九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

——XXXI——

福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査

上　　巻

—弥生時代生活遺構編—

1 9 7 9

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

——XXXI——

福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査

上　　巻

—弥生時代生活遺構編—

昭 和 54 年

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

この報告書は福岡県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて昭和44年度から実施した埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告書は、昭和47年度に行った小郡市三沢における土取り場内遺跡群の調査報告を内容とするものです。本報告書を学問研究に、文化財愛護思想の普及あるいは教育等にご活用いただければ幸甚に存じます。

発刊にあたり、報告をお寄せ下さいました九州大学医学部永井昌文先生に対しまして厚く御礼申し上げます。

なお、調査に対してご協力いただいた調査員、地元の方々をはじめ関係各位のご援助とご配慮に、心から感謝申し上げます。

昭和54年 3 月31日

福岡県教育委員会

教育長　浦　山　太　郎

例　　言

1．　この報告書は九州縦貫高速自動車道路の建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前発掘調査のうち、昭和47年度に実施した小郡市三沢所在北牟田遺跡、ハサコの宮遺跡、松尾口遺跡の調査報告を内容としている。

2．　発掘調査は日本道路公団の受託事業として福岡県教育委員会が実施した。

3．　昭和46年度に農園造成工事に伴って実施した正原遺跡発掘調査の内容は今報告の遺跡群と密接な歴史的内容を持つので、付して掲載した。

4．　本書は3巻に分かち、上巻は弥生時代生活遺構と遺物、中巻は弥生時代墓跡群とその遺物、下巻は古墳時代以降墓跡群・図版を内容とする。

5．　本書の執筆は下記のとおりである。

上　巻

Ⅰ－1・2A(1)	福岡県教育委員会文化課	酒井仁夫
Ⅰ－2A(2)，B，C	九州歴史資料館調査課	森田　勉
Ⅱ		酒井仁夫
Ⅲ－1		酒井仁夫
Ⅲ－2，3		森田　勉
Ⅳ		酒井仁夫
Ⅴ，Ⅵ		森田　勉

6．中・下巻の執筆については、各巻に記した。

7．　石材鑑定に当っては九州大学理学部助教授小川勇二郎先生に願った。

8．　掲載図の実測、製図の分担については、挿図目次に示すとおりである。掲載写真のうち遺物については、九州歴史資料館石丸洋氏の指導の下に、岡紀久夫・前田次郎・平島美代子の3君があたった。

9．　遺物の整理作業の大部分については、岩瀬正信氏の指導の下に、九州歴史資料館の整理作業員がこれを行ない、出土品は同館にて保管している。

10．　本書の編集は、上巻を酒井が、中巻を橋口、下巻を森田・馬田がそれぞれ担当した。

目　　次　（上巻）

Ⅰ．序　説 …… 1
　1．はじめに …… 1
　2．調査の経過 …… 1
　　A　北牟田遺跡の調査経過 …… 1
　　(1)　第1次調査 …… 1
　　(2)　第2次調査 …… 2
　　B　ハサコの宮遺跡の調査経過 …… 3
　　(2)　第2次調査 …… 3
　　(2)　第3次調査 …… 4
　　C　松尾口遺跡の調査経過 …… 4
Ⅱ．位置と環境 …… 6
Ⅲ．各遺跡の概要 …… 10
　1　北牟田遺跡 …… 10
　2　ハサコの宮遺跡 …… 10
　3　松尾口遺跡 …… 11
Ⅳ．北牟田遺跡の生活遺構と遺物 …… 12
　1　遺構 …… 12
　　A　住居跡 …… 12
　　B　貯蔵穴 …… 30
　2　遺物 …… 42
　　A　土器 …… 42
　　(1)　Ⅰ類土器 …… 42
　　(2)　Ⅱ類土器 …… 47
　　(3)　Ⅲ類土器 …… 48
　　(4)　Ⅳ類土器 …… 48
　　(5)　まとめ …… 49
　　B　石器 …… 92
　　C　土製品 …… 112
　　D　鉄器 …… 118
　　E　木器 …… 118

F　自然遺物 …… 118
G　まとめ …… 119
3　小結 …… 119
Ⅴ．ハサコの宮遺跡の弥生遺構と遺物 …… 121
1　遺構 …… 121
A　住居跡 …… 121
B　貯蔵穴 …… 121
2　遺物 …… 129
A　土器 …… 129
B　石器 …… 131
3　小結 …… 133
Ⅵ．松尾口遺跡の生活遺跡と遺物 …… 134
1　遺構 …… 134
A　住居跡 …… 134
B　貯蔵穴 …… 135
2　遺物 …… 135
3　小結 …… 137

図　版　目　次

北牟田遺跡

PL. 1　(1)　三沢丘陵と宝満川航空写真(西より)(西谷正撮影) …… 6
(2)　三沢丘陵航空写真(北より)(西谷撮影) …… 6
PL. 2　(1)　北牟田遺跡・ハサコの宮遺跡航空写真(北西より)(西谷撮影) …… 6
(2)　北半遺跡群(北より)(前川威洋撮影) …… 6
PL. 3　(1)　10号住居跡(北より)(酒井仁夫撮影) …… 18
(2)　11・12・22号住居跡(北より)(酒井撮影) …… 19
PL. 4　(1)　6号住居跡(東より)(前川撮影) …… 15
(2)　6号住居跡内木製鋤出土状況(西より)(酒井撮影) …… 15
PL. 5　(1)　16・26号住居跡(北より)(前川撮影) …… 20・25
(2)　20号住居跡(北東より)(山本信夫撮影) …… 21

PL. 6 (1) 21号住居跡(北より)(前川撮影) ……21
(2) 25号住居跡(北西より)(前川撮影) ……25
PL. 7 (1) 5号住居跡(南西より)(山本撮影) ……15
(2) 9号住居跡(南東より)(山本撮影) ……17
(3) 9号住居跡(北西より)(山本撮影) ……17
(4) 34号住居跡炉内支脚出土状況(山本撮影) ……27
PL. 8 3・5・6号各住居跡出土土器(岡紀久夫撮影) ……43
PL. 9 10・11号各住居跡出土土器(岡撮影) ……45・46
PL. 10 12・16号各住居跡出土土器(岡撮影) ……50
PL. 11 17号住居跡出土土器①(岡撮影) ……52
PL. 12 17号住居跡出土土器②(岡撮影) ……53
PL. 13 17号住居跡出土土器③(岡撮影) ……55
PL. 14 17号住居跡出土土器④(岡撮影) ……56
PL. 15 17号住居跡出土土器⑤(岡撮影) ……57
PL. 16 17号住居跡出土土器⑥(岡撮影) ……58
PL. 17 17号住居跡出土土器⑦(岡撮影) ……59
PL. 18 17号住居跡出土土器⑧(岡撮影) ……60
PL. 19 18・20・24・25・32号住居跡出土土器(岡撮影) ……64・66
PL. 20 4・7・16・38・40号各貯蔵穴出土土器(前田次郎撮影) ……68
PL. 21 40号貯蔵穴出土土器(前田撮影) ……69・70
PL. 22 52・62各貯蔵穴出土土器(前田撮影) ……71
PL. 23 62号貯蔵穴出土土器①(前田撮影) ……73
PL. 24 62号貯蔵穴出土土器②(前田撮影) ……74・75
PL. 25 76・79号各貯蔵穴出土土器(前田撮影) ……77
PL. 26 80・81・82・83号各貯蔵穴出土土器(前田撮影) ……78・79
PL. 27 85号貯蔵穴出土土器①(前田撮影) ……81
PL. 28 85号貯蔵穴出土土器②(前田撮影) ……82
PL. 29 85号貯蔵穴出土土器③(前田撮影) ……83
PL. 30 86・89・90・91号各貯蔵穴出土土器(前田撮影) ……84
PL. 31 91号貯蔵穴出土土器(前田撮影) ……86・87
PL. 32 93・94・95・96・97号各貯蔵穴出土土器(前田撮影) ……89
PL. 33 99・100・101・120号各貯蔵穴出土土器(前田撮影) ……91
PL. 34 103・104・107・109・121号各貯蔵穴出土土器(前田撮影) ……91

PL. 35 (1) 打製石器……92
(2) 掻器……92
PL. 36 (1) 石核……94
(2) 勾玉・磨製石器……95～98
PL. 37 石庖丁……101
PL. 38 (1) 石鎌・合鑿・偏平片刃石斧……101～103
(2) 柱状抉入石斧……101～103
PL. 39 (1) 磨製石斧①……103
(2) 磨製石斧②……103
PL. 40 (1) 砥石……107
(2) 磨石……110
PL. 41 (1) 石製紡錘車・石製円盤……111
(2) A・B1類紡錘車……112
(3) B2・C類紡錘車……112
PL. 42 (1) 投弾……112
(2) A類土製円盤……118
PL. 43 (1) B類土製円盤……118
(2) C類土製円盤……118

ハサコの宮遺跡

PL. 44 (上) 1号住居跡全景(東から)……121
(左下)「炉」跡(北から)……121
(右下) P4柱根跡断面(南から)……121
PL. 45 (上) 1号貯蔵穴(南から)……121
(下) 3号貯蔵穴(北から)……121
PL. 46 (上) 4号貯蔵穴(北から)……121
(下) 5号貯蔵穴(北から)……121
PL. 47 (上) 6号貯蔵穴(南から)……121
(下) 7号貯蔵穴(東から)……121
PL. 48 1号(1)2号(3)3号(4・5)7号(6)貯蔵穴出土土器……129

松尾口遺跡

PL. 49 (上) 松尾口遺跡A地点全景(東から－北牟田遺跡から－)……134

（下） 松尾口遺跡全景（西から） …… 134
PL. 50 （上） 1号住居跡（南から） …… 134
（左下） 2号貯蔵穴（西から） …… 135
（右下） 1号貯蔵穴（西から） …… 135

挿 図 目 次

北 牟 田 遺 跡

Fig. 1 周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）（酒井作成） …… 7
Fig. 2 遺跡位置図（縮尺1/5,000）（森田勉・山本信夫作成、芦塚照子整図） …… 折込
Fig. 3 1号住居跡実測図（縮尺1/60）（高田一弘・高田弘信・山下和美実測、芦塚照子整図） …… 12
Fig. 4 3号住居跡実測図（縮尺1/60）（高田一・三角ナルミ・山下実測、芦塚整図） …… 13
Fig. 5 4号住居跡実測図（縮尺1/60）（高田一・三角康子・山下実測、芦塚整図） …… 14
Fig. 6 5号住居跡実測図（縮尺1/80）（山本実測、芦塚整図） …… 15
Fig. 7 6号住居跡実測図（縮尺1/60）（酒井実測、芦塚整図） …… 16
Fig. 8 6号住居内炭化鋤出土状況実測図（縮尺1/6）（酒井実測、芦塚整図） …… 16
Fig. 9 9号住居跡実測図（縮尺1/60）（高田一・山本実測、芦塚整図） …… 17
Fig. 10 10号住居跡実測図（縮尺1/60）（前川威洋実測、芦塚整図） …… 18
Fig. 11 11号住居跡実測図（縮尺1/60）（前川・井沢実測、芦塚整図） …… 18
Fig. 12 12号住居跡実測図（縮尺1/60）（横田義章・酒井・井沢実測、芦塚整図） …… 19
Fig. 13 13号住居跡実測図（縮尺1/60）（酒井・前川実測、芦塚整図） …… 20
Fig. 14 14号住居跡実測図（縮尺1/60）（山本実測、芦塚整図） …… 20
Fig. 15 15号住居跡実測図（縮尺1/60）（前川・井沢実測、芦塚整図） …… 21
Fig. 16 16・26号各住居跡実測図（縮尺1/80）（山崎・杉野悦郎実測、芦塚整図） …… 21
Fig. 17 17・18・19号各住居跡実測図（縮尺1/60）（杉野・山崎謙実測、芦塚整図） …… 22
Fig. 18 20号住居跡実測図（縮尺1/60）（横田・酒井・山崎・杉野実測、芦塚整図） …… 22
Fig. 19 21号住居跡実測図（縮尺1/60）（久野由夫・杉野実測、芦塚整図） …… 23
Fig. 20 22号住居跡実測図（縮尺1/60）（杉野・横田実測、芦塚整図） …… 24
Fig. 21 23号住居跡実測図（縮尺1/60）（前川・井沢・山本実測、芦塚整図） …… 24
Fig. 22 25号住居跡実測図（縮尺1/60）（前川実測、芦塚整図） …… 25
Fig. 23 27号住居跡実測図（縮尺1/60）（前川・井沢・山本実測、芦塚整図） …… 25

Fig. 24　29号住居跡実測図(縮尺1/60)(横田・杉野実測、芦塚整図) …… 26
Fig. 25　30号住居跡実測図(縮尺1/60)(前川・井沢・山本実測、芦塚整図) …… 26
Fig. 26　34号住居跡実測図(縮尺1/60)(高田一・高田弘実測、芦塚整図) …… 27
Fig. 27　35号住居跡実測図(縮尺1/60)(高田一・高田弘・山下実測、芦塚整図) …… 27
Fig. 28　54・62号各貯蔵穴実測図(縮尺1/60)(前川実測、芦塚整図) …… 31
Fig. 29　16・69・94・121号各貯蔵穴実測図(縮尺1/60)(高田一・山本・井沢・前川・酒井実測、芦塚整図) …… 32
Fig. 30　85・117・120号各貯蔵穴実測図(縮尺1/60)(高田一・山本・井沢実測、芦塚整図) …… 33
Fig. 31　9・10・11・12・13・38・39号各貯蔵穴実測図(縮尺1/60)(高田一・井沢・三角康・内野玲子実測、芦塚整図) 34
Fig. 32　14・40・63号各貯蔵穴実測図(縮尺1/60)(高田一・高田弘・山本・酒井・前川実測、芦塚整図) …… 35
Fig. 33　3・5・6号各住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)(中野恵子実測、芦塚整図) …… 43
Fig. 34　10号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 45
Fig. 35　11号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 46
Fig. 36　12・16号各住居跡出土土器実測図(縮戸1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 50
Fig. 37　17号住居跡出土土器実測図①(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 52
Fig. 38　17号住居跡出土土器実測図②(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 53
Fig. 39　17号住居跡出土土器実測図③(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 55
Fig. 40　17号住居跡出土土器実測図④(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 56
Fig. 41　17号住居跡出土土器実測図⑤(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 57
Fig. 42　17号住居跡出土土器実測図⑥(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 58
Fig. 43　17号住居跡出土土器実測図⑦(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 59
Fig. 44　17号住居跡出土土器実測図⑧(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 60
Fig. 45　17号住居跡出土土器実測図⑨(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 61
Fig. 46　18・20・21・24・25号各住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 64
Fig. 47　28・32・34号各住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 66
Fig. 48　4・7・8・16号各貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 68
Fig. 49　38・40号各貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 69
Fig. 50　40号貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 70
Fig. 51　47・50・52・61号各貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 71
Fig. 52　62号貯蔵穴出土土器実測図①(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 73
Fig. 53　62号貯蔵穴出土土器実測図②(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 74
Fig. 54　62号貯蔵穴出土土器実測図③(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 75
Fig. 55　66・69・73・79号各貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 77
Fig. 56　80・81・82号各貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 78

Fig. 57　83号貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 79
Fig. 58　85号貯蔵穴出土土器実測図①(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 81
Fig. 59　85号貯蔵穴出土土器実測図②(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 82
Fig. 60　85号貯蔵穴出土土器実測図③(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 83
Fig. 61　88·89·90号各貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 84
Fig. 62　91号貯蔵穴出土土器実測図①(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図)…… 86
Fig. 63　91号貯蔵穴出土土器実測図②(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 87
Fig. 64　93·95·96·97·100号各貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 89
Fig. 65　101·102·103·107·108·109·111号各貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)(中野実測、芦塚整図) …… 91
Fig. 66　石器実測図、(石鏃・石鎗・石錐)(縮尺2/3)(酒井実測、整図) …… 93
Fig. 67　石器実測図(掻器①)(縮尺2/3)(酒井実測、整図) …… 95
Fig. 68　石器実測図(掻器・石核)(縮尺2/3)(酒井実測、整図) …… 96
Fig. 69　鉄器·石製品(勾玉)·石器(磨製石鏃·石剣実測図)(縮尺1/2)(酒井実測、整図) …… 98
Fig. 70　石器実測図(石庖丁)(縮尺1/2)(酒井実測、整図) …… 99
Fig. 71　石器実測図(石鎌·石鑿·石斧)(縮尺1/2)(酒井実測、整図) ……102
Fig. 72　石器実測図(蛤刃石斧①)(縮尺1/2)(酒井実測、整図) ……104
Fig. 73　石器実測図(蛤刃石斧②)(縮尺1/2)(酒井実測、整図) ……106
Fig. 74　石器実測図(砥石)(縮尺1/2)(酒井実測、整図) ……108
Fig. 75　石器実測図(磨石)(縮尺1/2)(酒井実測、整図) ……109
Fig. 76　石製品実測図(紡錘車·円盤)(縮尺1/2)(酒井実測、整図)……111
Fig. 77　土製品実測図(投弾)(縮尺1/2)(酒井実測、整図) ……112
Fig. 78　土製品実測図(紡錘車)(縮尺1/2)(酒井実測、整図) ……113

ハサコの宮遺跡

Fig. 79　ハサコの宮遺跡B地点遺構配置図(縮尺1/400)…… 122
Fig. 80　1号住居跡実測図(縮尺1/60)　中央ピット·柱穴(P4-1)·断面実測図(縮尺1/40) …… 123
Fig. 81　1号(P1)·2号(P2)貯蔵穴実測図(縮尺1/40) …… 124
Fig. 82　3号(P5)貯蔵穴実測図(縮尺1/40) …… 125
Fig. 83　4号(P6)·5号(P7)貯蔵穴実測図(縮尺1/40) …… 126
Fig. 84　6号(P9)貯蔵穴実測図(縮尺1/40) …… 127
Fig. 85　7号(P10)貯蔵穴実測図(縮尺1/40) …… 128
Fig. 86　ピット内出土土器実測図(1)(縮尺1/4) …… 130

Fig. 87　ピット内出土土器実測図(2)(縮尺1/4)…… 131
Fig. 88　3号(P5)貯蔵穴出土石斧および実測図(縮尺1/2) …… 132
Fig. 89　石鏃・石錐実測図 (縮尺2/3)…… 132

松尾口遺跡

Fig. 90　松尾口遺跡A地区遺構配置図(縮尺1/300)…… 134
Fig. 91　1号住居跡実測図(縮尺1/60) …… 135
Fig. 92　1号(P1)貯蔵穴出土土器 …… 135
Fig. 93　1号(P1)・2号(P2)・3号(P4)・4号(P6)貯蔵穴実測図(縮尺1/40) …… 136
Fig. 94　1号(P1)貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4) …… 137

表　目　次

北牟田遺跡

Tab. 1　住居跡一覧表……28～29
Tab. 2　貯蔵穴一覧表……36～41
Tab. 3　1～11号住居跡出土土器一覧表……44
Tab. 4　12～17号住居跡出土土器一覧表……51
Tab. 5　17号住居跡出土土器一覧表①……54
Tab. 6　17号住居跡出土土器一覧表②……62
Tab. 7　17号住居跡出土土器一覧表③……63
Tab. 8　17～25号住居跡出土土器一覧表……65
Tab. 9　25～34号住居跡および4～40号貯蔵穴出土土器一覧表……67
Tab. 10　40号貯蔵穴出土土器一覧表……70
Tab. 11　40～62号各貯蔵穴出土土器一覧表……72
Tab. 12　62～73号各貯蔵穴出土土器一覧表……76
Tab. 13　76・79号各貯蔵穴出土土器一覧表……78
Tab. 14　79・80号各貯蔵穴出土土器一覧表……79
Tab. 15　80～83号各貯蔵穴出土土器一覧表……80
Tab. 16　83・85号各貯蔵穴出土土器一覧表……84
Tab. 17　85～89号各貯蔵穴出土土器一覧表……85

Tab. 18　90～95号各貯蔵穴出土土器一覧表……88
Tab. 19　95～ 121号各貯蔵穴出土土器一覧表……90
Tab. 20　打製石鏃一覧表……92
Tab. 21　石錐一覧表……94
Tab. 22　石掻一覧表……97
Tab. 23　石核一覧表……97
Tab. 24　磨製石鏃一覧表……98
Tab. 25　磨製石剣一覧表……98
Tab. 26　石庖丁一覧表……100
Tab. 27　石鎌一覧表……101
Tab. 28　石鑿一覧表……101
Tab. 29　偏平片刃石斧一覧表……103
Tab. 30　抉入石斧一覧表……103
Tab. 31　蛤刃石斧一覧表……105
Tab. 32　砥石一覧表……107
Tab. 33　磨石一覧表……110
Tab. 34　石製紡錘車一覧表……110
Tab. 35　石製円盤一覧表……111
Tab. 36　土製紡錘車一覧表……114
Tab. 37　投弾一覧表……115
Tab. 38　土製円盤一覧表……115～117
Tab. 39　周辺遺跡時期別一覧表……119

ハサコの宮遺跡

Tab. 40　柱穴の深さ一覧表（*cm*）……121
Tab. 41　柱間一覧表（*cm*）……121
Tab. 42　竪穴一覧表（*cm*）……129
Tab. 43　石器一覧表（*cm*）……133

松尾口遺跡

Tab. 44　竪穴一覧表（*cm*）……135

付　図　目　次

Fig. ①　北牟田遺跡遺構配置図
Fig. ②　北牟田遺跡出土土器編年図（壺）（縮尺１/４）
Fig. ③　北牟田遺跡出土土器編年図（甕）（縮尺１/４）
Fig. ④　北牟田遺跡出土土器編年図（鉢・蓋・高杯・支脚）（縮尺１/４）

I 序　説

1 はじめに

小郡市北部の大字三沢・横隈・津古及び西島にかけては弥生時代の遺跡が密集することで有名であり、これまで10数遺跡の発掘調査が行われ、調査報告書も多数刊行されている。

三沢地区が縦貫自動車道跡鳥栖インターチェンジ建設のための土取り場に選定され、それに伴って発掘調査が実施された諸遺跡が、今回報告する北牟田、松尾口及びハサコの宮各遺跡である。

昭和46年2月22日より3月20日にかけて、当初に土取り用地として計画されていた県立種畜場内の予備発掘調査を実施した。(註1) その結果、広大な弥生時代集落遺跡であることが判明し、全県下あげての遺跡保存運動が展開された。数回にわたる県議会、国会での質疑応答も行われた。しかしこの間には土取り専用道路建設がすでに着手されており、北牟田遺跡は削平され、法面には弥生土器や石器が散乱していた。低丘陵部は地権者による路線変更要望もあって工事は遅れており、道路公団側との協議により同年4月より6月にかけて西中隈・宮裏・上棚田・ハサコの宮各遺跡の発掘調査を実施した。(註2)

土取り専用道路の発掘調査が終了し、工事も急ピッチで進行していく中で、種畜場遺跡の保存協議が行われ、同年末になって保存案が県当局から議会に打ち出された。その結果周辺丘陵に新らたに土取り場を設定し、作業することは必定となり、北牟田遺跡の、その後松尾口、ハサコの宮両遺跡の発掘調査となった。

註1. 福岡県教育委員会　「福岡県三沢所在遺跡予備調査概要」　昭和46年

註2. 福岡県教育委員会　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」V　昭和49年

2 各遺跡の調査経過

A 北牟田遺跡の調査経過

(1) 第1次調査

昭和47年1月20日より同3月20日にかけての2ヶ月間、遺跡の当面破壊予定部分の発掘調査を実施した。土取り専用道路に隣接した丘陵部である。道路巾杭をもとに20mグリットを設定した後、ブルドーザーでトレンチ発掘を行った。4区以北で遺構の密集度が高まり、遺物の出土も多くなった。また方墳4基があることも判明し、墳丘実測や周溝発掘を行った。

土取り工事が進行する中での調査であり、数少ない調査員はブルドーザーに追い回されるよ

うに作業を進めたが、あいついで発見される住居跡や竪穴の処理は間に合わず、調査前に削り取られた遺構や遺物も多かった。そこで2月末より動員可能な限りの調査員（文化課職員他）が調査に参加することになった。それでも工事の進度に合う調査など完全にやれるものではなく、杜撰なものであった。検出された37軒の住居跡のうち完掘し、20分の1縮尺図面を作成しえたもの21軒、計 200口以上の貯蔵穴他のピットのうち完掘したもの計51口、図面を作成しえたもの16口というありさまで、まして写真撮影に至っては全遺跡の1％にも満たなかった。

調査終了をひかえた3月後半、遺跡検出が少ないと考えられていたB－1区で、土取り中甕棺5基が発見された。雨中の事でもあり、平板測量で位置をおさえたのみで、甕を取り上げ、調査を終えた。

かような杜撰な調査がなされたのは道路公団・県各部課・小郡市・担当業者間の種々力関係及び利害関係がからんでの事ではあるが、今にして思えば各々の担当者にとって種々の意味で真に残念な事であり、各方面にわたって反省及び遺恨を残す結果となった。

調査担当者は次のとおりである。

福岡県教育委員会技師	西谷　正	宮小路賀宏
	横田　義章	前川　威洋
	井上　裕弘	酒井　仁夫
	浜田　信也	
調査補助員	高田　一弘	井沢　洋一
	杉野　悦郎	山本　信夫
	山下　和美	山崎　謙
	高田　弘信	久野　由夫

（2）　第2次調査

第2次調査は、土取り現場で甕棺が露出しているとの通報により、土取りを一旦中止し調査を行うこととなった。しかし、第1次調査地域に続く墓地群の大部分は既に破壊されており、残存部分のみの調査となった。

発掘調査は、1972年10月23日から1973年1月24日にかけて3ヵ月間実施した。

以下、調査の経過を日を追って略記する。

10月23日から調査を開始する。露出している甕棺にK－10～17まで番号を付す。K－15の内部を清掃中に棺に密着した石鏃1を検出した。10月24日調査地域を実測のための水糸配りを行う。10月25日K－15・16・17のプランを実測する。この日から検出順に、発掘と平行して実測を開始する。10月26日東西の大溝を検出し、一部発掘を始め、11月21日写真撮影、実測を行い溝の調査を終了する。10月28日夕暮時にD－12棺外から銅剣先が出土する。11月5日D－16の墓壙上面から約9cmの埋土中から石鏃が出土する。11月13日盛土が完全に除去され、石室の掘

り方および周溝のみを残す古墳を検出し、11月23日に古墳の調査を終える。11月29日D－48から石剣切先が出土するが完掘するのを止め、既検出分の遺構実測、写真撮影を優先する。翌1月13日D－48の完掘をもって発掘は終了し、これ以後は、実測・写真撮影のみとなる。1月24日D－42の断面図を取り終え、全ての調査を終了する。

調査担当者は次のとおりである。

福岡県教育委員会文化課技師	森田　勉
調査補助員	菊池　法信　山本　信夫
	高田　一弘　高田　弘信
	岩崎　逸男　山下　和美
	瀬戸　孝司　晃　治
	渡辺由紀子　馬田　弘稔

B　ハサコの宮遺跡の調査経過

（1）　第2次調査

ハサコの宮遺跡は1971年5月1日より同8日にかけて、土取り専用道路にかかる地点を調査した。その後、種畜場の保存についての諸問題が一段落し、保存範囲外の土取りに伴う緊急調査が矢継ぎ早に起ってきた。ハサコの宮遺跡も同様で、1972年9月より松尾口遺跡の発掘調査と並行して開始した。また調査終了前の10月23日より北牟田遺跡第2次調査が開始された。

以下、調査の経過を日を追って略記する。

9月27日より調査を開始する。調査対象地は第1次調査（1971年）の北西に続く丘陵地（A地点）と谷をへだてた北側の丘陵（B地点）の2個所である。伐採を終えた5月14日の時点でA地点には円墳3基（2～4号墳）、B地点には円墳1基（1号墳）が知られており、その調査を実施するためである。しかしこの日A地点では既に3・4号墳が破壊されていた。

当日と翌28日にはA地点1号墳周辺の地形測量を、10月1日より3日にかけてB地点の地形測量を実施する。

A地点1号墳の発掘は10月2日より8日にかけて行う。主体部は盗掘を受け、かなり攪乱されている。敷石面の追求と石材抜き痕の検出を計る。敷石面より鉄器が、また攪乱土中より若干の須恵器が出土する。墳丘西南部から西側にかけて表土下で周溝を検出し、中より須恵器完形品が出土する。1号墳の西側ではさらに弥生時代遺構が検出され始める。1号住居跡は円形で、内部より石器や床面に土器が発見される。また貯蔵穴も数口検出された。

10月9日より1号墳の周溝を発掘する一方、石室内部の実測を開始し、13日には全ての測量を終了する。また10日には住居跡を完掘し、写真撮影を行う。

10月12日より1号墳西北側の表土剝ぎを行い、貯蔵穴がまばらに分布することが次第に明らかとなっていった。最終的には10口を明らかにした。各遺構の発掘と写真撮影、実測を順次く

りかえす。

25日より土取り作業に追われ、古墳を含め、各遺構の実測は平板のみとなる。28日2口の貯蔵穴が検出され、あわただしい発掘作業及び実測を行い、31日B地点の調査を完了する。

次いで、12月6日から2号墳の発掘調査を北牟田遺跡の調査と平行して開始する。石室の石材は全て抜き取られ、遺存状態は極めて悪かった。しかし、1973年1月25日、墓道西側墳丘中から一括して須恵器が検出され、遺物の上からは大きな成果を得た。調査はこの一括土器の写真撮影、実測をもって全てを終了した。

（2） 第3次調査

第3次調査はA地点の弥生時代墓跡群の調査である。1972年9月～1973年1月にかけて行なわれた土取り作業により、対象地域内の道路が浮き上って孤立し、土取りされたレベルまで道路面を下げる必要が生じた。そこで、法面勾配に必要な部分の発掘調査を実施することとなった。

第3次調査は前後2回にわたって行い、第1回目は甕棺および人骨が露出したため1974年4月3日～5日にかけて2基の甕棺の調査を行った。第2回目は1974年4月22日から同年6月7日にかけて23基の甕棺墓、19基の土坑墓・木棺墓(註)の調査を実施した。

註 福岡県教育委員会文化課の依頼により、山本信夫（福岡県文化財管理調査員、現福岡県文化財保護指導委員）・山本昇の両氏が調査を行った。

C 松尾口遺跡の調査経過

松尾口遺跡の発掘調査は、種畜場遺跡の保存に伴い、代替の土取場とされたため1972年8月17日から同年11月30日にかけ実施した。

調査区は大きく二つに分れ、南側の丘陵をA区、北側の丘陵をB区とした。検出した主要な遺構はA区では弥生時代の住居跡1・貯蔵穴4・古墳1・横穴1、B区では古墳1である。

以下、調査の経過を略記する。

発掘調査開始前に対象地域の分布調査を実施したが、表面観察だけでは遺構の存否は判断しかねたため、ハサコの宮、種畜場両遺跡の発掘調査終了後に予備調査を実施することとした。ところが、8月14日から土取りが開始され、断面に遺構が観察されたため、急拠作業を中止してもらい、8月17日から本調査を開始した。8月20日さきに発見した溝は盛土を完全に除去された古墳の周溝であることがわかった。8月23日周溝の西南方で排水のために周溝が2つに分れることが判明した。また、この日、円形住居跡・貯蔵穴の平面を検出する。8月24日、周溝の北側部分で、溝内に置かれた完形の土師器高杯・須恵器杯を発見し、出土状態を写真撮影する。9月2日、8月23日に発見した排水用と考えられる溝の北壁に切り込む横穴を発見する。9月3日遺構写真撮影、9月7日から12日にかけて遺構実測を行う。9月13日からA区西半の表土剝ぎを開始したが、顕著な遺構は存せず、21日に終了する。

B区の調査を9月21日から開始し、10月3日調査区最北端において古墳を検出し、これを2号墳とする。10月5日墳丘および周辺の地形実測を行い、2号墳の調査を開始し、11月30日に調査を終了する。

以上、3ヶ月半におよぶ松尾口遺跡の発掘調査を全て終了する。

II　位置と環境

福岡平野のうち博多湾に面する低地は、大野城市と太宰府町の境、水城附近を南端とする。一方、筑後平野のうち筑後川中流の低地は小郡町津古附近を北端とする。この二大低地の中間を宝満川の扇状地性低地が帯状に伸び、両低地をつないでいる。この宝満川扇状低地の西岸に背振山脈の一峰基山より東出する低丘陵が伸びている。この丘陵は小河川によって複雑に開析され、谷あるいは池となっている。低丘陵上には古代の生活の跡が色濃く刻まれており、特に弥生時代各期の生活遺構や墓跡はほとんどの丘陵で見受けられる。ここ10年内に発掘調査された遺跡だけでも津古内畑・津古・種畜場・横隈山・ハサコの宮・北牟田・上棚田・牟田々・宮裏・西中隈・花聳・正原・松尾口・西島・伊勢山・千塔山の各遺跡がある。また古くは中山平次郎氏・鏡山猛氏によって各遺跡が調査されている。このように発掘調査された多くの遺跡は宅地造成や道路建設に伴い破壊され、緑濃い弥生の里も急速に変貌しつつある。はたまたこの地域全体を宅地造成し、数万人のベットタウンとする中九州ニュータウン計画は近々着手されようとしている。

この地域を地勢によって大きく2区分される。つまり宝満川に注ぐ宝珠川の北岸丘陵（I地区）と、南岸に位置し高原川に北面する丘陵（II地区）である。

I地区　筑紫を北端、原田を西端、津古を東端とし、概三角形を呈する。この地区のうち宝満川に面した隈地区や宝珠川に面した南側丘陵では、すべてといって良いほど弥生時代の遺物が採集され、所によっては甕棺が崖断面より顔をのぞかせている。また弥生時代遺跡と一部重なり、より高位の丘陵上には後期古墳群が尾根線上まで連なっている。この地区の弥生時代遺跡としては宝珠川に面して、片曾場・御所・津古内畑の各遺跡が連なっている。ただし中期中葉以降の遺構は不明瞭である。今後に期待される。

II地区　宝珠川、宝満川、高原川に狭まれた地区は、北西より山地が南東に伸び、その先端部に緩かな広大な丘陵地をもつ。丘陵地は複雑に入り込んだ谷によって樹枝状を呈しており、大略次の5亜地区に分けられる。

1)　宝珠川南岸端に位置し、西より高田、宮原、狸原、津古の各遺跡が立地し、弥生より古墳時代の土器が散布している。標高30m以上の丘陵上はもとより、現水田面との比高2～3mの低段丘上にも遺物の散布が著しい。津古上ノ原遺跡では先土器時代の遺物（ナイフ・ポイント・スクレーパー・細石核等）が採集されている。この亜地区での代表的遺跡は津古遺跡であり前方後円墳2基、方墳1基の他弥生時代前期から古墳時代にかけての生活遺構が検出されてい

Fig. 1　周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）(●▶● 印は古墳)

1．ハサコの宮B地点　2．ハサコの宮A地点　3．北糸田遺跡　4．松尾口遺跡
5．正原遺跡　6．津古内畑遺跡　7．津古遺跡　8．横隈第2地点
9．横隈第5地点　10．横隈第6・7地点　11・12．種畜場内遺跡　13．牟田々遺跡
14．上棚田遺跡　15．宮裏遺跡　16．西中隈遺跡　17．花聳遺跡
18．城ノ上遺跡　19．千塔山遺跡

る。

2） 西側を三沢駅東側より鉄道線路に沿って北上する沖積地、東側を宝満川に狭まれた南北に長い丘陵を指し、現在の横隈部落が中心をなす。北端は宝珠川に面し、1）の津古遺跡に東隣している。

この亜地区の代表的遺跡は横隈山第2・第3地点であり、第2地点では弥生時代前期末から中期初頭及び後期後半の住居跡と前期末から中期初頭の貯蔵穴が検出されている。第3地点で中期初頭の甕棺が確認されている。

鏡山猛氏はこの地区の甕棺、箱式石棺を昭和16年に報告されている。

3） 第2亜地区の西側を南北に伸びる丘陵地であり、西側の広い谷をへだてて、第4・5亜地区に接している。南端は西鉄三沢駅周辺、北端は第1亜地区の津古遺跡に接している。この亜地区でのこれまでの発掘調査は数多く、今回報告するハサコの宮遺跡、北牟田遺跡を含め、種畜場内遺跡、牟田々遺跡、横隈遺跡第6・7地点とほぼ全丘陵上に弥生時代前期から中期中葉までの遺跡が立地している。その他未調査ではあるが、北内畑遺跡、大手木遺跡も同時代の集落跡と考えられる。

4） 第3亜地区と第5亜地区に狭まれ、Y字状沖積地の間に立地する丘陵地である。II地区北西側山地の南東端に当る。現在のところ南端に立地する松尾口遺跡が発掘調査されたにすぎないが、一般に弥生時代遺跡は希薄である。後背の山地には古墳が占地している。

5） 第3・4亜地区の西側に北西－南東に伸びる丘陵で、中間を2本の小谷が開析している。東側丘陵では上棚田遺跡、宮裏遺跡が、中間丘陵では西中隈遺跡、西側丘陵では正原遺跡が発掘調査されている。これら遺跡は丘陵の南端に近い例ばかりであり、遺跡の密集度は全域でかなり高いと思われる。つまり、宮裏遺跡近くでは日吉神社の石棺、甕棺遺跡と栗原遺跡で弥生時代の遺物が散布している。この地区の集落跡では弥生時代の遺構と古墳時代のそれが重複している例が多く、他地域と興を異にしている。

6） 佐賀県境に接する丘陵部で、高原川に最も接近する花聳、西島遺跡群が代表的遺跡である。これまで、花聳遺跡で弥生時代中期住居跡群・古墳2基が、西島遺跡で弥生時代前期～中期の集落跡と墓跡が調査されている。しかし北側後背丘陵地はゴルフセンターやピクニックセンター地内にあり、未調査のまま破壊された遺跡も多い。

7） 第6亜地区の西側に広い谷を狭んで立地する丘陵部であり、西端には開析されて独立丘陵となった千塔山遺跡が所在する。これまで伊勢山遺跡で古墳時代集落跡が、城ノ上遺跡で弥生時代後期溝と古墳が、千塔山遺跡で弥生時代集落跡と古墳群が調査されている。この亜地区は早くから造成工事などで破壊された遺跡も多いが、今後検出される例も多いと思われる。

以上各地区、亜地区の遺跡の概要を記してみた。弥生時代の遺跡は極めて濃密であり、古墳時代の遺跡を含めて集落、墓域、生産地の各時代の立地とその変遷について究明すべき問題は

多大である。

また宝満川の東岸低丘陵上には弥生時代中期中葉～後期にかけての遺跡が多い事は、三沢地区遺跡群と好対称をなす。この地域は宝満川の支流山家川、曾根田川、草場川、小石原川、佐田川といった中河川が南流し、城山山麓を除いては島状に低段丘が立地する。この段丘上に遺跡がのっており、三沢方面との地勢の差が明瞭である。同様な地勢は高原川以南の大保・小郡、大木川・秋光川流域の田代・基山についても言えることであり、千塔山遺跡や城ノ上遺跡での弥生後期集落内容はこの地勢とも関連付けて考えるべきであろう。

以上記した各遺跡の参考文献は以下の通りである。

1. 津古遺跡　波多野晥三「津古遺跡群」『筑紫史論』第三輯　1975
2. 津古内畑遺跡　小郡町教育委員会「津古内畑遺跡」第1・2次1970，1971　福岡県教育委員会「津古内畑遺跡」第3・4次　1972，1973
3. 津古上ノ原遺跡　福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係調査報告書」第1集 1970
4. 種畜場内遺跡　福岡県教育委員会「福岡県三沢所在遺跡予備調査概要」1971
5. 横隈遺跡　小郡市教育委員会「横隈遺跡」1974
6. 牟田々遺跡　小郡市教育委員会「牟田々遺跡」1977
7. 上棚田遺跡　福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告(Ⅴ)」1974
8. 宮裏遺跡　同上
9. 西中隈遺跡　同上
10. 西島遺跡　山本信夫「小郡市西島出土の弥生時代遺物」『九州考古学49．50』1974
11. 花聳遺跡1.　小郡町教育委員会「津古内畑遺跡－第2次」付　1971
2.　大沢正巳・山本信夫『鉄鋌の新例に関する検討』「考古学雑誌」第62巻第4号　1977
12. 伊勢山遺跡　佐賀県教育委員会「基山町伊勢山・鳥栖市永吉遺跡」1970
13. 城ノ上遺跡　城ノ上遺跡調査会「城ノ上遺跡」1978
14. 千塔山遺跡　千塔山遺跡調査会「千塔山遺跡」1979

III　各遺跡の概要

1　北牟田遺跡

北牟田遺跡は小郡市大字三沢字北牟田の丘陵上に所在する。松尾口遺跡の西、牟田々遺跡の北に谷を挟んで隣接し、周辺他遺跡ともあいまって調査時には古代景観を良く残していた。

調査地点は2地区よりなる。遺跡は南側が柄部となる杓子形をなすが、その柄部北半と杓部西半が調査地点である。前者が埋葬地跡、後者が集落跡である。標高は約15mの差があるが、中間地で相接するものと思われる（中間地は調査前に土取りによって消滅したが、集落跡の南端で、貯蔵穴と甕棺が検出された）。

検出された遺構・遺物のほとんどは弥生時代前期末より中期前半及び中期後半の時期に属する。さらに集落跡の遺構上には中世の方形墳墓が5基築かれていた。

集落跡では住居跡37軒以上、ピット 166口以上が検出されたが、調査前に破壊された遺構も多く、集落の全容を明らかにはし得なかった。住居跡は不整方形・隅丸長方形・円形・楕円形・方形・長方形と多種形態があり、うち不整方形2・隅丸長方形4・円形17・方形1・楕円形1長方形12の各軒数が認められた。ピット166口とは、一部でも発掘したもののみである。166口のうち貯蔵穴と考えられたものは 122口である。形態は長方形、楕円形、円形、隅丸方形と種々あるが、底面まで発掘した例が少ないため、表面形状を知るに止まったものが大半である。これらの貯蔵穴内から出土する遺物は弥生前期末～中期初頭のみである。

生活遺構群の中間より2基の甕棺が検出された。小児用で、中期初頭のものである。

住居跡地域から緩やかに降っている丘陵上に弥生時代の墓が営まれ、居住区域と墓域とは分離している。墓域の大部分は既に土取りによって破壊されているためその一部を調査したにすぎないが、甕棺26基、土壙墓16基、木棺墓31基を検出した。切り合い関係から土壙墓、木棺墓が甕棺墓に先行し、前期から中期初頭に営まれ、その中心は前期にある。甕棺墓は前期末から中期中頃に造られており、その多くは中期前半期にある。

古墳は完全に盛土、石材を失い、石室の掘り方および周溝のみを残すだけである。その他、古墳時代後期の東西溝が調査区中央部で発見された。溝の性格については、調査区が狭いため定かでないが、丘陵のもっとも迫った部分を走るため、用水のため谷と谷を結ぶものかも知れない。

2　ハサコの宮遺跡

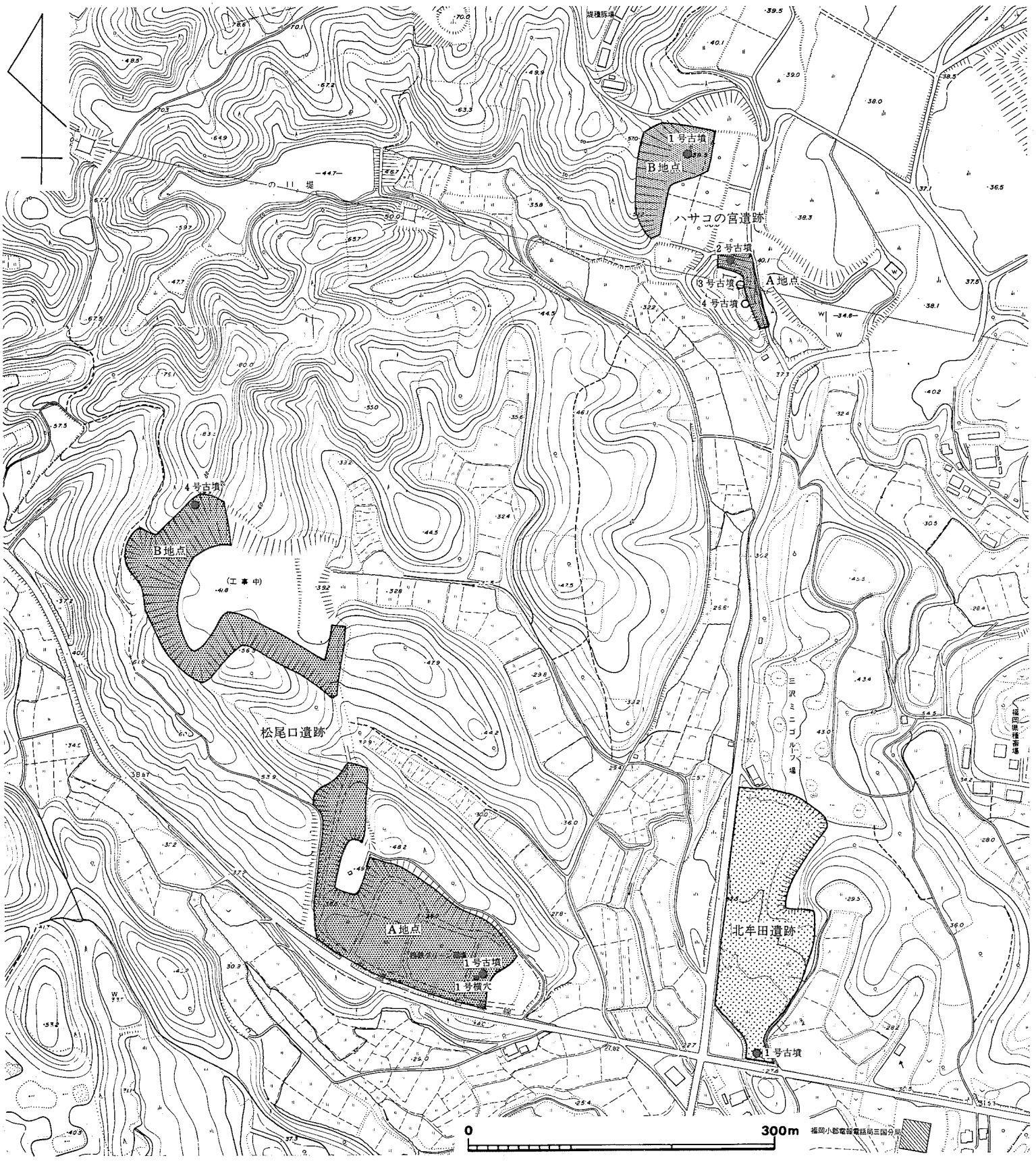


Fig. 2 遺跡位置図（縮尺1/5,000）

ハサコの宮遺跡は小郡市大字三沢字ハサコの宮の口の丘陵上にあり、北東は種畜場遺跡と接し、南は北牟田遺跡に連なる。

調査地点は2地域からなり、弥生時代の遺跡は谷を挟んで北西地域（B地点）が集落跡、東南地域（A地点）が墓地域である。しかし、集落地域はさらに西方に延びると考えられ、今回の調査は、その東端部分のみであることを付記する。集落跡では住居跡1棟・貯蔵穴7口を検出した。住居跡は円形で径6.6 *m*を測る大型のもので、中央に炉跡を有している。貯蔵穴は全て方形のプランを有している。出土した遺物から住居跡、貯蔵穴ともに弥生時代前期後葉から中期初頭のものと見做すことができる。墓地群では、甕棺を2次調査で2基、3次調査で23基・土壙墓・木棺墓を2次調査で1基、3次調査で20基検出した。この墓地群は第1次調査の墓地群と一連のものである。また3次調査でD－16・17から石剣の基部および石剣切先が出土した。

古墳時代の遺構は、古墳のみで、両地域に存す。4基あったが、調査対象となったのは2基で、他の2基は九州電力の鉄塔建設の際破壊された。1号墳は石室の石材は全て抜き取られ、敷石の一部が残存していたにすぎない。2号墳は1号墳と同様石室の石材は全て抜き取られていた。しかし、遺物は墓道両側の盛土中に、一括して埋置された状態で発見され、その中から陶質土器と見られるものが出土したことは貴重な成果であった。また、他に特記すべき遺物として、表土下の茶褐色土層内からねり玉1個が出土した。

3　松尾口遺跡

調査開始前に一部土取りがなされ、また、既に遺構面が削平されていたため、遺構の残存状態は悪く、検出した主要な遺構は、弥生時代の円形住居跡1棟、貯蔵穴4口、古墳2基、横穴1基のみであった。出土した遺物から、弥生時代の遺構は前期末から中期初頭、古墳・横穴は6世紀後半頃のものと考えられる。

Ⅳ　北牟田遺跡の生活遺構と遺物

検出された遺物は膨大な量にのぼるが、遺構の時期決定に供しうる遺物は火災などによって住居中に遺棄された土器群が主要であり、その量は僅かである。さらに各土器群の時間差を決定するためには、住居跡の切り合い関係に依拠することが重要である。その意味で11号・12号・22号住居跡の切り合い関係を基に、当遺跡各遺構の新旧関係を究明する主軸とする。さらに6号・10号・32、34号住居跡出土の床面一括出土土器や、17号住居跡埋土中の100個体を越える土器や62号貯蔵穴出土土器をも加えて、当遺跡の編年を試み、4時期に区分した。各時期土器の詳細については「土器」の項で述べるが、従来の編年観でいえば、Ⅰ期－前期末、Ⅱ期－中期初頭、Ⅲ期－中期前半、Ⅳ期－中期後半となろう。以下遺構と遺物について概述する。

Ⅰ　遺　　構

調査区を20m方眼で区分けした。南よりアラビア数字で、西よりアルファベットで各区を示す。(Fig.①)

A 住居跡

1号住居跡

(Fig.3) ははA6区にある。小形の円形を呈している。柱7本は床面中心より西につれて配

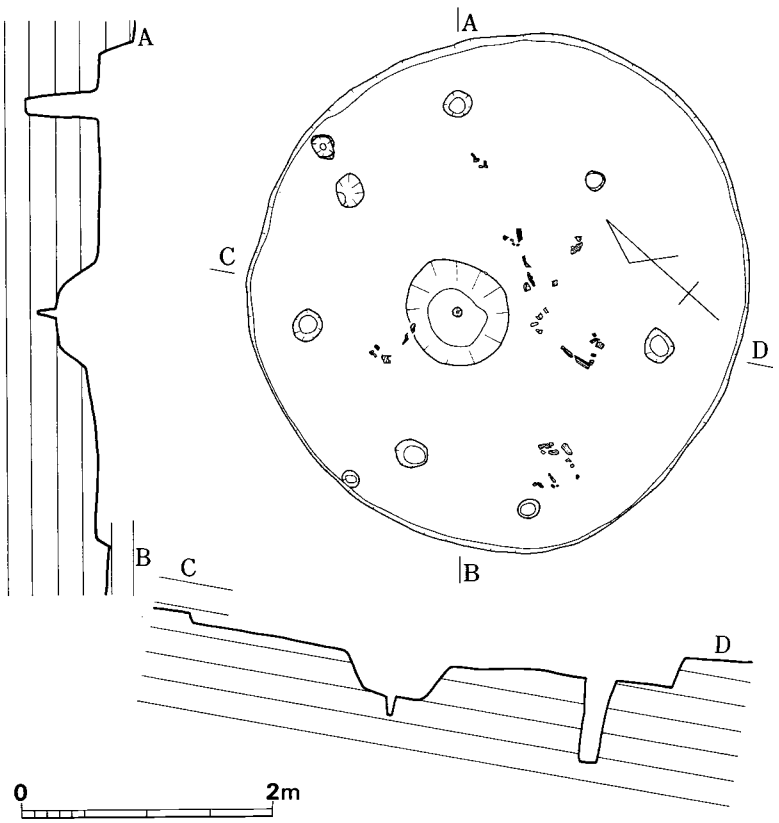


Fig3　1号住居跡実測図（縮尺1/60）

置されている。床面中央の円形ピットは40 *cm*と深く、中央に小孔がある。床面には炭化物が僅かではあるが、散乱している。時期は不明。

2号住居跡はＣ５区にある。構造は不詳。60・65・79号各貯蔵穴と切り合い、64・88号貯蔵穴の上に床面が作られている。土器の出土例はないが、切り合い関係により、Ⅲ期かと思われる。

3号住居跡（Fig. 4）はＢ７～８区にある。円形住居跡で、壁は南側のみ検出された。床面

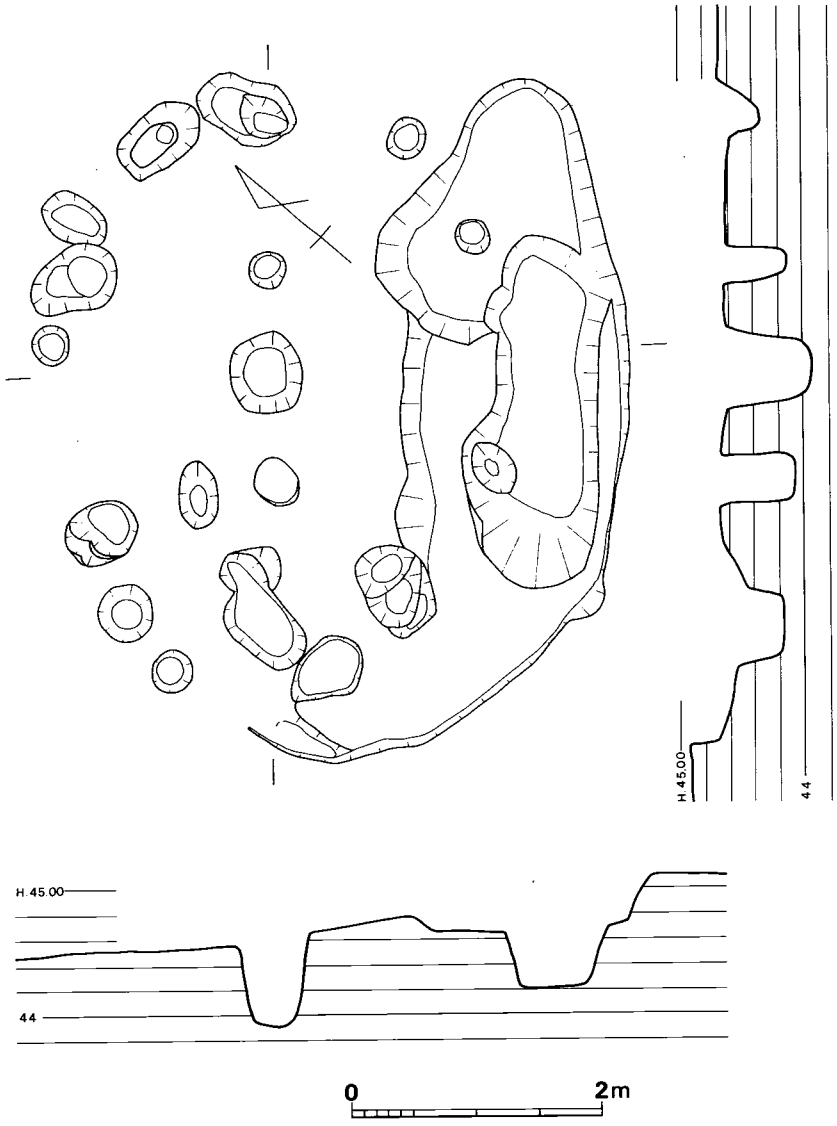


Fig. 4　3号住居跡実測図（縮尺１/60）

は凹凸が著しく、ピットも多い。周柱は8本程度かと考えられる。床面中央の円形ピット脇の2ピットは棟持柱跡と思われる。土器や石器、土製品が多く出土した。II期の所産。

4号住居跡（Fig. 5）はC 7 ～ 8 区にある。円形住居跡で、38号貯蔵穴を切っている。西側にある円形遺構（未掘）をも切っている。床面に多くのピットがあるが、周柱は7～8本程度と思われる。床面中央の楕円形ピット脇の2ピットは3号住居跡でみられた棟持柱跡と同様か。床面から、石器、土製品、鉄器、イチイガシの実が出土した。IV期の所産。

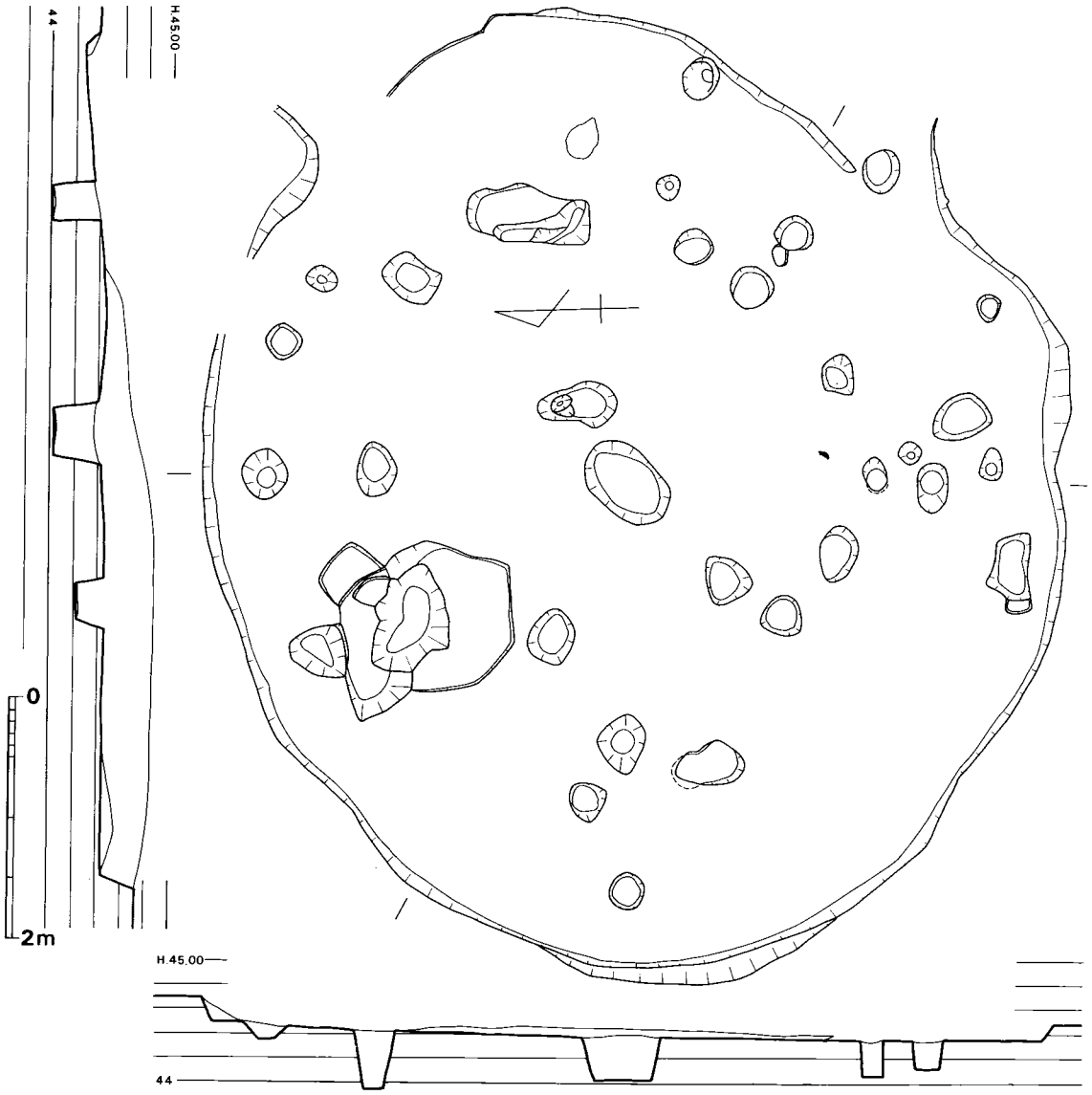


Fig. 5　4号住居跡実測図（縮尺1/60）

5号住居跡（Fig. 6、PL 7－1）はC～D 8区にあり、8号住居跡に次ぐ大きさの円形住居跡である。南東壁は34号貯蔵穴を切っている。床面には48口のピットがあるが柱穴の認定は不詳。床面中央の楕円形ピットは1回作り替えている。床面より土器の他石器やシイの実が多く出土したが、特に勾玉は当遺跡唯一の例である。Ⅳ期の所産。

6号住居跡（Fig. 7、PL 4－1）はA 6区にある隅丸長方形住居である。切り合いはない。

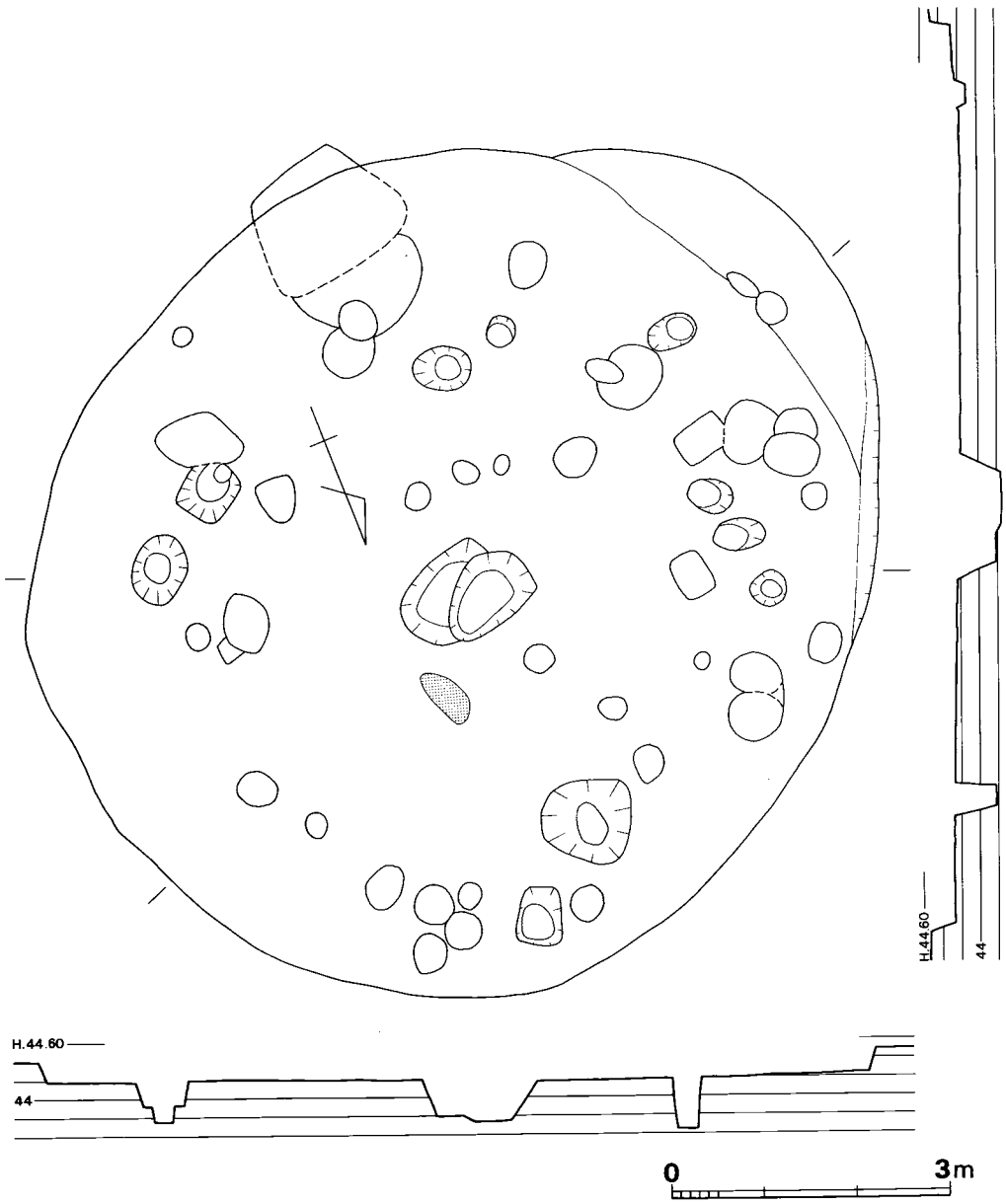


Fig. 6　5号住居跡実測図（縮尺1/80）

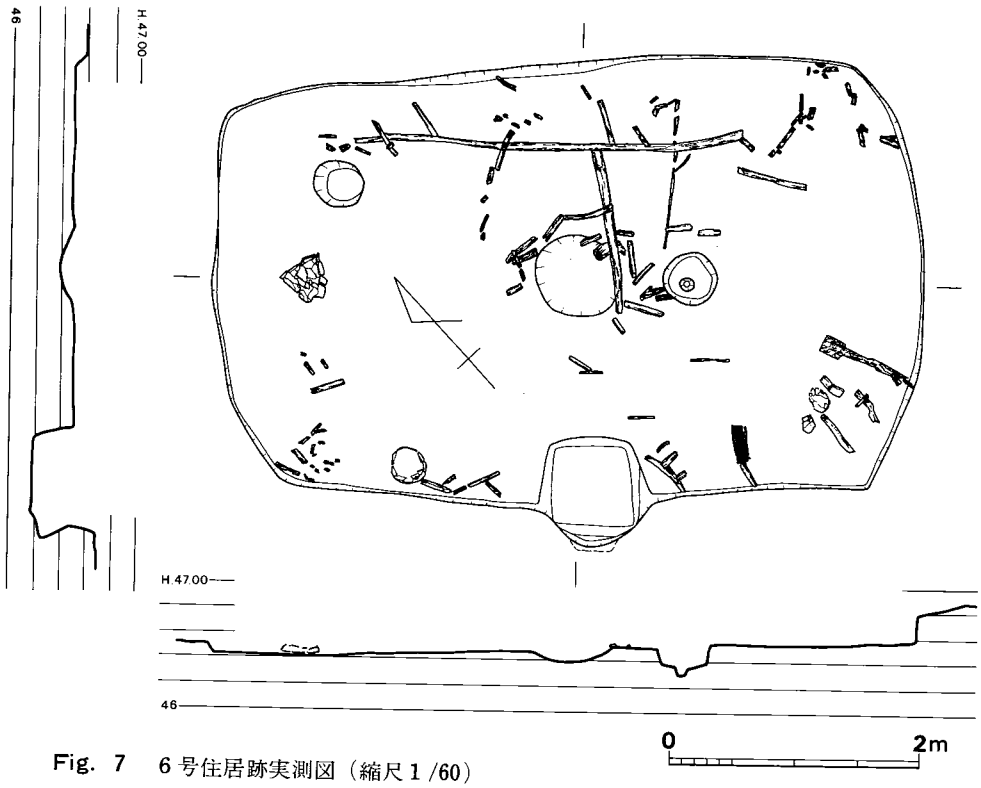


Fig. 7　6号住居跡実測図（縮尺1/60）

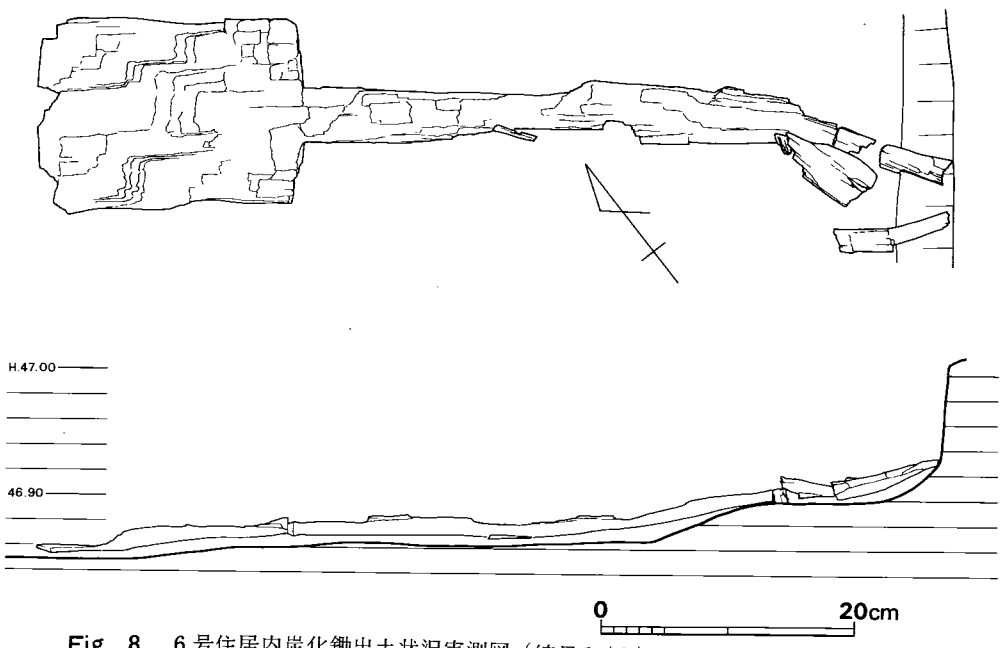


Fig. 8　6号住居内炭化鋤出土状況実測図（縮尺1/6）

火災に会っており、床面に建築材が散乱している。床面中央には断面摺鉢状の円形ピットがある。南西壁中央が張り出してその内側に方形ピットがある。断面一部は袋状になる。床面からは土器2個体と木製鋤が出土した。II期の所産。

7号住居跡は調査区北端のD9区で検出したが、未掘である。径6.2*m*程度と思われるが、構造は不明。よって時期も不詳。

8号住居跡はD8～9区にあり、9～13号貯蔵穴を切っている。当遺跡最大の円形住居跡であるが、調査不充分なため、構造は不詳。IV期の所産。

9号住居跡（Fig. 9　PL7－2．3）はC7区にあり、円形である。第3号中世墳墓の周溝によって切られている。北壁は不明。床面に19口のピットがみられるが、内8口程度が柱穴と

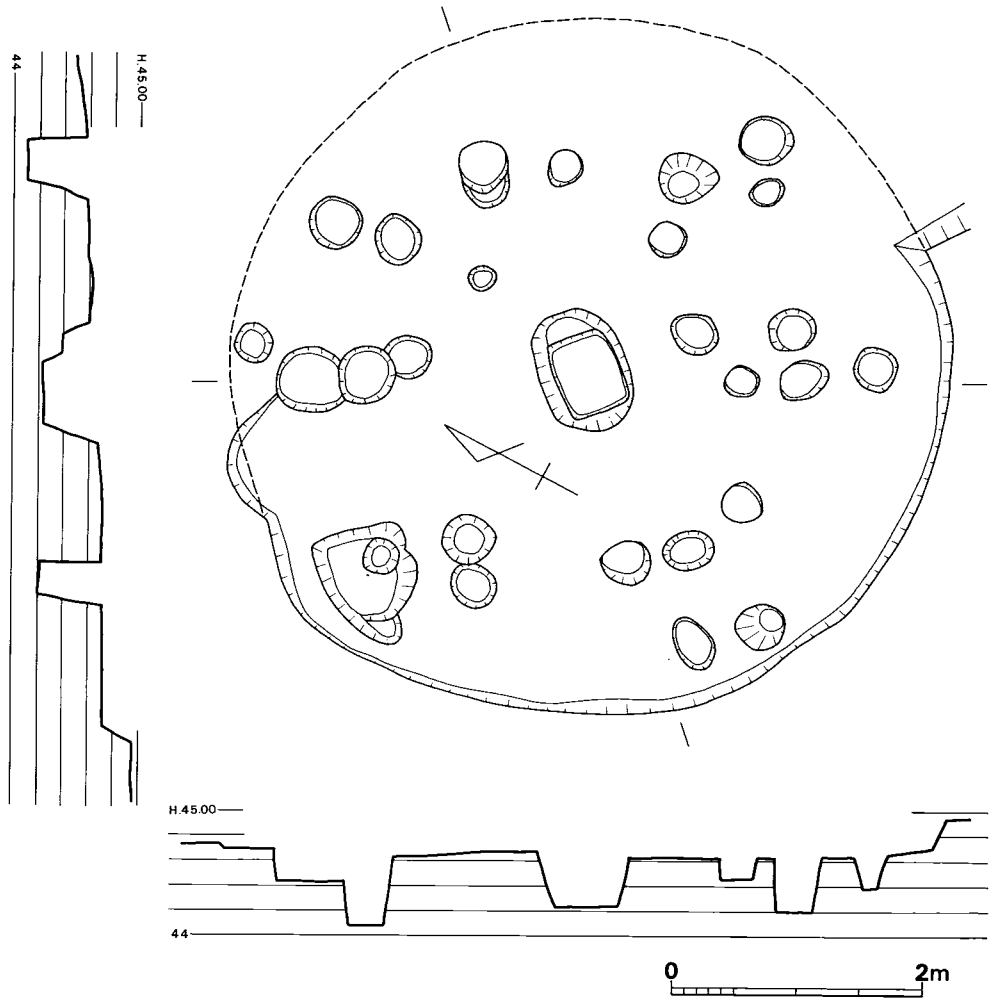


Fig. 9　9号住居跡実測図（縮尺1/60）

思われる。床面中央に楕円形ピットがある。黒耀石片、石斧残欠が出土したが時期は不詳。

10号住居跡

（Fig. 10. PL 3－1）はB6区にあり、長方形である。南隅壁は円形貯蔵穴を切っていた。火災

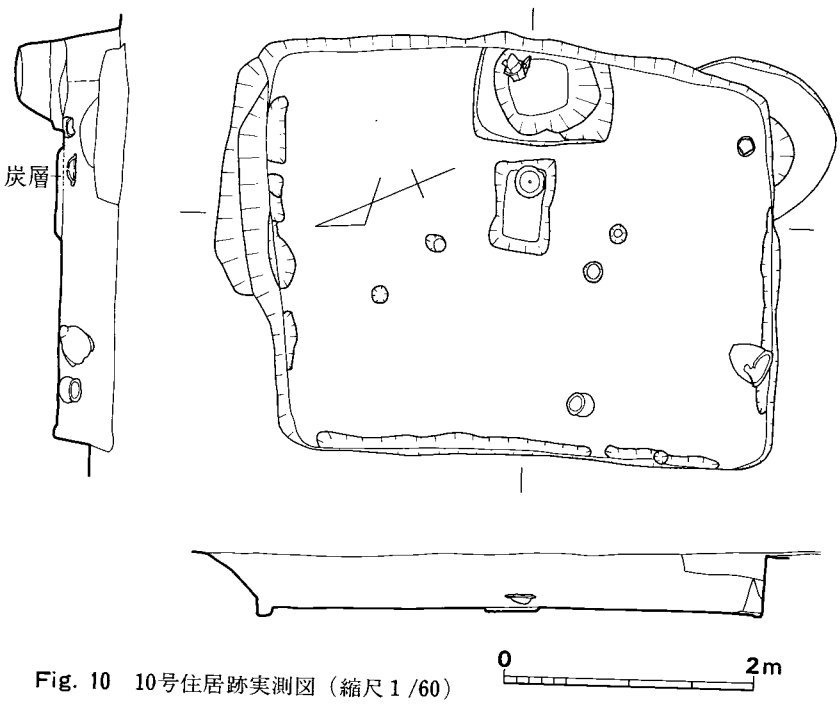


Fig. 10　10号住居跡実測図（縮尺１/60）

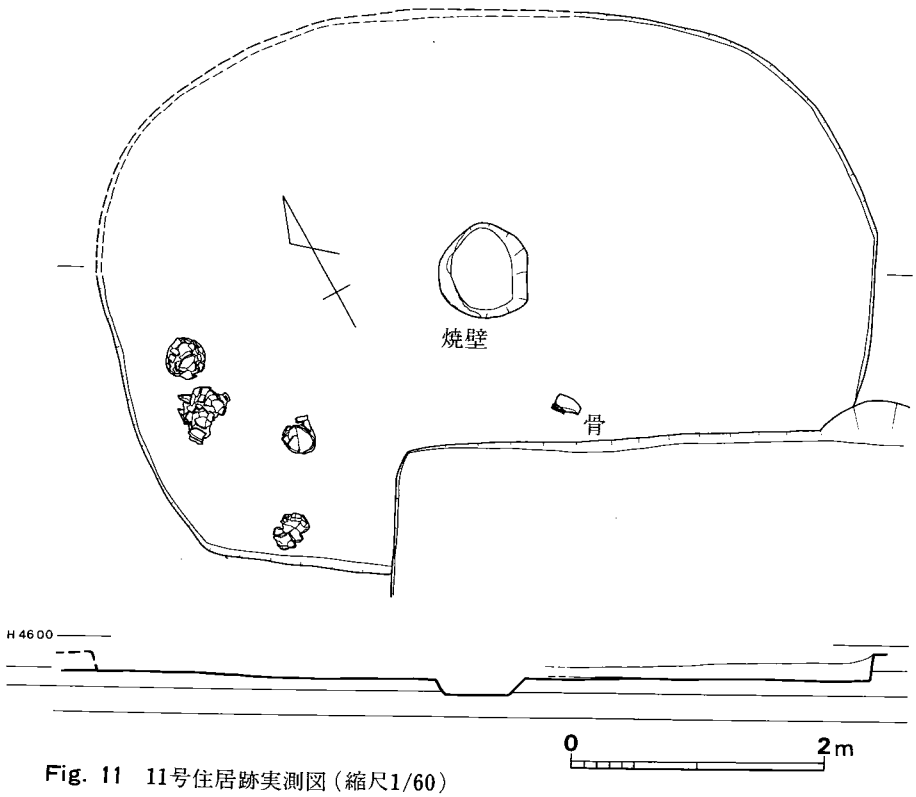


Fig. 11　11号住居跡実測図（縮尺1/60）

を被っていた。長辺主軸上の小ピット２口が主柱穴と思われる。周溝は途切れがちだがめぐっている。床面中央より西に寄って長方形ピットがあり、炭化物が詰っていた。さらに西壁側中央に1.07×0.7 *m* のピットがあった。床面からは完形品を含む８個の土器と石器が出土した。また西壁下南半には炭化米が広く散布していた。Ⅳ期の所産である。

11号住居跡　（Fig. 11、 PL３－２）はＢ６区にある楕円形住居跡で、12号住居跡に南壁を切られている。火災を被っており、床面全体に炭化物が散乱していた。床面中央に炉があるが、柱穴は不明。西壁下より完形品の壺３、鉢１が出土した。Ⅲ期の所産である。

12号住居跡　（Fig. 12、 PL３－２）はＢ６区にある長方形住居で、11・22号住居跡を切っている。火災を被っており、床面に炭化建築材が散乱していた。柱痕及び構造については不明瞭。床面中央に焼土があり、炉かと考えられる。床面上から完形品を含む土器や投弾８個が出土した。Ⅳ期の所産である。

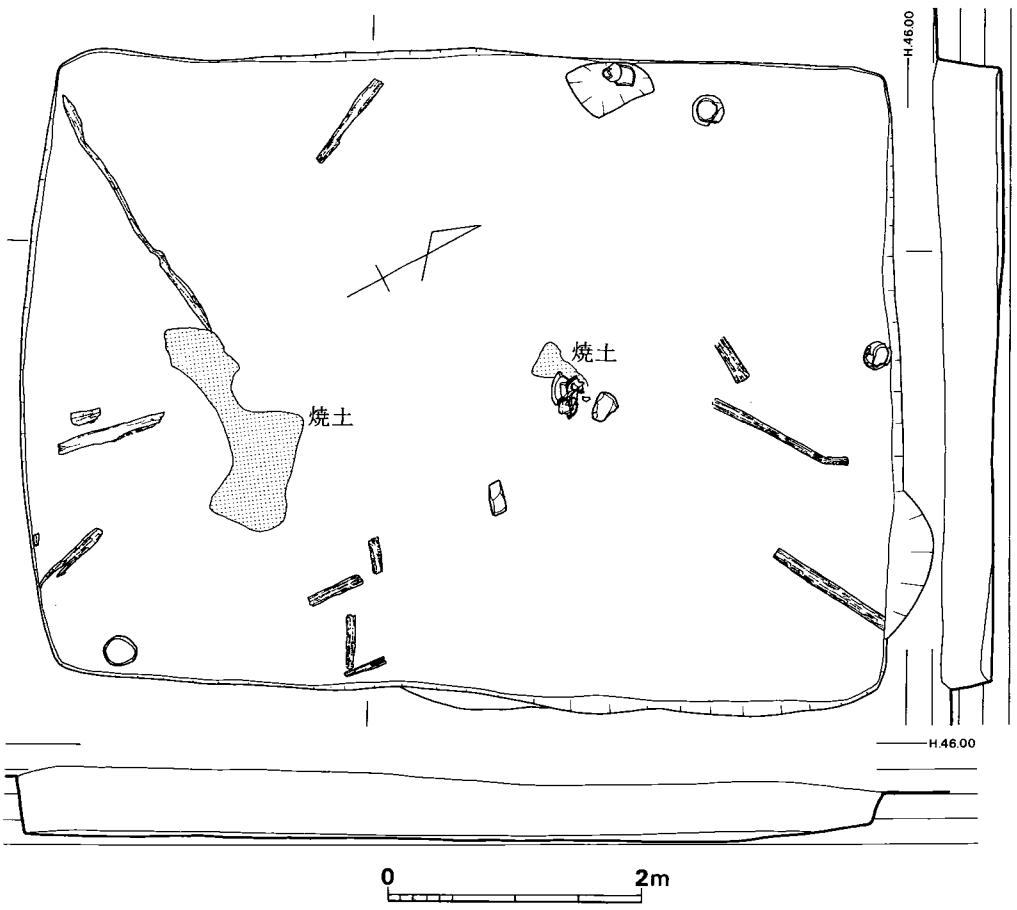


Fig. 12　12号住居跡実測図（縮尺1/60）

13号住居跡（Fig. 13）はB５区にある長方形住居跡である。柱痕は不明である。床面中央に炉と南壁側中央に楕円形ピットがある。Ⅳ期の所産である。

14号住居跡（Fig. 14）はA～B５区にある小形の不整長方形の住居跡である。長軸上に２口のピットがあり、南壁下の楕円形ピットの深さは床面から35 *cm*を計る。Ⅱ期の所産である。

15号住居跡（Fig. 15）はA５区にある。西北壁は削平されて不明である。床面中央に炉が、長軸上に２柱穴がある。東壁下の楕円形ピット２口の性格は不明。所属時期は不明。

16号住居跡（Fig. 16、PL５－１）はB～C４区にある長方形住居跡である。26号住居跡の上に貼床して建てられている。火災を被っており、床面上に炭化材が散乱していた。中央軸線上に２口の深いピット（床面より北東側が85 *cm*、南西側が62 *cm*）があり主柱穴と考えられる。その中間に瓢形のピットがある。中に小ピットがあり、やや複雑な形態だが、炉であろう。南東壁側中央に長楕円形のピットがある。Ⅳ期の所産である。

17～19号住居跡（Fig. 17）はA４区にある。19→18→17号の関係にある。17･18号は隅丸長方形、19は不整方形を呈する。

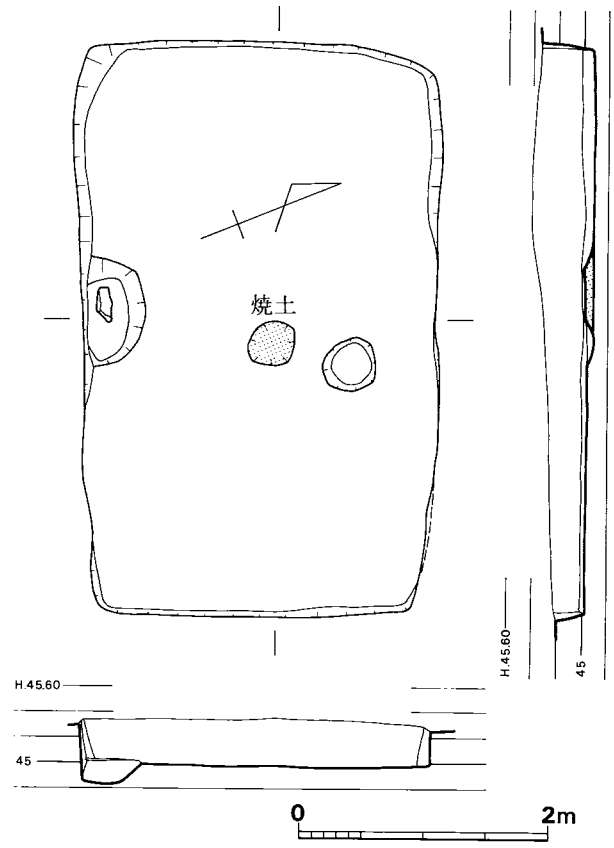


Fig. 13　13号住居跡実測図（縮尺１/60）

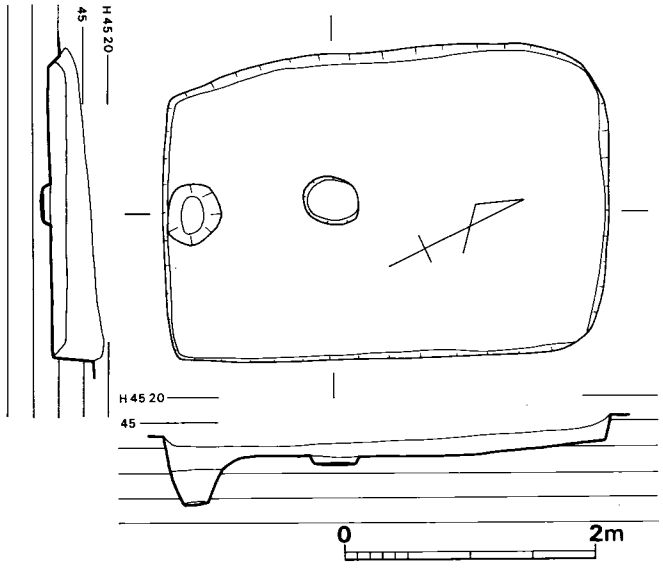


Fig. 14　14号住居跡実測図（縮尺１/60）

構造については不明瞭。内部堆積土中よりⅠ期及びII期の多量の土器が出土した。その数は100個体を越える。石器、土製品も多い。いづれもⅠ期の所産と考えられる。

20号住居跡（Fig. 18、PL 5 － 2）はC 4 ～ 5 区にある円形住居跡である。49号貯蔵穴を切っている。床面中央の不整隅丸長方形ピットを囲んで、8 口のピットがある。うち4 は柱穴であろうが、他は不明瞭。II期の所産であろう。

21号住居跡（Fig. 19、PL 6 － 1）はC 4 区にある円形住居跡で、西壁は方形ピット（住居跡？）を切っている。床面には22口のピットがみられ、その多くは二段掘りである。床面中央に二段掘り長方形ピットがあり、その作り方は丁寧で、床面平坦である。周柱は 6 本と考えられ、

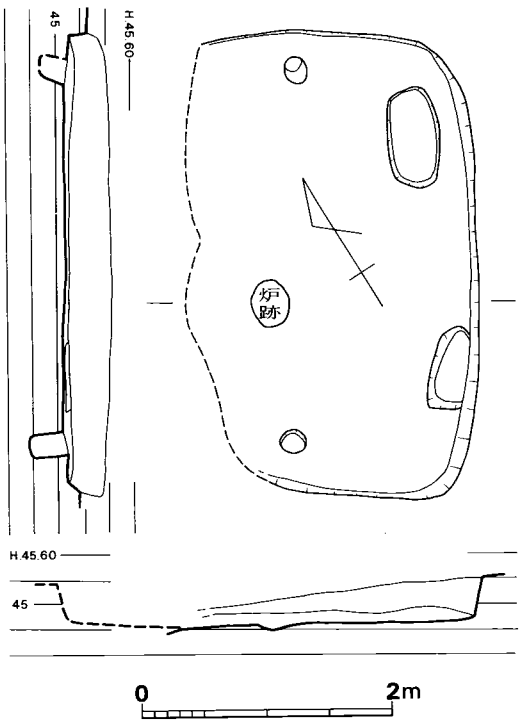


Fig. 15　15号住居跡実測図（縮尺 1 /60）

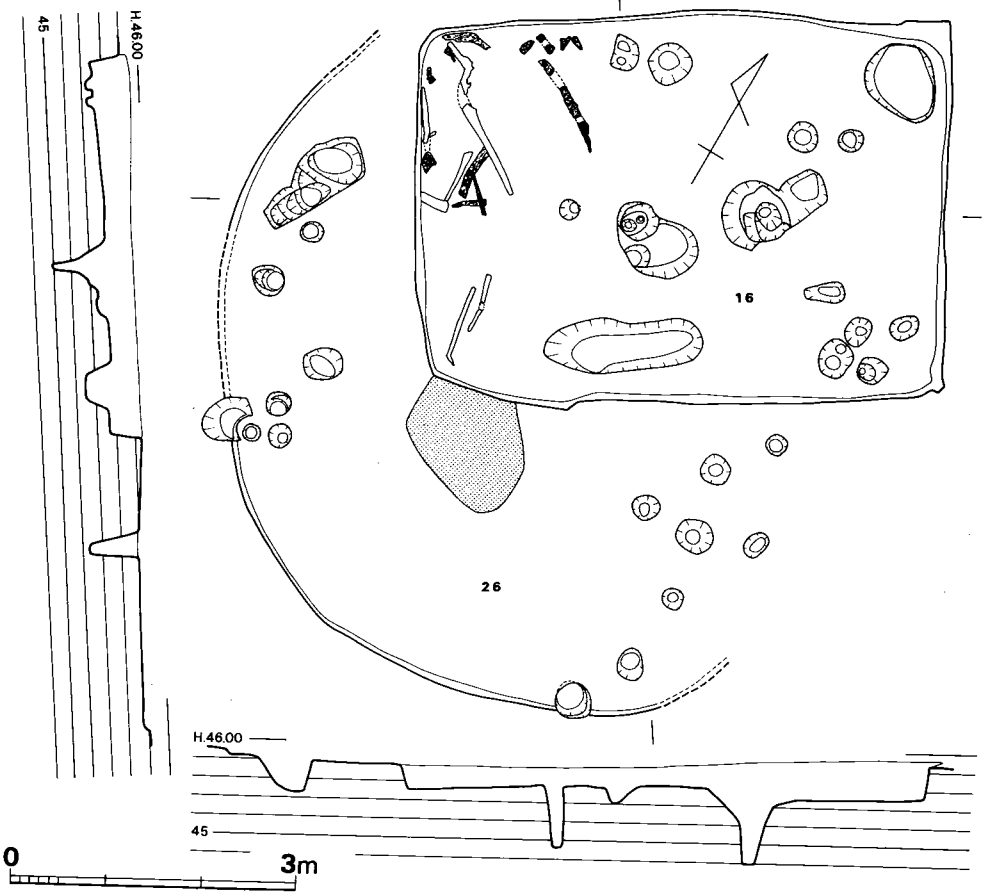


Fig. 16　16・26号各住居跡実測図（縮尺 1 /80）

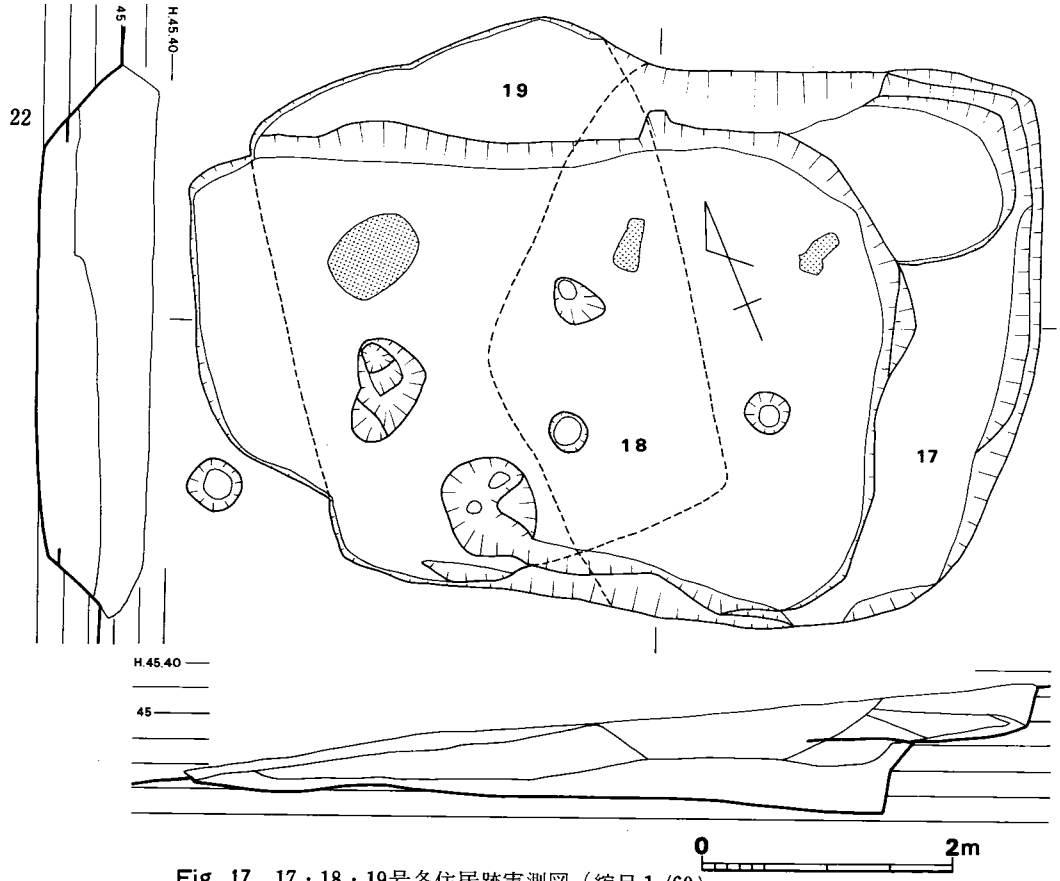


Fig. 17　17・18・19号各住居跡実測図（縮尺１/60）

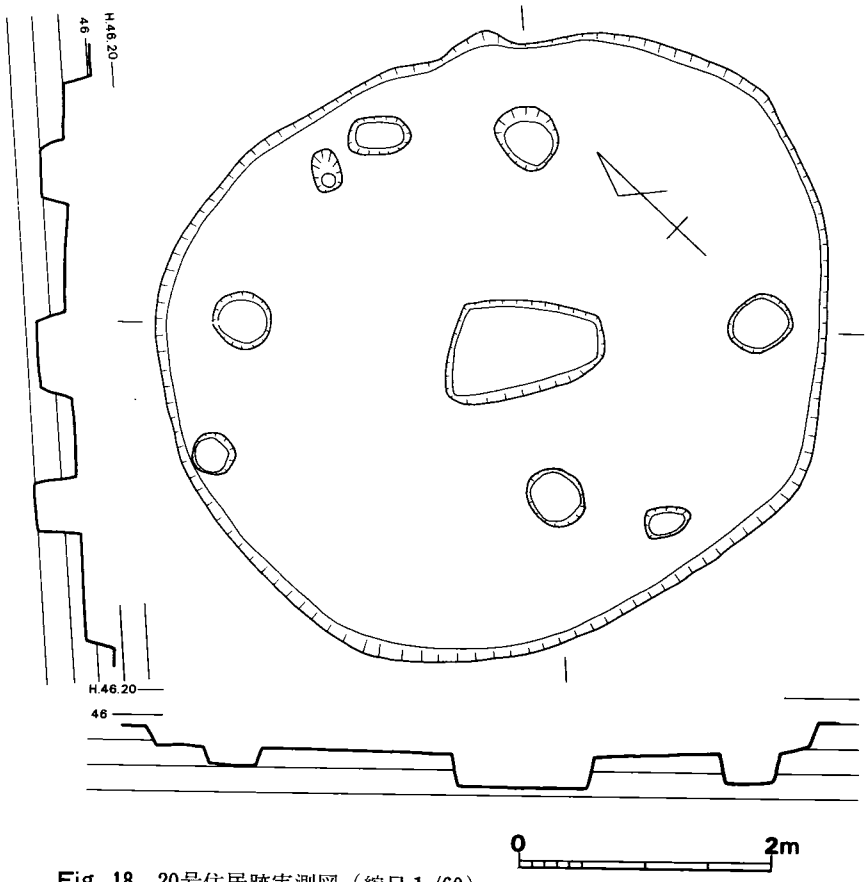


Fig. 18　20号住居跡実測図（縮尺１/60）

各々の間隔は2.0～2.3mである。但し、南側の2柱間では3mを計り、その外側のピットとも考え合わせ、出入口をなすものと考えられる。中央長方形ピットの両脇に二段掘りの深いピッ

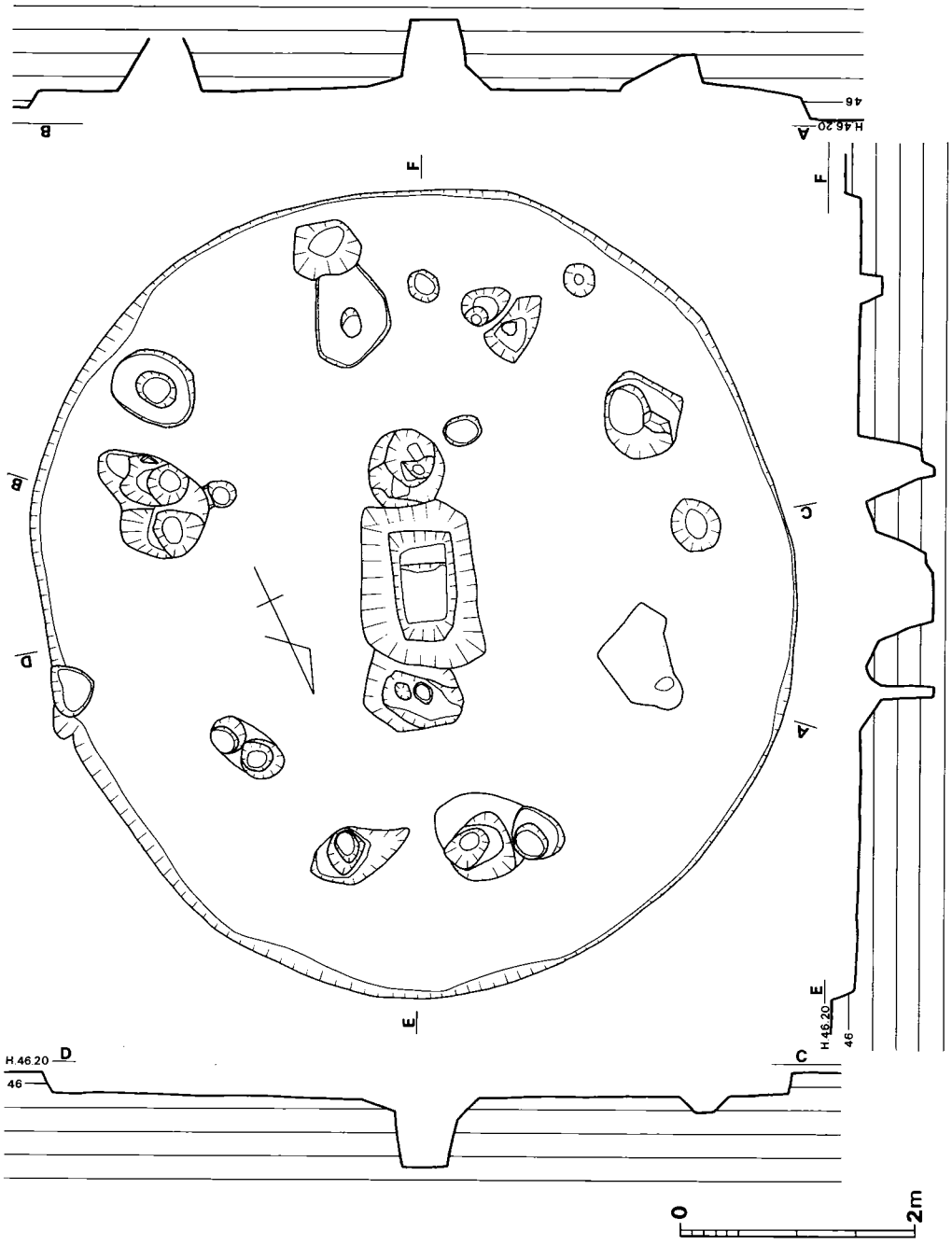


Fig. 19 21号住居跡実測図（縮尺1/60）

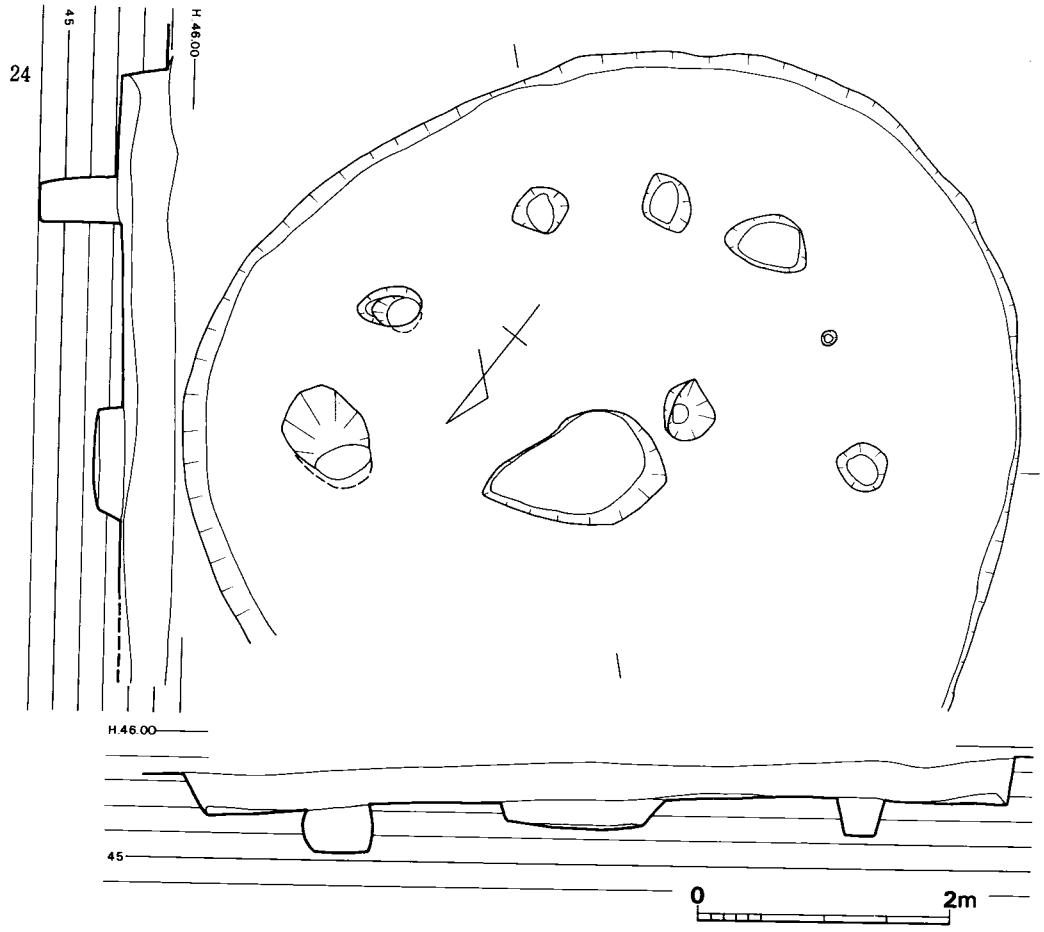


Fig. 20　22号住居跡実測図（縮尺１/60）

トがある。棟持柱の痕であろう。内部から土器の他、石鏃、石剣、紡錘車が出土した。Ⅲ期の所産である。

22号住居跡（Fig20、PL３－２）はＢ５～６区にある円形住居跡で、12号住居跡に切られている。中央の不整形ピットの周囲に７口のピットがめぐっている。柱の間隔は狭く、あるいは建て替えされたものかも知れない。内部より多種類の石器、土製品が出土した。Ⅱ期の所産である。

23号住居跡（Fig21）はＣ４～５区にある隅丸方形の住居跡で、31号住居跡に切られており、南壁は不明。床面中央に炉がある。柱並びは不明、

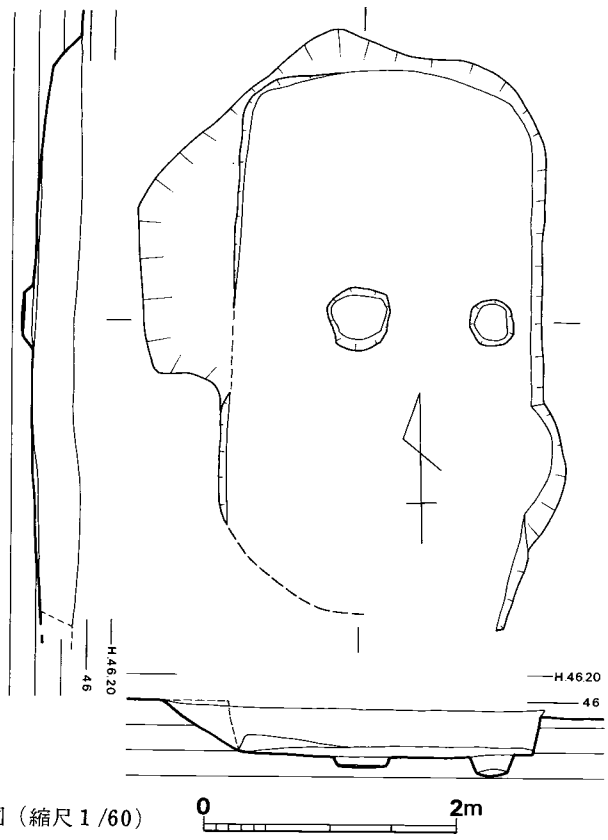


Fig. 21　23号住居跡実測図（縮尺１/60）

II期かそれ以前の所産。

24号住居跡はA～B4区で検出された隅丸長方形の住居跡である。東壁は36号住居跡壁と重なり、24号が拡張されて36号が作られたと思われる。柱穴は36号のそれと重なり指摘は困難。中央に炉がある。土器の他、石包丁が2点出土している。II期の所産である。

25号住居跡（Fig22、PL6－2）はD9区で検出された長方形住居跡である。14・15号貯蔵穴を切っている。中央の炉中から支脚3点がまとまって出土した。東北壁側中央に楕円形ピットがある。柱列は不明。III期の所産である。

26号住居跡（Fig16、PL5－1）はB～C4区で検出された。円形で、16号住居跡に切られている。壁は削平されてほとんど残っておらず、南西の⅓周分を検出したのみ。16号住居跡南壁中央下に掘り込みがあり、当住居跡の中央ピットかと考えられるが未掘である。ピットも未検出のものがあり、柱並びは不明確である。III期の所産である。

27号住居跡（Fig23）はC4区にある長方形住居跡で30号住居跡を切っている。中央に炉があり、南壁側中央に円形ピットがある。列並びは不明。II期の所産である。

28号住居跡はA5区で検出された長方形住居跡である。西半は未掘。北壁から東壁側にかけてL字状のベッ

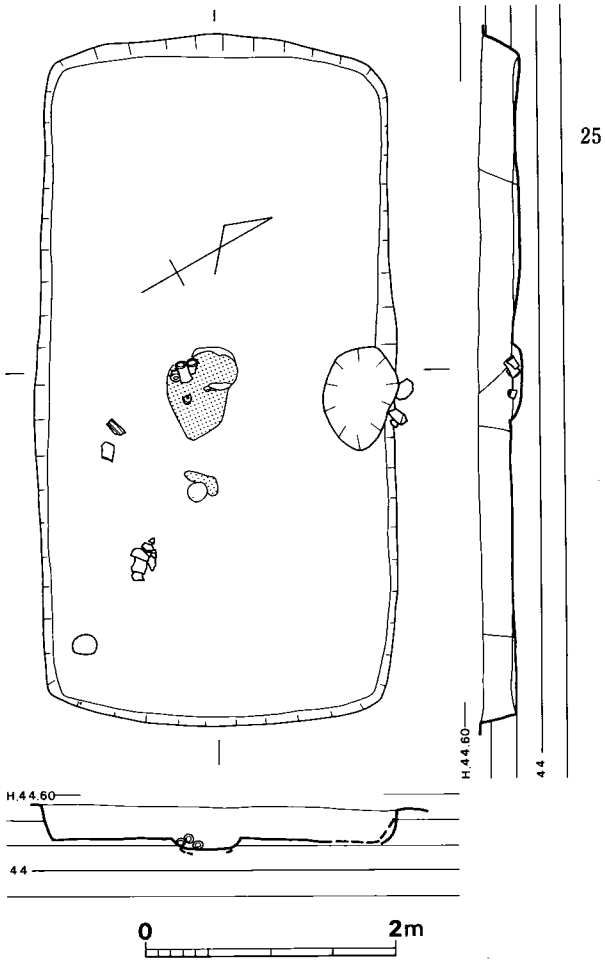


Fig. 22　25号住居跡実測図（縮尺1/60）

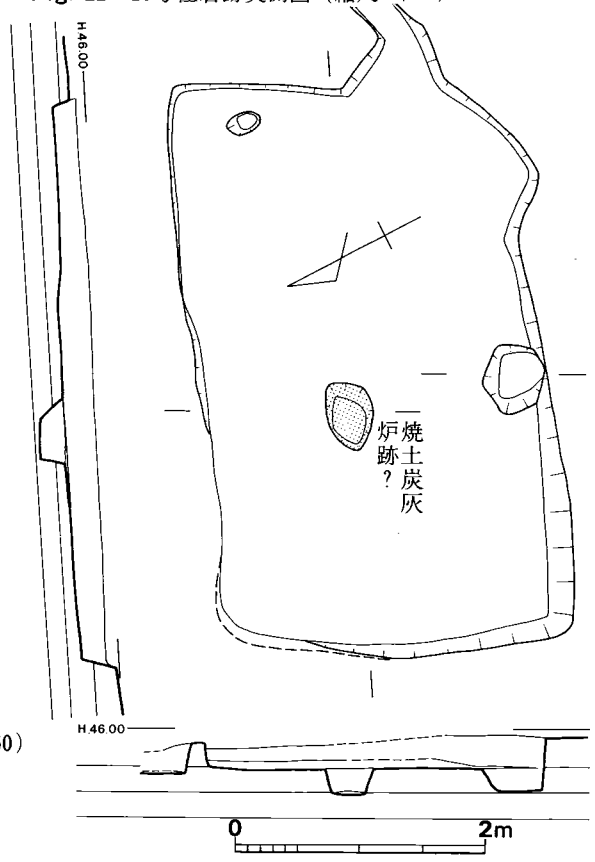


Fig. 23　27号住居跡実測図（縮尺1/60）

トをもつ。南東隅に円形ピットがある。柱並びに炉は不明。Ⅳ期の所産である。

29号住居跡（Fig 24）はＣ５区にある長方形住居跡。中央より東に寄って浅い掘り込みの炉があり、その東、東壁下に楕円形ピットがある。柱並びは不明だが、床面中央に円形の柱穴様ピットがある。Ⅱ期の所産である。

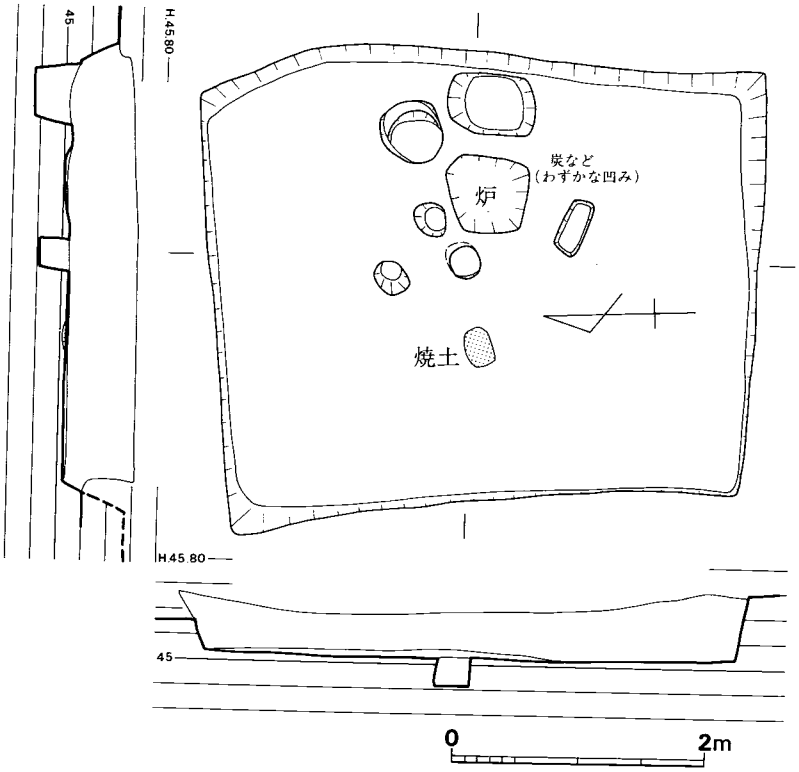


Fig. 24　29号住居跡実測図（縮尺１/60）

30号住居跡（Fig. 25）はＣ４区にあり、27号・31号住居跡に切られた長方形住居跡である。構造についてはまったく不明。Ⅱ期かそれ以前の所産である。

31号住居跡はＣ４～５区にある方形住居跡。構造についてはまったく不明。Ⅱ期の所産。

32号住居跡はＡ７区で検出された方形住居跡であるが工事中に検出され、実測もできずに終った。構造については不明。床面で一括土器が出土した。Ⅳ期の所産。

33号住居跡はＡ８区で検出された円形住居跡である。プランを

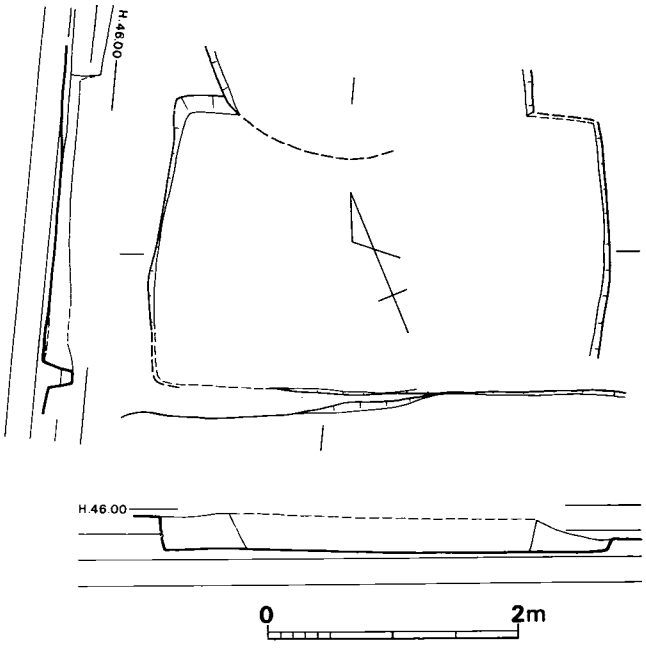


Fig. 25　30号住居跡実測図（縮尺１/60）

確認したのみで未掘。所属時期も不明。

34号住居跡（Fig. 26, PL. 7－4）はB 8区で検出された不整方形の小形住居跡である。床面中央に円形炉があり、中より支脚3個が出土した。炉を挟んで2柱穴がある。他にピットが数個所あるが、当住居跡に伴うものかどうかは不明。あるいは4本柱をもつか。Ⅰ期の所産である。

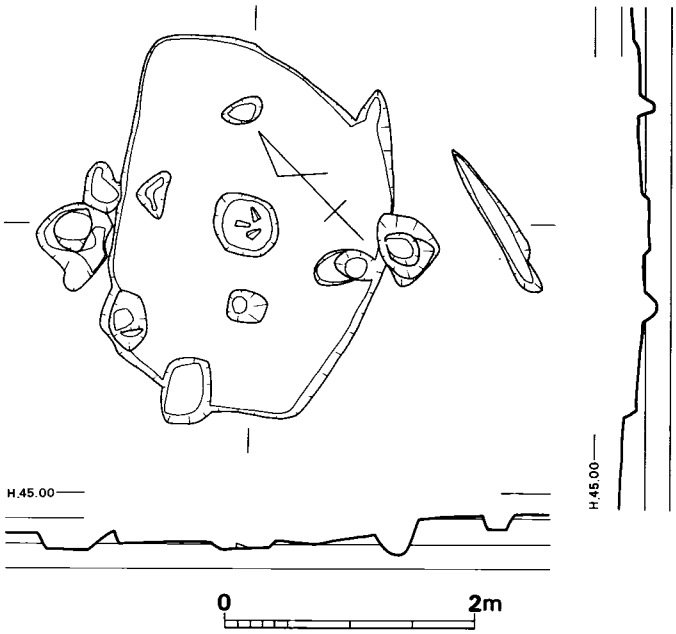


Fig. 26　34号住居跡実測図（縮尺1/60）

35号住居跡（Fig. 27）はA 4区にある。小形円形住居跡であろうか。内部構造は不明。床面にピット2口がある。時期不明。

36号住居跡はA～B 4区にある。南側は未発掘。112号貯蔵穴を切っている。また24号住居跡東壁と壁を共有しており、24号を拡張したものと考えられる。床面中央に楕円形ピットがある。他に28口のピットがあり、そのうち7～8口が柱穴であろう。Ⅲ期の所産。

37号住居跡はB 4区にある円形住居跡。1期の78号貯蔵穴を切っている。床面の大半を3つの長方形ピットが切っており、構造は不明。Ⅲ期に属する。

以上計37軒の住居跡について述べた。構造の不明確なものも多いが、構造的には隅丸長方形あるいは長方形と円形住居跡の2種に大別される。前者については中央に炉があり、炉を挟んで長軸上に2本の主柱穴

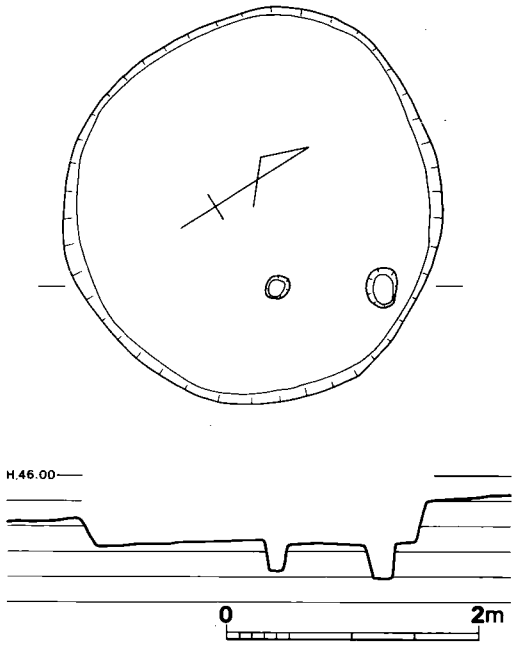


Fig. 27　35号住居跡実測図（縮尺1/60）

No.	形態	計測値				柱穴		施設			出土
		長辺(長軸)	短辺(短軸)	深さ	面積	主柱穴	その他	炉	貯蔵穴 横ピット	中央ピット	土器
1	円形	4.00	3.94	0.24	13.2	7	2			あり	
2	円形	6.05	不明	不明	39.6±	不明	不明				
3	円形	6.08	?	0.34	27.2±	8	9		あり	あり	壺3、甕2
4	円形	7.78	7.52	0.30	42.1	7	22			あり	
5	円形	8.90	8.45	不明	61.7	7～8	48			あり	壺1、甕1
6	隅丸長方形	5.58	3.40	0.20	18.8	2	1		あり	あり	甕6、支脚1
7	円形	6.20	不明	不明	27.1±	不明	不明				
8	円形	9.95	9.50	不明	75	不明	18			あり	
9	円形	5.40	5.40±	0.23	22.4±	8	19			あり	
10	長方形	4.04	3.03	0.42	13.5	2	4	あり	あり		壺3、甕3、高杯2
11	楕円形	6.08	4.30	0.22	22.7±	不明	不明			あり	壺3、鉢1
12	長方形	6.84	4.95	0.50	33.7	不明	2	あり			壺7、甕1、鉢1、支脚1
13	長方形	4.42	2.78	0.50	11.2	不明	1	あり	あり		
14	長方形	3.48	2.30	0.44	7.5	不明	1				
15	長方形	3.52	?	0.33	不明	2	2	あり	あり		
16	長方形	5.69	4.13	0.30	20	2	17	あり	あり		
17	隅丸長方形	6.18±	3.42±	0.44	15.4	不明	不明				壺18、甕63、鉢8 蓋2、甑4
18	隅丸長方形	5.44	3.00	1.05	15.0	不明	4		あり		壺4、甕7、支脚1、手捏ね1
19	不整方形	4.50	3.70±	不明	14.6±	不明	2	あり			
20	円形	5.15	4.57	0.25	19.4	4+α	4			あり	甕1、鉢1、
21	円形	6.68	6.22	0.20	32.2	8	14			あり	壺1
22	円形	6.40	5.40±	0.38	28.6±	6～8	2～3				
23	隅丸長方形	4.32	2.34	0.32	9.3	不明					
24	長方形	(4.40)	(2.90)	不明	不明						甕3、支脚1
25	長方形	5.22	2.60	0.30	14.6	不明	1	あり	あり		甕1、支脚3
26	円形	8.41	不明	不明	52.0±	不明	25		あり		
27	長方形	4.36	2.61	0.25	11.3	不明	1	あり	あり		
28	長方形	3.25	2.75	不明	8.6						甕2
29	長方形	4.18	3.37	0.50	13.5	不明	5	あり	あり		
30	長方形	3.54	2.17	0.28	7.4	不明	不明				
31	方形	2.40	2.20	不明	5.1						
32	方形	5.45±	5.20±	不明	不明	不明	不明	あり	あり		甕1、鉢1、高杯1
33	円形	不明	不明	不明	12.8	不明					
34	不整方形	2.80	2.70	0.10	4.9	2					支脚3
35	円形	2.88	2.82	0.34	6.3	不明	2	—	—		
36	円形	8.60±	7.20	不明	50.2±	7～8	19	—	—	あり	
37	円形	5.00	4.30	不明	17.0	不明					

Tab. 1 住居跡一覧表

土遺物				備考	挿図番号	時期
石器	土製品	鉄器	その他			
					Fig. 3	?
蛤刃石斧1	紡錘車1					?(III)
石核1、石庖丁1、蛤刃石斧1、磨石1	円盤3			副柱あり	Fig. 4	II
打製石鏃1、偏片刃石斧1、蛤刃石斧1	円盤1	刀子	イチイガシの実	貯38より新	Fig. 5	III
勾玉1、打製石鏃2、石庖丁2、柱状片刃石斧1、石皿1	円盤3		シイの実	貯34より新	Fig. 6	III
石錐1、石製円盤1	紡錘車2		木製鋤	被火災、床面土器あり	Fig. 7	III
						?
				貯9～13より新		II
					Fig. 9	?
蛤刃石斧1、砥石1			米	床面土器あり、被火災	Fig.10	IV
	紡錘車1			床面土器あり、No.12より古、被火災	Fig.11	III
	投弾8			No.22より新、被火災	Fig.12	IV
				貼床	Fig.13	IV
打製石鏃1、蛤刃石斧1、紡錘車1					Fig.14	II
					Fig.15	?
			シイの実	貼床、被火災	Fig.16	IV
打製石鏃3、スクレパー7、磨製石鏃1	投弾1、			No.18より新	Fig.17	I
投弾1、紡錘車5、偏平片刃石斧1、	紡錘車5					I
蛤刃石斧1、円盤1、砥石2						
スクレーパー2	紡錘車1			No.17より古、No.19より新		I
				No.17・18より古		I
砥石2				貼床の下より貯蔵穴(49)を検出	Fig.18	II
打製石鏃1、石剣1	紡錘車2			副柱あり	Fig.19	III
打製石鏃1、スクレーパー1、庖丁1、円盤1、紡錘車1、砥石1	投弾3			被火災、No.12より古	Fig.20	II
石庖丁1				No.31より古	Fig.21	II
石庖丁2				No.36より古		?(II)
			骨片	床面土器	Fig.22	III
						?(III)
				No.30より新	Fig.23	?(II)
磨製石鏃1	投弾1			L字形ベット付		IV
石庖丁2					Fig.24	II
				No.27・31より古	Fig.25	?(II)
石庖丁1				No.30・25より新		IV
						?(II)
						?(II)
				床面土器	Fig.26	I
					Fig.27	II
砥石1				No.24より新		II
						?

をもつ。Ⅰ期を除いて長辺壁側中央に楕円形か長方形のピットをもつことが基本的である。10号・15号・25号・住居跡がその典型である。25・34号住居跡では炉中から3個の支脚が出土しており、炉中での炊事の様が理解される。なお、28号住居跡は柱並びは不明であるがL字状ベットが附設されている。時期的な差について各期ごとに記すと、Ⅰ期（17～19・34号）はいづれも不整方形を呈し、調査区中南北両端に位置する。床面積は各々15.4m^2、15.0m^2、14.6m^2、4.9m^2で17～19号は34号の3倍の大きさである。Ⅱ期（14・29号）は方形か長方形をなし、調査区中南部に分布している。床面積は 7.5m^2と13.5m^2であり、中小二種ある。Ⅰ期と同様である。Ⅲ期は6号と11・25号住居跡の3軒で、隅丸長方形をなす。床面積は中形は14.4m^2と18.8m^2で大形は22.7m^2。前期より全体に大形化する。Ⅳ期（10・12・13・16・28号）は長方形をなし、調査区中南半西寄りのみに分布する。32号は最も北に位置するが構造等についてはまったく不明。床面積は小形が8.6m^2、中形が11.2m^2・13.5m^2、大形が20m^2・33.7m^2である。小形の住居跡と大形の住居跡が明瞭に区分される。特に12号住居跡は方形住居跡中で最大である。占地も他の同時期方形住居跡群中の中央にあり、中心的建物であったと考えられる。

円形住居跡は中央に楕円形か長方形のピットがある。このピットの底面は平坦的な例が多く若干鍋底状になったものもある。壁線と平行して内側に柱が並ぶ。その数は7～8本が普通である。炉はない。21号住居跡は中央ピットの両脇に深い柱穴があり、棟木を支える柱が立っていたと思われる。同様の柱穴は3・4号住居跡においてもみられる。21号住居跡の場合、さらに出入口を設けたと考えられる柱穴があり、当遺跡発見円形住居跡の典型である。時期不明の例も多いが、判明する限りでは、Ⅰ期は全くない。Ⅱ期（3・8・20・22・36号）になって遺跡の全域に方形住居跡と混じって出現する。床面積は小形（19.4m^2）と中形（27.2m^2、28.6m^2）それに大形（50.2m^2、75m^2）に分けられる。Ⅲ期（4・5・21号）になると、遺跡南半にのみ分布が集中する。床面積はⅡ期より大形化し、中形（32.2m^2、42.1m^2）と大形（61.7m^2）に分けられる。

以上の事を総括するならば、Ⅰ期は中小形の不整方形住居跡、Ⅱ期は中小形長方形住居跡と中大形の円形住居跡、Ⅲ期は中大形隅丸長方形住居跡と中大形円形住居跡、Ⅳ期は小中大形長方形住居跡と住居形態を変化させていると言える。

B　貯蔵穴

貯蔵穴と考えたピットは総計 122口である。しかし、そのうち完掘したのは約半数の65、半分掘り終えたもの30であり、遺構の性格を取り違えているものもあろう。

貯蔵穴の平面形状は基本的に方形・長方形と円形に区分される。方形プランのものは断面形が袋状をなすもの（A類）、垂直壁をなすもの（B類）、舟底あるいは台形状をなすもの（C類）がある。長方形プランのものは垂直壁をなす。円形プランのものは断面全て袋状をなす。

Ⅰ期は方形A類か長方形B類、他はⅡ期のものである。

方形A類貯蔵穴（Fig. 28）には52・54・62・69・ 121号が含まれる。54は底面各辺が僅かなふくらみを持つ。断面は下半が垂直である。深さ1.47*m*を残している。62は比較的残りの良い例で、底面各辺は僅かなふくらみを持つ。内部より多くの土器、石器、カシの実が出土した。深さ1.86*m*。69は半掘したのみであるが、底面は隅丸方形であろう。西壁を円形袋状貯蔵穴が切っている。

121は壁面崩壊により、本来の袋状をなしていない。底面は隅丸方形で、各辺はふくらみを持つ。深さ2.32*m*をはかり、方形袋状貯蔵穴の中では最も深い。

方形B類貯蔵穴（Fig. 29）には10・16・79・94が含まれ、94に代表される。94は底面形状からいって本来は袋状であったとは考えられない。床面上より角礫4個が出土した。深さ 1.6*m*。

方形C類貯蔵穴（Fig. 29, 31, 32）には9～14と16が含まれる。10～13は浅く、貯蔵穴と呼びうるかどうか疑問がある。9・14・16は深さが各々1.28*m*、0.97*m*、1.52*m*である。

長方形B類貯蔵穴（Fig. 31, 32）には9・14・27・39・40・63が含まれる。39は二段掘りで、最深部の深さ1.37*m*。40は2口の切り合いだが、前後関係は不明。北側は底面で1.66×0.8*m*、南側は中央で3.46×1.42*m*をはかる。南端の最深部で深さ1.76*m*。周辺の弥生中期初頭遺跡でも類例がある。63は南西辺に段

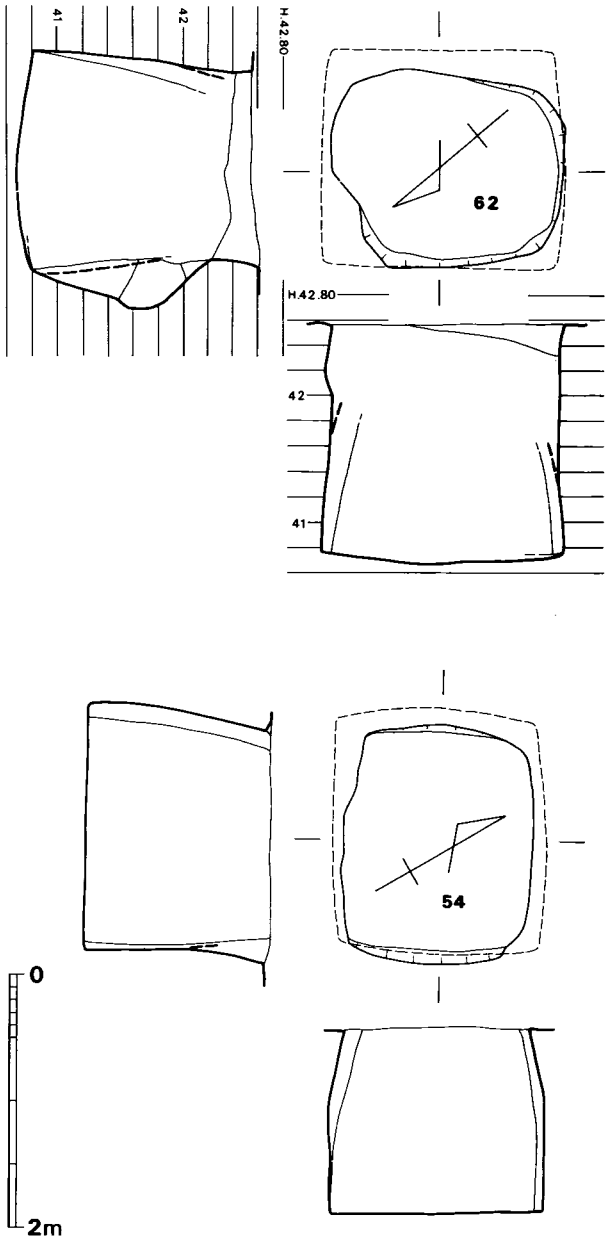


Fig. 28　54・62号各貯蔵穴実測図（縮尺1/60）

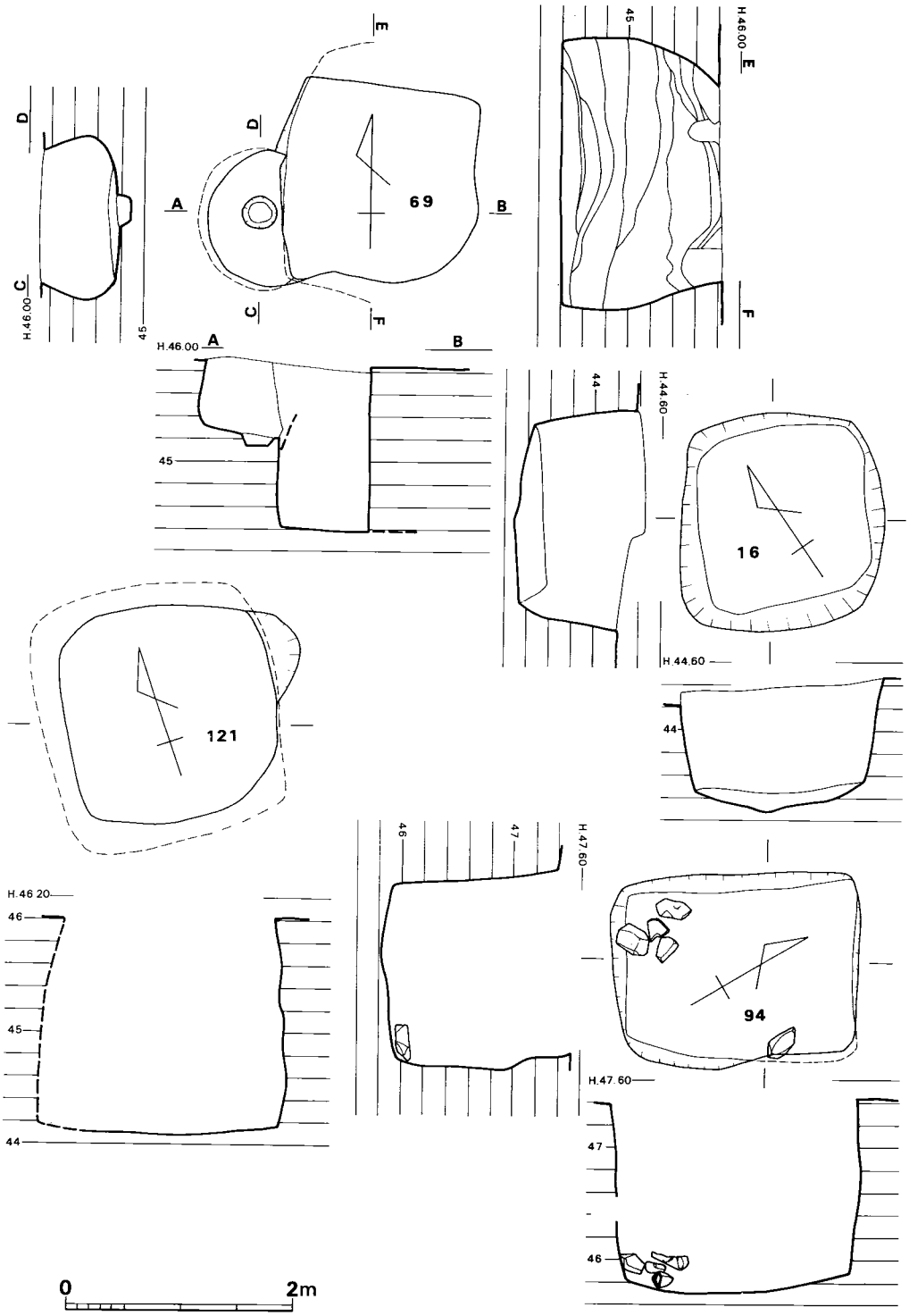


Fig. 29　16・69・94・121号各貯蔵穴実測図（縮尺1/60）

部があり、上面がやや開く。段部上で3.22×1.34mをはかる。深さ 1.5m。特殊な例で、これのみⅣ期に入ると考えられる。

円形A類貯蔵穴（Fig. 30）には55・57・58・80・85・88・91・95・96・107・115・117・118・120・122号が含まれる。85は 120を切っており、当遺跡中で最も典型的で、残りのよい例である。復元口径は推定 1.0mである。深さ1.43m。120の深さ0.8mである。 117は底面が楕円形である。深さ 1.0m。一般に円形袋状貯蔵穴は方形のそれに比べて浅い。

以上各種貯蔵穴について述べた。それらをまとめると次のことが言える。

1．貯蔵穴はⅠ期からⅡ期にかけて存在し、Ⅲ期以降は特殊例である。

2．Ⅰ期の貯蔵穴は底面方形プランで袋状か垂直壁をなし深い。

3．Ⅱ期の貯蔵穴は円形袋状か方形プランで袋状をなさない例である。

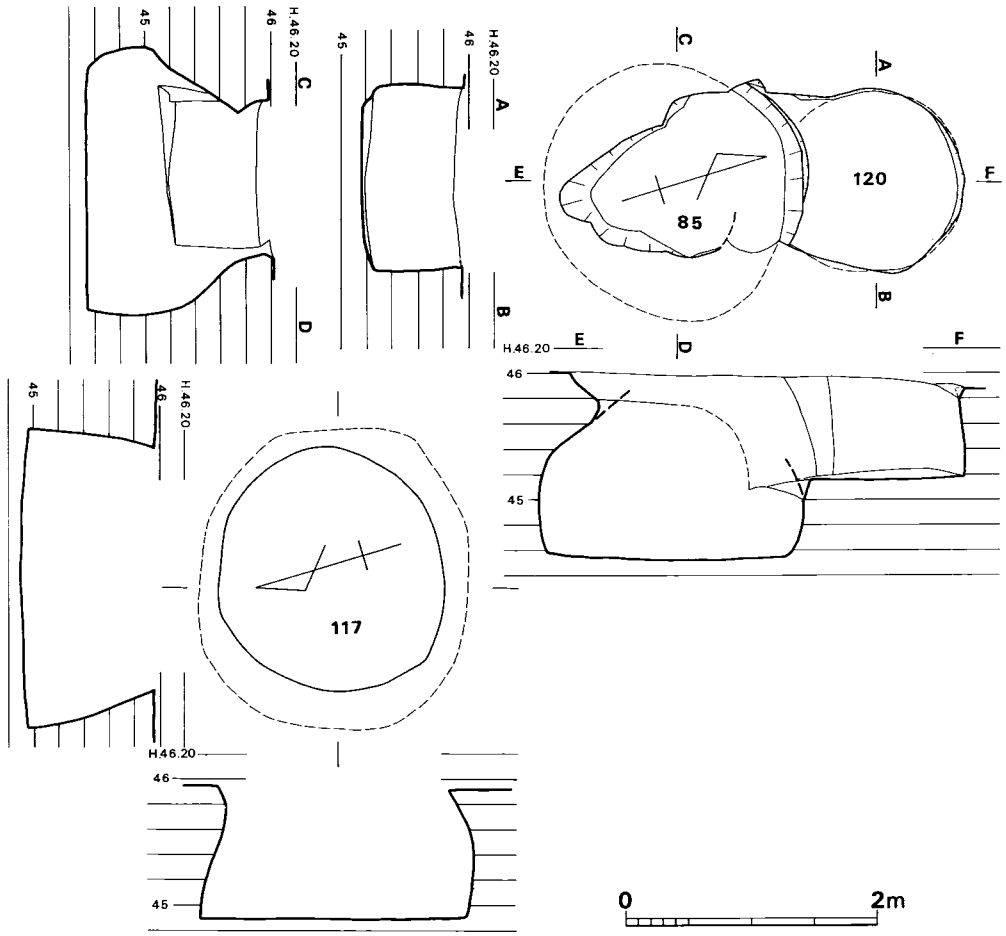


Fig. 30　85・117・120号各貯蔵穴実測図（縮尺1/60）

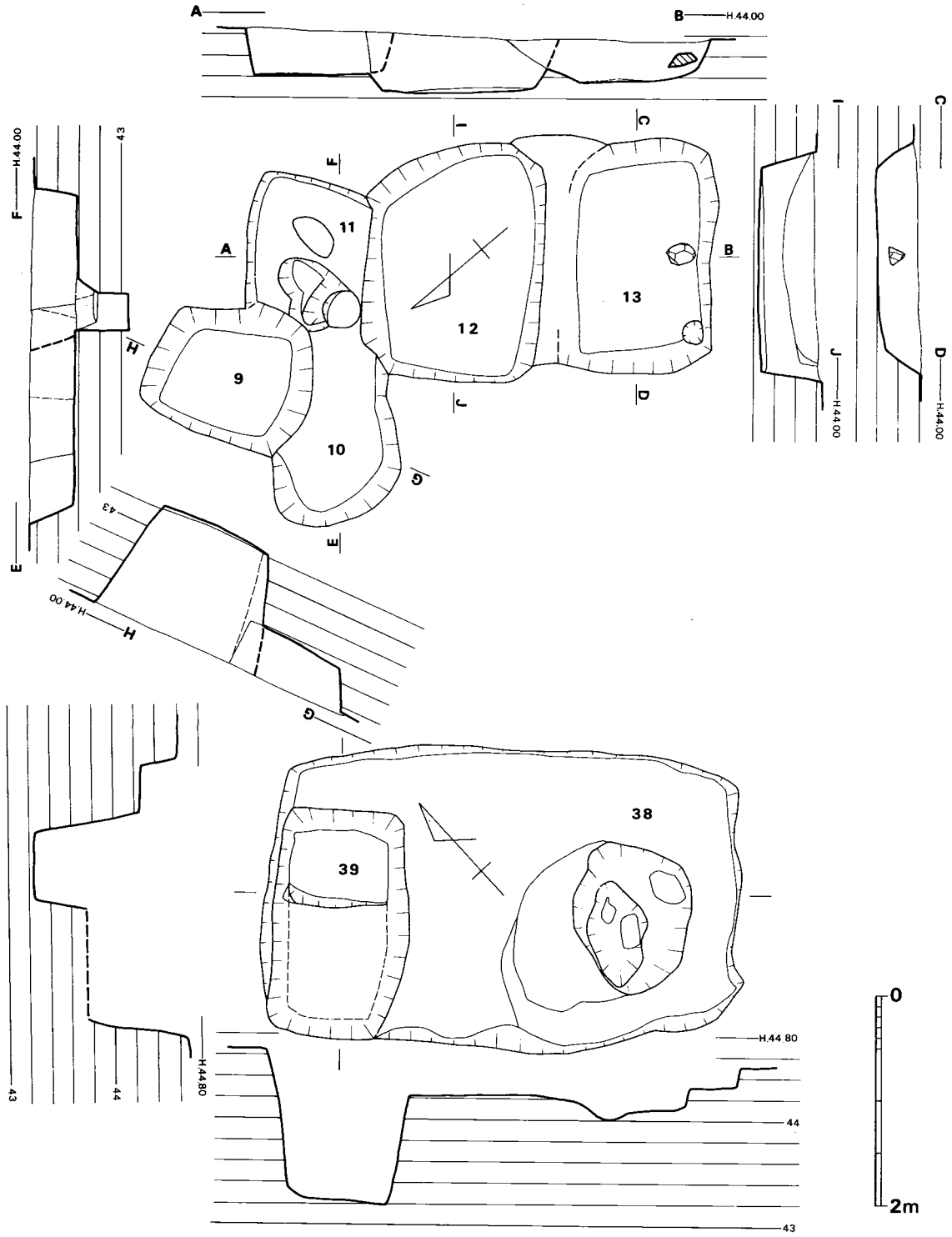


Fig. 31　9・10・11・12・13・38・39号各貯蔵穴実測図（縮尺1/60）

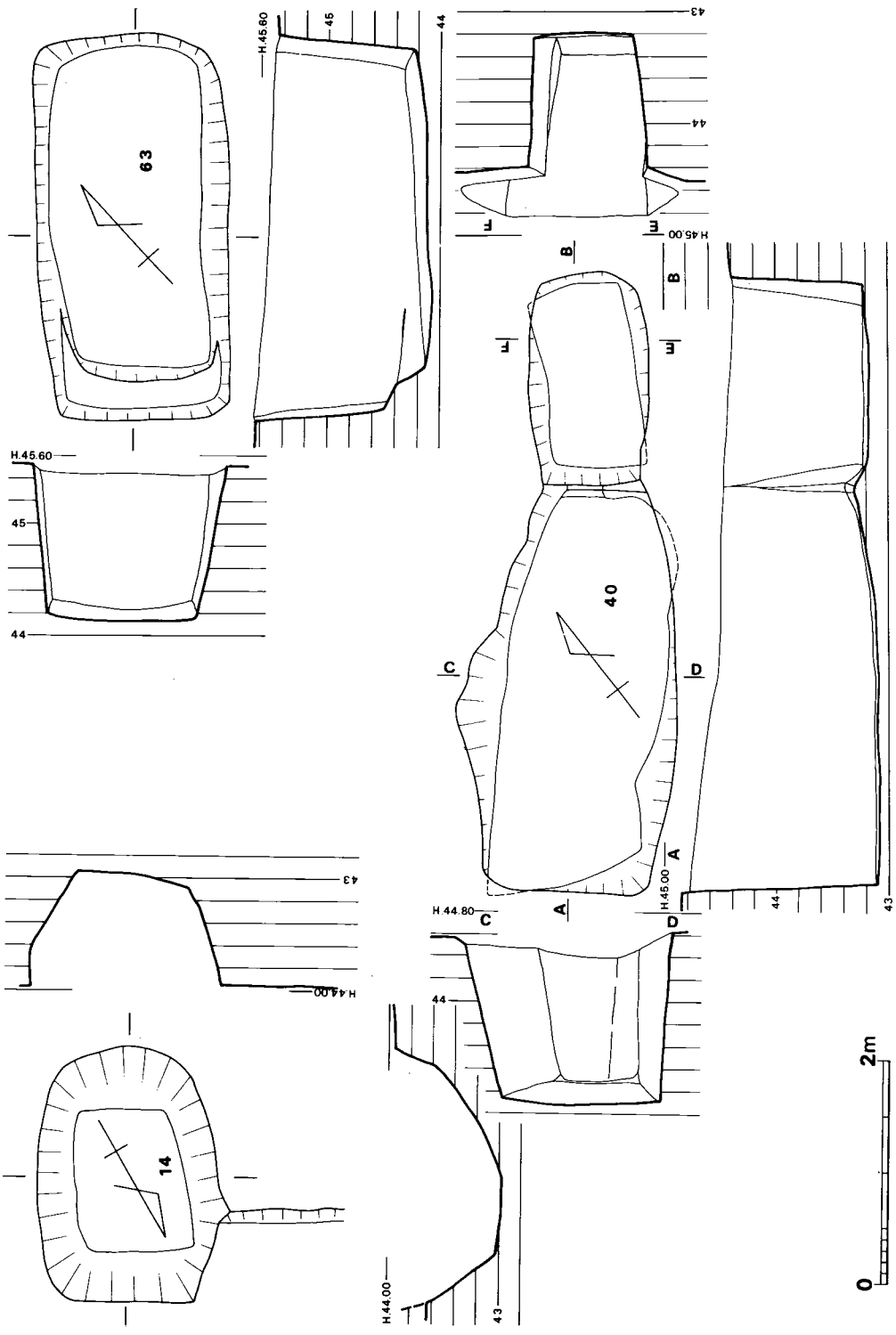


Fig. 32　14・40・63号各貯蔵穴実測図（縮尺1/60）

4．Ⅰ期の貯蔵穴は調査区内南域（4～5区）と北域（7区）の2区域に分かれて分布する。その区域とはⅠ期の19号住居跡及び34号住居跡に近接する場所であり、貯蔵穴が各々の住居跡に附属することを示している。

5．Ⅱ期の貯蔵穴は調査区域全域に跨っており、同時期住居跡と同様の傾向を示している。

No.	地区割	形態	計測値			出土	
			底面長辺	底面短辺	深さ	土器	石器
1	E－9	長方形	1.14	0.64	0.32		
2	E－9	長方形	1.17	0.70	0.10		石庖丁1
3	D－9	楕円形	1.52	0.84	0.44		
4	D-8~9	隅丸方形	－	－	－	壺1	打製石鏃1、磨製石鏃1
5	D－9	長楕円形	－	－	－		
6	D－9	不整方形	1.90	1.47	－		打製石鏃1
7	D－9		－	－	－	壺1	
8	D－8	楕円形	－	－	－	大型壺1	
9	D－8	隅丸長方形	1.60	1.28	1.12		円盤1
10	D－8	方形	1.12	0.90	1.14		打製石鏃1、石錐1
11	D－8	長方形	(1.60)	(1.35)	0.42		
12	D－8	長方形	1.97	1.43	0.54		
13	D－8	長方形	1.74	1.15	0.38		
14	D－9	長方形	1.27	0.97	1.05	甕1	円盤1
15	D－9	隅丸長方形	1.41	1.03			
16	D－9	方形	1.55	1.52	1.05	甕3、深鉢1、壺1	打製石鏃1、砥石1
17	D－9	楕円形	－	－	－		磨石1
18	D－8	隅丸長方形	－	－	－		
19	D－8	長楕円形	－	－	－	蓋1	磨石1
20	D－8	長楕円形	3.05	1.41	1.27		
21	D－9	楕円形	－	－	－	甕1	
22	D－9	楕円形	－	－	－	甕1	打製石鏃1
23	C~D-9	隅丸長方形	－	－	－		
24	D－8	隅丸長方形	2.75	2.16	0.1	甕1	
25	D－8	円形	－	－	－		
26	D－8	－	－	－	－		
27	D－8	隅丸長方形	2.18	1.33	1.13		石庖丁1
28	D－8	長方形	1.38	1.05	0.77		黒曜石片多数
29	D－8	隅丸長方形	－	－	－		
30	D－8	不整長方形	－	－	－		
31	D－8	長方形	－	－	－		
32	D－8	不整長方形	－	－	－		
33	D－8	楕円形	－	－	－		
34	D－8	方形	－	－	－		
35	D－8	方形	－	－	－		
36	D－8	楕円形	－	－	－	蓋1	
37	D－7	長方形	－	－	－		
38	D－8	隅丸長方形	－	－	－	壺2	石庖丁3

Tab. 2　　貯蔵穴一覧表

品		備考	発掘状態	挿図番号	時期
土製品	その他				
紡錘車1		西側に凹みあり	○		
紡錘車1			○		
		床面不規則、No.4より新	○		II
		No.3、5より古	○		II
		No.4より新、6より古、床面に灰色粘土ブロックあり	○		II
紡錘車1		No.5より新	○		II
円盤1			○		II～III
			○		II
		No.10、11より新	○	Fig.31	II
		No.11より新、9より古	○	Fig.31	II
円盤1		No.12より新、No.9より古	○	Fig.31	II
		No.13より新、No.11より古	○	Fig.31	II
円盤4		No.12より古	○	Fig.31	II
		上面が大きく開く	○	Fig.32	II
			×		
紡錘車1、円盤3		底面中央が窪む、断面台形	○	Fig.29	I～II
		No.18より古、No.22より新	△		II
		No.17、19より新	○		II
紡錘車1		No.18、20より古	△		II
紡錘車1			△		II
			△		II
			×		II
			△		
円盤1		西側2段掘り	○		II
			×		II
			×		
円盤1		No.26より新、No.28より古	△		
		No.27より新、壁は垂直	△		
		No.30、31、32より新	×		
		No.29より古、No.32より新	×		
		No.29、30より古、No.32より新	×		
		No.29、31より古、No.33より新	×		II
		No.32より古	×		I～II
		住5より古	△		II
	炭化籾		○		
			△		
			×		
紡錘車3		床面に窪みをもつ	○		II～III

※ ○印は完掘、△は半掘、×は未掘

No.	地区割	形態	計測値			出土	
			底面長辺	底面短辺	深さ	土器	石器
39	C－8	隅丸長方形	1.82	0.95	1.37		石庖丁1
40	C－8	長方形	3.45	1.40	1.50	甕4、甕型土器1、壺5、深鉢1、蓋1	石庖丁1、柱状石斧1、砥石1
41	C－7	隅丸長方形	－	－	－	甕2	磨製石斧1
42	D－7	楕円形					
43		楕円形					石錐1(43～48)石庖丁1(43～47)、円盤1
44	C－7	隅丸長方形				壺1	砥石1
45	C－7	隅丸長方形					
46	C－7	隅丸長方形					
47	C－7	隅丸長方形				甕3	砥石1
48	C－7	楕円形					柱状石斧1
49	B－7	円形					石庖丁1
50	C－7	楕円形				甕1、壺1	
51	B－7	楕円形					
52	C－7	方形袋状				甕2、壺1	磨製石斧1
53	C－7	長方形					石核1
54	C－7	方形袋状	1.95	1.69	1.47		
55	C－7	円形袋状				壺1	石庖丁1
56	C－7						
57	C－7	円形袋状					
58	C－7	円形袋状					石庖丁1
59	B－7	円形					
60	C－5	方形					
61	B－7	隅丸長方形				壺1、甕9、甕型土器1、鉢転用甑1	磨石1
62	B－7	方形袋状	1.93	1.73	1.86	深鉢7、壺7、甕11、甕型土器1、蓋1	打製石鏃1、磨製石斧1、磨石1
63	C－6	長方形	3.22	1.34	1.32		打製石鏃1、磨石1
64	C－5	楕円形					特殊品1、柱状石斧1、磨製石斧1、砥石1
65	C－5	長方形					打製石鏃1、石掻1、石庖丁1、柱状石斧1、砥石1、磨石1
66	B－6	隅丸長方形				壺1	
67		隅丸方形					
68		不整楕円形					
69	B－6	方形袋状	2.05	－	1.46	甕1、壺1	
70	B－6	円形					石庖丁2
71	B－6	楕円形					
72	B－6	長方形					
73	B－6	隅丸方形				壺1	
74	B－6	長方形					
75	B－6	円形					
76	A－6	円形				器台1、甕2	
77	C－5						石庖丁1

品		備考	発掘状態	挿図番号	時期
土製品	その他				
		2段掘り、東南外側は浅く広い竪穴となる	△	Fig.31－2	
紡錘車1、円盤4	クリ、カシの実		○	Fig.32－2	II
			○		II
			×		
紡錘車1(44～48)、円盤1(43～47)		検出地区不明	○		II
円盤4			○		II
			△		II
			△		II
円盤1			○		II
円盤1			△		II
			△		
			△		II
		2口の復合か？	○		
円盤1			○		I
			△		I
			○	Fig.28	
円盤1	カシの実		○		II
			×		
円盤11			○		II
			○		II
			×		
			×		
			○		II
紡錘車1、円盤1	カシの実	底面中央が窪む	○	Fig.28	I
		二段掘り上面が開く	○	Fig.32	III
			○		
紡錘車2、円盤4			○		II
			△		II
			×		
			×		
			△	Fig.29	I
			△		
			×		
			×		
			△		II
			×		
			×		
			△		II
			△		

No.	地区割	形態	計測値			出土	
			底面長辺	底面短辺	深さ	土器	石器
78	B－4					深鉢2、甕形土器1	
79	C－5	方形				深鉢2、甕8、甕形土器1、壺4、器台3、支脚2	石庖丁1、磨製石斧1
80	B－2	円形袋状				深鉢1、蓋1、甕4、甕形土器1	磨製石斧1
81	C－5					壺1	
82	D－9					甕1、口縁2	
83	B－7					深鉢2、壺1、甕1、蓋1	
84	B－5	円形				甕3、壺1	
85	B－5	円形袋状	2.10	1.90	1.43	壺9、甕11、大型甕1	柱状石斧1
86						壺2	柱状石斧1、石製紡錘車1
87	C－5	円形袋状				甕3、蓋2	柱状石斧1、磨製石斧1
88	B－4	円形				器台2	石庖丁1
89							
90	B－5	円形袋状				甕6、壺10	
91	B－4					甕1	磨製石斧1
92	B－4	長楕円形				甕1、蓋1	石核1、石庖丁1、磨製石斧1
93	B－4	方形重壁	2.00	1.45	1.6	甕4	
94	B－4	円形袋状				甕3、壺2、転用甑1	
95	B－4	円形袋状				壺2、甕1	
96	B－4	隅丸長方形				甕1	
97						甕転用甑1	石製円盤1
98	B－2					壺2、蓋1、甕2	石鎌1、磨石1
99	B－4	隅丸長方形				壺2、手づくね深鉢1、甕1	磨製石斧1、磨石1
100	B－4	不整方形				甕2	
101	A－2					甕1	
102	B－4					甕3、コマ形土器	
103	B－5	長方形				甕1	
104	B－2					甕1	
105	B－5	円形				甕1	
106	B－5	円形袋状				甕1、壺2	石掻1、石剣1、石庖丁1、磨製石斧3、柱状石斧1、扁平片刃石斧1
107	B－4					甕1	
108	B－5	楕円形				甕1	磨製石斧1
109	A－5	円形				壺2	柱状石斧1、磨石1
110						甕1、壺1	
111	B－4	長方形				甕1	石庖丁1
112						甕1、器台1	石錐1
113							
114	B－5	円形袋状	1.44	1.42	0.80		
115	B－5	円形					柱状石斧1
116	B－4	円形袋状	2.40	2.10	1.05		
117	B－4	円形袋状					
118	B－4	楕円形					
119	B－5	円形袋状	1.42	1.42	0.80		
120		方形袋状	2.11	2.32			
121	B－6	円形袋状	1.30	1.30			

品	品	備	発掘状態	挿図番号	時期
土製品	その他				
円盤2	カシの実		○		I
円盤1			○		II
			○		II
円盤3			○		III～IV
			△		III～IV
円盤3			○		I～II
紡錘車1			○		II
紡錘車1	炭化米	No.115より新、口径推定0.90m	○		II
		検出地区不明	○		II
			○		II
			△		II
			×		I
	カシの実		○		II
紡錘車2			○		II
紡錘車1			○		II
紡錘車2	カシの実	底面より角礫4個出土	○	Fig.29	I
円盤1			○		I～II
			○		II
			○		I
		検出地区不明	○		
投弾1、円盤4			○		I～II
			○		II～III
円盤2			○		II
円盤1			○		III
			○		III
			△		II
円盤1			△		II
円盤1			△		
			○		II
円盤3			○		II
			△		I
投弾1	炭化物多量		○		II
紡錘車2			△		I
			○		
紡錘車1		検出地区不明	○		I～III
			×		
		No.85より古	○		
			△		
			○	Fig.30	
			○		
			×		
	多量の籾		○	Fig.30	
			○	Fig.29	
		底面中央にピットあり	○	Fig.29	

2 遺　物

A　土器（Fig. 33～65, Fig. ②～④, PL. 8～34）

住居跡及び貯蔵穴から出土した土器は膨大な量に及ぶ。これらは壺・甕・鉢・高杯・蓋・器台・手捏ね土器の7器種を含んでいる。甕の底に穿孔し、甑として転用したものもある。これらの土器を前節冒頭で述べた通り、切り合い関係にある11・12号住居跡の一括遺物を軸に他の6・10・17・25・32・34号住居跡の床面出土土器をもって4グループに編年し、類別した。（Fig. ②～④参照）以下壺・甕・鉢の3器種のタイプについて述べた上で各類を概観する。

壺

8タイプ含まれている。A：無頸壺である。B：短頸壺である。C：小形壺である。口径12～13*cm*、器高13～15*cm*、胴径12～13*cm*である。手捏ねに近い粗い作りのものと、中・大形品と同様に成形されたものとがある。D：中小形壺である。口径11.5～15*cm*、器高21～27*cm*、胴径18.5～22.5*cm*である。E：中形壺である。口径17～25.5*cm*、器高28～32*cm*、胴径27～32*cm*である。F：大形壺である。口径25～35*cm*、器高43.5*cm*。G：直口壺である。H：極大形壺である。甕棺にも使用される。

甕

5タイプ含まれている。A：小形甕である。口径12.5*cm*、器高9.8～14.5*cm*。外反する口縁をもつもの（*a*）と、口縁端部に三角凸帯を貼り付けたもの（*b*）とがある。B：中小形甕である。口径17.5*cm*～19*cm*、器高17～18*cm*で、1と同様*a*とbとがある。C：いわゆるコマ形土器である。D：中形甕である。最も出土例の多い甕で、口径24～32*cm*、器高25～30*cm*。A・Bと同様*a*とbがある。D：大形甕である。甕棺としても用いられる。口径42～48*cm*、器高51*cm*。

鉢

3タイプ含まれる。A：小形鉢である。口径11.8*cm*、器高8.3*cm*。B：中小形鉢である。口径17～20*cm*、器高10.5*cm*。甕と同様に口縁部の形状で、*a*とbに区分される。C：中形甕である。口径21.5～30*cm*、器高16～18.5*cm*でやはり*a*とbが含まれる。D：大形甕である。口径33～37*cm*、器高23～30*cm*。

（1）　I類土器

17号住居跡及び62・85・91号貯蔵穴から集中して出土している。他に41・52～54・62・78・88・95・97号各貯蔵穴から出土している。但し、遺構に附属するものではなく、廃棄された状態で発見されたものであり、II類土器と混在する。

壺

86や217、222のように古式の様相を備えるものもある。頸部は内傾著しいものが多いが、93

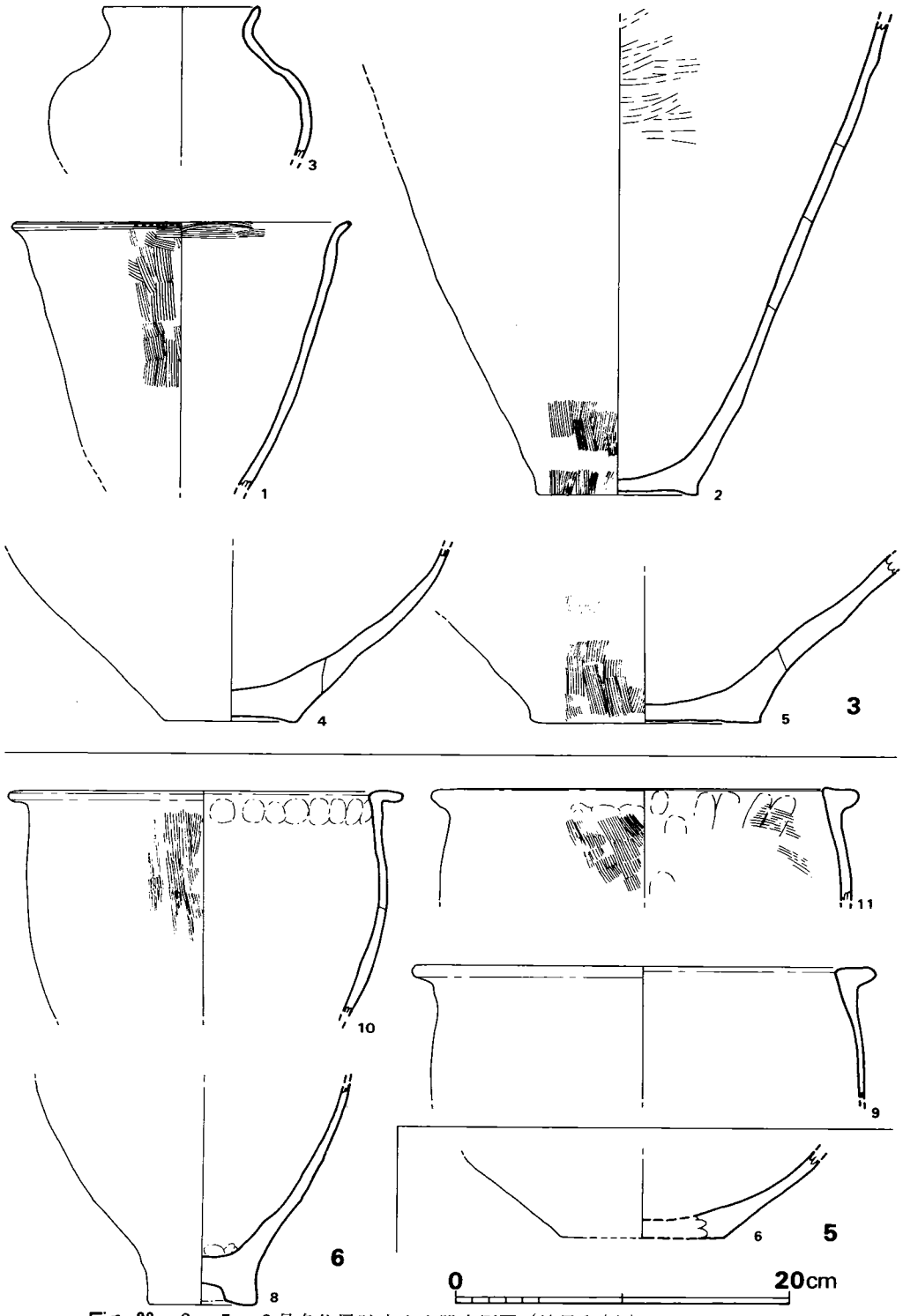


Fig. 33　3・5・6号各住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図図版	時期
1	D 0301	住 3	甕	19.9	(16.0)	暗黄茶褐色	大粒砂粒を含む	底部破損 口縁部$\frac{1}{4}$を破損	Fig.33 PL.8	I
2	D 0302	住 3	甕		9.6 (28.0)	外面－黄褐色 (一部黒色) 内面－茶褐色	大粒砂粒を含む	胴部～底部片	Fig.33 PL.8	I
3	D 0303	住 3	壺	9.2(復元)	(12.7)	外面－黄褐色 内面－暗灰黄褐色	粗い砂粒多し	全体の$\frac{1}{3}$残底部欠損	Fig.33 PL.8	I
4	D 0304	住 3	壺		7.8 (10.4)	外面－暗黄色 内面－灰黄色	砂粒を含む	底部片	Fig.33 PL.8	II
5	D 0305	住 3	壺		13.7 (9.1)	内面－黄灰色 外面－淡黄色	砂粒を含む	底部片		I
6	D 0501	住 5	壺		4.8(復元) (4.9)	茶褐色 (内面に一部黒ずみあり)	大粒の砂粒を含む	底部片	Fig.33 PL.8	III
7	D 0502	住 5	甕	18.7	(11.0)	内面－黄褐色 外面－黄褐色	小砂粒と雲母を少し含む	内面が煤で黒変している。口縁部$\frac{1}{3}$残		II
8	D 0601	住 6	甕		6.5 (13.4)	内面－黄灰色 外面－茶褐色	小砂粒多し	胴部～底部片	Fig.33 PL.8	III
9	D 0602	住 6	甕	27.5	(8.0)	茶褐色	小砂粒多し	口縁部片	Fig.33 PL.8	III
10	D 0603	住 6	甕	23.4	(13.6)	黒茶褐色	小砂粒多し	口縁部～胴部片 口縁部$\frac{1}{4}$欠損	Fig.33 PL.8	III
11	D 0604	住 6	甕	25.2(復元)	(6.5)	黄茶色	細砂粒を少量含み密	口縁部片	Fig.33	III
12	D 1002	住 10	壺	15.7(復元) 20.5	8.0 16.4	明黄褐色	小砂粒を含む	口縁～胴部にかけ$\frac{1}{3}$弱破損	Fig.34 PL.9	IV
13	D 1003	住 10	壺	11.8 14.0	5.9 9.6	黄灰色	細砂粒を少し含む	胴部に丹塗りと思われる茶褐色の部分がある。胴部に炭化した木質のもの付着	Fig.34 PL.9	IV
14	D 1004	住 10	甕	27.2 21.8	9.9 29.1	内面－灰黄褐色 外面－黄褐色半々黒褐色	砂粒多し		Fig.34 PL.9	IV
15	D 1005	住 10	高杯	24.4	(5.2)	口縁部－淡赤褐色 内面－黄色 外面－淡灰黄色	小砂粒を少し含む	高杯の杯部	Fig.34 PL.9	IV
16	D 1006	住 10	甕	40.1	10.6 (27.3)	明黄褐色	小砂粒を少し含む	底部に2ヶ所黒色の部分がある。胴部から底部にかけ$\frac{1}{3}$ほど破損	Fig.34 PL.9	IV

Tab. 3　　1～11号住居跡出土土器一覧表※(　)内数値は現存値

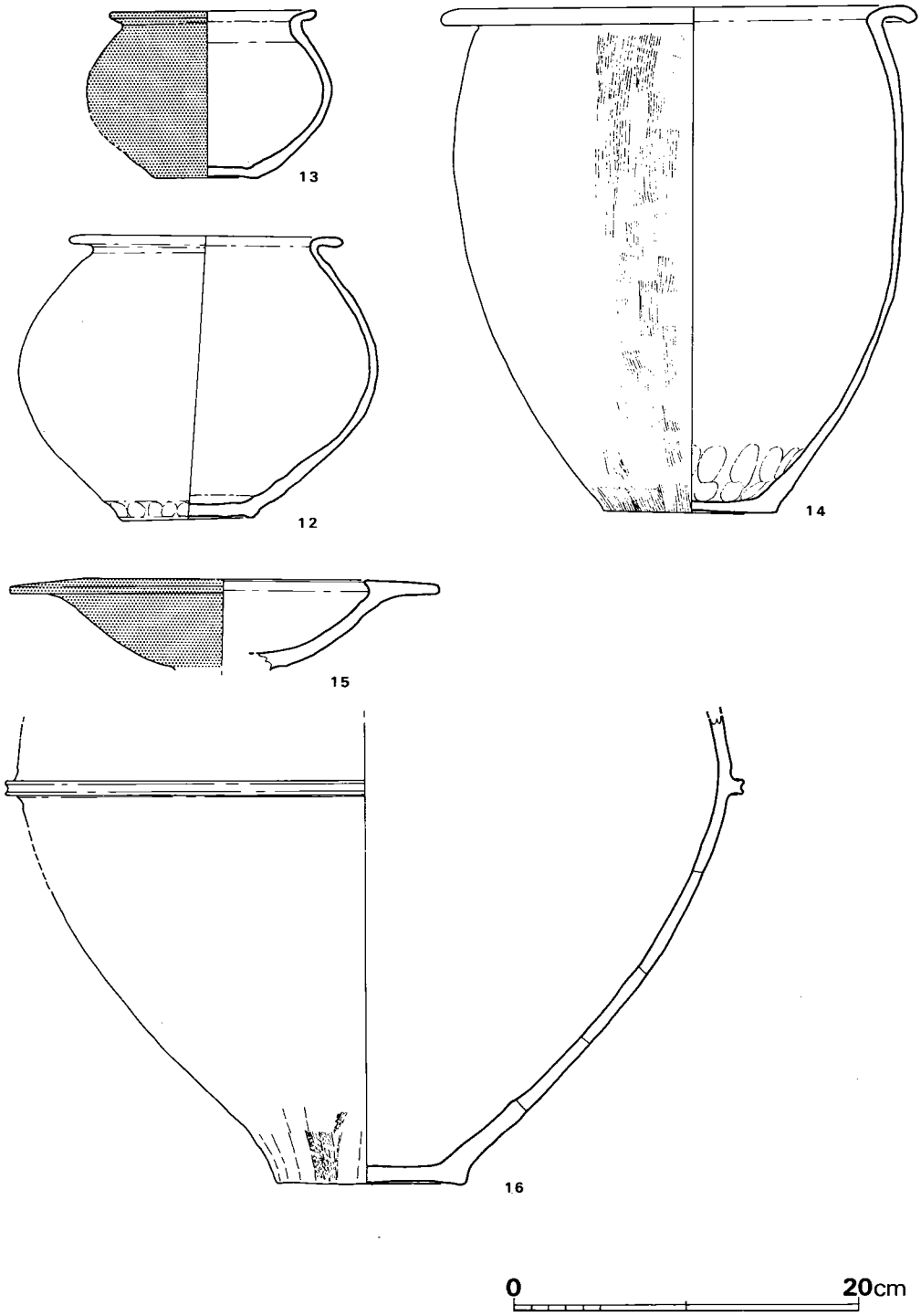


Fig. 34　10号住居跡出土土器実測図（縮尺１/４）

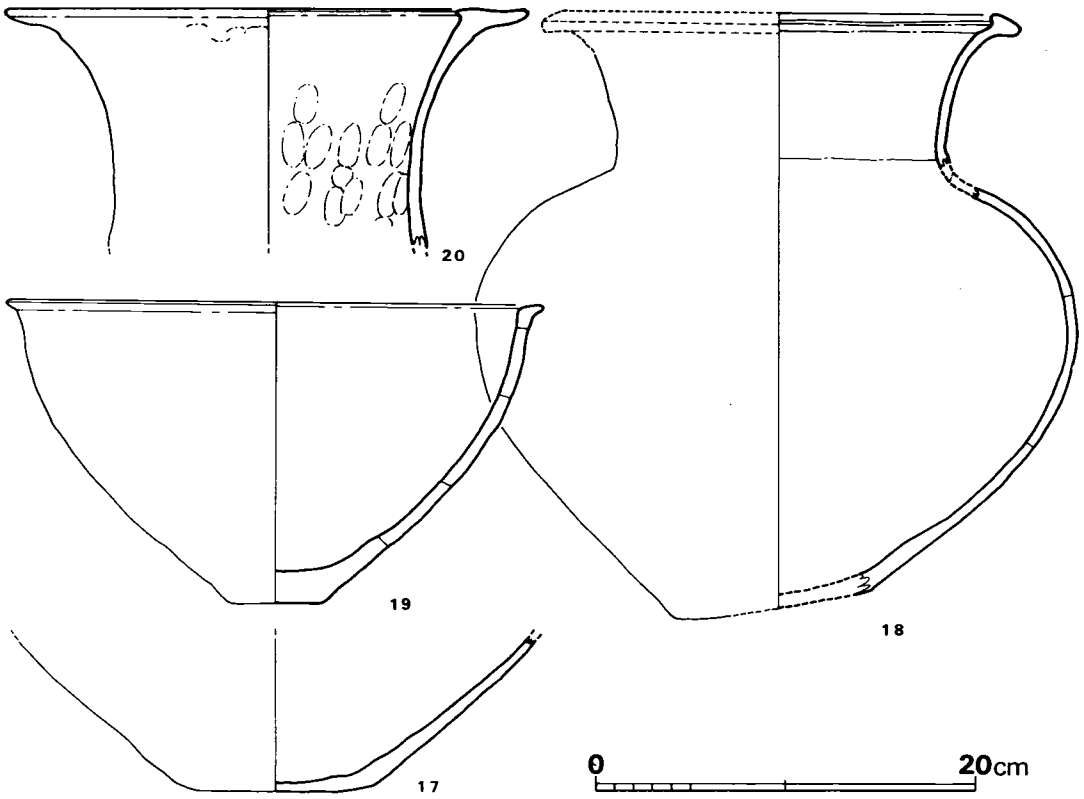


Fig. 35 11号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

のように立ち気味の例も含まれる。頸部下に一、二条の沈線をめぐらせる例が多く、弧状紋や縦沈線も施している。40は三角凸帯をもち、口唇下部に刻目をめぐらしている。最大胴径は胴部上位にあり肩が張る。底部は平底のものと、若干上げ底気味のものとがある。Hタイプの壺は17号住居跡、62号貯蔵穴で出土している。

甕

A・B・D・Eの4タイプがあり、Dタイプには如意形口縁をもつaと、いわゆる亀ノ甲タイプのbとがある。胴部が張らず、古式の様相をもつものは多い。口縁部下に一条沈線や段部をもつ例は三角凸帯をもつ例に比して少ない。Dbのうち、38は口唇部上下両端に刻目をもち、Daの63・85は下端に刻目をめぐらしている。Eタイプの 105も同様である。底部は平底か若干上げ底気味である。

鉢

B・C・Dの3タイプがあり、17号住居跡出土品中に全てがそろっている。Dタイプが最も多く、a、b両種口縁部がみられる。ほとんどが口縁部下に三角凸帯を持つ。85は口縁部付根に一条沈線をめぐらせるが、他に沈線をもつ例はない。

蓋

47が唯一の出土品である。頂部は厚味が身部とほぼ等しく、平坦で中央に小凹部がある。

器台

34号住居跡の炉中から3点セットで出土した。截頭方錐状で、頭頂部が楕円形に窪んでいる。各辺断面は凹面をなす。

以上のI類土器は板付II式から前期末の土器に相当する。

（2）II類土器

当類の土器を集中的に出土した住居跡はなく17号出土品と、25号住居跡炉中出土の器台を除いては土器細片が検出された程度である。貯蔵穴からの出土例は多い。40・79・91号貯蔵穴が代表的で、他に13～16・19～21・25・32・34・39・40・44～48・55・64・76・84・85・93・100・101・108号が当類土器を出土している。

壺

Aタイプが含まれる。171はその蓋で笠部に外側から4孔穿たれている。132は薄手の球形胴部をもち、底部は平坦。40号貯蔵穴からCタイプが2例出土している。143はやや上げ底の部厚い底部を持つ。口縁部はないが、朝顔形に開くものと思われる。Dタイプは口縁部の形状によって2種に区分される。aは開口壺であり、91号貯蔵穴から2点出土している。238はやや肩が張り、胴上部に開き気味の弧状文をもつ。bは開口する口縁内側を肥厚させ、垂直な段部をしつらえている。141は唯一の例である。E・Fタイプの頸部はI類に比べて短かくなり直立気味に立って端部で外傾する。頸部下に三角凸帯をめぐらせた例がほとんどであるが、245のように一条沈線をもつ例もある。最大胴径は胴部中位にあり、そこに凸帯を設ける例もある(191)。210や242は長胴である。底部は平坦か、若干上げ底気味である。

甕

口縁部が外反するもの（a）と口縁部外面に三角凸帯を付したもの（b）とがある。底部は小さくて部厚く、上げ底のものと、広くて部厚いものの2種類がある。口縁部下に一あるいは二条の三角凸帯をめぐらす例も多い。胴上部は1類に比して張り気味である。103は全体に細味ではあるが、底部が部厚く、当類に含めた。器壁は薄手になる。Eタイプは2例出土している。194は外反する口縁部の内側に三角凸帯を貼っている。甕棺にはこの類が数例使用されている。59は口縁端部外面に方形凸帯をめぐらし、その上下端に刻目を施している。胴部最大径は口径にほぼ等しい。

鉢

全体に1類に比して出土例が少ない。17号住居跡以外では61・62号貯蔵穴の2点（157・180）のみである。口縁部、底部の形状は甕と同様である。

蓋

2例出土している。(149・208)。1類に比して身部の立ち上りが低く、頂部が部厚くなる。

以上のII類土器は中期初頭城ノ越式の土器に相当する。

(3) III類土器

3・6・25号各住居跡の一括出土品が代表的で、他に38・81・82・102号貯蔵穴から若干出土している。

壺

頸部付根から口縁部にかけて朝顔形に開く。端部内側に粘土を貼って肥厚させるもの(*a*)とそうでないもの(b)がある。*a*には18・20・138・139・203がある。共伴関係にある18と20は三角凸帯を貼付したもので、若干内側にも凸出する。203も同様である。但し、18の口縁上面が丸味をもって下向きになるのに対し、20と203は平坦である。Fタイプの138・139は平板な粘土を上面に貼付し、内側を指圧えしている。上面は丸味を持ち、端部近くで僅かに下向きになる。bには200と202が含まれる。

甕

内面端部の丸い逆「L」字口縁をもち、上面平坦なもの(10)、胴部との境に稜があり「く」字に鋭く外反する短い口縁をもつもの(122)。口縁端内外面に粘土を貼って肥厚させたもの(9、11、271)がある。胴部上半は若干張り、底部は部厚く、中央を深くえぐっている。III類にはさらに、271に伴った270のいわゆるコマ形土器が含まれる。コマ形土器でも新しいタイプであろう。

鉢

11号住居跡から1点のみ出土している。19は極短い口縁部をもち、上面はやや内傾する。底部はII類に比して薄くなる。

器台

細味、厚手の筒状である。25号住居跡炉中から3点セットで出土した。(119～121)。

以上のIII類土器は中期前葉の土器に相当する。

(4) IV類土器

10・12・28・34号住居跡の床面から集中出土した。

壺

B・E・F・Gの4タイプが含まれる。Bの短頸壺は2点のみで、いづれも10号住居跡の出土品である(12・13)。ほぼ同様の作りであるが、12の口縁端部は下垂する。Eタイプの23は頸部に見かけ二条、作り一条の凸帯を3本めぐらしている。胴部は扁球状で中位が最も張る。底部は薄く、上げ底である。丹塗りである。Fの16は胴部中位に23と同様の凸帯を一条めぐらしている。Gの28は直口壺で、端部が僅かに外反する。

甕

口縁部はIII類に比べて長くなる。「L」字口縁をもち、ふくらみ気味に伸びて、端部は丸い。傾き具合は、外上方へ開くもの（127）、水平に近いが内傾するもの（25、123、124）、下垂するもの（14）がある。 124は口縁内側に稜を有し、口縁部下外面に一条の三角凸帯をめぐらしている。頸部は良く締まり、胴が張るが、口径よりは小さい。14・26の底部は薄手で平底である。

鉢

32号住居跡出土（ 126）の1点のみである。内面端部の丸い逆「L」字口縁をもち、表面は平坦で、端部は丸く、やや下垂する。底部は甕と同様に薄手で平坦である。

高杯

32号住居跡出土（ 125）の1点と10号住居跡出土品（15）がある。杯部形状は両者まったく同じで浅く、鋤先口縁をもつ。端部は僅かに下垂する。丹塗りである。

器台

12号住居跡出土の1例（22）のみである。薄手の筒状器台で、内面に指痕が著しい。

以上IV類の土器は中葉後葉の土器に相当する。

（5） まとめ

以上4類が全ての弥生式土器である。述べてきた中でいくつか問題点がある。

1．北牟田遺跡の土器は筑前、筑後系土器両者の影響を強く受けており、その折衷形の土器も生み出している。遠賀川流域にみられるタイプも若干含んでいる（28・141）。

2．編年上の問題として2点ある。第1点としてI類土器はさらに細分化される可能性を含んでいる。第2点としてIII類とIV類の間が切れており、典型的な中期中葉の土器が見られない。この事は、隣接墓地には中期中葉の甕棺が1基を除いてみられない事と関連がありそうである。

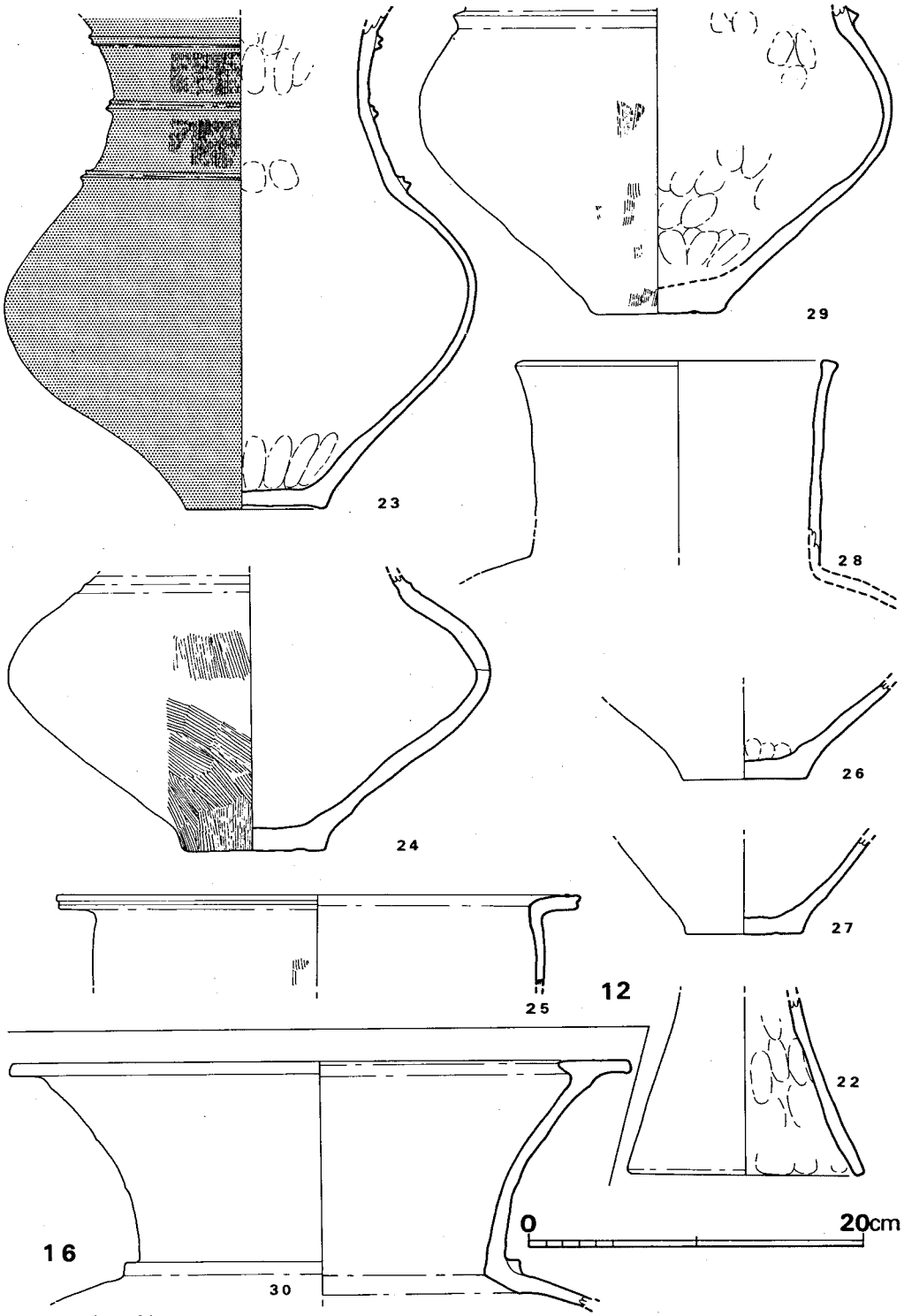


Fig. 36 12・16号各住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 底径	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
17	D 1101	住 11	壺		9.3 (8.1)	内面－淡黄褐色 外面－茶褐色	砂粒多し	底部片 底部約2cm位黒ずむ	Fig.35 PL.9	Ⅲ
18	D 1102	住 11	壺	24.9(復元) 11.4	10.6 31.8	淡茶褐色	砂粒を含み良	口縁部4cm位残存	Fig.35 PL.9	Ⅲ
19	D 1103	住 11	鉢	28.0(復元)	4.8 15.8	外面－明黄褐色 (底部褐色) 内面－灰黄色 (全体に黒ずむ)	小砂粒多し	口縁部を¼程残す 胴部½破損		Ⅲ
20	D 1104	住 11	壺	27.2(復元)	(12.4)	淡黄灰色	小砂粒を少し含む	口縁部½を欠く	Fig.35 PL.9	Ⅲ
21	D 1201	住 12	鉢		10.0 (6.5)	外面－赤褐色 内面－黄褐色	小砂粒多し	底部片		Ⅳ
22	D 1202	住 12	器台	14.0		内面－黄褐色 外面－黄灰褐色	小砂粒多し	上部片	Fig.36 PL.10	Ⅳ
23	D 1203	住 12	壺	28.0	8.4 (29.3)	内面－黄褐色 外面－黄茶褐色	小砂粒を含む	外面全体に丹塗りを施す。胴部、頸部の一部と口縁を欠損	Fig.36 PL.10	Ⅳ
24	D 1204	住 12	壺	28.5	8.5 (16.4)	内面－淡黄褐色 (一部灰黄色) 外面－淡黄褐色 (一部黒色)	砂粒を少し含む	口縁部欠損	Fig.36 PL.10	Ⅳ
25	D 1205	住 12	甕	31.0(復元)	(5.5)	灰黄色	細かい金雲母を含 小砂粒を含む	口縁部¼残存		Ⅳ
26	D 1206	住 12	壺		7.3 (5.5)	黄褐色	小砂粒多	底部片		Ⅳ
27	D 1207	住 12	壺		6.9 (6.0)	黄褐色	細砂粒多し	底部が摩滅している	Fig.36 PL.10	Ⅳ
28	D 1209	住 12	壺	19.0	(12.1)	灰黄色	小砂粒を含む	口縁～頸部片	Fig.36 PL.10	Ⅳ
29	D 1210	住 12	壺	27.9	8.1 (18.1)	灰黄色	小砂粒を少し含む	凸帯～底部にかけ¼残孔		Ⅳ
30	D 1601	住 16	壺	37.0(復元)	(14.2)	暗黄茶色	砂粒多し	口縁部～肩部にかけ¼残存		Ⅳ
31	D 1705	住 17	甕		8.7 (4.1)	明茶褐色	小砂粒を含む	底部片	Fig.45	Ⅱ
32	D 1706	住 17	甕	26.9	7.8 29.0	黄色 (胴部付近は黒灰色)	砂粒を含む		Fig.42 PL.16	Ⅰ
33	D 1709	住 17	甕		9.8 (17.5)	暗黄褐色	砂粒多し	砂粒が器面に露出している 胴部～底部片		Ⅰ

Tab. 4　　12～17号住居跡出土土器一覧表

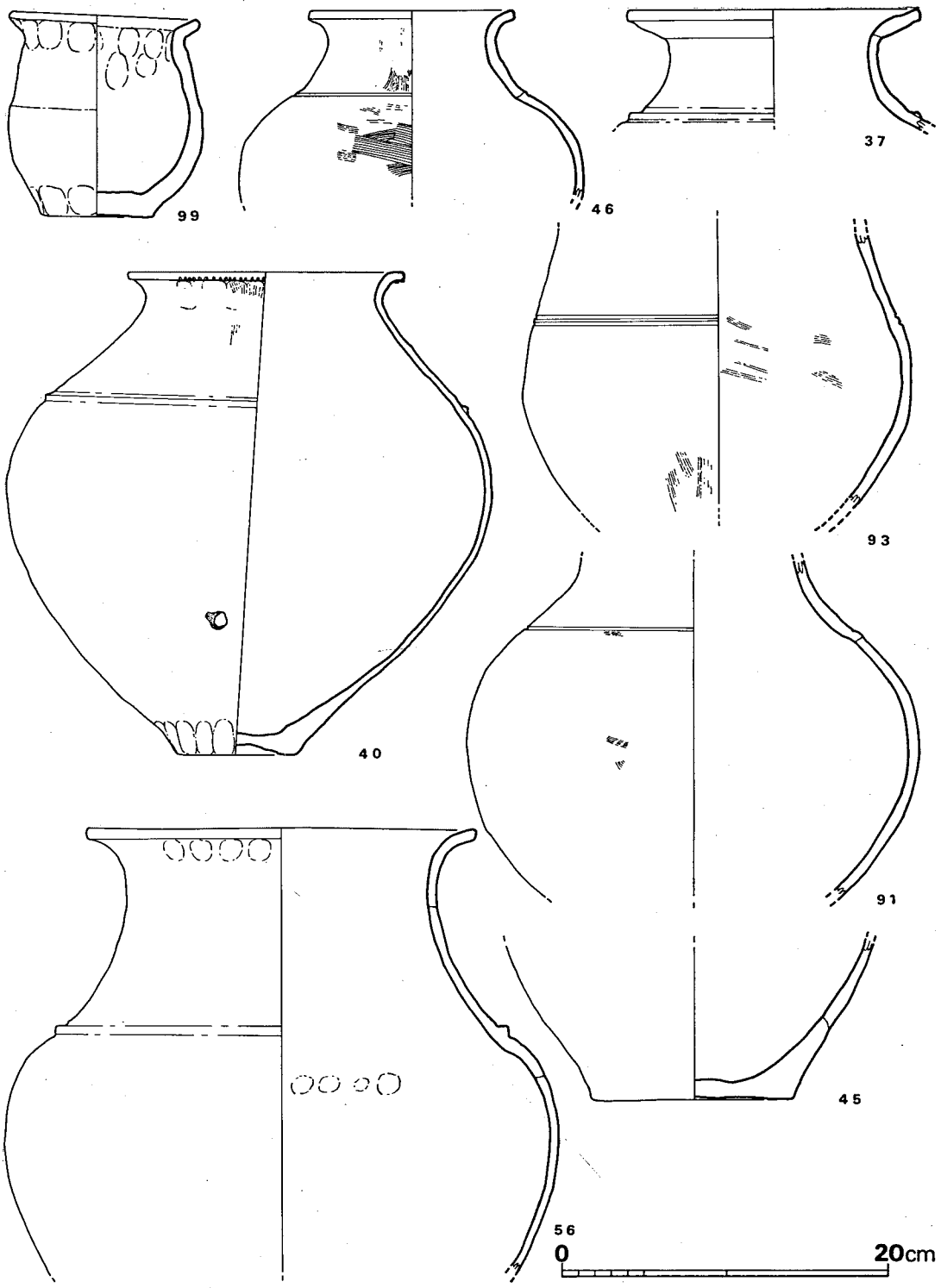


Fig. 37 17号住居跡出土土器実測図①（縮尺1/4）

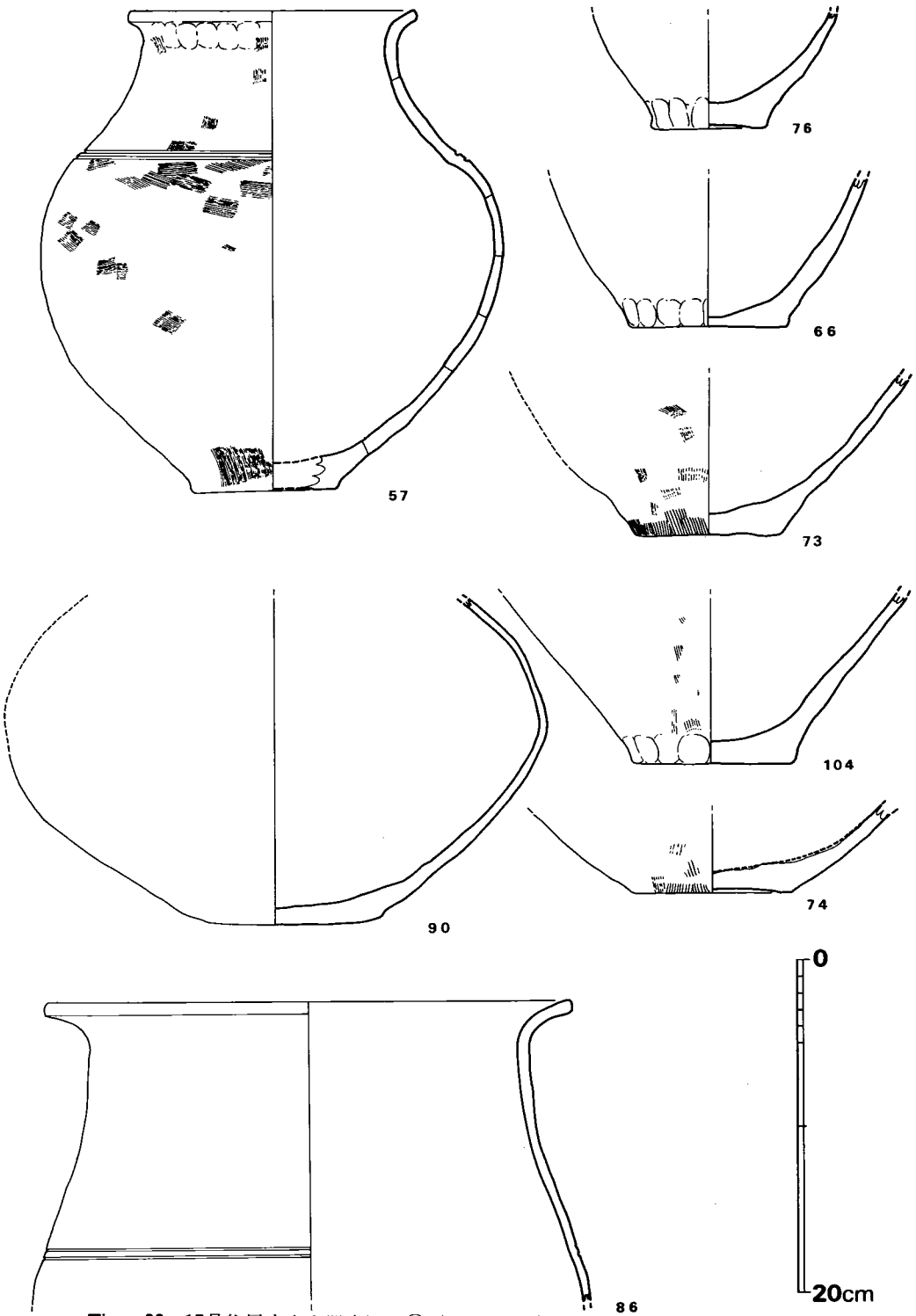


Fig. 38 17号住居出土土器実測図②（縮尺１/４）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口胴径	計測値 底器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図図版	時期
34	D 1710	住 17	鉢	21.5	(13.4)	赤褐色	小砂粒多し	底部欠損、器面に砂粒が露出している	Fig.39 PL.13	I
35	D 1711	住 17	甕		7.1 (13.5)	暗茶褐色	砂粒多し	底部のみ	Fig.45 PL.18	I
36	D 1712	住 17	甕		7.8 (11.1)	茶褐色	砂粒多し	底部のみ		I
37	D 1713	住 17	口縁	17.8(復元)	(6.9)	灰茶褐色	小砂粒を若干含む	口縁部を½弱残す	Fig.37 PL.11	II
38	D 1714	住 17	鉢	31.8	(16.4)	(内外面とも黒色部分有) 暗茶褐色	大粒の砂粒多し	口縁～胴部上半のみ現存	Fig.42 PL.16	I
39	D 1715	住 17	甕	28.4	6.15 29.2	内面－灰黄褐色 外面－灰黄褐色 (一部黒色)	砂粒多く粗い	口縁～胴部にかけ½欠損	Fig.44 PL.17	II
40	D 1716	住 17	壺	16.6(復元) 29.2	7.3 29.2	淡黄色	小砂粒を含む	口縁から胴部にかけ½欠く	Fig.37 PL.11	I
41	D 1717	住 17	甕		7.5 (6.0)	淡黄色	砂粒を含む	底部	Fig.45	I
42	D 1718	住 17	甕		7.7 (8.5)	内面－灰黄褐色 外面－黄褐色	砂粒を含む	底部		II
43	D 1719	住 17	甕		7.8 (12.1)	黄茶褐色 部分的に赤黄色 黄灰色	砂粒多し	金雲母を含む 底部	Fig.45 PL.18	I
44	D 1720	住 17	甕		8.5 (12.0)	内面－灰茶褐色 外面－明茶褐色	砂粒多し	底部のみ	Fig.45 PL.18	I
45	D 1721	住 17	甕		12.2 (6.9)	内面－黄茶色 外面－黄茶褐色	大粒砂粒多し	底部	Fig.37	I
46	D 1722	住 17	壺	12.5(復元) 20.8(復元)	(11.5)	茶褐色	小砂粒を少し含む	肩部に沈線が入る 口縁から胴部	Fig.37 PL.11	I
47	D 1723	住 17	蓋		最大 6.5 最小 5.7 (9.4)	内面－黄褐色 (ほぼ全面黒色がかる) 外面－黄褐色	砂粒を含む	底部は楕円形をなす	Fig.39 PL.13	I
48	D 1724	住 17	甕	24.3	(11.7)	灰黄色	大粒の砂粒を含む	口縁部を約⅓欠く 口縁～胴部	Fig.40	I
49	D 1725	住 17	深鉢転用甑		9.00 (12.0)	明黄茶褐色	小砂粒を少量含む	底部のみ	Fig.45 PL.18	I
50	D 1726	住 17	甕	29.2(復元)	(17.9)	黄茶褐色	砂粒多し	口縁～胴部	Fig.43 PL.17	I
51	D 1727	住 17	甕	24.3	(19.1)	黄橙褐色	砂粒を含む	底部を欠く	Fig.40 PL.14	I
52	D 1728	住 17	深鉢		6.5 (24.3)	内面－灰色 外面－黄褐色	砂粒を含む	口縁～底部を½破損	Fig.43 PL.17	I

Tab. 5　　17号住居跡出土土器一覧表①

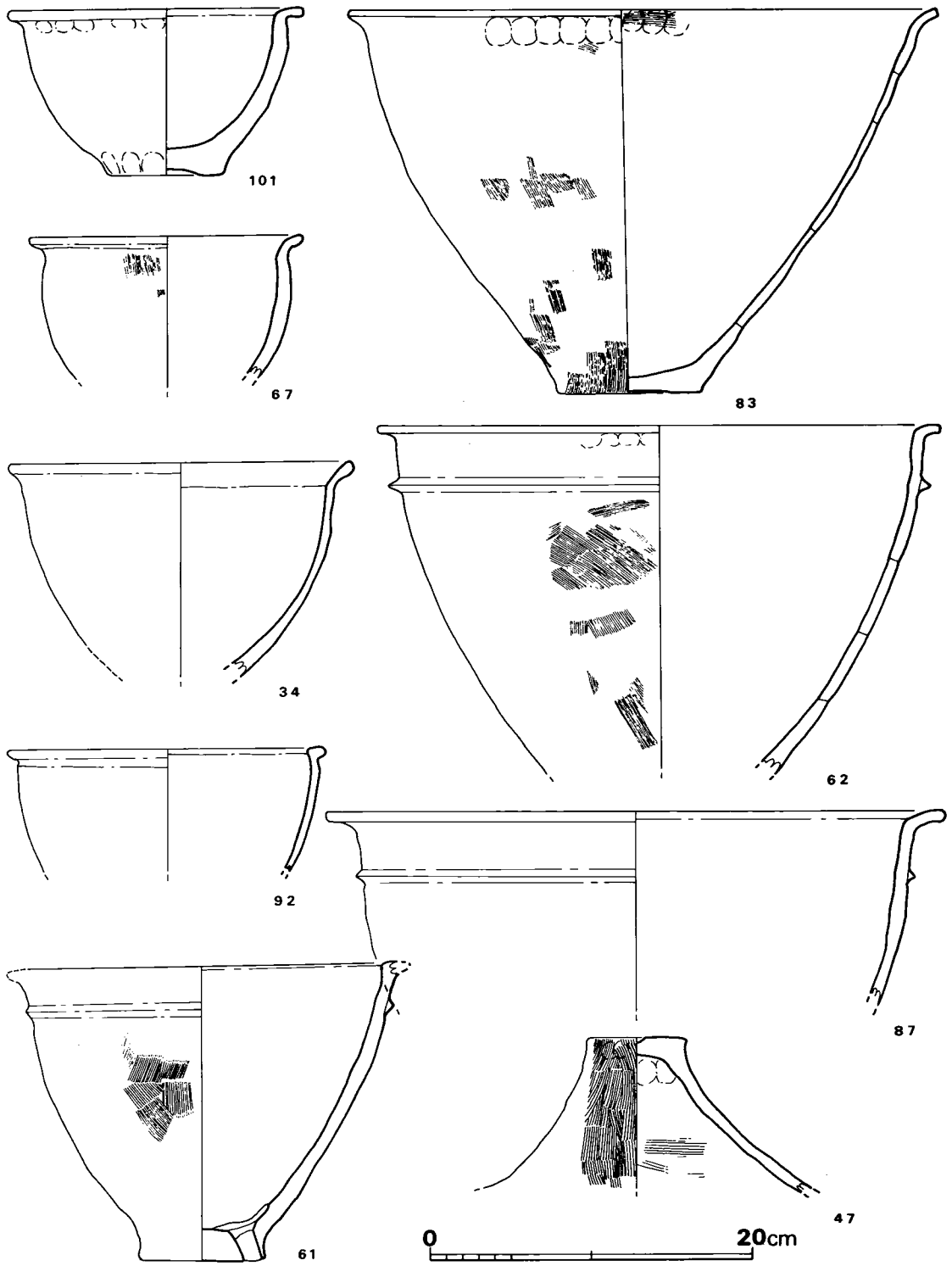


Fig. 39 17号住居跡出土土器実測図③（縮尺1/4）

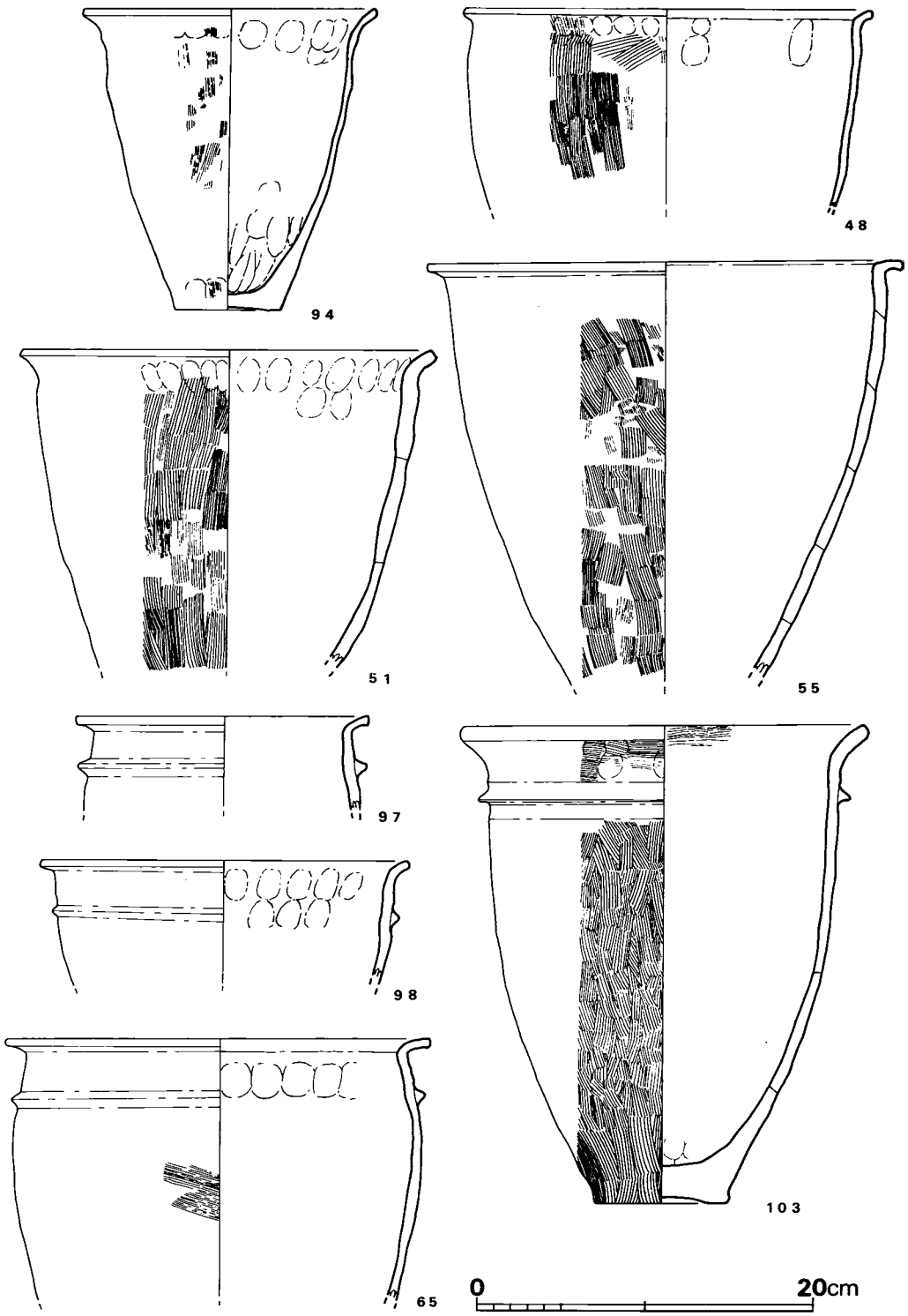


Fig. 40 17号住居跡出土土器実測図④（縮尺１/４）

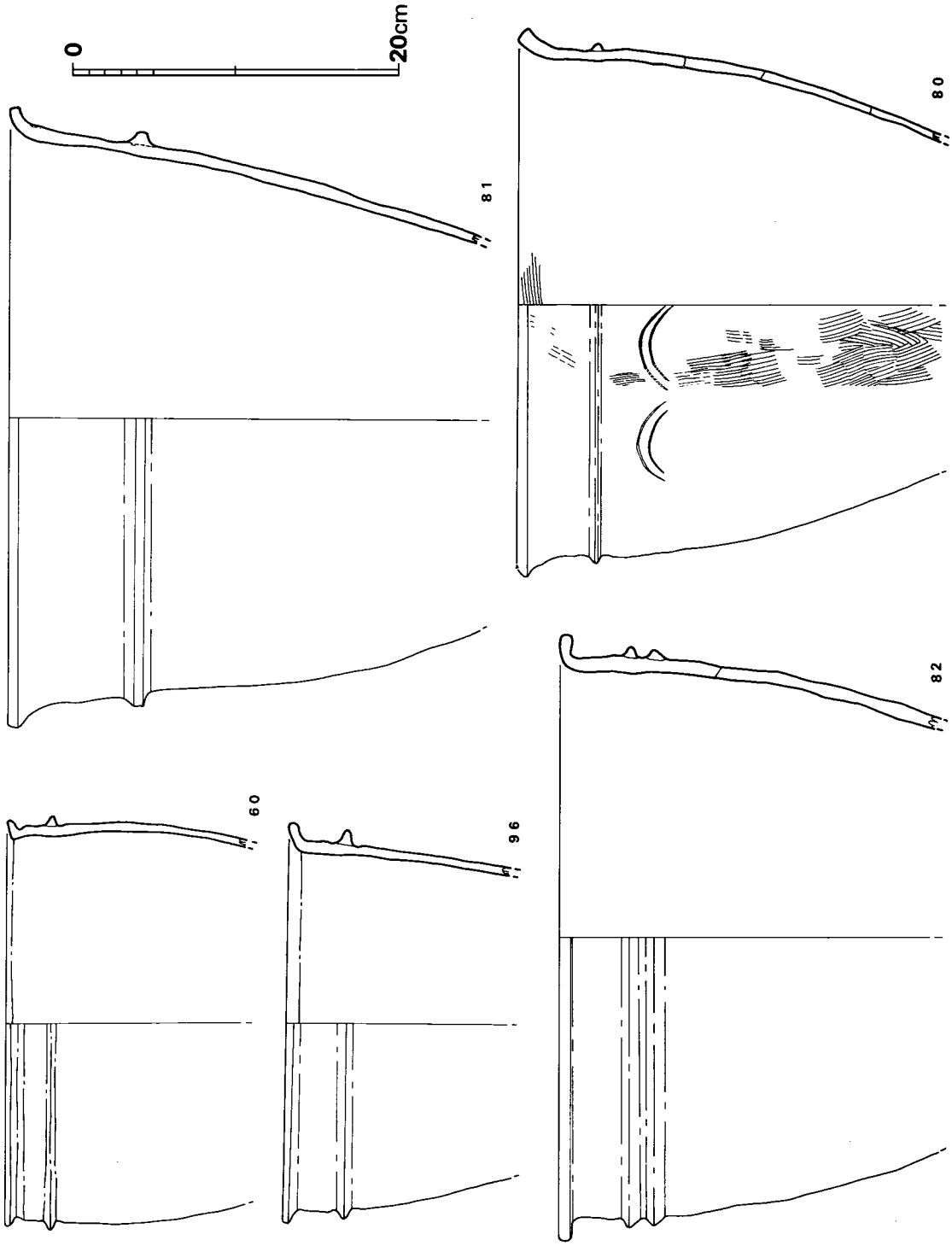


Fig. 41 17号住居跡出土土器実測図⑤（縮尺1/4）

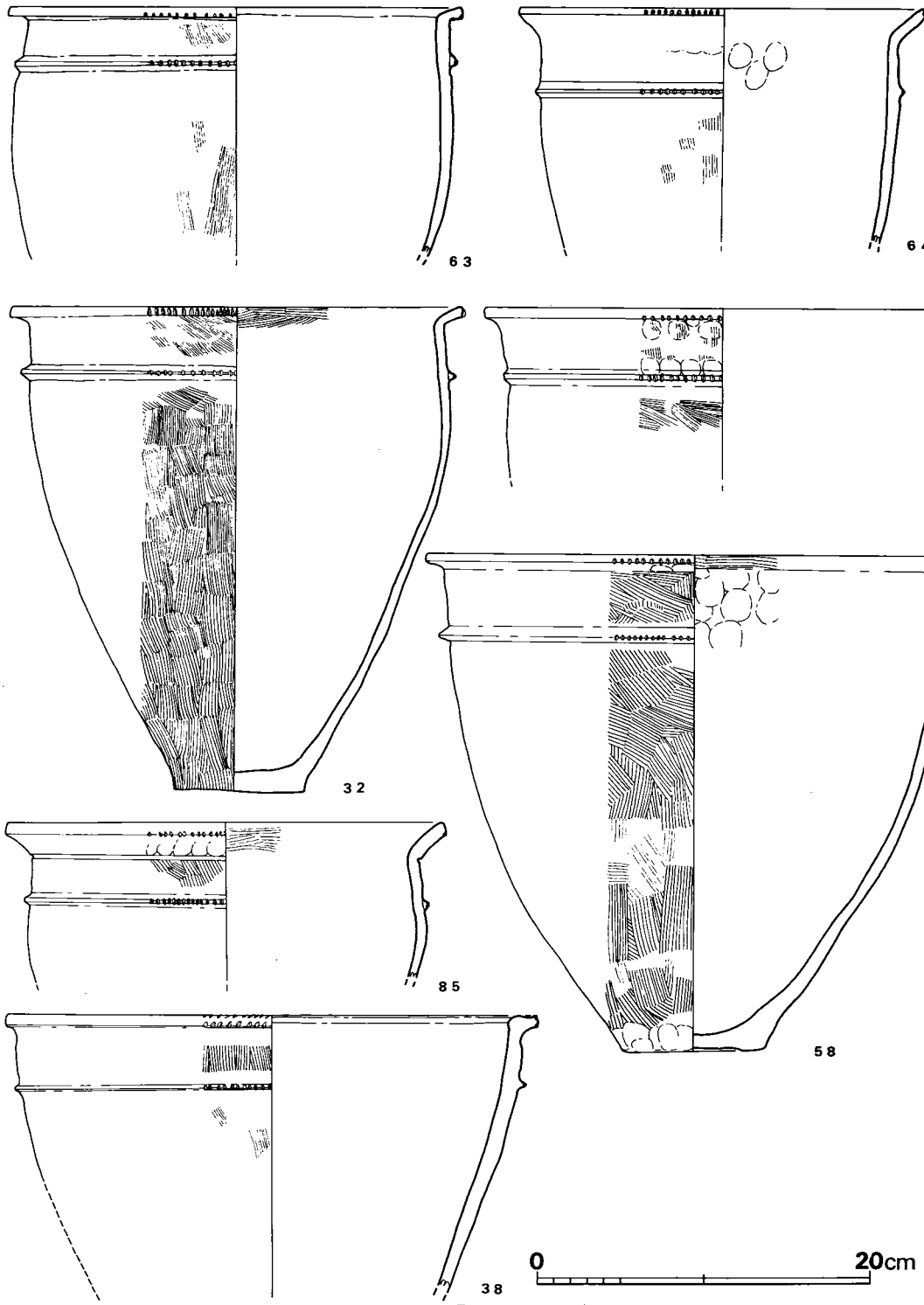


Fig. 42 17号住居跡出土土器実測図⑥（縮尺1/4）

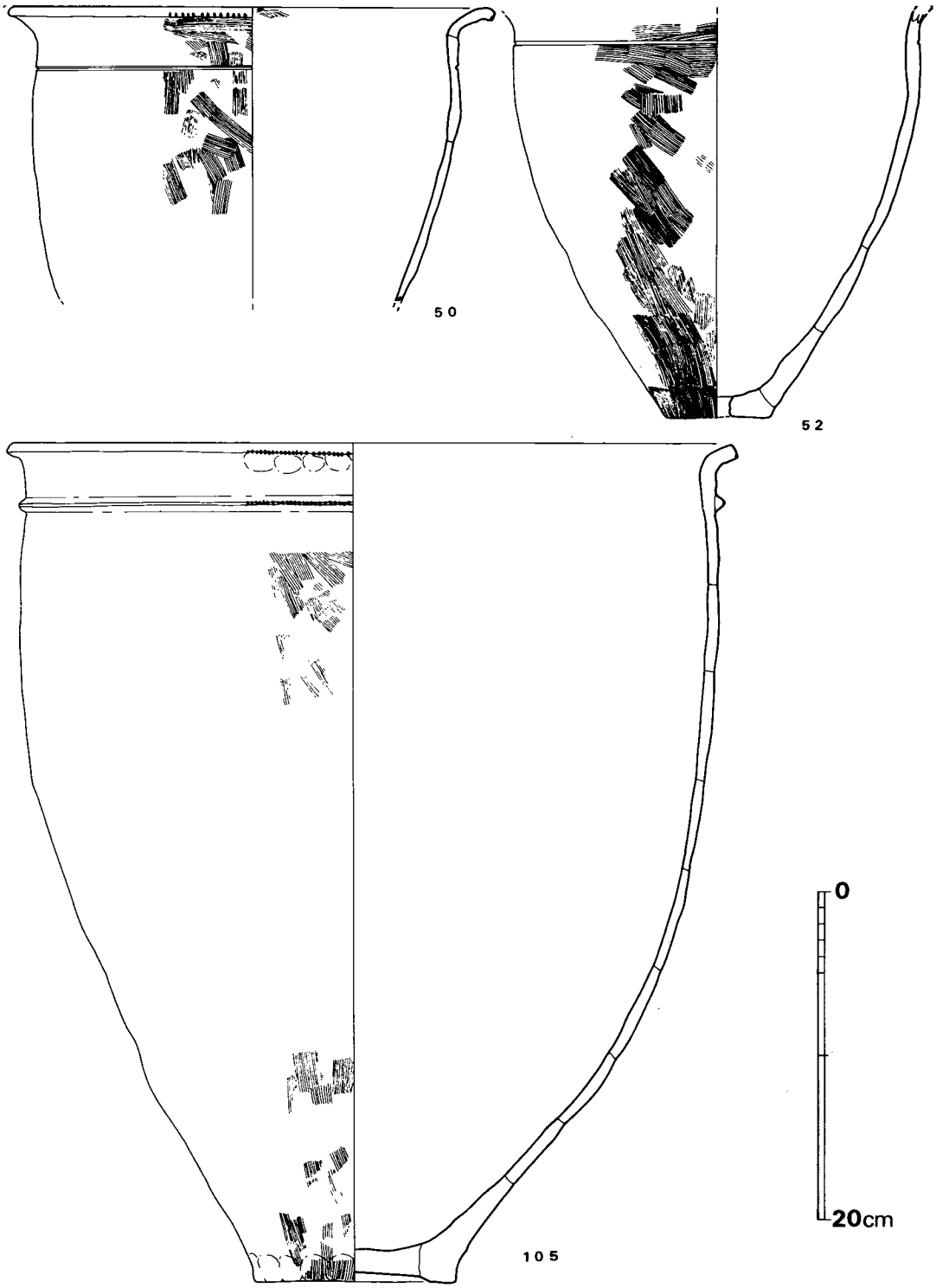


Fig. 43 17号住居跡出土土器実測図⑦（縮尺 1 / 4 ）

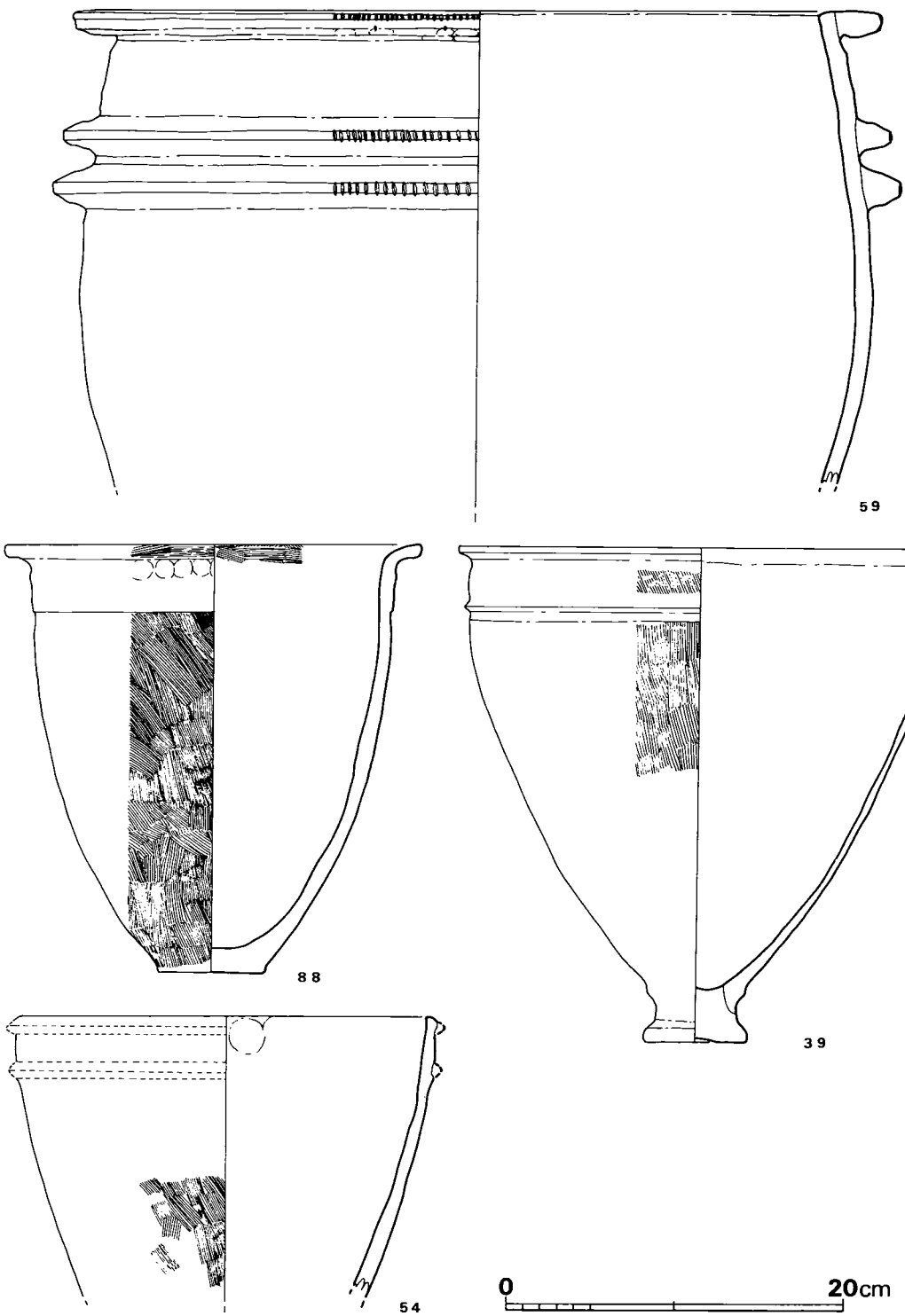


Fig. 44 17号住居跡出土土器実測図⑧（縮尺1/4）

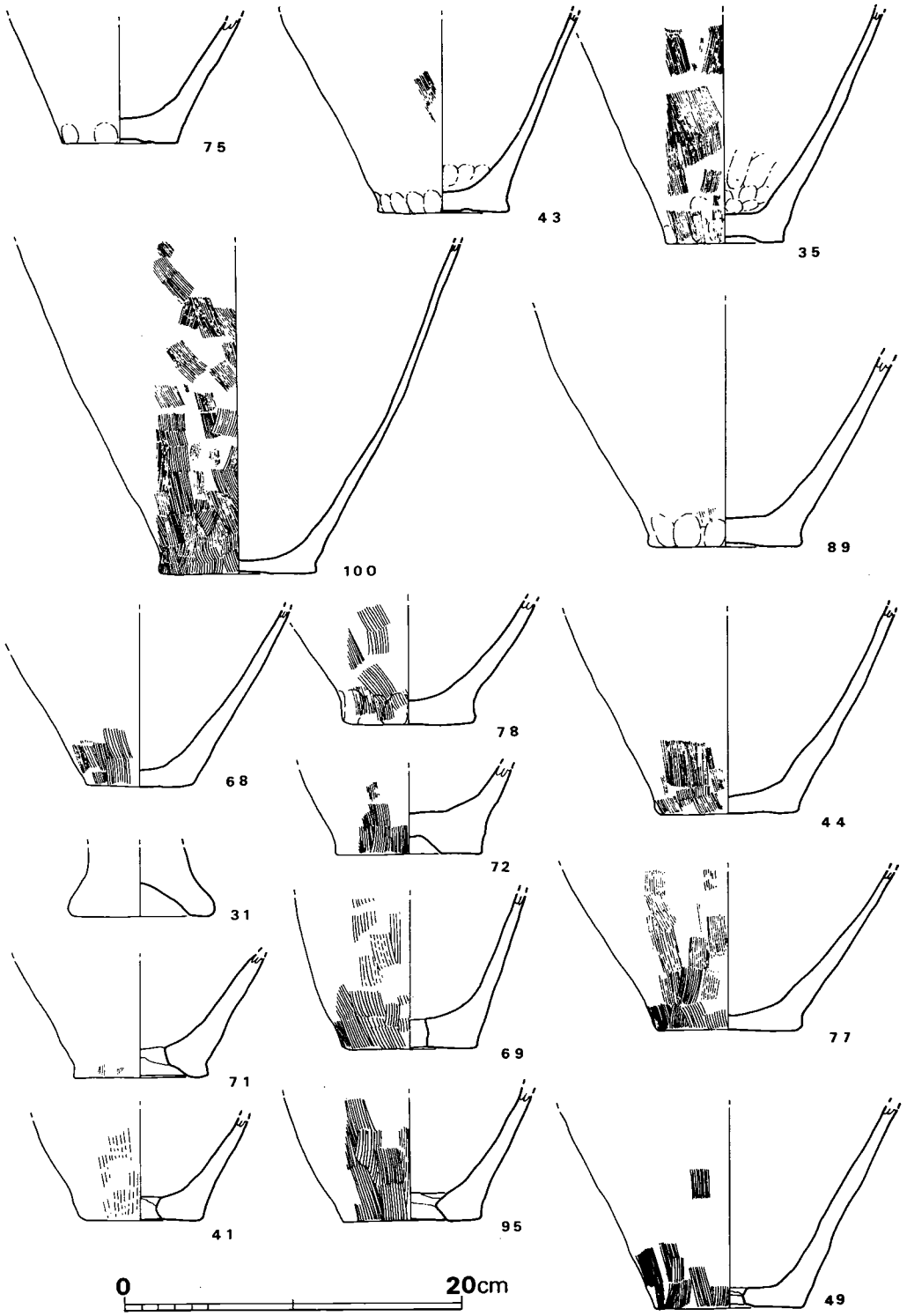


Fig. 45 17号住居跡出土土器実測図⑨（縮尺１/４）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径 胴径	計測値 底径 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
53	D 1729	住 17	深鉢		10.2 (21.0)	明茶褐色 (一部黒色)	小砂粒を含む	口縁部を欠く		II
54	D 1730	住 17	深鉢	22.2(復元内径)	(16.5)	茶黄色（口縁部はうすく黒ずむ)	砂粒を含む	口縁部付近破損、底部を欠く	Fig.44 PL.17	II
55	D 1731	住 17	深鉢	28.1	(25.1)	内面－明茶褐色 外面－灰茶色	砂粒を含む	胴部付近に黒ずみあり、底部を欠く	Fig.40	I
56	D 1732	住 17	壺	23.4(復元) 33.4	(27.1)			口縁～胴部にかけ$\frac{1}{2}$残る		II
57	D 1733	住 17	壺	17.0(復元) 27.0	8.6(元) 28.6	明黄褐色	砂粒多し	胴部下に１ヶ所黒色の所がある、底部は$\frac{2}{3}$を破損	Fig.38 PL.12	I
58	D 1734	住 17	深鉢	32.2	8.5 29.6	上半部・内面－淡黄色 下半部－赤褐色	砂粒を含む		Fig.42 PL.16	I
59	D 1735	住 17	甕	46.4(復元) 39.6(〃内径)	(28.1)	黄茶褐色	砂粒を含む	口縁部～胴部にかけ$\frac{1}{2}$破損、底部欠く	Fig.44 PL.17	II
60	D 1736	住 17	甕	24.8(復元) 24.6(復元)	(14.6)			胴部片	Fig.41 PL.15	II
61	D 1737	住 17	鉢	24.5(復元)	7.8 18.4	淡黄色	砂粒多し	口縁から胴部にかけ$\frac{1}{3}$破損	Fig.39 PL.13	II
62	D 1738	住 17	鉢	34.4(復元)	(21.3)	明黄茶褐色（胴部に一部黒色）	砂粒多し	底部を欠く	Fig.39 PL.13	I
63	D 1739	住 17	甕	27.0 26.2	(14.9)	内面－黄色 外面－灰黄褐色	砂粒を含む	口縁～胴部片	Fig.42 PL.16	I
64	D 1740	住 17	甕	24.3	(14.1)	淡黄褐色	大粒の砂粒多し	口縁～胴部片	Fig.42 PL.16	I
65	D 1741	住 17	甕	25.0	(15.7)	明灰黄色	砂粒を少量含む	口縁部を約$\frac{1}{2}$欠損	Fig.40 PL.14	I
66	D 1743	住 17	甕		9.5(復元) ((9.0)	明黄茶褐色	大粒砂粒多し	底部のみ	Fig.38 PL.12	I
67	D 1744	住 17	鉢	16.6(復元)	(8.9)	黄色	砂粒を含む	底部を欠く	Fig.39 PL.13	I
68	D 1745	住 17	甕		6.4 (10.4)	黄茶褐色	大粒の砂粒を含む	底部のみ	Fig.45 PL.18	I
69	D 1748	住 17	甕転用甑		7.8 (9.1)	内面－黄色 外面－茶褐色	砂粒を含む	底部のみ	Fig.45 PL.18	I
70	D 1751	住 17	甕		8.8 (8.1)	明黄褐色（ピンクがかる）	砂粒を含む（金雲母）	底部を一部破損		II
71	D 1752	住 17	甕		8.0(復元) (7.0)	茶赤褐色	砂粒を含む	底部	Fig.45 PL.18	II
72	D 1753	住 17	甕		8.6 (5.1)	明黄色	砂粒を含む	底部	Fig.45	II

Tab. 6　17号住居跡出土土器一覧表②

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径 胴径	計測値 底径 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
73	D 1754	住 17	壺		8.4 (9.5)	黄色	大粒の砂粒を含む	底部のみ	Fig.38 PL.12	I
74	D 1756	住 17	壺		9.3 (4.6)	淡黄色 (一部黒色)	大粒の砂粒を含む	底部のみ	Fig.38	I
75	D 1758	住 17	甕		6.8 (7.5)	黄茶褐色	砂粒を含む	底部のみ	Fig.45 PL.18	I
76	D 1760	住 17	壺		6.9 (7.0)	内面－黄赤褐色 外面－黄褐色	砂粒を含む	底部のみ	Fig.38 PL.12	II
77	D 1762	住 17	甕		8.8 (9.6)	黄茶褐色	砂粒を含む	底部のみ	Fig.45 PL.18	I
78	D 1764	住 17	甕		7.9 (7.2)	明黄色	砂粒を含む	底部のみ	Fig.45	I
79	D 1765	住 17	甕		8.5 (9.3)	淡黄褐色	大粒の砂粒を含む	底部のみ		I
80	D 1771	住 17	甕	33.8(復元)	(26.0)	茶褐色（内面は一部灰黒色）	大粒の砂粒を含む	口縁～胴部片	Fig.41 PL.15	II
81	D 1772	住 17	甕	38.1	(28.9)	淡黄褐色 (一部黒変)	大粒の砂粒を含む	底部と口縁部$\frac{1}{4}$を破損	Fig.41 PL.15	I
82	D 1773	住 17	甕	37.2(復元) 34.0(復元)	(23.2)	黄赤褐色	大粒の砂粒を含む	口縁から胴部片	Fig.41 PL.15	II
83	D 1774	住 17	鉢	36.1(復元)	8.8 23.6	黄褐色	砂粒多し	口縁から胴部にかけ$\frac{3}{4}$破損	Fig.39 PL.13	I
84	D 1775	住 17	甕	28.4 25.8	(10.3)	明黄色	大粒の砂粒を含む	口縁から胴部上半部のみ	Fig.42 PL.16	I
85	D 1776	住 17	甕	26.2 23.5	(9.5)	明黄褐色	砂粒を含む	口縁部のみ	Fig.42 PL.16	I
86	D 1777	住 17	壺	31.0(復元) 32.7(復元)	(18.1)	明黄褐色	砂粒多し	口縁から胴部にかけ$\frac{1}{4}$残る	Fig.38	I
87	D 1778	住 17	甕	38.0(復元)	(12.1)	明黄褐色	大粒砂粒多し	口縁部$\frac{1}{2}$弱破損	Fig.39 PL.13	I
88	D 1779	住 17	甕	24.3(復元) 20.6(復元)	6.3 25.2	暗黄色	砂粒を含む	口縁から胴部にかけ約$\frac{1}{3}$欠損	Fig.44 PL.17	I
89	D 1780	住 17	甕		9.1 (14.5)	茶褐色	砂粒比較的多し	底部のみ	Fig.45 PL.18	I
90	D 1781	住 17	壺	10.2	(19.4)	明茶褐色	大粒の砂粒多し	口縁部及び胴部を$\frac{1}{2}$欠く	Fig.38 PL.12	II
91	D 1782	住 17	壺	27.4(復元)	(20.7)	灰茶黄色	砂粒を含む	口縁部と底部を破損	Fig.37 PL.11	I
92	D 1784	住 17	鉢	19.5	(7.6)	暗茶黄色	砂粒多し	口縁から胴部上半片	Fig.39 PL.13	II

Tab. 7　　17号住居跡出土土器一覧表③

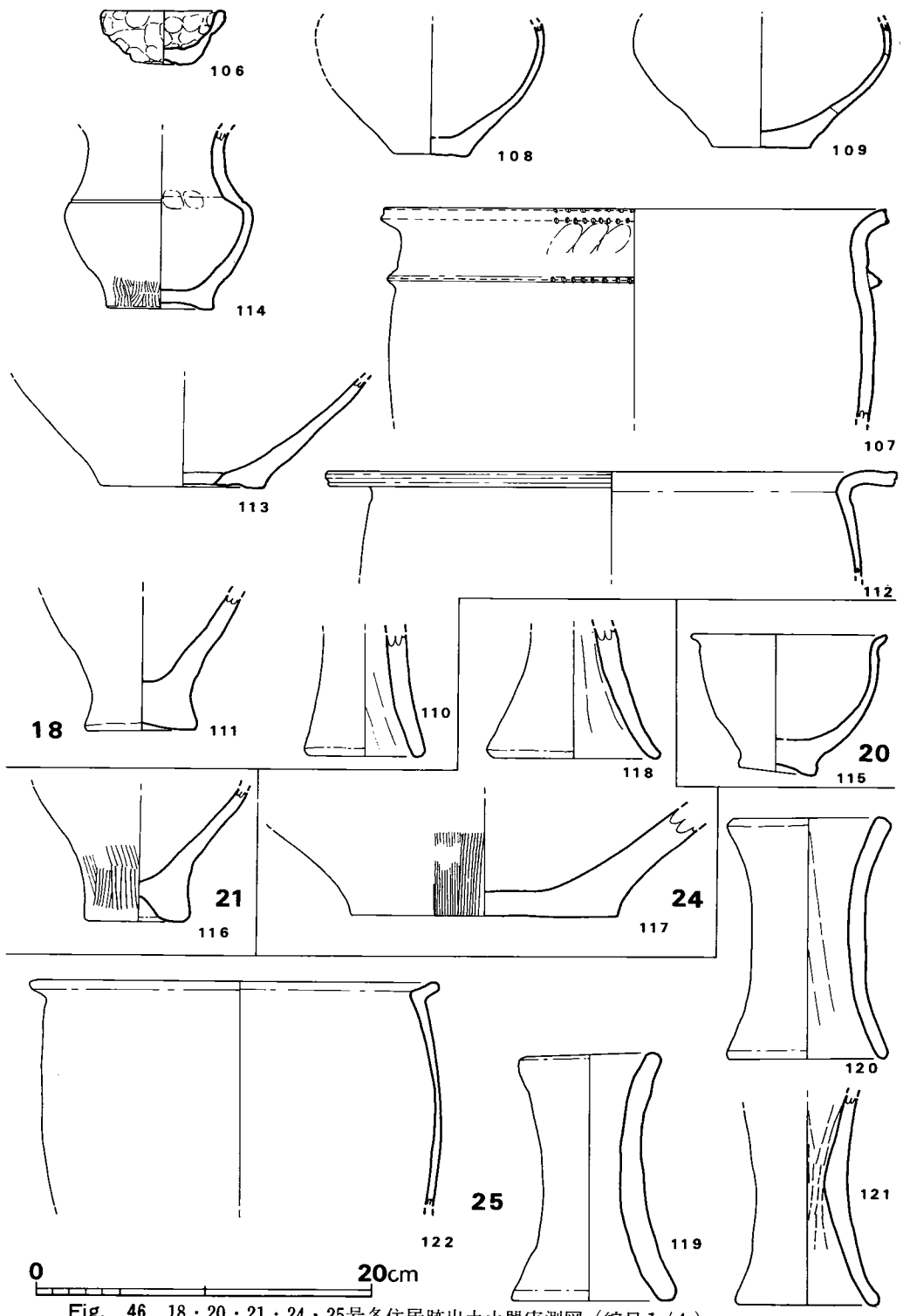


Fig. 46 18・20・21・24・25号各住居跡出土土器実測図（縮尺１/４）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
93	D 1786	住 17	甕	23.5	(17.5)	明黄褐色	砂粒多し	胴部のみ	Fig.37 PL.11	I
94	D 1788	住 17	甕	17.2(復元)	6.3 (18.0)	内面－黄灰色 外面－淡黄灰色	砂粒を含む		Fig.40 PL.14	I
95	D 1790	住 17	転用甑		8.2 (7.5)	明黄茶褐色	大粒の砂粒を含む	底部のみ		I
96	D 1791	住 17	甕	24.5	(13.7)	茶褐色	砂粒やや多し	口縁部～胴部のみ	Fig.41 PL.15	I
97	D 1792	住 17	甕	17.2(復元)	(5.6)	淡黄色 (一部灰黒色)	砂粒を含む	口縁部を$\frac{1}{2}$強破損	Fig.40 PL.14	I
98	D 1793	住 17	甕	21.7	(7.4)	明黄褐色	砂粒多し	口縁部～胴部上半	Fig.40 PL.14	I
99	D 1794	住 17	壺	11.4 11.6	6.9 12.4	黄褐色	砂粒を含む		Fig.37 PL.11	I
100	D 1795	住 17	甕		9.3 (19.6)	茶褐色	砂粒多し	上半部欠損	Fig.45 PL.18	I
101	D 1796	住 17	鉢	18.1	7.1 10.2	口縁～胴部が黄褐色、その他灰黒色	砂粒を含む		Fig.39 PL.13	II
102	D 1797	住 17	甕		7.8 (19.0)	灰黄褐色	砂粒を含む	胴部～底部		II
103	D 1798	住 17	甕	24.2(復元)	8.0 28.3(復元)	黄茶褐色 一部胴部黒色	砂粒を含む	口縁から胴部にかけ$\frac{3}{4}$破損	Fig.40 PL.14	II
104	D 1799	住 17	壺		9.5 (10.0)	黄茶褐色	砂粒多し	底部のみ	Fig.38 PL.12	I
105	D17101	住 17	大型甕	43.8(復元)	50.8	明茶褐色	大粒の砂粒多し		Fig.43	I
106	D 1801	住 18	手づくね (ミニチュア)	7.2	3.2	内面－明黄色 外面－黒灰色	小砂粒多し		Fig.46 PL.19	II
107	D 1802	住 18	甕	30.2(復元)	(12.8)	明黄褐色	小砂粒多し	口縁部$\frac{1}{2}$を破損	Fig.46 PL.19	I
108	D 1803	住 18	壺		4.4 (8.0)	淡黄色	大粒の砂粒多し	胴部～底部片	Fig.46 PL.19	I
109	D 1804	住 18	壺	15.3	5.8 (7.6)	明黄色	大粒の砂粒を含む	胴部～底部片	Fig.46	I
110	D 1805	住 18	器台		7.3 (7.4)	赤褐色～黄褐色 (脚下方)	粗い砂粒を含む	下半部のみ	Fig.46	II
111	D 1806	住 18	甕		6.7 (8.3)	外面－褐色 内面－暗褐色	粗い砂粒多し	底部のみ	Fig.46	II
112	D 1807	住 18	甕	39.0(復元)	(6.4)	内面－黄黒色 外面－茶褐色	細砂粒多し	口縁部約$\frac{1}{3}$残存	Fig.46	IV

Tab. 8　17～25号住居跡出土土器一覧表

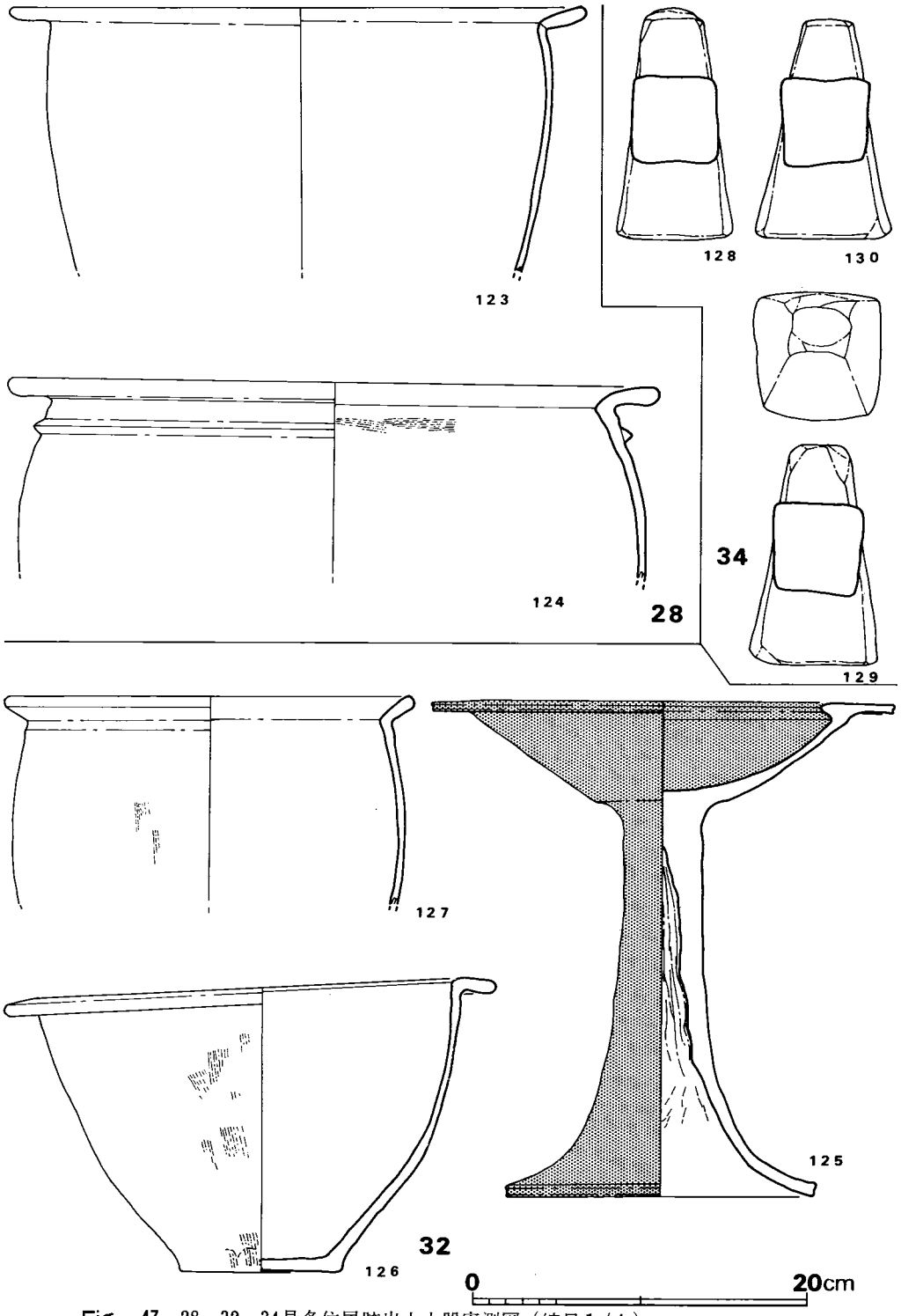


Fig. 47 28・32・34号各住居跡出土土器実測図（縮尺１/４）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口胴径	計測値 底器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図図版	時期
113	D 1809	住 18	壺		9.5 (6.5)	明黄色	小砂粒を含む	底部のみ	Fig.46	II
114	D 1814	住 18	壺	11.0	6.2 (10.7)	茶褐色 (一部黒変)	直径2㎜位の砂粒多し	口縁部を欠損	Fig.46 PL.19	I
115	D 2001	住 20	鉢	11.6	4.7 8.7	灰黄褐色	小砂粒を多く含む	口縁部約$\frac{2}{3}$破損	Fig.46 PL.19	II
116	D 2101	住 21	壺		6.1 (8.0)	茶褐色	砂粒を多く含む	底部のみ	Fig.46	II
117	D 2403	住 24	甕		15.8 (6.4)	明褐色	大きい砂粒多し	底部のみ 24住か25住？	Fig.46 PL.19	II
118	D 2404	住 24	器台		10.5 (7.8)	茶褐色	粗い砂粒を含む	下半部のみ	Fig.46 PL.19	II
119	D 2501	住 25	器台	9.45	右14.8 左14.5	明茶褐色	粗い砂粒多し		Fig.46	III
120	D 2502	住 25	器台	9.8	9.7 14.5	明茶褐色	粗い砂粒多し	全体の$\frac{2}{3}$残	Fig.46 PL.19	III
121	D 2503	住 25	器台		8.5 (17.6)	明茶褐色	小砂粒多し	上部欠損	Fig.46	III
122	D 2505	住 25	甕	24.2	(13.5)	茶褐色	砂粒多し	口縁部$\frac{1}{3}$を欠く	Fig.46 PL.19	III
123	D 2801	住 28	甕	34.2	(15.7)	黄褐色	砂粒を含む	口縁部$\frac{3}{4}$を残す	Fig.47	IV
124	D 2802	住 28	甕	38.6(復元)	(11.6)	明黄褐色	砂粒を含む	口縁部$\frac{1}{3}$を残す	Fig.47	IV
125	D 3201	住 32	高杯	27.3	裾径18.3 (29.4)	灰黄色	砂粒多し	部分的に茶色 (丹塗りか)	Fig.47 PL.19	IV
126	D 3202	住 32	深鉢	29.0	17.6	茶褐色(底部外面付近黒灰色)	小砂粒を含む		Fig.47 PL.19	IV
127	D 3203	住 32	甕	24.2(復元)	(12.4)	明黄橙色	砂粒を含み密	口縁から胴部にかけ$\frac{1}{2}$残す	Fig.47	IV
128	D 3401	住 34	支脚		13.8	橙褐色	小砂粒を含む		Fig.47	I
129	D 3402	住 34	支脚		13.2	橙褐色	小砂粒を含む		Fig.47	I
130	D 3403	住 34	支脚		13.2	橙褐色	小砂粒を含む		Fig.47	I
131	S 0402	貯 4	壺	19.6(復元) 27.9(復元)	(13.2)	淡黄褐色	砂粒多し	口縁～胴部片	Fig.48 PL.20	II
132	S 0701	貯 7	無頸壺	7.4(復元) 19.5(復元)	6.7 16.4	内面－暗灰色 外面－淡黄色	細砂粒多し	口縁から胴部にかけ$\frac{1}{2}$強を欠く	Fig.48 PL.20	II

Tab. 9　25～34号住居跡及び4～40号貯蔵穴出土土器一覧表

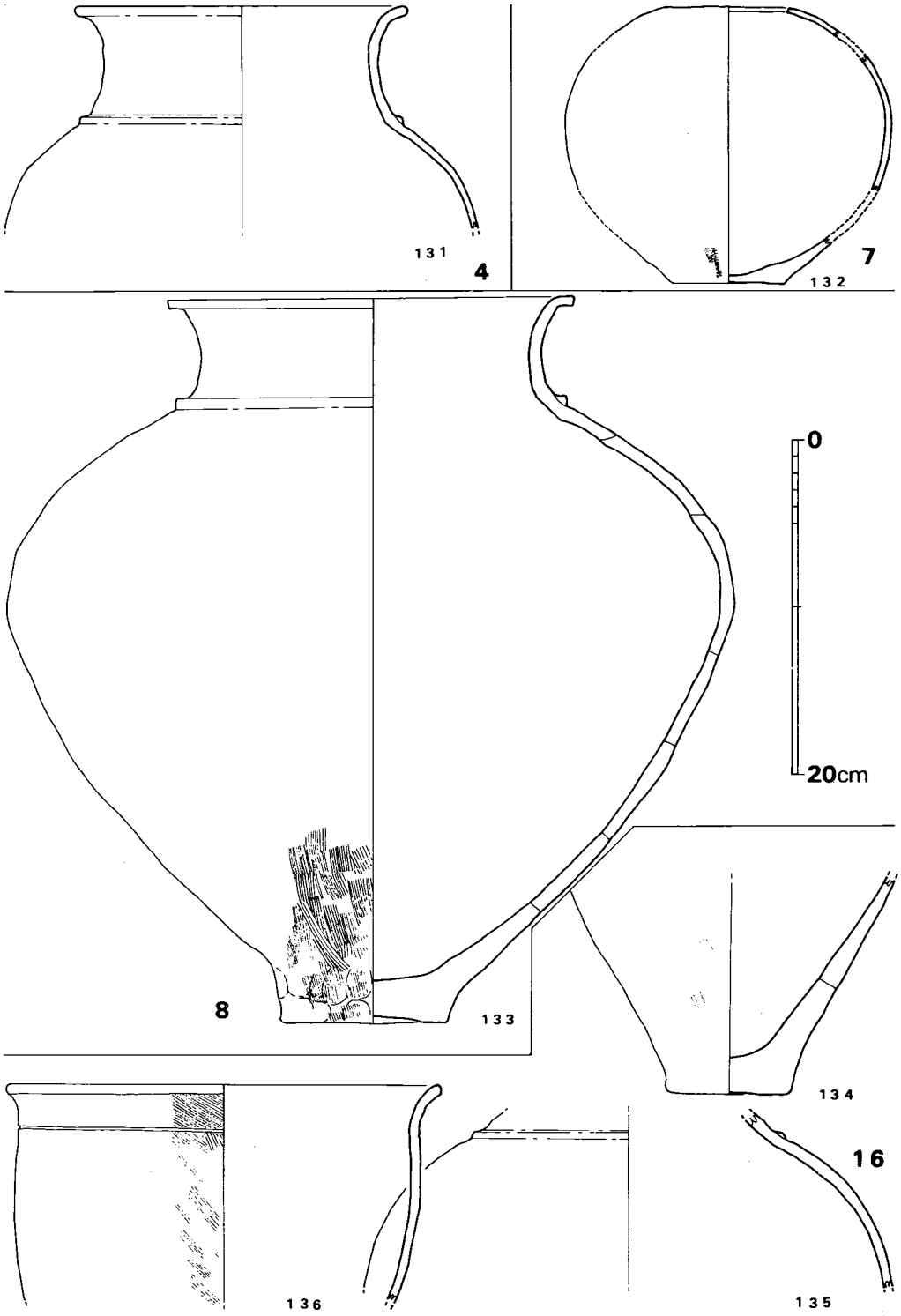


Fig. 48 4・7・8・16号各貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

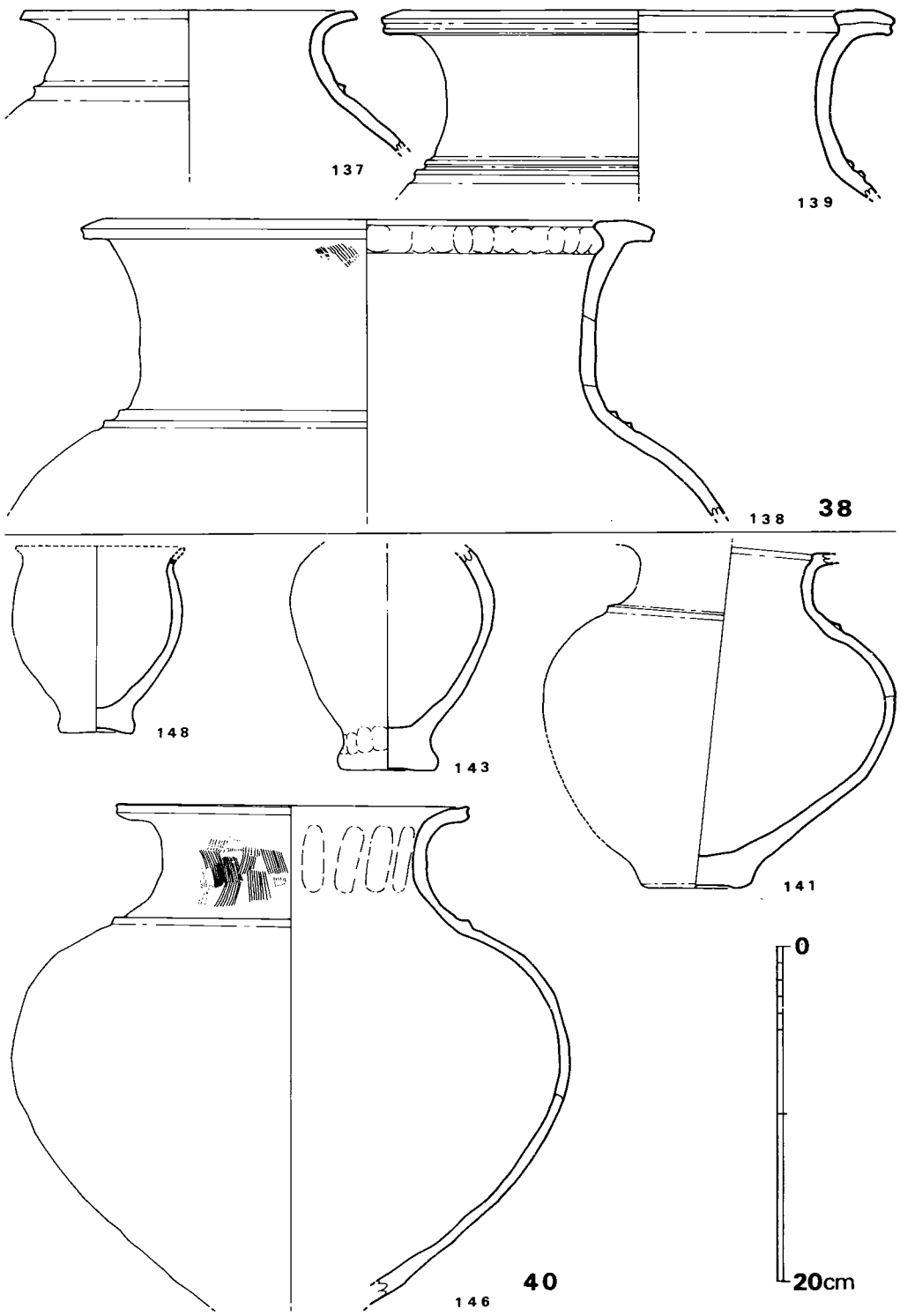


Fig. 49 38・40号各貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図図版	時期
133	S 0801	貯 8	大型壺	24.2(復元) 43.0	10.0 43.0	暗黄褐色 (一部黒色)	大粒の砂粒多し		Fig.48	II
134	S 1601	貯 16	甕		7.4(復元) (12.7)	黄灰色	大粒の砂粒多し	底部のみ	Fig.48	II
135	S 1604	貯 16	壺		(10.0)	内面－明黄色 外面－明黄・黒・暗茶褐色)	砂粒多し	胴部のみ	Fig.48	II

Tab. 10　　40号貯蔵穴出土土器一覧表

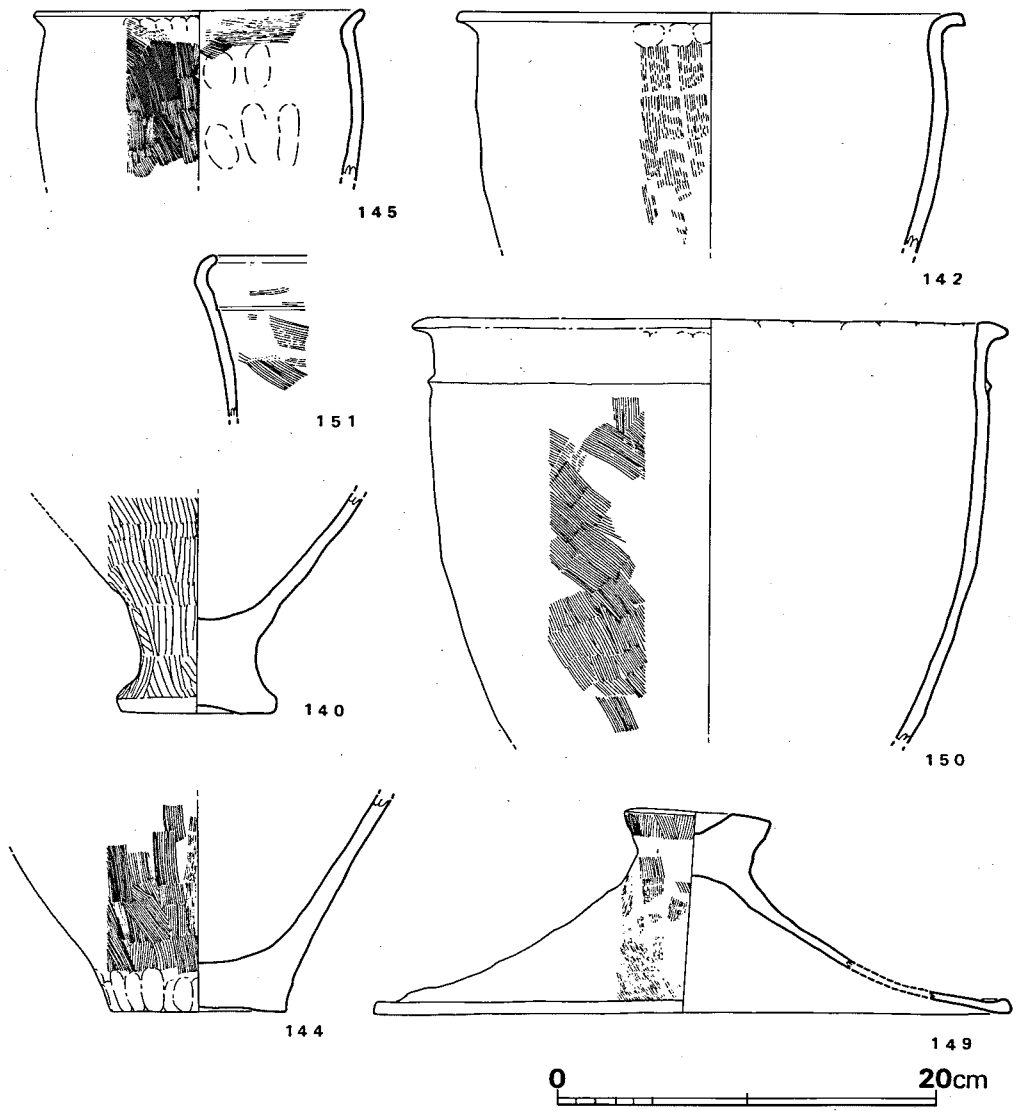


Fig. 50　40号貯蔵穴出土土器実測図（縮尺１/４）

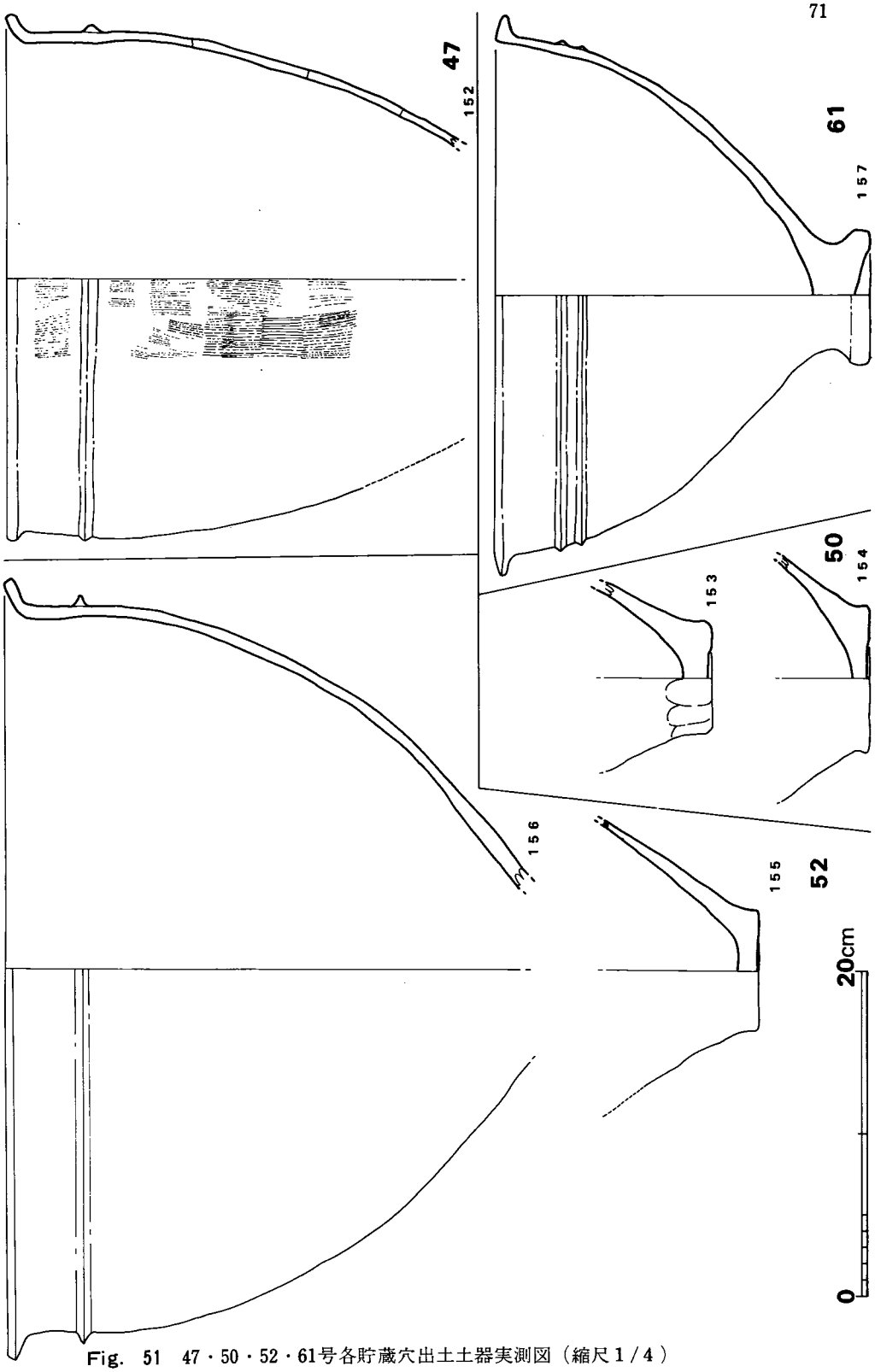


Fig. 51 47・50・52・61号各貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
136	S 1605	貯 16	甕	25.6	(13.0)	内面－黄茶褐色 外面－暗茶褐色	砂粒を含む	口縁から胴部にかけ$\frac{1}{4}$程欠損		I
137	S 3801	貯 38	壺	19.0	(8.4)	茶褐色	砂粒(2·3mm)多し	口縁のみ	Fig.49 PL.20	II
138	S 3802	貯 38	壺	34.0(復元)	(17.5)	淡灰黒色	大粒の砂粒を含む	口縁から肩部にかけ$\frac{1}{3}$強残す	Fig.49 PL.20	III
139	S 3803	貯 38	壺	30.4(復元)	(11.0)	灰茶褐色	砂粒多し	口縁部から肩部にかけ約$\frac{1}{2}$弱残す	Fig.49	III
140	S 4001	貯 40	甕		8.4 (11.3)	内面－淡灰黄色 外面－黄色・一部赤褐色	大粒の砂粒を含む	底部のみ	Fig.50 PL.21	II
141	S 4002	貯 40	壺	20.5	6.5 (20.4)	内面－黒茶褐色 外面－明灰黄色	砂粒多し	口縁部の胴部を一部欠く	Fig.49 PL.20	II
142	S 4003	貯 40	甕	26.5	(12.5)	明黄褐色	砂粒を少し含む	口縁部～胴部片	Fig.50 PL.21	I
143	S 4004	貯 40	壺	12.0	5.9 (13.5)	茶褐色	砂粒多し	口縁部を欠く	Fig.49 PL.20	II
144	S 4005	貯 40	深鉢		9.2 (11.5)	明黄褐色	砂粒を少し含む	底部のみ	Fig.50 PL.21	II
145	S 4006	貯 40	甕	17.3(復元)	(9.0)	内面－淡赤褐色 外面－灰黄褐色	砂粒を含む	口縁部約$\frac{1}{2}$を残す	Fig.50 PL.21	II
146	S 4008	貯 40	壺	20.8 33.0	(29.6)	黄茶褐色	砂粒を含む	底部欠損、口縁内部と胴部に丹塗りが残る	Fig.49 PL.20	II
147	S 4010	貯 40	壺					口縁部から胴部残存		II
148	S 4011	貯 40	甕型土器	10.0(復元) 10.0	4.5 10.9(復元)	灰黄色	小砂粒を含む	口縁部から胴下部を破損	Fig.49 PL.20	II
149	S 4012	貯 40	蓋	33.3	10.6	外面－黄茶褐色 内面－灰黄褐色	砂粒を含む		Fig.50 PL.21	II
150	S 4013	貯 40	甕	31.2	(22.0)	黒黄色 部分的に茶褐色	砂粒を含む	底部欠	Fig.50 PL.21	II
151	S 4014	貯 40	甕			茶褐色	砂粒を含む	口縁～胴部片	Fig.50	II
152	S 4702	貯 47	甕	32.1 30.3	(23.3)	茶黄褐色（部分的に暗茶色）	砂粒多し	底部欠損	Fig.51	I
153	S 5001	貯 50	甕		6.9 (6.8)	淡灰黄色	細砂粒多し	底部のみ	Fig.51	II
154	S 5002	貯 50	壺		8.8 (5.7)	淡小豆色	大粒砂粒多し	底部のみ	Fig.51	I
155	S 5201	貯 52	甕		7.3 (10.0)	黄褐色	砂粒多し	底部のみ	Fig.51	I

Tab. 11　　40～62号各貯蔵穴出土土器一覧表

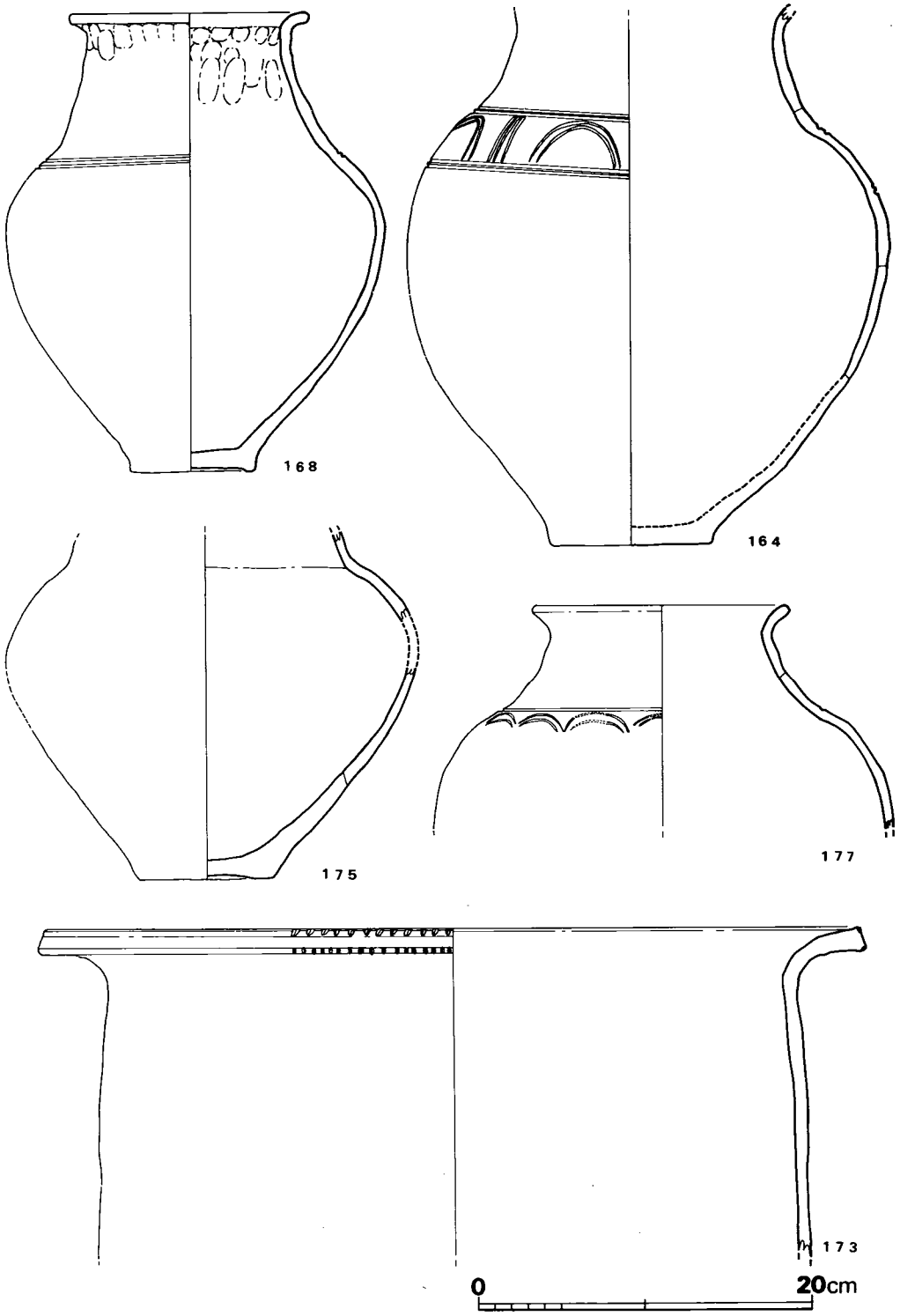


Fig. 52 62号貯蔵穴出土土器実測図①（縮尺1/4）

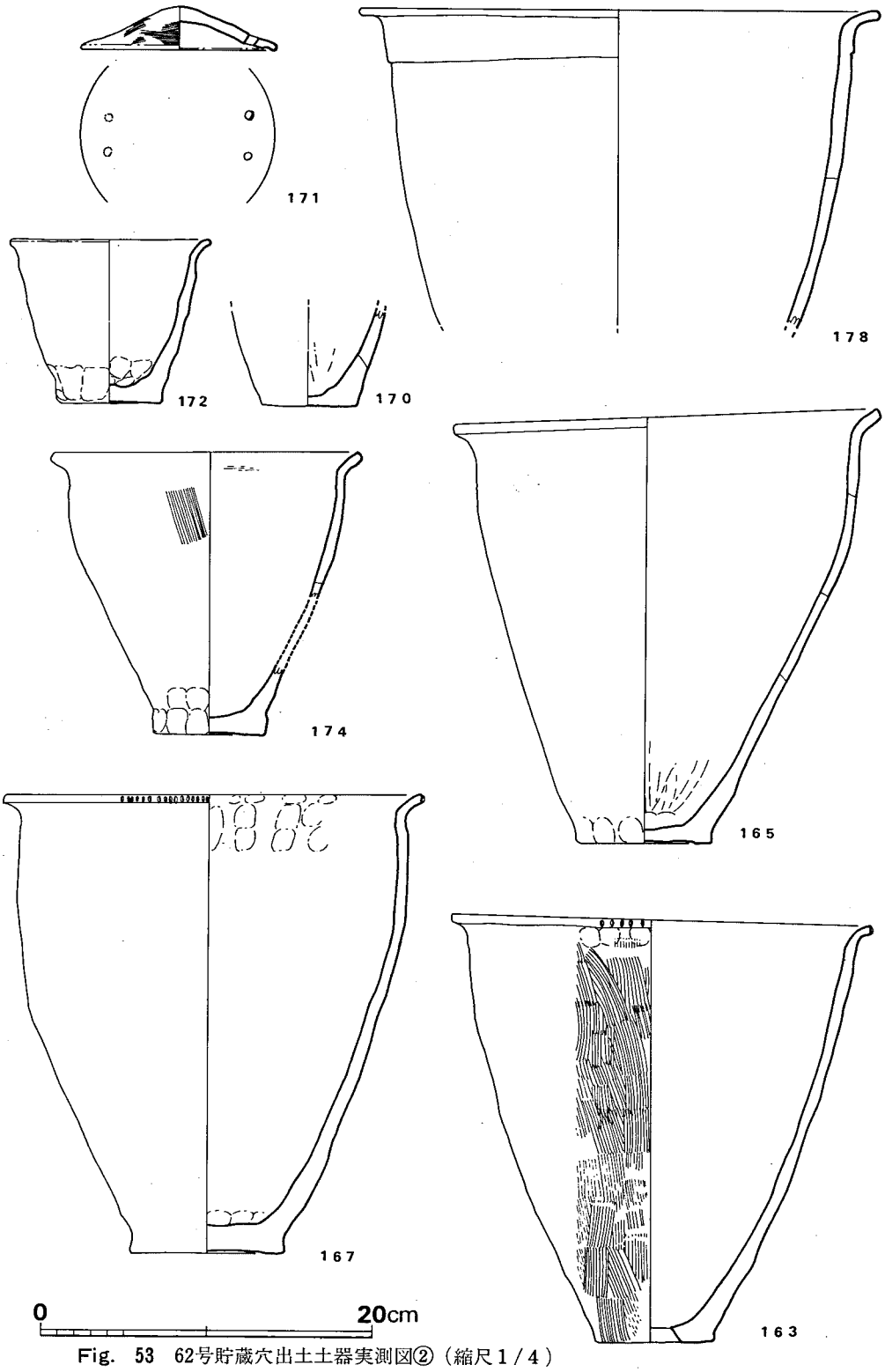


Fig. 53 62号貯蔵穴出土土器実測図②（縮尺1/4）

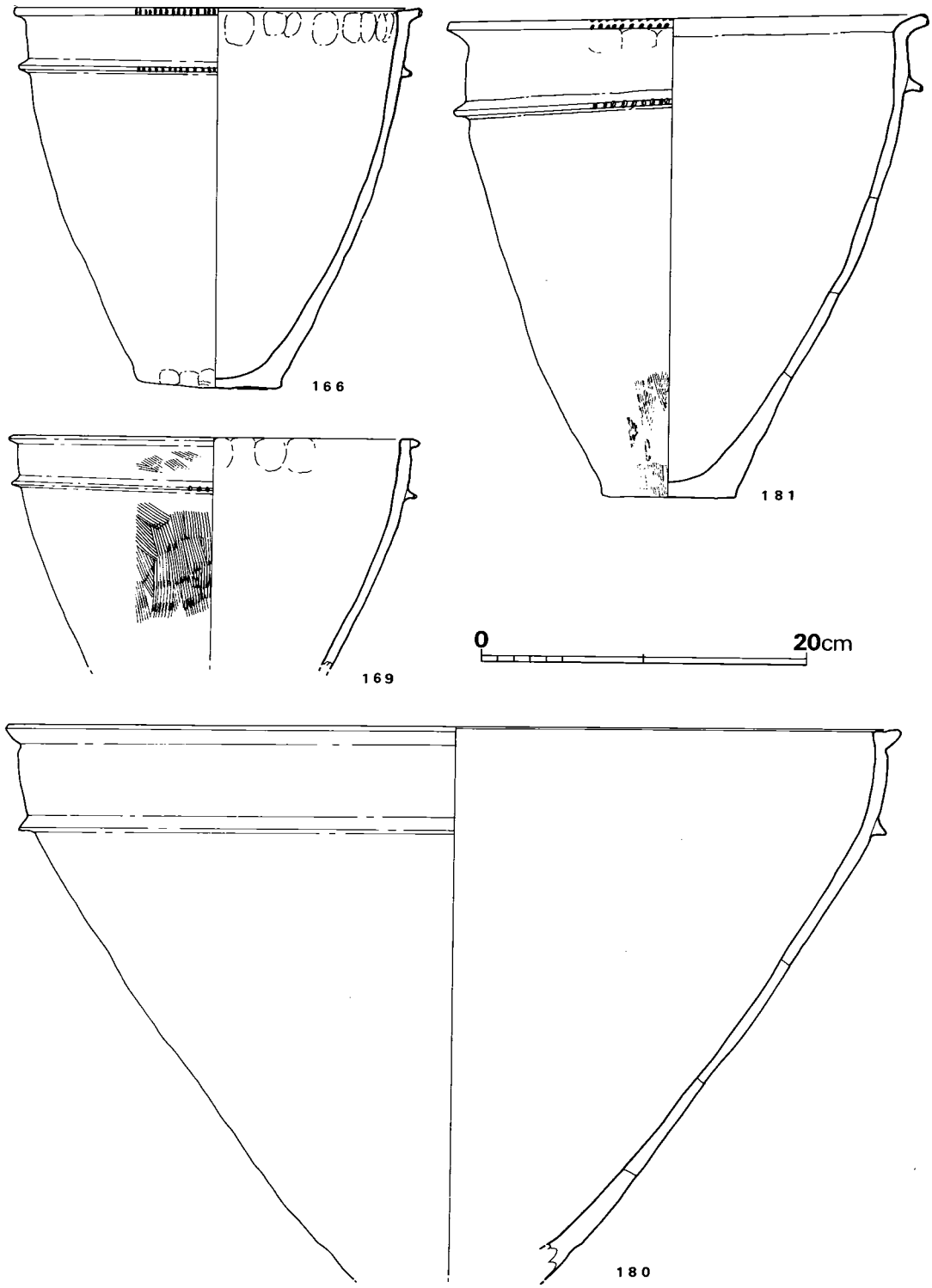


Fig. 54 62号貯蔵穴出土土器実測図③（縮尺１/４）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
156	S 5203	貯 52	甕	47.7(復元)	(32.2)	明黄褐色（外面一少し灰色）	砂粒多し	口縁部から胴部下半にかけ$\frac{1}{3}$残存	Fig.51 PL.22	I
157	S 6103	貯 61	鉢	34.3(復元)	8.2 23.0(復元)	淡黄褐色	砂粒を少し含む		Fig.51	II
158	S 6104	貯 61	小形甕					完形、口縁$\frac{1}{3}$欠	PL.22	II
159	S 6105	貯 61	甕					完形	PL.22	II
160	S 6106	貯 61	甕					完形	PL.22	II
161	S 6108	貯 61	深鉢					口縁$\frac{1}{2}$欠	PL.22	II
162	S 6111	貯 61	甕					口縁$\frac{2}{3}$欠	PL.22	II
163	S 6201	貯 62	深鉢	25.0	7.0 25.5	赤褐色	砂粒多し		Fig.53 PL.24	I
164	S 6202	貯 62	壺	28.7	9.7 (32.0)	内面一暗灰黄色 外面一黄褐色	砂粒多し	口縁部を欠き他の部分が少しづつ破損	Fig.52 PL.23	I
165	S 6203	貯 62	深鉢	25.2(復元)	7.8 25.8	外面一黄褐色 内面胴部一暗赤褐色 胴部に黒変あり	砂粒多し	口縁から胴部にかけ$\frac{1}{3}$程欠損	Fig.53 PL.24	I
166	S 6204	貯 62	深鉢	24.6	23.1	赤褐色	砂粒を含む	底部内面に煤付着	Fig.54 PL.24	I
167	S 6205	貯 62	深鉢	25.0 23.2	9.2(復元) 27.2	灰黄色	小砂粒を含む	口縁部から底部にかけ約$\frac{1}{3}$破損	Fig.53 PL.24	I
168	S 6207	貯 62	壺	14.1 22.4	7.4 22.2	黄色（胴部に黒色と赤褐色の部分有）	砂粒を含む	口縁から頸部にかけ$\frac{1}{3}$弱破損	Fig.52	I
169	S 6209	貯 62	甕	24.8	(14.0)	茶褐色	砂粒を含む	口縁から胴部のみ	Fig.54	II
170	S 6210	貯 62	深鉢		5.6 (5.6)	小豆色に近し（茶色気味）	砂粒多し	底部のみ	Fig.53	I
171	S 6212	貯 62	蓋	11.5	2.5	灰黄色	砂粒を含む		Fig.53 PL.23	III
172	S 6213	貯 62	甕型土器（手づくね）	12.0	6.2 9.75	黄色がかった淡小豆色	砂粒多し		Fig.53 PL.23	I
173	S 6215	貯 62	甕	49.2(復元)	(19.8)	黄茶褐色（一部黒色）	大粒の砂粒を含む	口縁から胴部のみ	Fig.52	I
174	S 6217	貯 62	甕	18.5(復元)	6.7 16.8	黄茶褐色（一部黒色）、底部内外一淡小豆色	砂粒多し	口縁のごく一部と胴部から底部にかけ約$\frac{1}{2}$を残存	Fig.53 PL.24	I
175	S 6218	貯 62	壺		8.0 (20.5)	茶褐色	砂粒多し	口縁部と胴部を欠損	Fig.52 PL.23	I

Tab. 12　62～73号各貯蔵穴出土土器一覧表

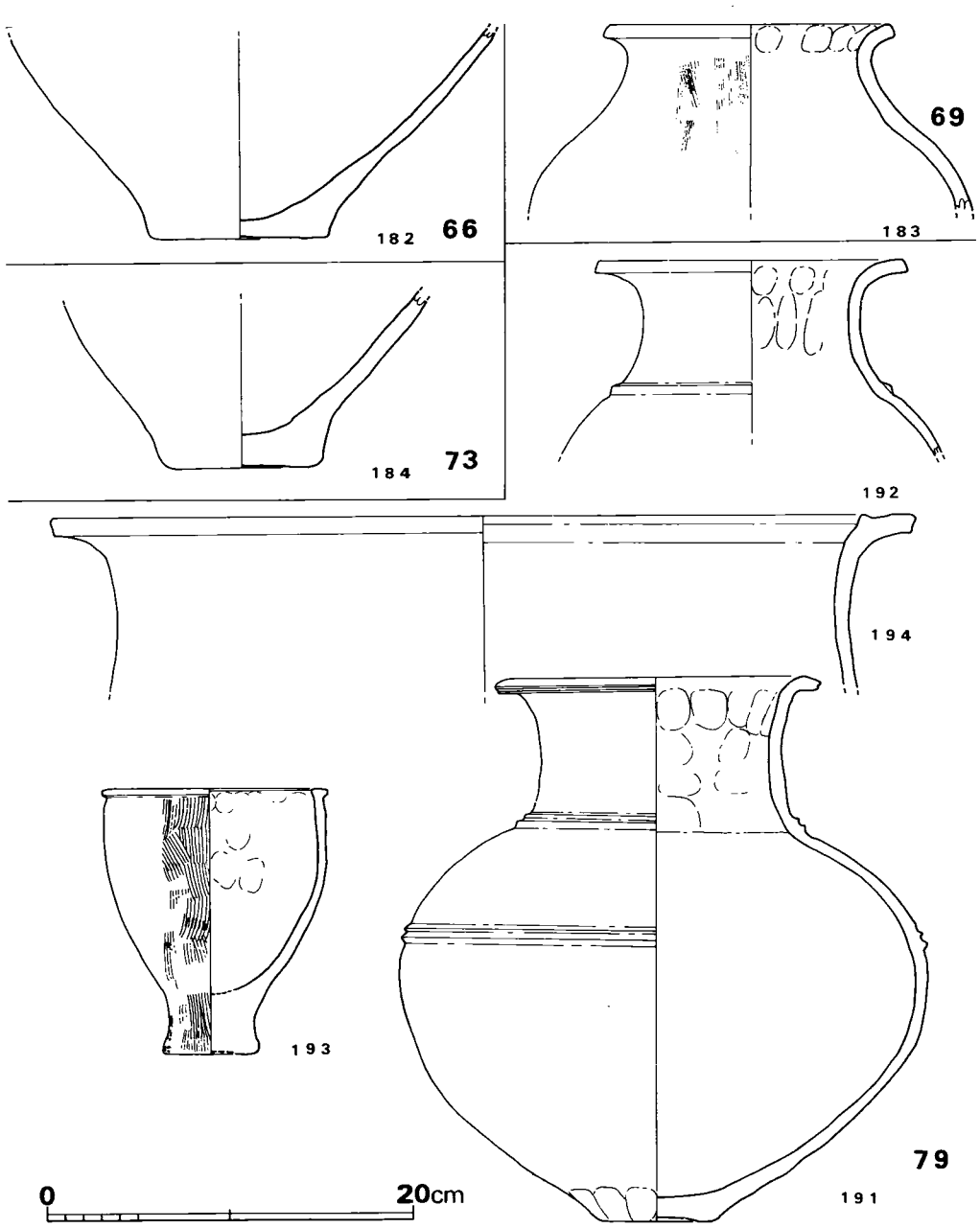


Fig. 55 66・69・73・79号各貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 底径	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
176	S 6219	貯 62	壺						PL.23	I
177	S 6221	貯 62	壺	15.4(復元) 27.3	(13.5)	茶褐色	砂粒を含む	口縁から胴部にかけ$\frac{3}{4}$弱残存	Fig.52 PL.23	I
178	S 6224	貯 62	甕	30.9	(19.0)	明黄褐色	砂粒多し	底部欠損	Fig.53 PL.24	I
179	S 6225	貯 62	壺						PL.23	II
180	S 6226	貯 62	甕	54.4(復元)	(33.7)	赤褐色、底部内面一黒色の部分有	砂粒多し	口縁から底部かけ$\frac{1}{3}$弱残底部打欠	Fig.54	II
181	S 6227	貯 62	甕	29.2	8.1 29.5	内面一灰黒色 外面一上黄褐色 下赤褐色	砂粒を含む	口縁から底部にかけ$\frac{1}{3}$弱破損	Fig.54	I

Tab. 13　76・79号各貯蔵穴出土土器一覧表

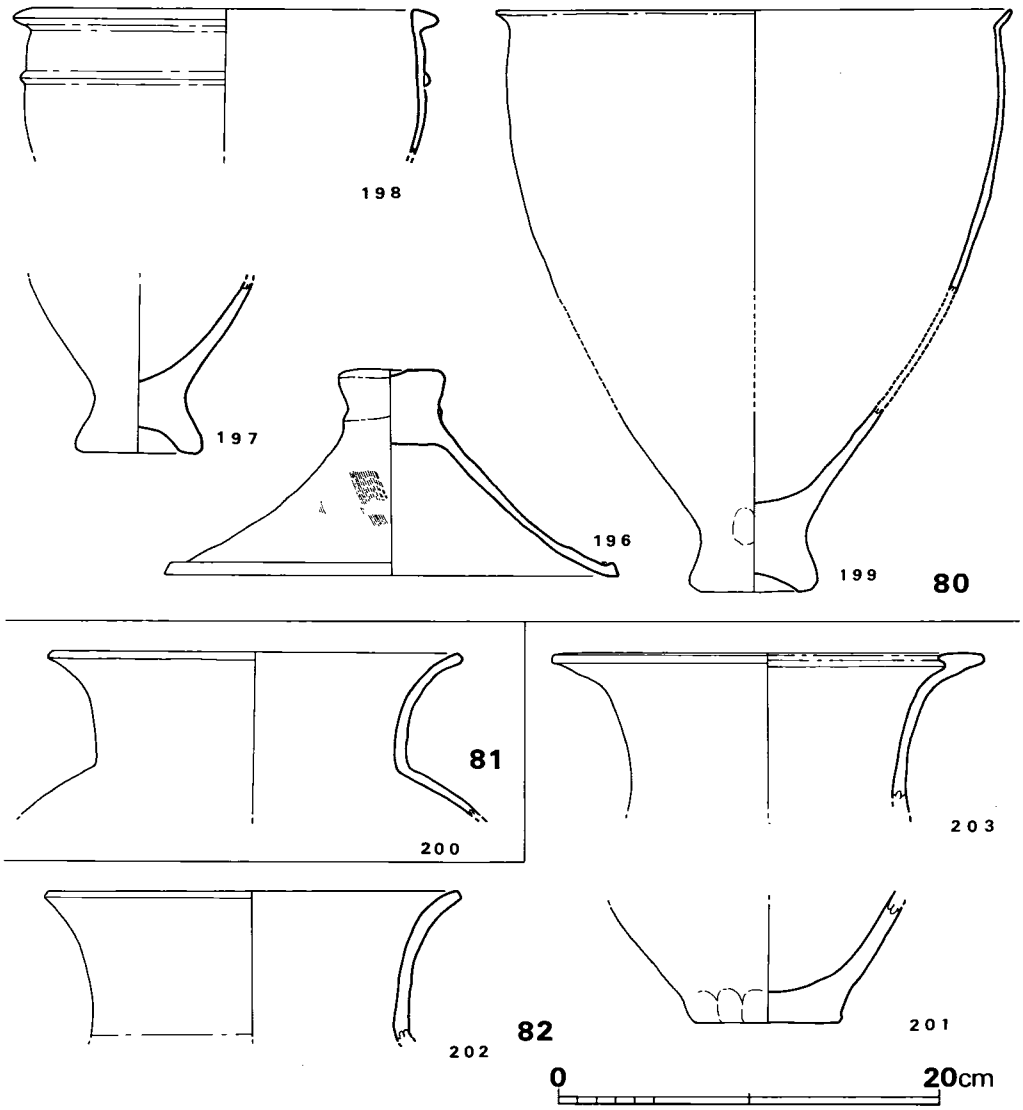


Fig. 56　80・81・82号各貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値		特徴		備考	挿図図版	時期
				胴径	器高	色調	胎土			
182	S 6601	貯 66	壺		9.8 (11.3)	明黄褐色	大粒砂粒多し	底部のみ	Fig.55	II
183	S 6902	貯 69	壺	15.8(復元)	(10.3)	明茶褐色	大粒砂粒多し	口縁から胴部にかけ$\frac{1}{3}$弱残す	Fig.55	II
184	S 7301	貯 73	壺		8.8 (9.0)	淡灰黄色	砂粒を含む	底部のみ残存	Fig.55	II
185	S 7602	貯 76	小形甕					完形	PL.25	I
186	S 7603	貯 76	甕					口縁～胴部残存	PL.25	I
187	S 7902	貯 79	甕					口縁～胴部残存	PL.25	II
188	S 7906	貯 79	壺					口縁部欠損、頸部～胴部残存	PL.25	II
189	S 7907	貯 79	甕					口縁～胴部残存	PL.25	II
190	S 7908	貯 79	壺					完形	PL.25	II

Tab. 14　　79・80号各貯蔵穴出土土器一覧表

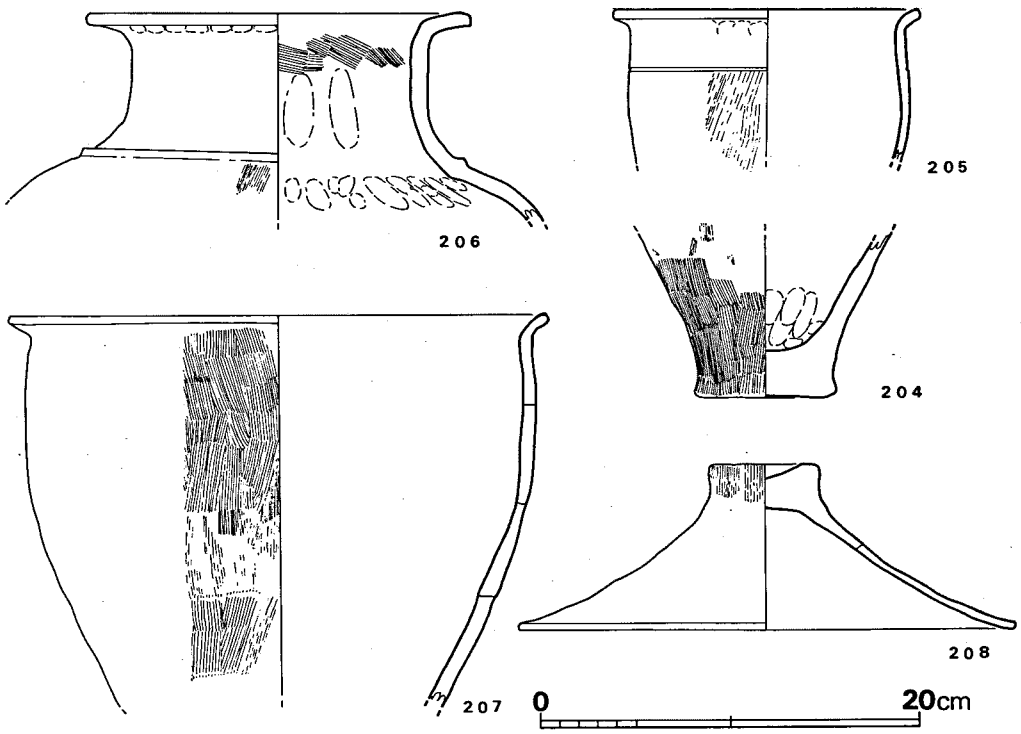
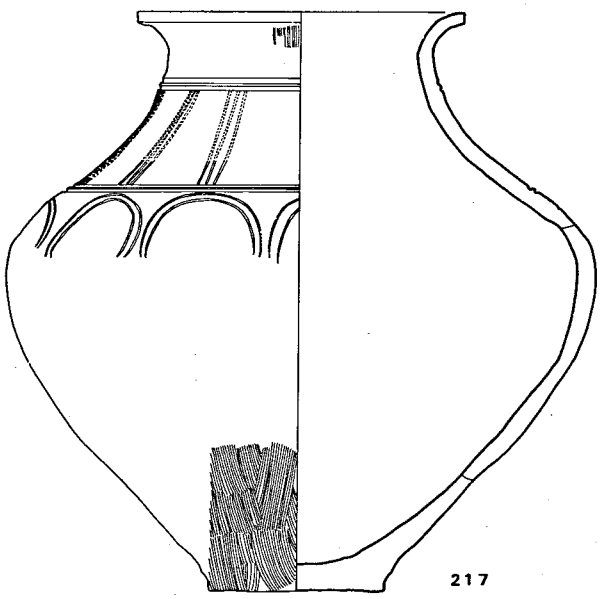
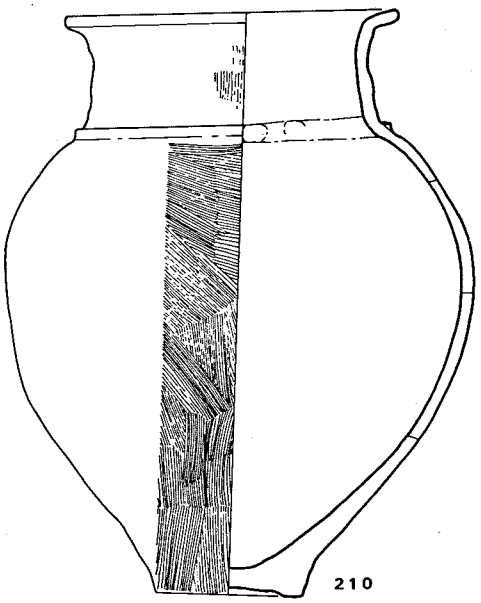


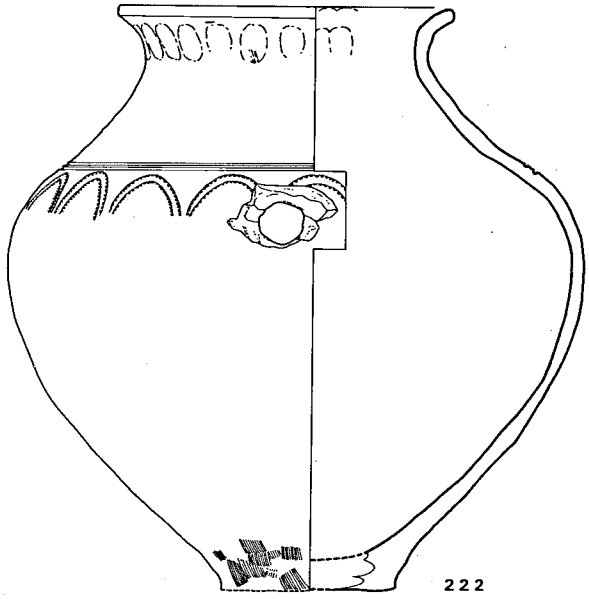
Fig. 57　83号貯蔵穴出土土器実測図（縮尺１/４）

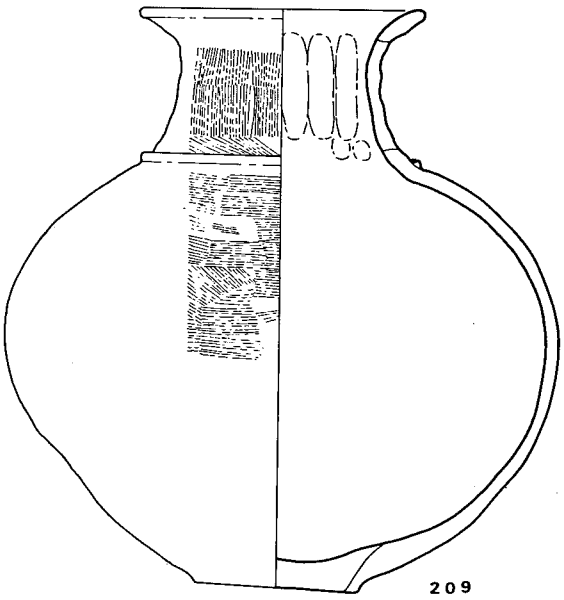
No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
191	S 7909	貯 79	壺	17.8 28.7		6.5 29.5	外面－灰黒色 内面－淡茶黄色	小砂粒多し	胴部口縁部を部分的に欠く	Fig.55	II
192	S 7913	貯 79	壺	17.2(復元)		(10.5)	淡明黄色	大粒の砂粒を含む	口縁部を$\frac{1}{2}$弱残す	Fig.55	II
193	S 7914	貯 79	甕	12.2(復元)		5.2 14.4	明灰黄色	細砂粒を若干含む	口縁から底部にかけ$\frac{1}{2}$強欠く	Fig.55	II
194	S 7918	貯 79	甕	47.0(復元)		(10.0)	灰黄色（部分的－茶褐色）	砂粒少なし	口縁部のみ	Fig.55	II
195	S 8001	貯 80	深鉢							PL.26	II
196	S 8002	貯 80	蓋	23.6(復元)		10.8	内面－淡黄色、黒灰色、外面－上－淡黄色、口縁－赤褐色	小砂粒を含む	口縁部殆ど破損	Fig.56 PL.26	II
197	S 8003	貯 80	甕			6.5 (9.4)	淡黄色	小砂粒を含む	底部のみ	Fig.56	II
198	S 8004	貯 80	甕	22.0(復元)		(7.5)	黄色	大粒の砂粒を含む	口縁部を$\frac{1}{2}$残す	Fig.56	II
199	S 8005	貯 80	甕	26.9 25.9		6.6 30.6(復元)	口縁～胴部外面－小豆色近し、内面上部－暗茶褐色、内面下部－淡黄色、底部－黄茶褐色	大粒の砂粒多し	底部内面に火薬らしきもの付着、口縁から胴部にかけ$\frac{1}{4}$欠損	Fig.56 PL.26	II
200	S 8102	貯 81	壺	21.4 頸部径16.2		(8.5)	黄桃褐色	小砂粒多し	口縁から肩部にかけ$\frac{1}{2}$残存	Fig.56 PL.26	III
201	S 8201	貯 82	甕			7.7 (6.1)	黄褐色	大粒の砂粒多し	底部のみ	Fig.56	III
202	S 8202	貯 82	口縁	21.5		(7.5)	茶褐色	小砂粒を含む	口縁部片	Fig.56 PL.26	III
203	S 8203	貯 82	口縁	22.6(復元)		(8.3)	茶褐色	砂粒を含む	口縁部片	Fig.56 PL.26	III
204	S 8301	貯 83	深鉢			7.4 (8.5)	黄褐色	砂粒を少し含む	底部のみ	Fig.57 PL.26	II
205	8302	貯 83	深鉢	16.1(復元)		(8.0)	内面－明黄色 外面－黄黒色	砂粒多し	口縁～胴部片	Fig.57 PL.26	I
206	S 8303	貯 83	壺	19.5		(10.9)	淡黄色（内面は灰色がかる）	砂粒多し	口縁～肩部片	Fig.57 PL.26	II

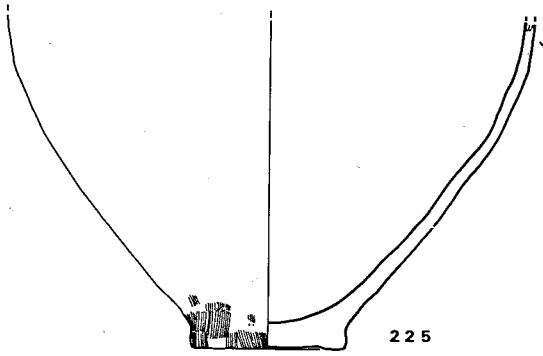
Tab. 15　80～83号各貯蔵穴出土土器一覧表

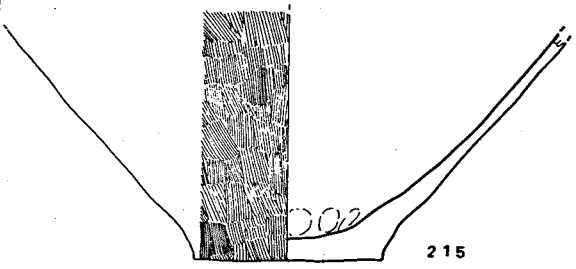












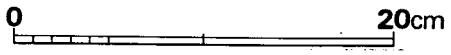


Fig. 58 85号貯蔵穴出土土器実測図①（縮尺1/4）

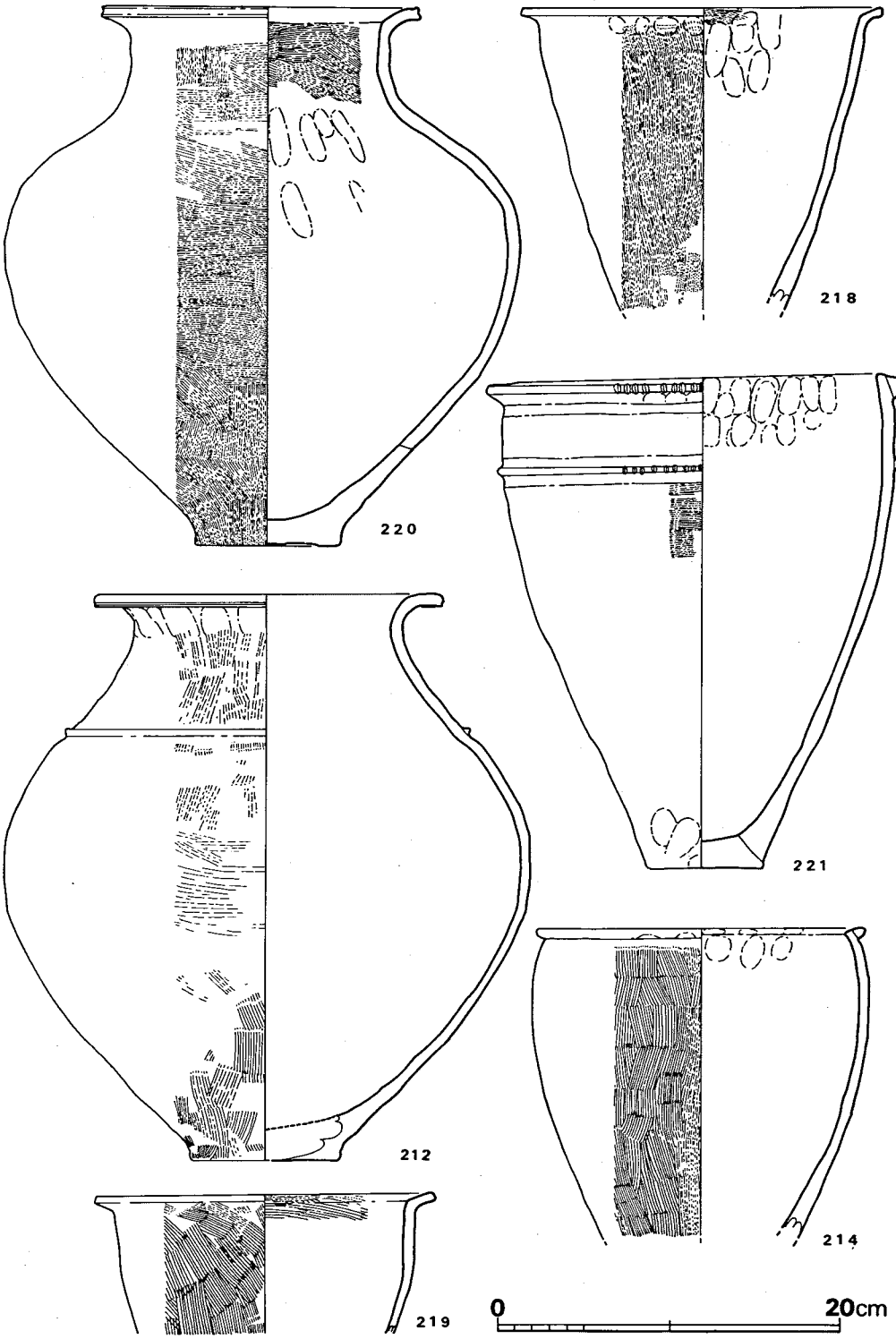


Fig. 59 85号貯蔵穴出土土器実測図②（縮尺1/4）

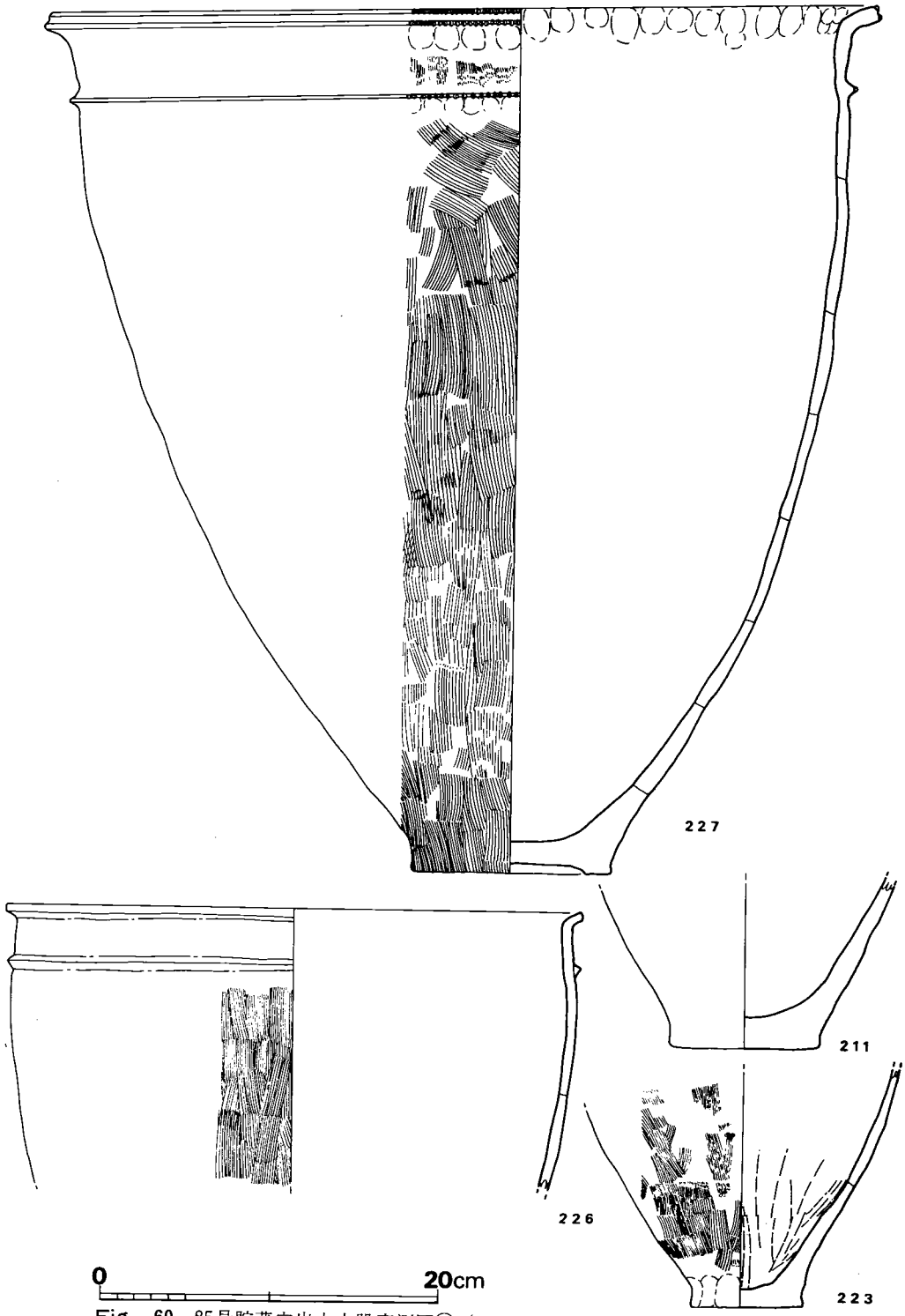
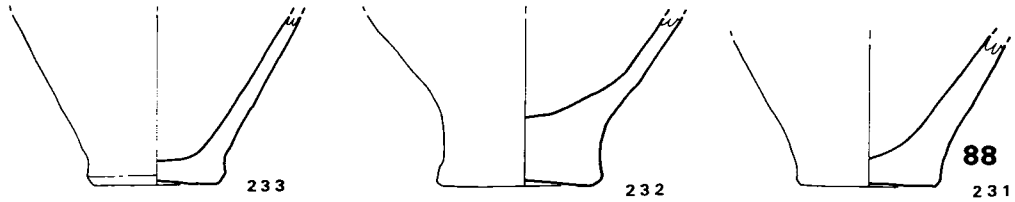


Fig. 60 85号貯蔵穴出土土器実測図③（縮尺１/４）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
207	S 8304	貯 83	甕	28.0(復元)	(20.0)	内面－黄色 (部分的に灰色) 外面－上半－灰黄色 下半－黄赤褐色	小砂粒を含む	底部欠損 口縁部½欠損	Fig.57 PL.26	II
208	S 8305	貯 83	蓋	26.0	5.9 8.6	明黄褐色	砂粒多し	口縁部½弱欠く	Fig.57 PL.26	II
209	S 8501	貯 85	壺	14.9 28.7	8.6 30.0	黄褐色	小砂粒を含む		Fig.58 PL.27	II
210	S 8502	貯 85	壺	17.4 24.6	7.7 30.4	暗黄褐色 胴部に黒変有り	砂粒を含む		Fig.58 PL.27	II
211	S 8503	貯 85	甕		8.9 (10.0)	内面－黄褐色 外面－橙褐色	砂粒非常に多し	底部のみ	Fig.60 PL.29	II
212	S 8504	貯 85	壺	20.0(復元) 8.7(復元) 30.5(復元)	32.9(復元)	黄褐色胴部－赤褐色 底部付近－灰黄色	砂粒を少し含む	口縁から底部にかけ⅓強破損	Fig.59 PL.28	I
213	S 8505	貯 85	壺					肩がはり長胴		II
214	S 8506	貯 85	甕	19.0(復元) 19.5		内面－橙褐色 (一部黒ずむ) 外面－小豆色 (一部黒ずむ)	大粒の砂粒を含む	胴部付近に煤付着 底部欠損	Fig.59 PL.29	II

Tab. 16　83・85号各貯蔵穴出土土器一覧表



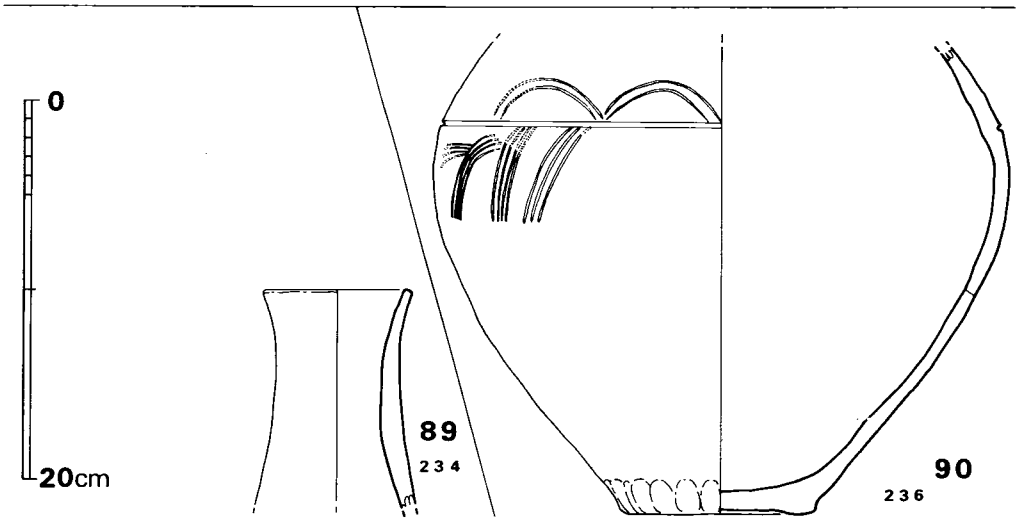


Fig. 61　88・89・90号各貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図図版	時期
215	S 8507	貯 85	壺		9.9 (13.0)	明茶褐色 (一部黒ずむ)	砂粒多し	底部下方に煤付着 底部のみ	Fig.58 PL.27	I
216	S 8508	貯 85	甕					口縁から胴部にかけて残存		II
217	S 8509	貯 85	壺	17.1 30.7(復元)	9.2 304	茶褐色	砂粒多し	口縁から胴部にかけ約$\frac{1}{2}$欠損	Fig.58 PL.27	I
218	S 8500	貯 85	甕	20.6	(17.6)	淡黄褐色 外面－やや黒ずむ	砂粒を含む	口縁～胴部にかけ$\frac{3}{4}$残存	Fig.59 PL.29	I
219	S 8511	貯 85	甕	19.8(復元)	(12.2)	外面－明橙褐色・黒黄色 内面－淡橙褐色	砂粒少なし	口縁～胴部にかけ約$\frac{1}{2}$残る	Fig.59 PL.29	I
220	S 8512	貯 85	壺	18.5 30.0	8.5 31.4	淡黄褐色胴部から底部にかけて黒変有り	砂粒多し	口縁部、胴部を一部欠損	Fig.59 PL.28	II
221	S 8513	貯 85	甕	24.6	6.8 28.6	灰黄色 全体に黒ずむ	小砂粒を含む			I
222	S 8514	貯 85	壺	17.5 30.0	9.1 30.4	黄褐色 胴部～底部にかけ一部黒色	大粒の砂粒を含む		Fig.58 PL.27	I
223	S 8515	貯 85	甕		6.6 (14.0)	灰茶褐色	砂粒を含む	底部のみ	Fig.60 PL.29	II
224	S 8516	貯 85	甕					口縁～胴部にかけ$\frac{2}{3}$残存		I
225	S 8517	貯 85	壺		8.1 (17.2)	明黄褐色	砂粒を含む	胴部～底部片	Fig.58 PL.27	II
226	S 8520	貯 85	甕	33.8(復元)	(16.5)	黄褐色	小砂粒を含む	口縁～胴部にかけ$\frac{1}{2}$残存	Fig.60 PL.29	I
227	S 8521	貯 85	大型甕	49.3	11.8 51.7	黄褐色（灰色がかる部分あり）	砂粒多し		Fig.60	I
228	S 8601	貯 86	小形壺					完形	PL.30	II
229	S 8602	貯 86	壺					口縁～胴部にかけて$\frac{3}{4}$を残す	PL.30	II
230	S 8604	貯 86								II
231	S 8801	貯 88	甕		7.5 (7.6)	淡灰黄色	金雲母小量含む 砂粒を含む	底部の約$\frac{3}{4}$を残す	Fig.61	II
232	S 8802	貯 88	甕		8.6 (8.8)	明黄赤褐色 (ややピンクがかる)	砂粒多し	底部のみ	Fig.61	II
233	S 8803	貯 88	甕		7.2 (9.0)	黄色	大粒の砂粒少し含む	底部のみ	Fig.61	II
234	S 8901	貯 89	器台		7.7 (11.5)	淡茶褐色	砂粒多し		Fig.61	II

Tab. 17　85～89号各貯蔵穴出土土器一覧表

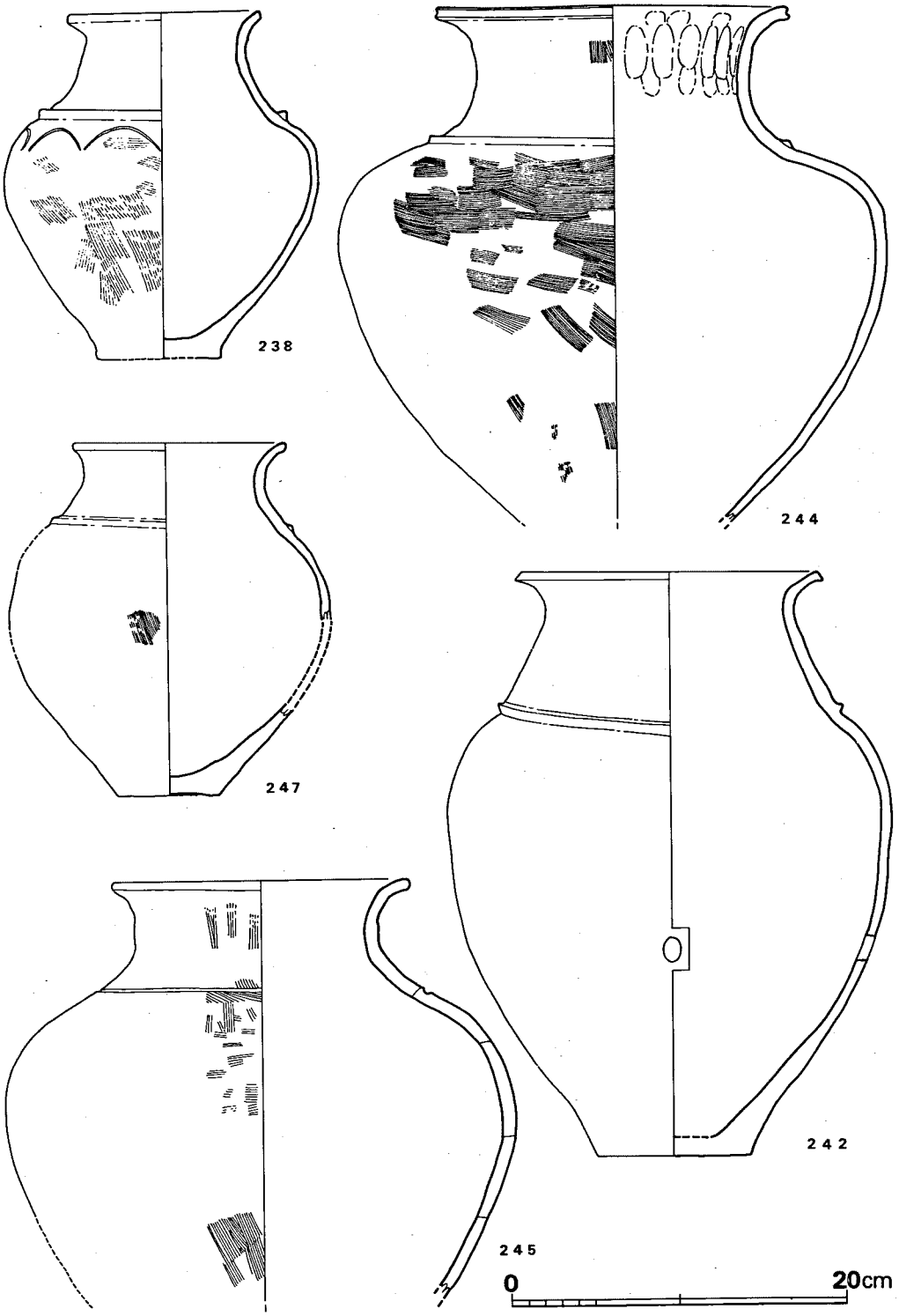


Fig. 62 91号貯蔵穴出土土器実測図①（縮尺１/４）

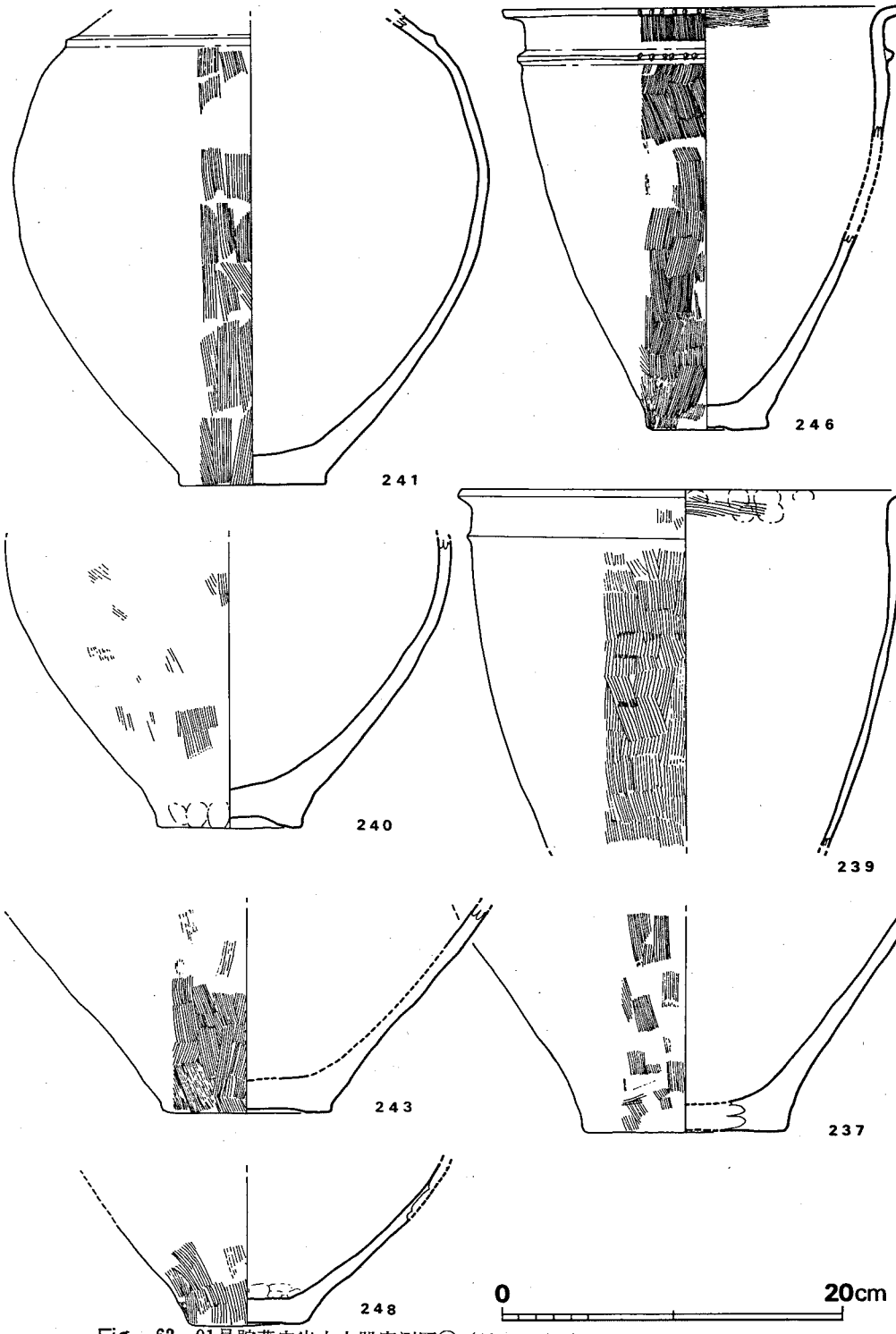


Fig. 63 91号貯蔵穴出土土器実測図②（縮尺1/4）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 胴径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図図版	時期
235	S 8902	貯 89	器台						PL.30	II
236	S 9001	貯 90	壺	30.0(復元)	10.1 (24.5)	黄茶褐色	砂粒多し	胴部上半と口縁部を欠損	Fig.61 PL.30	I
237	S 9101	貯 91	甕		12.0(復元) (13.3)	黄色	大粒砂粒多し	底部約$\frac{1}{3}$残	Fig.63	II
238	S 9102	貯 91	壺	11.3 18.5	7.3(復元) 20.6	黄橙褐色 部分的に黒ずむ	砂粒を含む	口縁部を殆ど破損	Fig.62 PL.30	II
239	S 9103	貯 91	壺	26.4	(21.0)	内面－茶褐色 外面－灰黄褐色	砂粒を含む	口縁から胴部にかけ$\frac{1}{3}$破損	Fig.63 PL.31	I
240	S 9104	貯 91	壺		8.5 (17.0)	淡黄褐色	砂粒を含む	胴部～底部片	Fig.63 PL.31	II
241	S 9105	貯 91	壺	28.7	8.5 (27.5)	明黄褐色から灰褐色	大きい砂粒を含む (2㎜～3㎜)	口縁部を欠く	Fig.63 PL.31	II
242	S 9106	貯 91	壺	17.5 26.4	9.2 34.7	黄褐色	小砂粒多し		Fig.62 PL.31	II
243	S 9107	貯 91	甕		9.9 (12.4)	明黄褐色	砂粒多し	底部のみ	Fig.63 PL.31	II
244	S 9108	貯 91	壺	20.8 32.4	(30.7)	茶黄褐色 (全体的にうすく黒ずむ)	小砂粒を含む	胴部から底部にかけ$\frac{1}{3}$弱破損	Fig.62 PL.30	II
245	S 9109	貯 91	壺	17.4 30.0	(25.0)	淡黄褐色 胴部外面は黒色	砂粒を少し含む	胴部下半～底部にかけ破損	Fig.62 PL.31	II
246	S 9110	貯 91	甕	23.4	7.1 24.7	淡赤褐色 口縁部は黒色	砂粒を含む	口縁～胴部にかけ$\frac{1}{3}$弱破損	Fig.63 PL.31	I
247	S 9111	貯 91	壺	12.5(復元) 19.0	6.5 21.0	明黄色 (胴部～底部にかけ黒灰色)	砂粒を含む	口縁$\frac{2}{3}$、胴部$\frac{1}{3}$破損	Fig.62 PL.30	II
248	S 9114	貯 91	壺		7.2 (5.2)	黄色	大粒砂粒を少し含む	底部のみ	Fig.63	II
249	S 9301	貯 93	甕	28.8	(17.5)	黄褐色 胴部付近は黄黒色	金雲母を少し含む 小砂粒を少し含む	口縁～胴部にかけ$\frac{2}{3}$欠損	Fig.64 PL.32	II
250	S 9302	貯 93	蓋					完形		II
251	S 9401	貯 94	甕					口縁～胴部にかけ残存		II
252	S 9402	貯 94	甕					底部のみ		II
253	S 9502	貯 95	甕	23.2	(11.0)	黄色	大粒の砂粒を含む	胴下半～底部欠損	Fig.64	I
254	S 9503	貯 95	壺		10.6 (5.5)	黄褐色 (外面約$\frac{1}{3}$は桃赤褐色と黒色)	大粒の砂粒を含む	底部のみ	Fig.64	II
255	S 9504	貯 95	壺		13.3 (5.5)	黄茶褐色	砂粒を多く含む	底部のみ	Fig.64	I

Tab. 18　90～95号各貯蔵穴出土土器一覧表

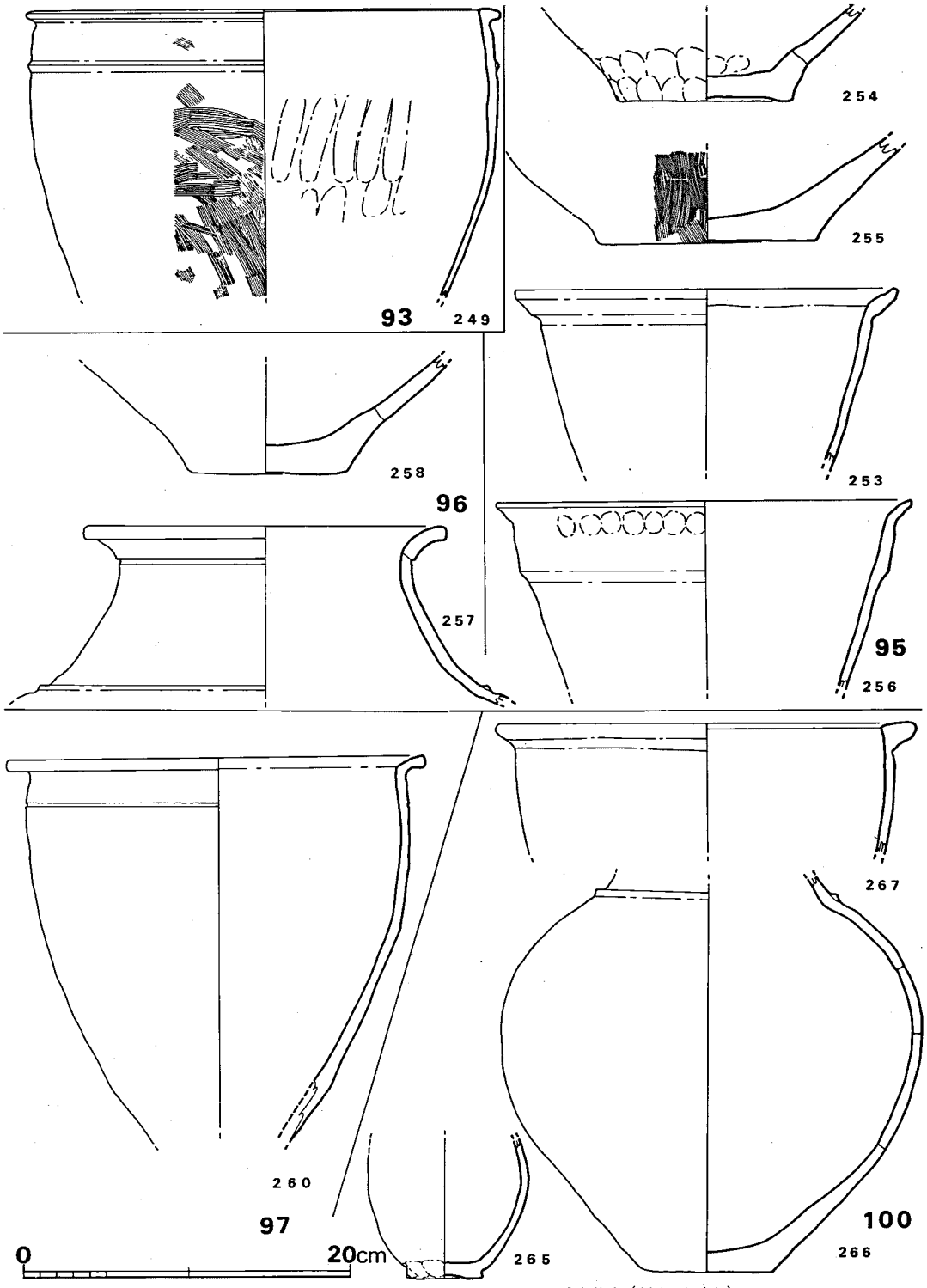


Fig. 64 93・95・96・97・100号各貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

No.	登録No.	出土地点	器種	計測値 口径	計測値 器高	特徴 色調	特徴 胎土	備考	挿図 図版	時期
256	S 9506	貯 95	甕	25.2(復元)	(11.5)	内面－黒茶色（一部黄褐色）外面－茶褐色	大粒の砂粒を多く含む	口縁部～胴部上半	Fig.64 PL.32	I
257	S 9601	貯 96	壺	22.0	(10.5)	茶褐色	砂粒多し 金雲母を含む	口縁部片	Fig.64 PL.32	I
258	S 9602	貯 96	壺		9.8 (6.5)	灰黄色	大粒の砂粒を多く含む	底部のみ	Fig.64	I
259	S 9603	貯 96								I
260	S 9701	貯 97	甕	25.4	(23.5)	茶黄褐色 胴部付近に黒ずみ有	砂粒を含む	底部を欠く	Fig.64 PL.32	I
261	S 9902	貯 99							PL.33	I
262	S 9903	貯 99								II
263	S 9904	貯 99								II
264	S 9905	貯 99							PL.33	
265	S 10002	貯100	手づくね深鉢	9.7	4.6 (8.5)	茶黄褐色 胴部付近	細砂粒を含む	口縁部破損	Fig.64	II
266	S 10003	貯100	壺	25.5	8.1 (24.1)	黄茶褐色 胴部外面一一部黒色	砂粒多し	口縁部と胴部を約$\frac{1}{3}$程度破損	Fig.64 PL.33	II
267	S 10004	貯100	甕	25.5	(7.9)	明黄褐色 口縁～胴部にかけ一部黒色	砂粒多し	口縁部	Fig.64 PL.33	III
268	S 10102	貯101	甕	27.6	8.1 33.2	淡黄褐色	小砂粒を含む		Fig.65 PL.33	II
269	S 10201	貯102			2.8(復元) (7.0)	灰黄色	細砂粒を少し含む	底部～胴部にかけ約$\frac{1}{2}$残す	Fig.65	III
270	S 10301	貯103	無文土器甕	20.8	(13.9)	内面－黄褐色 外面－淡黄褐色	砂粒及び少量の黒雲母を含む	内外面とも赤褐色の丹(化粧土？)を施す、現在ではその痕跡のみ	Fig.65	III
271	S 10302	貯103	甕	31.0	(15.0)	淡茶黄褐色	砂粒多し	口縁～胴部にかけ約$\frac{1}{4}$破損	Fig.65	III
272	S 10401	貯104								
273	S 10703	貯107	甕	18.1	6.2 16.1	明茶褐色（部分的に灰色）	砂粒多し		Fig.65	I
274	S 10801	貯108	甕		5.1 (12.6)	暗灰黄色	砂粒多し		Fig.65	II
275	S 10901	貯109	甕	33.2	(14.5)	黄茶褐色（部分的に暗茶黒色）	大粒の砂粒を含む	口縁～胴部上半	Fig.65	I
276	S 11102	貯111	壺		13.0 (7.3)	黄色	小砂粒を含む	底部のみ	Fig.65	I
277	S 12001	貯120	甕						PL.33	II
278	S 12101	貯121								

Tab. 19　95～121号各貯蔵穴出土土器一覧表

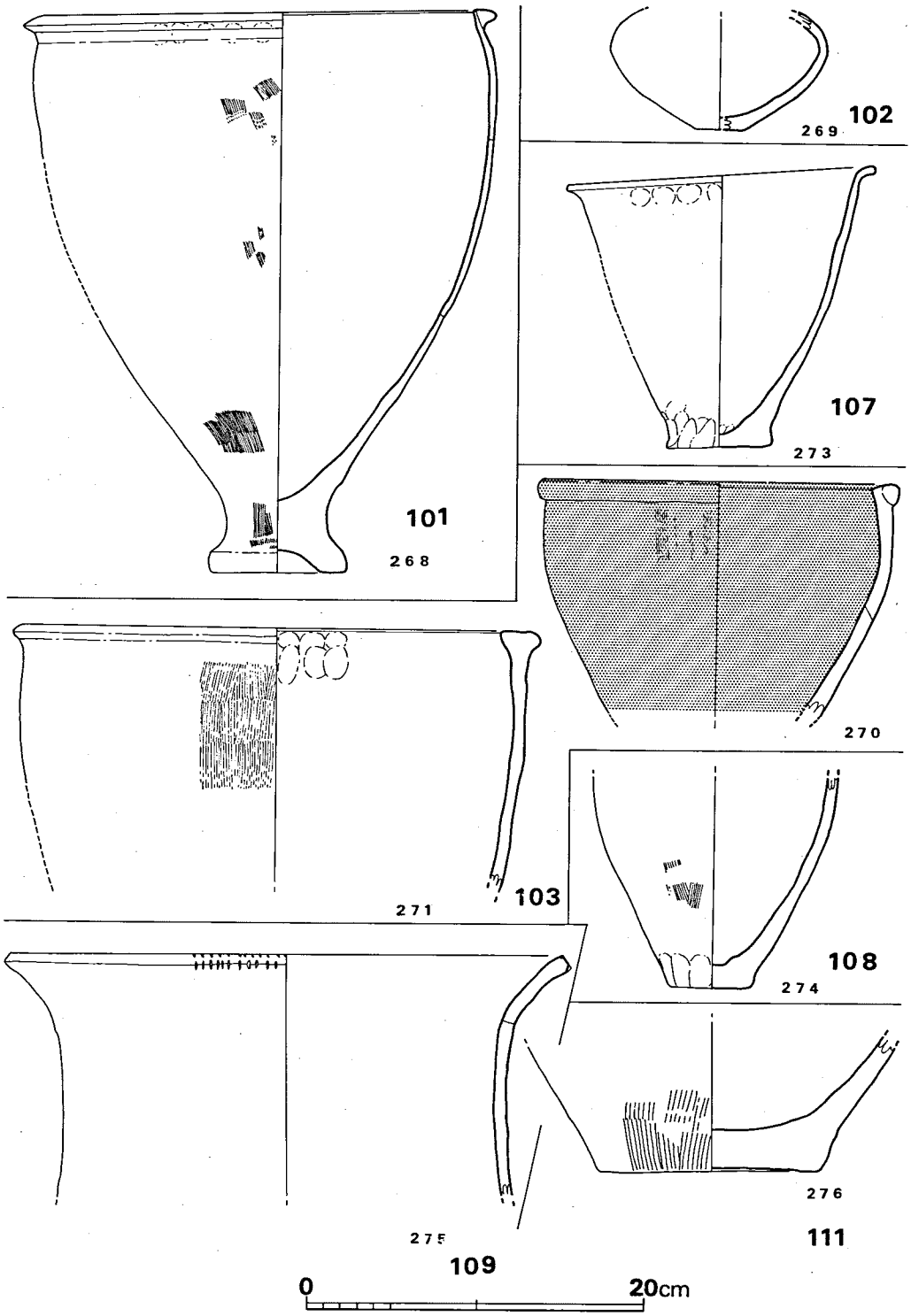


Fig. 65 101・102・103・107・108・109・111号各貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

B 石　器

各種石器が出土した。打製石器は石鏃、石鎗、石錐、掻器、石核がある。磨製石器は石鏃、石剣、石庖丁、石鎌、石鑿、石斧、砥石、磨石、紡錘車、円盤が含まれる。

(1) 打製石鏃 (Fig. 66. PL. 35)

26点出土した。全て無茎である。形態によってA～Hの8種に区分される。このうち、A～Eの5種は重量が1 g弱から2 g以下であり、F～Hの3種は2 gから5 gある。石材は黒耀石とサヌカイトである。A（1～2）：最小の類で、浅い凹基である。サヌカイト製である。B（3～8）：浅い凹基で、平面形は正三角形に近い。6例中4例までが黒耀石製である。C（9～16）：わたぐりの深い凹基で、やや縦長である。9、10のみ黒耀石製で、他はサヌカイト製である。D（17・18）：精美な長三角形を呈し、わたぐりの深い凹基である。いづれも黒

No.	出土地点	類別	石材	重量	備考	時期	挿図番号
1	南端大溝4層	A	サヌカイト	0.8	完形		Fig.66－1
2	貯 63	A	〃	1	〃 先端磨耗	III	Fig.66－2
3	住 5	B	〃	1	〃	III	Fig.66－3
4	表土	B	〃	1.7	〃		Fig.66－4
5	住 22	B	黒耀石	(1.5)	一部欠	II	Fig.66－5
6	貯 6	B	〃	1	完形	II	Fig.66－6
7	住 ?	B	〃	1	〃		Fig.66－7
8	住 17	B	〃	(1)	両翼端欠	I	Fig.66－8
9	住 ?	C	〃	(0.9)	片翼欠		Fig.66－9
10	住 17	C	〃	1	完形	I	Fig.66－10
11	貯 4	C	サヌカイト	(1.5)	片翼端欠	II	Fig.66－11
12	住 21	C	〃	(1.8)	片翼欠	III	Fig.66－12
13	表土	C	〃	(1.5)	先端欠		Fig.66－13
14	住 5	C	〃	(1.9)	〃	III	Fig.66－14
15	貯 22	C	〃	(2.5)	未製品		Fig.66－15
16	貯 10	C	〃	2	完形	II	Fig.66－16
17	住 14	D	黒耀石	(0.9)	上部欠、先端欠	II	Fig.66－17
18	住 6	D	〃	1.5	完形	III	Fig.66－18
19	貯 9	E	サヌカイト	1	〃	II	Fig.66－19
20	表土	E	〃	(1)	先端と片翼欠		Fig.66－20
21	住 17	F	〃	(3.5)	翼端欠	I	Fig.66－21
22	貯 62	F	〃	5	未製品	I	Fig.66－22
23	住 4	G	〃	(3)	先端欠、磨耗	III	Fig.66－23
24	貯 16	G	〃	5	完形	II	Fig.66－24
25	貯 65	H	〃	2	〃	I	Fig.66－25
26	表土	H	〃	3	〃	I	Fig.66－26

Tab. 20　打製石鏃一覧表

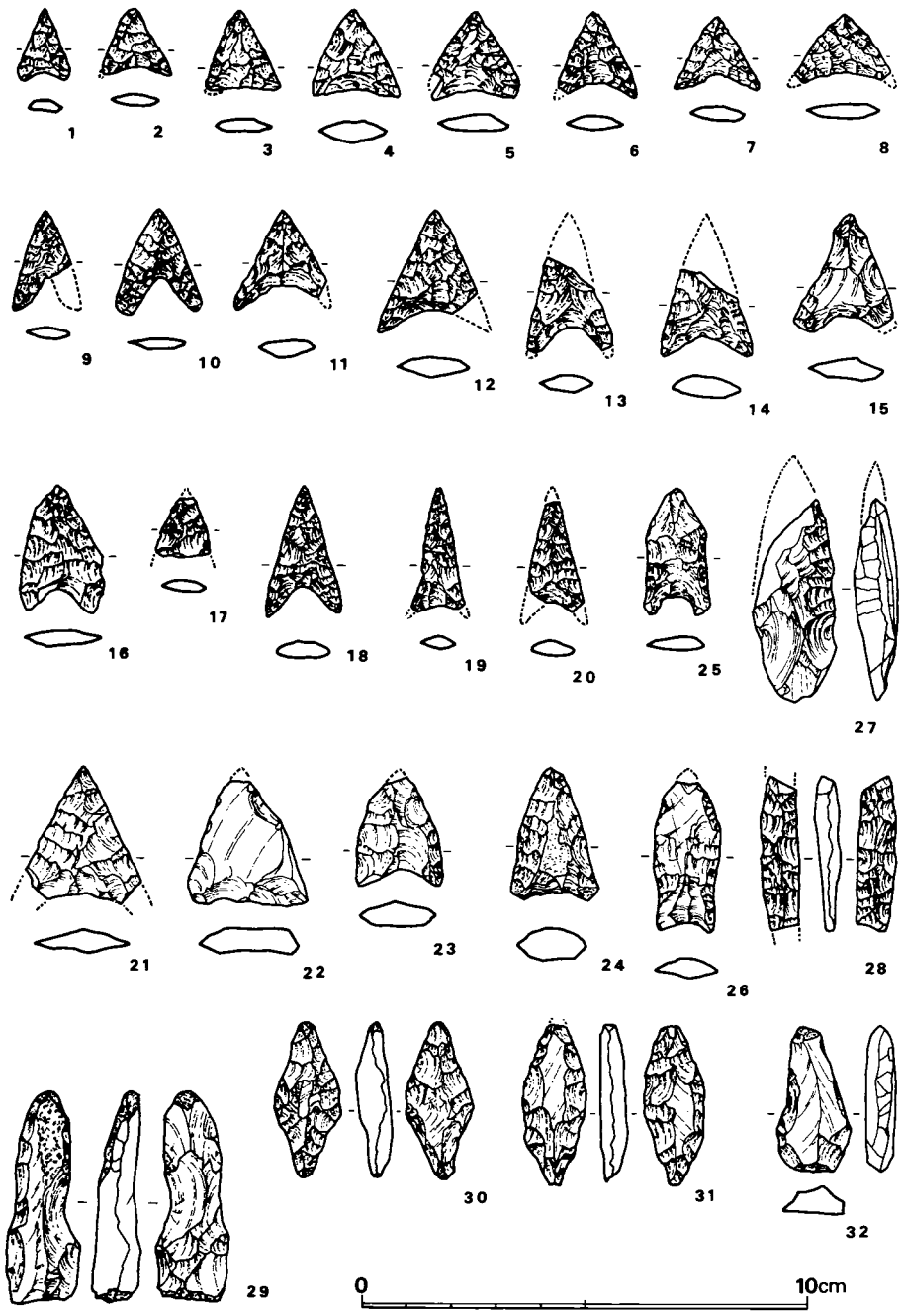


Fig. 66 石器実測図（石鏃・石鎗・石錐）（縮尺２/３）

耀石製。E（19・20）：わたぐりの深い凹基で狭長である。サヌカイト製である。F（21・22）：極く大形の類である。わたぐりは深くなると思われる。22はその未製品か。サヌカイト製。G（23・24）：浅い凹基で、先端、身部とも丸味を帯びる。サヌカイト製。H（25・26）：凹基で、平面形が五角形に近い。25は先端が磨耗している。サヌカイト製。

出土例はTab. 20のごとくⅣ期のものは含まれていない。Ⅰ～Ⅲの各期ごとの類別は例が少なく不確定要素が多いため困難である。またⅠ～Ⅲ期の中で、種類が大きく変化したとも思われない。唯、F及びH類についてはⅠ期のみに伴う可能性がある。

（2） 石 鎗（Fig. 66 PL. 35）

1点のみ表土から出土した。先端部を欠損する。身下部の両側を荒い打調で抉入させ、それ以下を茎としている。サヌカイト製。

（3） 石錐（Fig. 66 PL. 35）

5例出土している。29～32はいづれも刃部が使用によって磨耗している。刃部の形状により3種に区分される。A（29・32）：基部をもち、一端が刃部として使用される。B（30、31）：両端が刃部として使用される。平面形は菱形。C（28）：刃部が不明である。片側は直ぐであるが、片側は弧状に彎曲している。

以上 Ⅱ～Ⅲ期に属すると思われる。但し、Ⅰ期に使用されなかったとは考えられない。

No.	出土地点	類別	石 材	重 量	備 考	時期	挿図番号
1	住 6 床	A	サヌカイト		完形 先端磨耗	Ⅲ	Fig 66－29
2	貯 113	B	〃		〃	Ⅲ	Fig 66－30
3	不 明	B	〃		先端欠		Fig 66－31
4	貯43～48	C	〃		両端欠	Ⅱ	Fig 66－28
5	貯 10	A	〃		完 形 先端磨耗	Ⅱ	Fig 66－32

Tab. 21 石錐一覧表

（4） 掻器（Fig. 67・68, PL. 35）

22例出土した。いづれもサヌカイト製である。このうち切り合い状態にある17・18号住居跡から約半数の9例が出土している。刃部の作りにより3種に区分される。A（Fig. 67－1～6、Fig. 68－2）：横長剥片を用いており、図上の下縁を片面あるいは両面より加工して刃部としている。（Fig. 68－1・3・4）：主に縦長剥片を用い、その両側縁を片面あるいは両面加工して刃部としている。C（Fig. 68－5～8）：全面に加工を施し、上部中央にツマミを作出している。いわゆる石匙である。

以上、いづれもⅠ～Ⅱ期の所産である。Cの石匙はⅠ期のみに伴う可能性がある。

（5） 石核（Fig. 68－9・10, PL. 36）

4例出土している。他にも原石や打痕のある半使用品が数点検出されている。原材料は小円礫である。3類に区分される。A（9）：未調整打面をもち、2面から剥離され、反対面に自

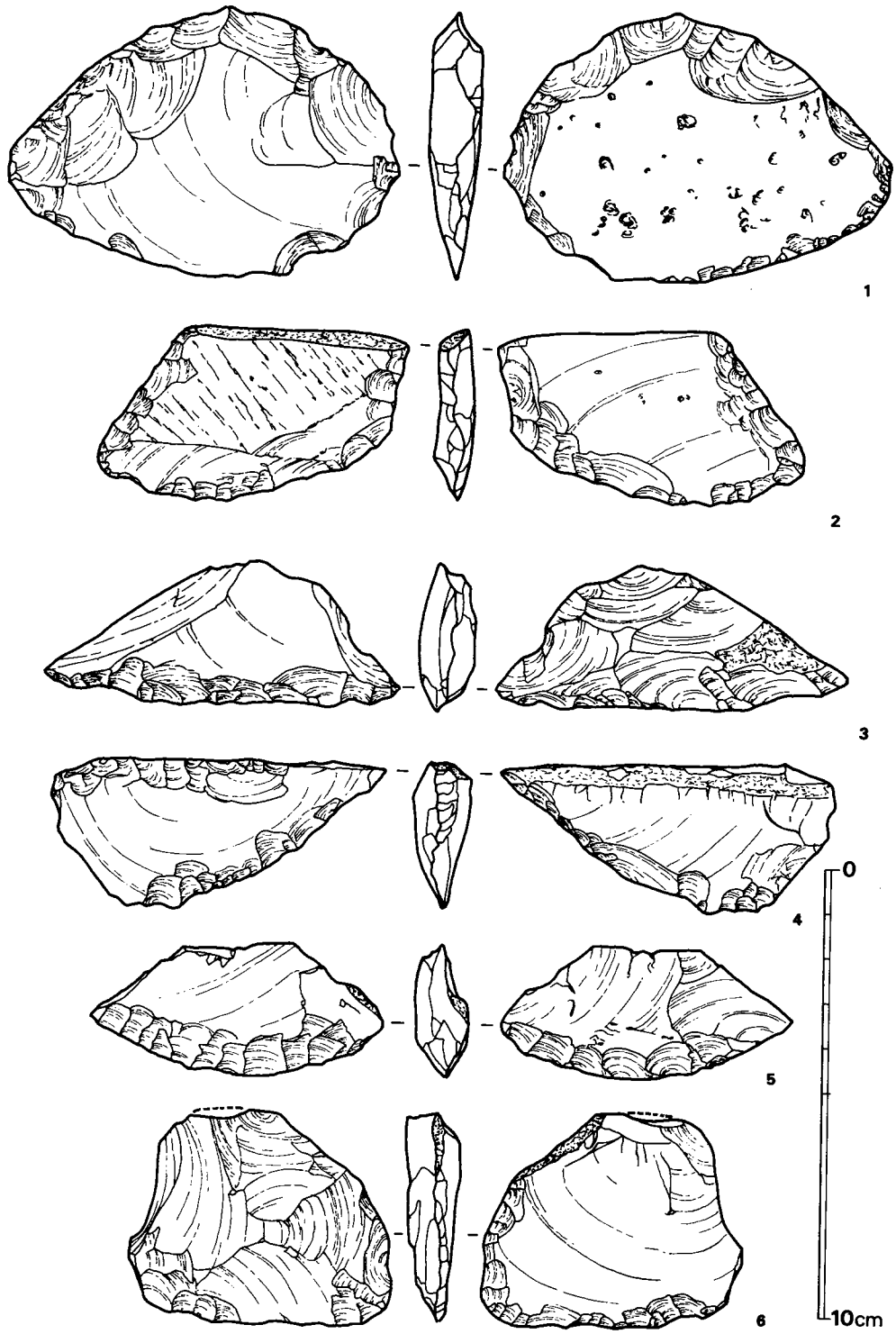


Fig. 67 石器実測図（掻器①）（縮尺２/３）

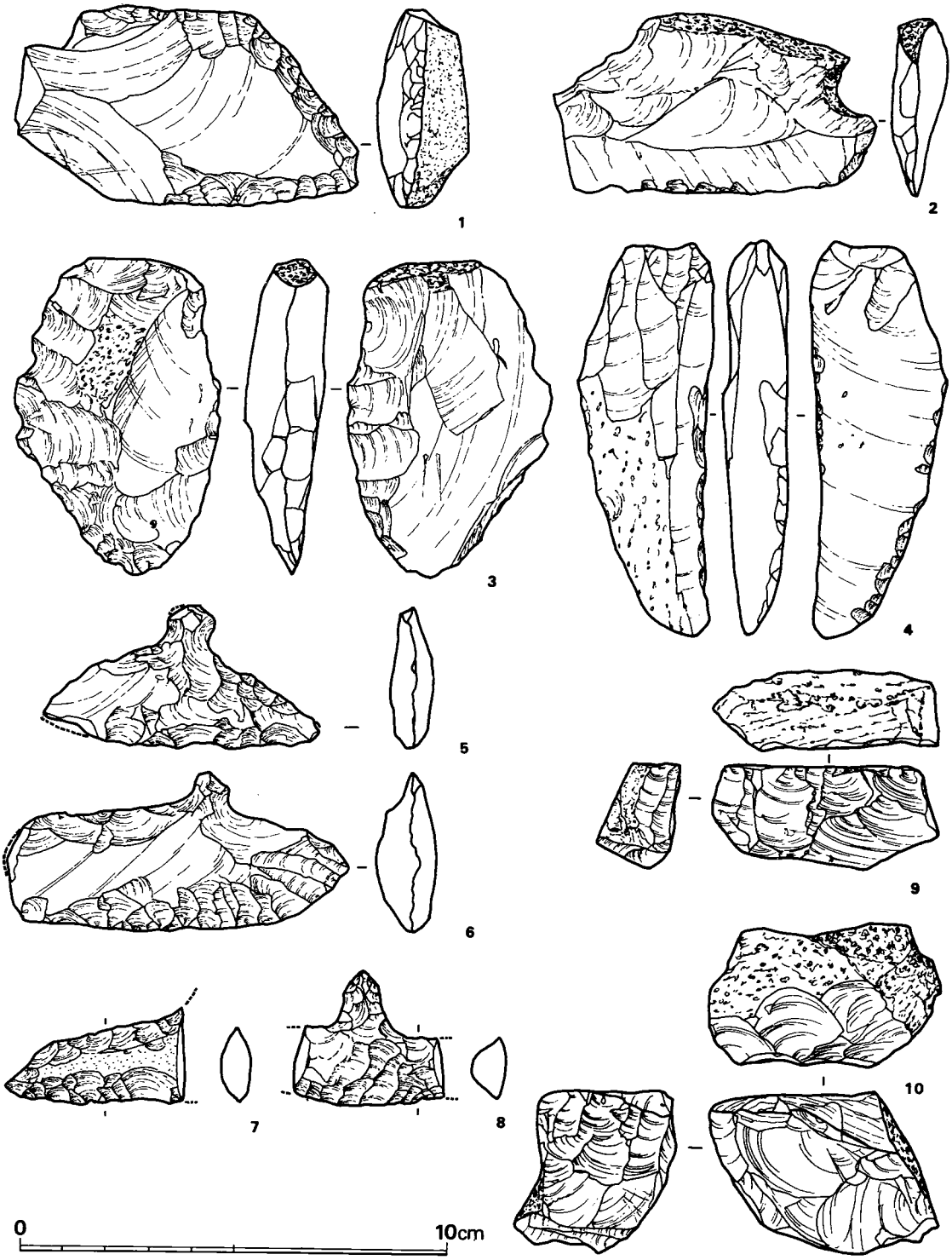


Fig. 68 石器実測図（掻器・石核）（縮尺２/３）

No.	出土地点	類別	石　材	備　　考	時期	挿図番号
1	住　17	A	サヌカイト	側片欠　下縁のみ片面加工　横剝ぎ剝片利用	I	Fig 68－2
2	〃	A	〃	下縁のみ片面加工　頭部両面荒加工　〃	I	Fig 67－1
3	表　土	A	〃	頂部を除く周縁両面加工　〃		Fig 67－2
4	〃	A	〃	下端のみ両面加工　〃		
5	住　18	A	〃	片縁一部片面加工　〃	I	
6	住　22	B	〃	両側縁片面加工　基部両面加工	II	Fig 68－1
7	貯　107	B	〃	片面全面荒加工　一部両面加工		Fig 68－3
8	住　17	A	〃	下縁両面加工　横剝ぎ剝片利用	I	Fig 67－4
9	〃	A	〃	片面全面荒加工　刃部全面加工　半欠	I	Fig 67－3
10	貯　65	A	〃	下縁片面加工　横剝ぎ剝片利用	II	Fig 67－6
11	住　26	A	〃	片側縁一部を加工　〃		
12	表　土	A	〃	下縁両面加工　〃		Fig 67－5
13	〃	A	〃	下縁片面加工　〃		
14	〃	B	〃	2辺縁両面加工　細片		
15	住　17	A	〃	下縁の片面荒加工　片面細加工　〃	I	
16	表　土	B	〃	周縁荒加工		
17	住　18	A	〃	下縁両面加工	I	
18	住　17	B	〃	プレ縄文の blade 状	I	Fig 68－4
19	表　土	C	〃	石サジ		Fig 68－5
20	不　明	C	〃	〃		Fig 68－6
21	住　17	C	〃	〃	I	Fig 68－8
22	表　土	C	〃	〃		Fig 68－7

Tab. 22　　石　掻　一　覧　表

No.	出土地点	類別	石　材	備　　考	時期	挿図番号
1	住　？	A	黒　耀　石	未調整打面		Fig 68－9
2	住 3 床	B	サヌカイト	調整打面	II	Fig 68－10
3	貯　93	C	黒　耀　石	原　石	I	
4	貯　53	C	〃	〃	I	

Tab. 23　　石　核　一　覧　表

然面を残している。黒耀石製である。B（10）：調整打面をもち、2面から剝離され、反対面には自然面を残している。サヌカイト製である。原石である。

I～II期の出土例である。

（6）　勾玉（Fig. 69－2，PL. 36）

5号住居跡の床面から出土した。蛇紋岩製である。長さ1.3*cm*、最大厚0.5*cm*、孔は両穿りであるが、片側からの穿り込みが深い。

III期の所産である。

（7）　磨製石鏃（Fig. 69，PL. 36）

3点出土した。いづれも粘板岩製である。形状により2区分される。A（5・6）：断面菱

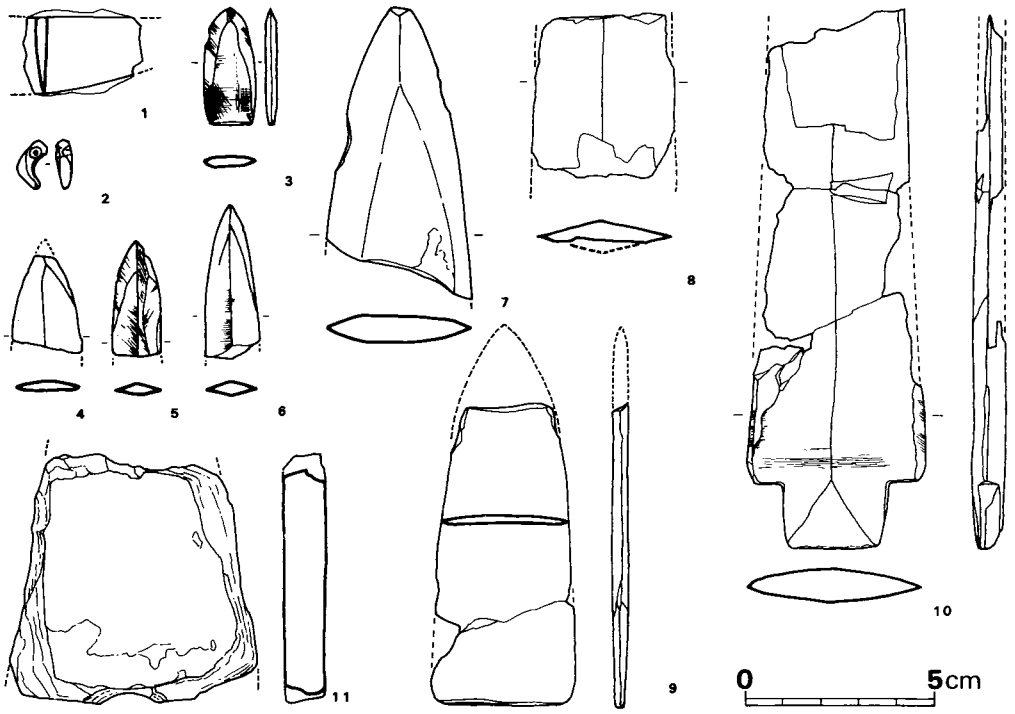


Fig. 69 鉄器・石製品(勾玉)・石器(磨製石鏃・石剣) 実測図(縮尺1/2)

No.	出土地点	類別	石材	重量	備考	時期	挿図番号
1	住 28	A_1	粘板岩	(1.5)	先端部のみ	Ⅳ	Fig 69－5
2	住 17	A_2	〃	(3)	〃	Ⅰ	Fig 69－6
3	貯 4	B	〃	2	完形	Ⅱ	Fig 69－3

Tab. 24 磨製石鏃一覧表

No.	出土地点	類別	石材	備考	時期	挿図番号
1		A	砂質粘板岩	有茎、先端部欠損、断面菱形		Fig 69－10
2	不明	A	〃	刃部中間のみ、断面菱形		Fig 69－8
3	貯 107	B	粘板岩	無茎平基、先端部欠損、断面扁平	Ⅱ	Fig 69－9
4	表土	C	頁岩	先端部のみ、断面扁平な菱形		Fig 69－4
5	住 21	B	砂質粘板岩	先端部のみ、断面扁平	Ⅲ	Fig 69－7

Tab. 25 磨製石剣一覧表

形で鏑をもつ長鏃。5は先端が丸味を帯び砥ぎ出しが粗い。6は鋭い先端をもつ端整な作り。有茎であろう。B(3):断面扁平である。先端は丸味を帯び、平基である。

(8) 磨製石剣 (Fig. 69, PL. 36)

5点出土している。形状により3区分される。A(8、10):断面はシャープな菱形で鏑を

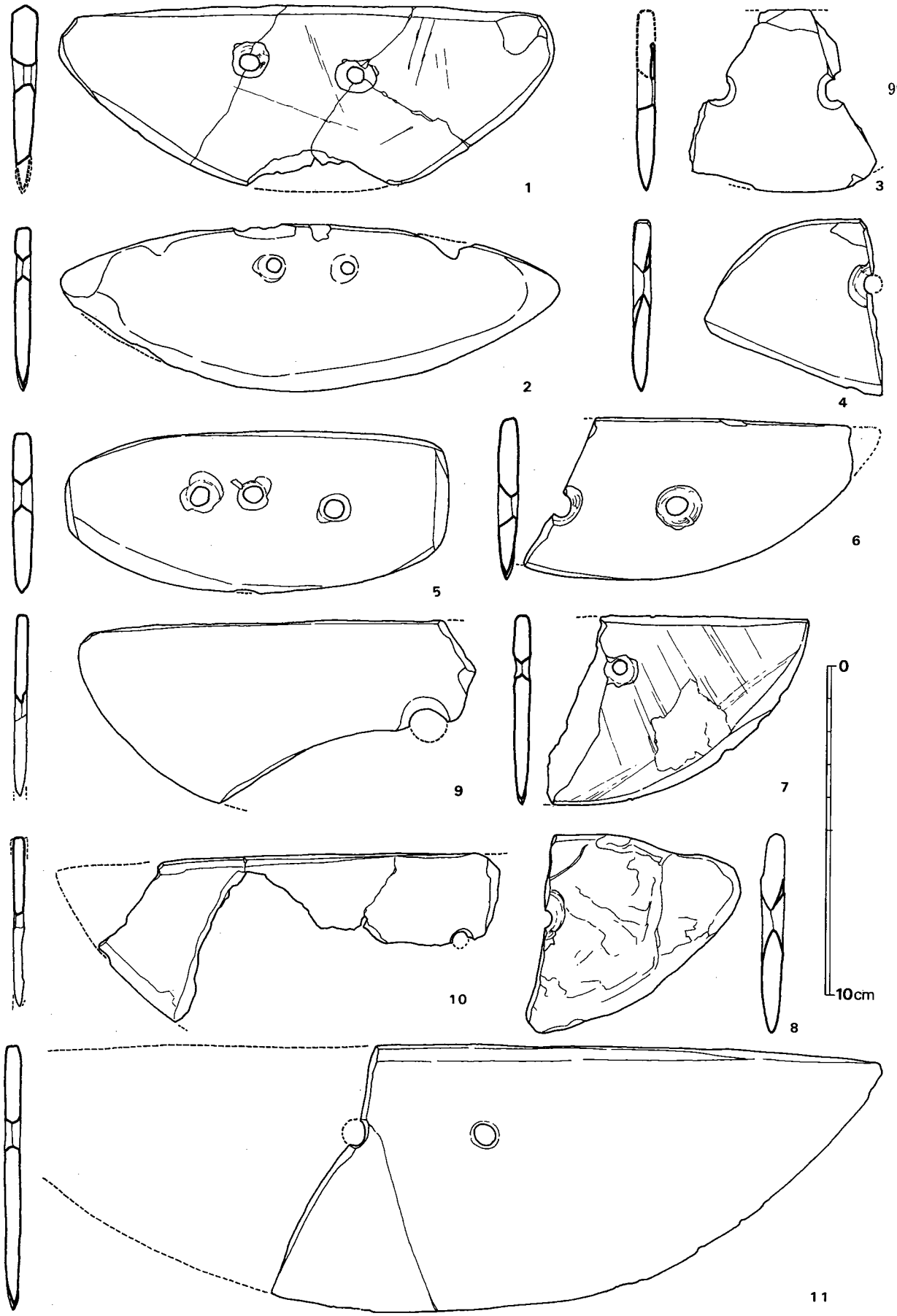


Fig. 70 石器実測図（石庖丁）(縮尺１/２)

もつ。10の茎は身部より直角に凸出させ、端部は丸味をもつ。いづれも砂質粘板岩製である。B（7・9）：断面は扁平である。7は先端部にのみ鏑をもつ。砂質粘板岩製。9は無茎平基である。基部の断面は薄くなっている。粘板岩製。C（4）：小形品で、鎗かもしれない。砂質粘板岩製。

No.	出土地点	類別	石材	備考	時期	挿図番号
1	住32床面	A	輝緑凝灰岩	刃部一部欠	Ⅳ	Fig 70－1
2	南端溝9層	A	〃	半欠		Fig 70－7
3	貯 2	A	粘板岩	〃	Ⅱ	Fig 70－6
4	貯 40	D	砂質粘板岩	〃	Ⅱ	Fig 70－11
5	貯 39	B	輝緑凝灰岩	完形	Ⅱ	Fig 70－2
6	貯 79	C	〃	完形、有3孔	Ⅱ	Fig 70－5
7	表土		安山岩	刃部片		
8	貯 70	D	頁岩	⅔を欠		Fig 70－9
9	貯93上層	D	砂質粘板岩	細片	Ⅱ	Fig 70－10
10	貯 77	A	〃	〃	Ⅱ	Fig 70－3
11	貯 107	A	片岩	〃	Ⅱ	Fig 70－8
12	住5床面		頁岩	〃 被火	Ⅲ	
13	住 24		頁岩	〃	Ⅱ	
14	貯 58		〃	〃	Ⅱ	
15	貯 38		〃	〃	Ⅱ	
16	貯 38		輝緑凝灰岩	〃	Ⅱ	
17	貯 99		粘板岩	〃		
18	貯 27		頁岩	〃		
19	表土		〃	〃		
20	貯 112		砂質粘板岩	〃		
21	住 5		頁岩	〃	Ⅲ	
22	住 31		〃	〃	Ⅱ	
23	住 29		凝灰岩	〃	Ⅱ	
24	貯43～47		〃	〃	Ⅱ	
25	住 29		片岩	〃	Ⅱ	
26	表土		凝灰岩	〃		
27	表土		〃	〃		
28	貯 55		砂質粘板岩	〃	Ⅱ	
29	貯 70		凝灰岩	〃		
30	表土		輝緑凝灰岩	〃		
31	住 3		〃	〃	Ⅱ	
32	貯 38		凝灰岩	〃	Ⅱ	
33	表土		粘板岩	〃		
34	住 24		頁岩	〃	Ⅱ	
35	住 22		粘板岩	〃	Ⅱ	
36	貯 65		砂質粘板岩	〃	Ⅱ	
37	貯 89	B	〃	⅔欠		Fig 70－4

Tab. 26　　石庖丁一覧表

（9） 石戈未製品（Fig. 69－11, PL. 36）

25号住居跡から出土した。基部に抉入部がある。上下両端とも欠損するが、戈の未製品かと考えた。雲母片岩製である。

(10) 石庖丁（Fig. 70, PL. 37）

32点出土しており、全て外彎刃である。1を除き、断面は扁平で平坦である。背緑長及び形状によって4種に区分される。石材は32点中の7点が輝緑凝灰岩製であり、多くは（砂質）粘板岩や頁岩製である。A（1・3・6～8）：直線的な背緑をもつ類である。背緑から刃部までの中に長短がみられるが、研ぎなおしによるものかも知れない。1は背緑部が部厚く、他例と趣を異にする。8は破損品で刃部が磨耗している。長さは14.5～15*cm*と一定している（紐孔心心間の平均値3 *cm* と刃端部から紐孔心までの長さを加えて破損品の推定長を出した）。B（2・4）：肩線が弧状をなし、全体にレンズ状の平面となる類である。4は背部破損後をさらに研ぎなおしている。2は全長15*cm* でA類と同様である。C（5）：両側が立ち、全体的に楕円形に近い平面をなす。全長11.6*cm* で最も小さい。D（9～11）：薄手で大形の類である。9は頁岩、他は砂質粘板岩製。推定復元長は9が24*cm*、10・11は28*cm*で等しい。実用穂摘み具とは考えられず、他の用途を考えねばなるまい。類品は北牟田遺跡の南西約1.5*km* 離れた西島遺跡で出土している。

図示した例品以外のものも含め、時期別可能なものは18点である。II期のものは15点、III期のもの2点、IV期のもの1点である。II・III期で形態変化はない。IV期に属するのは1である。

(11) 石鎌（Fig. 71－1・2, PL. 38）

2点出土した。いづれも丁寧な研ぎ上りである。A（1）：薄手で背縁の彎曲は著しい。先端に近い破片であろう。B（2）：厚手である、刃部の残存個所が極く狭く、刃部の彎曲度は不明。

No.	出土地点	類別	石　材	備　　考	時期	挿図番号
1	貯　99	A	緑色片岩	刃身中央部のみで両端欠損	II～III	Fig 71－1
2	表　土	B	頁　岩	両端欠損、刃部の残りは僅か		Fig 71－2

Tab. 27　石　鎌　一　覧　表

(12) 石鑿（Fig. 71－3・4, PL. 38）

3点出土している。いづれも粘板岩製である。断面形により2種に区分される。A（3）：

No.	出土地点	類別	材　質	備　　考	時期	挿図番号
1	住　5	A	粘板岩	刃部欠	III	Fig 71－4
2	表　土	B	〃	完　形		Fig 71－3
3	住　4	A	〃	完　形	III	

Tab. 28　石　鑿　一　覧　表

断面が方形を呈する。頂部より体刃部境が部厚くなる。全長4.15cm、巾 1.4cm、B（4）：断面三角形で、抉入石斧の断面に類似する。刃部欠損。厚さ1.15cm、巾1.1cm。

(13)　扁平片刃石斧（Fig. 71－5～7，PL. 38）

5点出土している。いづれも粘板岩製である。2種に区分される。A（7）：長さ8.3cm、巾4.4cm、最大厚1.4cm で大形である。刃部の稜は不明瞭である。厚さは頂部が薄く、体部下位で最も厚くなる。B（5・6）：長さ7.1cm、巾3.45cm、最大厚1.1cm で小形である。刃部

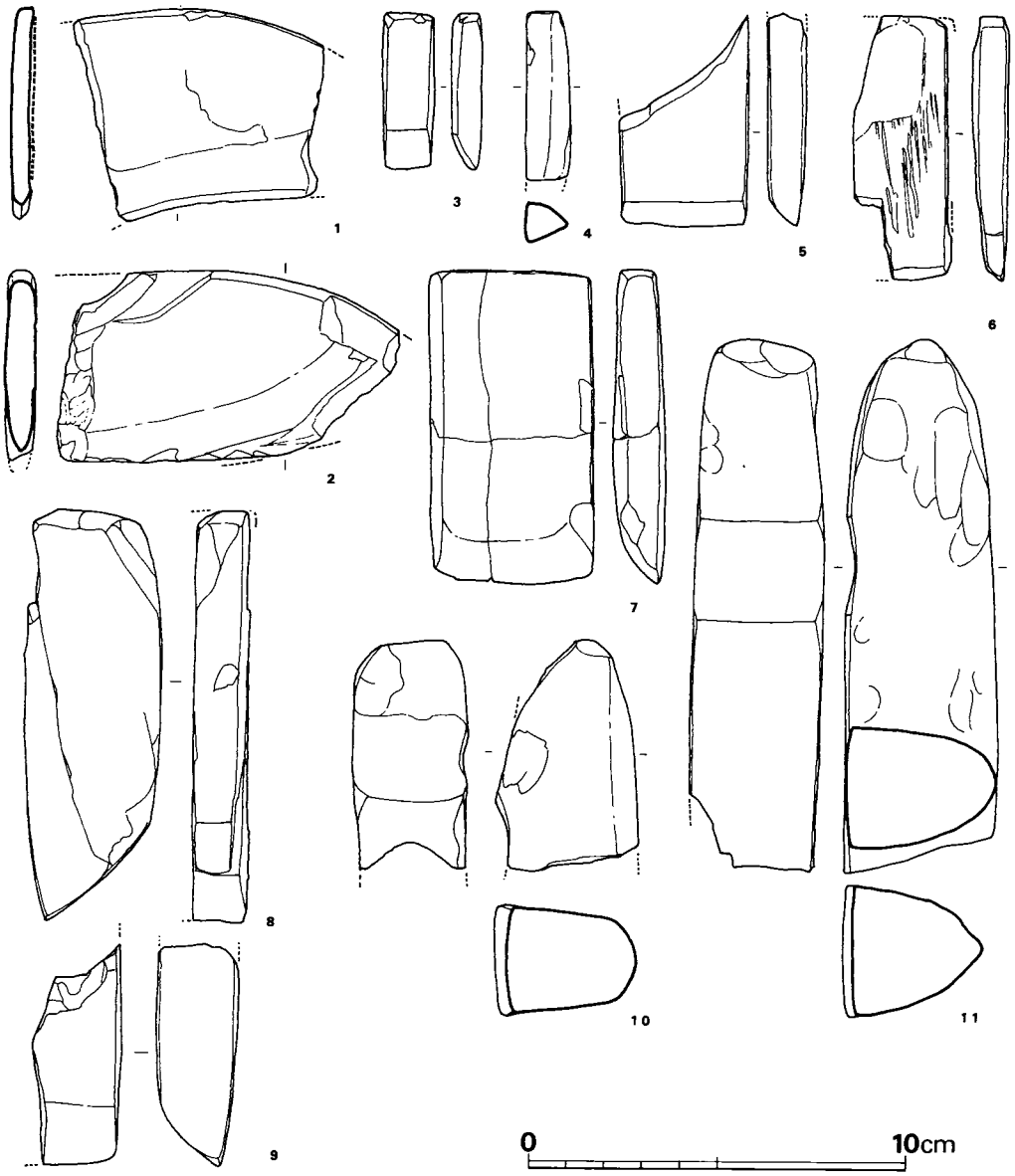


Fig.　71　石器実測図（石鎌・石鑿・石斧）（縮尺1/2）

の稜は明瞭で、表面平坦である。6は表面を砥石として利用されたのか、巾広い削痕が縦にみられる。

A種がⅠ期、B種がⅡ～Ⅲ期に所属すると考られる。

No.	出土地点	類別	石材	備考	時期	挿図番号
1	住 17	A	粘板岩	完形	Ⅰ	Fig 71－7
2	表 土	B	〃	頭部欠		Fig 71－5
3	貯 107	B	〃	片側欠	Ⅱ	Fig 71－6
4	住 4	B	〃	完形	Ⅲ	
5	表 土	B	〃	刃部のみ		

Tab. 29　扁平片刃石斧一覧表

(14)　抉入石斧（Fig. 71－8～11, PL. 38）

13点出土している。断面形状により2種に区分される。A（8・9）：いづれも破損品であり全容を知ることができない。8の片側に僅かに抉部が残っている。断面方形である。8の全長は11.0*cm*、巾3.6*cm*。9の厚味は2.2*cm*。B（10・11）：山形頭部を持ち、断面山形である。抉部下で10は厚さ3.0*cm*、巾3.6*cm*。11は厚さ3.4*cm*、巾3.9*cm*で、11が若干大きい。石材はAが流紋岩質凝灰岩。Bが安山岩である。

(15)　蛤刃石斧（Fig. 72・73－1～10, PL. 39）

石器中で最も多量に出土し、35点を数える。うち27点が玄武岩製であり、そのうち7の1点

No.	出土地点	類別	材質	備考	時期	挿図番号
1	貯 85	A	流紋岩質凝灰岩	片側欠	Ⅱ	Fig 71－8
2	表 土	B	安山岩	刃部欠		Fig 71－11
3	貯 48	B	〃	頭部のみ	Ⅱ	
4	住 5	B	〃	〃	Ⅲ	Fig 71－10
5	貯 88	B	〃	中央部のみ	Ⅰ	
6	表 土	B	〃	頭部のみ		
7	貯 64	B	〃	細片	Ⅱ	
8	貯 107	－	流紋岩質凝灰岩	〃	Ⅱ	
9	貯 110	－	〃	〃		
10	貯 65	－	〃	〃	Ⅱ	
11	貯 116	－	〃	〃		
12	貯 40	－	〃	〃	Ⅱ	
13	貯 86	A	〃	刃部のみ		Fig 71－9

Tab. 30　抉入石斧一覧表

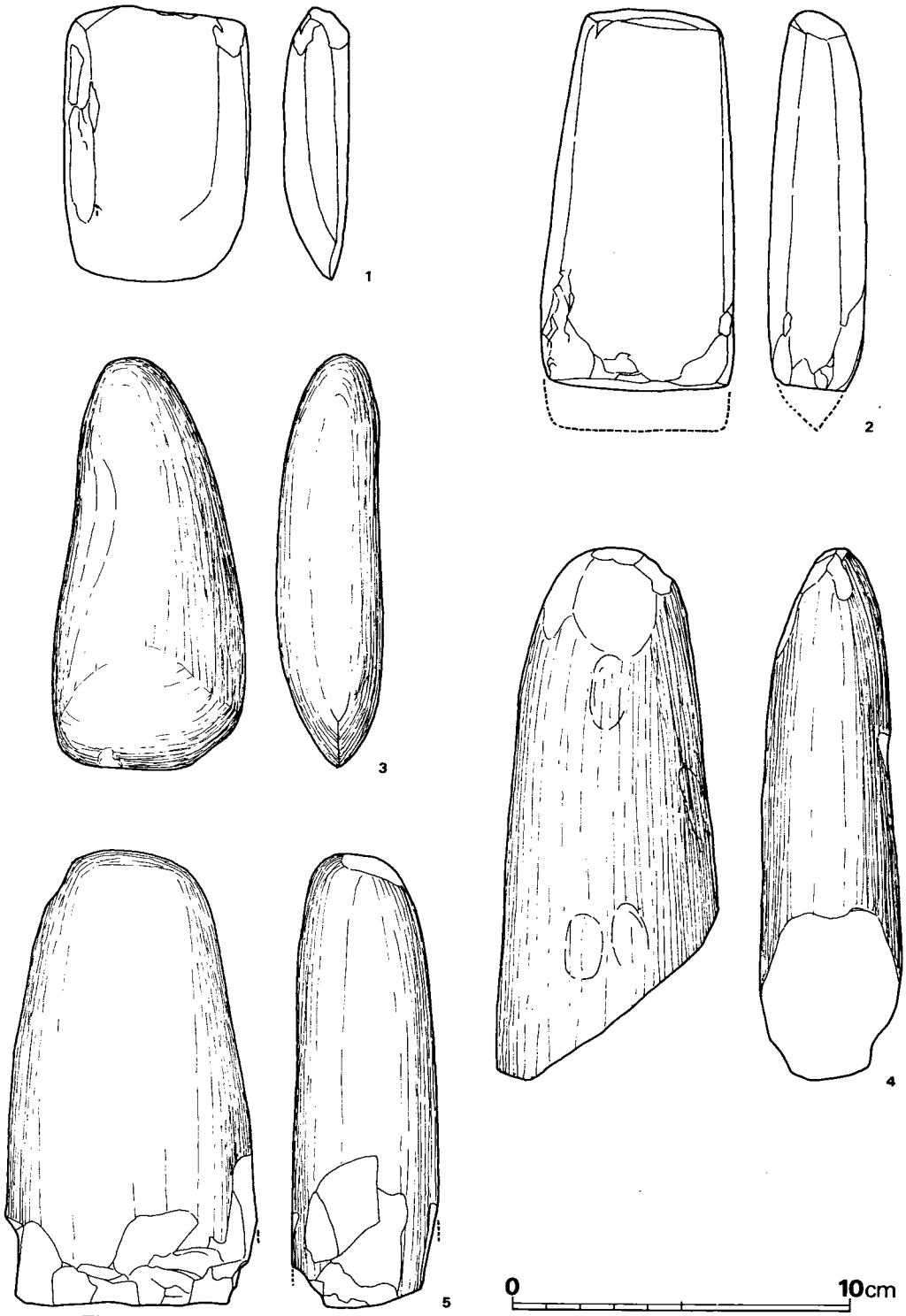


Fig. 72 石器実測図（蛤刃石斧）①（縮尺１/２）

を除いて他は今山産玄武岩と思われる。形態によってA～Eの5種に区分される。A（1）：片辺に近い刃部を持つ。側面に明瞭な稜が付く。長8.1cm、巾5.5cm、厚2.0cm。蛇紋岩製である。10号住居跡の床面出土品である。Ⅳ期の所産。B（2）：平面は長撥形状で、頭部は平坦である。4面角に全て稜がつく。頭部に比して刃部近くが最も厚味を増す。長（推定）12.5cm、巾5.8cm、厚2.9cm。　Ⅰ期の所産。C（3）：自然礫の一端に付刃したもの。長12.3cm、巾5.65cm、厚3.2cm。D（4・5）：頭部の丸い長撥形平面をし、部厚い。5は残存

No.	出土地点	類別	石材	備考	時期	挿図番号
1	住 10	A	蛇紋岩	略完形	Ⅳ	Fig 72－1
2	住 ?	B	花崗岩質ホルンフェルス	刃部欠		Fig 72－2
3	住 14	C	砂岩	完形	Ⅱ	Fig 72－3
4	表 採	D	安山岩	刃部欠		Fig 72－4
5	貯 52	B	花崗岩質ホルンフェルス	中央部片	Ⅰ	
6	貯 41	D	砂岩	刃部片	Ⅰ	
7	貯 107	D	ホルンフェルス	頭部片	Ⅱ	
8	〃	E	玄武岩	片面表皮を失うも、細片を接合して完形	Ⅱ	Fig 73－6
9	表 土	〃	〃	片部欠		
10	〃	〃	〃	〃		Fig 73－9
11	貯 49	〃	〃	〃		Fig 73－10
12	表 土	〃	〃	〃		
13	〃	〃	〃	〃		Fig 73－7
14	〃	〃	〃	頭部片		
15	貯 107	〃	〃	中央部片	Ⅱ	
16	表 土	〃	〃	〃		
17	貯 109	〃	〃	〃		
18	表 土	〃	〃	〃		
19	住 4	〃	〃	刃部片	Ⅲ	
20	貯 93	〃	〃	〃	Ⅰ	
21	貯 62	〃	〃	〃	Ⅰ	
22	住 17	〃	〃	〃	Ⅰ	
23	貯 88	〃	〃	〃	Ⅰ	
24	表 土	〃	〃	〃		
25	表 土	〃	〃	〃		
26	〃	〃	〃	〃		
27	貯 79	〃	〃	〃	Ⅰ	
28	住3床面	〃	〃	〃	Ⅱ	
29	表 土	〃	〃	〃		
30	〃	〃	〃	〃		Fig 73－8
31	貯 100	〃	〃	〃	Ⅱ	
32	貯 64	〃	〃	細片		
33	貯 80	〃	〃	〃		
34	貯 87	〃	〃	〃		
35	貯 92	D	砂岩	刃部欠	Ⅰ	Fig 72－5

Tab. 31　　蛤刃石斧一覧表

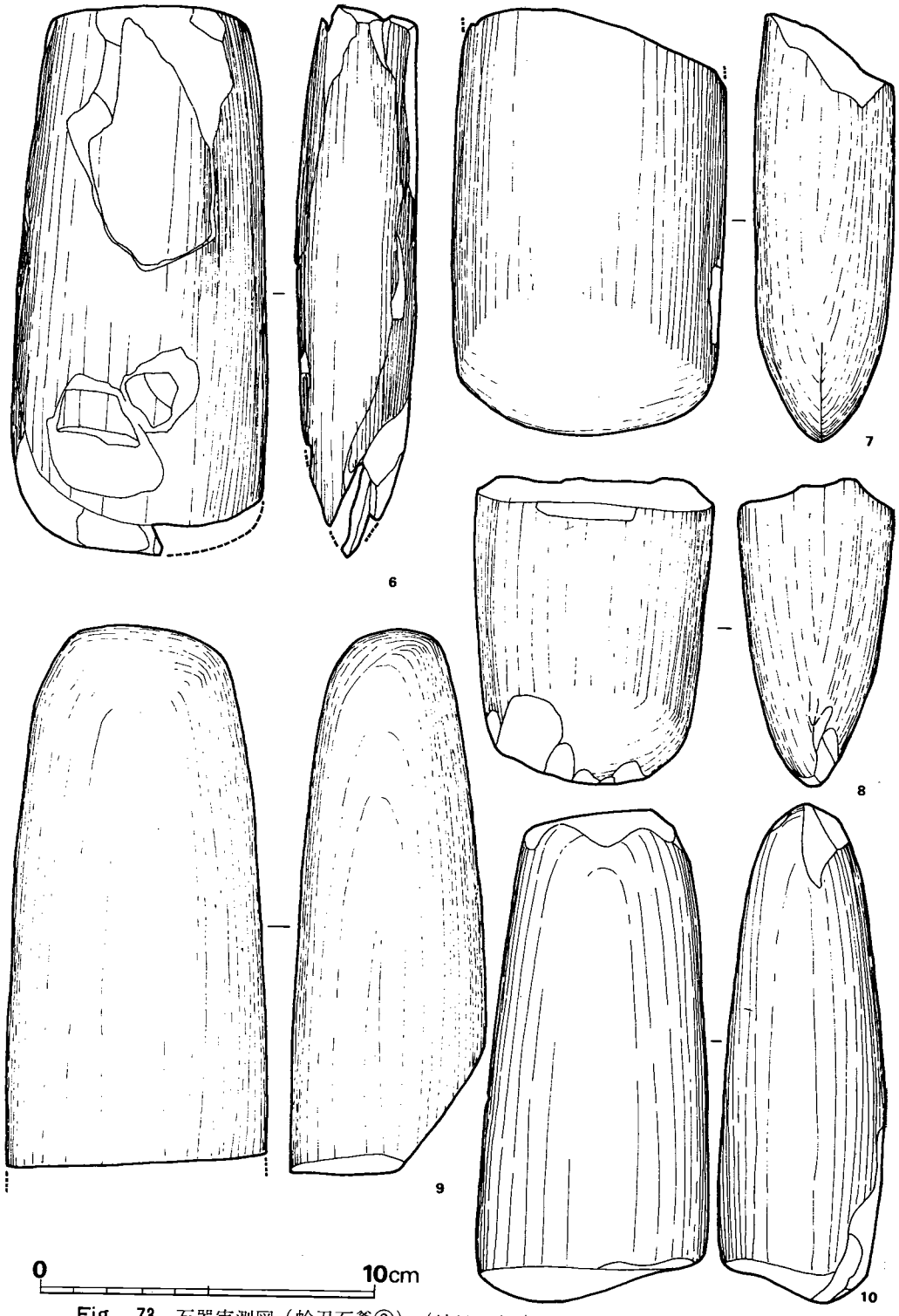


Fig. 73 石器実測図（蛤刃石斧②）（縮尺１/２）

長13.5cm、残存巾7.4cm、厚4.3cm。4は残存長16.0cm、残存巾6.4cm、厚4.2cmである。I～II期に属す。他に2例この類に含まれるものがある。E（Fig. 73－6～10, PL. 37）：今山玄武岩製の石斧である。6が全形状を知りうる唯一の例である。但し頭部は磨耗して平坦になっている。長16.6cm、巾7.6cm、厚3.6cm。この類としては小形であり、損度の激しさからみて、使用によって磨耗したものとみられる。9は最も厚味のある例で5.8cmである。

以上のうち、玄武岩製以外の石斧8点はI期が3点、II期が2点、IV期が1点である。特に10号住居跡床面出土の1はこの時期としては特異であり、類例を知らない。

(16)　砥石（Fig. 74, PL. 40）

16点出土した。4種に区分される。A（1）：有孔の撥形小品である。表面には研ぎ痕がみられ、表面中央が僅かに窪んでいる。砥石を利用して作られたペンダントか、ペンダント様に作られた砥石である。B～Dの4種は細砥・中砥・粗砥の別である。B（2～7）：細砥であり、全て手持ち砥である。平板状のもの（3～5）と方柱状のもの（6・7）の2種が含まれる。前者は細粒砂岩製、後者は粘板岩製である。粘板岩製のほうが、ねばりがあり、仕上げ砥としてはより有効であろう。C（8・9）：中砥であり置砥である。表裏両面を使用している。8はさらに側面を使用し、深い削痕がみられる。頁岩製である。D（10・11）：粗砥である。置砥であろう。14は各面全て使用されている。粗粒砂岩製である。

上記11点は2を除いて全てII期のものである。図示しなかった中にIV期の粗砥がある。また貯蔵穴から粗粒砂岩の角礫が多く出土している。それらの面中に砥石として使用されたと思える面がある。重量が3～5kgという例も多い。

No.	出土地点	類別	石　材	備　　考	時期	挿図番号
1	貯　96	A	砂質頁岩		II	Fig 74－1
2	住　17	B	細粒砂岩	両端欠、方柱状	I	Fig 74－2
3	表　土	〃	〃	完　形、平板状		Fig 74－4
4	〃	〃	〃	片端欠　〃		Fig 74－3
5	住　22	〃	〃	両端欠　〃	II	Fig 74－5
6	住　20	〃	粘板岩	一面欠、方柱状	II	Fig 74－6
7	〃	〃	〃	〃　〃	II	Fig 74－7
8	貯　47	C	頁　岩	片端欠損後、再使用、平板状	II	Fig 74－8
9	貯　40	〃	〃	〃　〃	II	Fig 74－9
10	貯　64	〃	〃	〃　、方柱状		
11	貯　44	〃	〃	〃　、平板状	II	
12	貯　65	〃	〃	細　片、平板状	II	
13	住　17	〃	〃	〃　〃	I	
14	住　36	D	粗粒砂岩	片端欠損後再使用、方柱状	II	Fig 74－11
15	貯　16	〃	〃	片端欠、長平板状	II	Fig 74－10
16	住　10	〃	〃	細　片、方柱状	IV	

Tab. 32　砥石一覧表

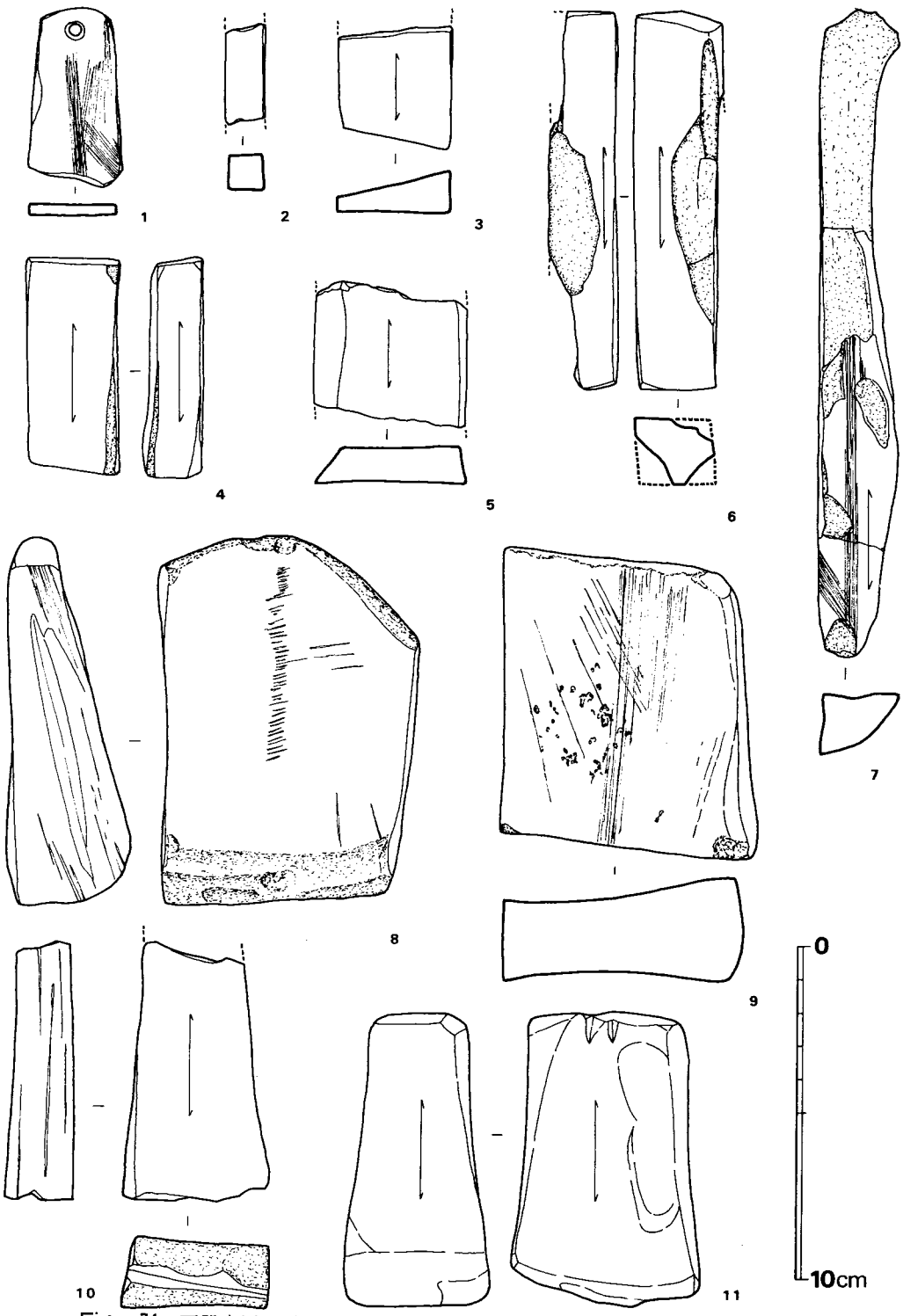


Fig. 74 石器実測図（砥石）（縮尺１/２）

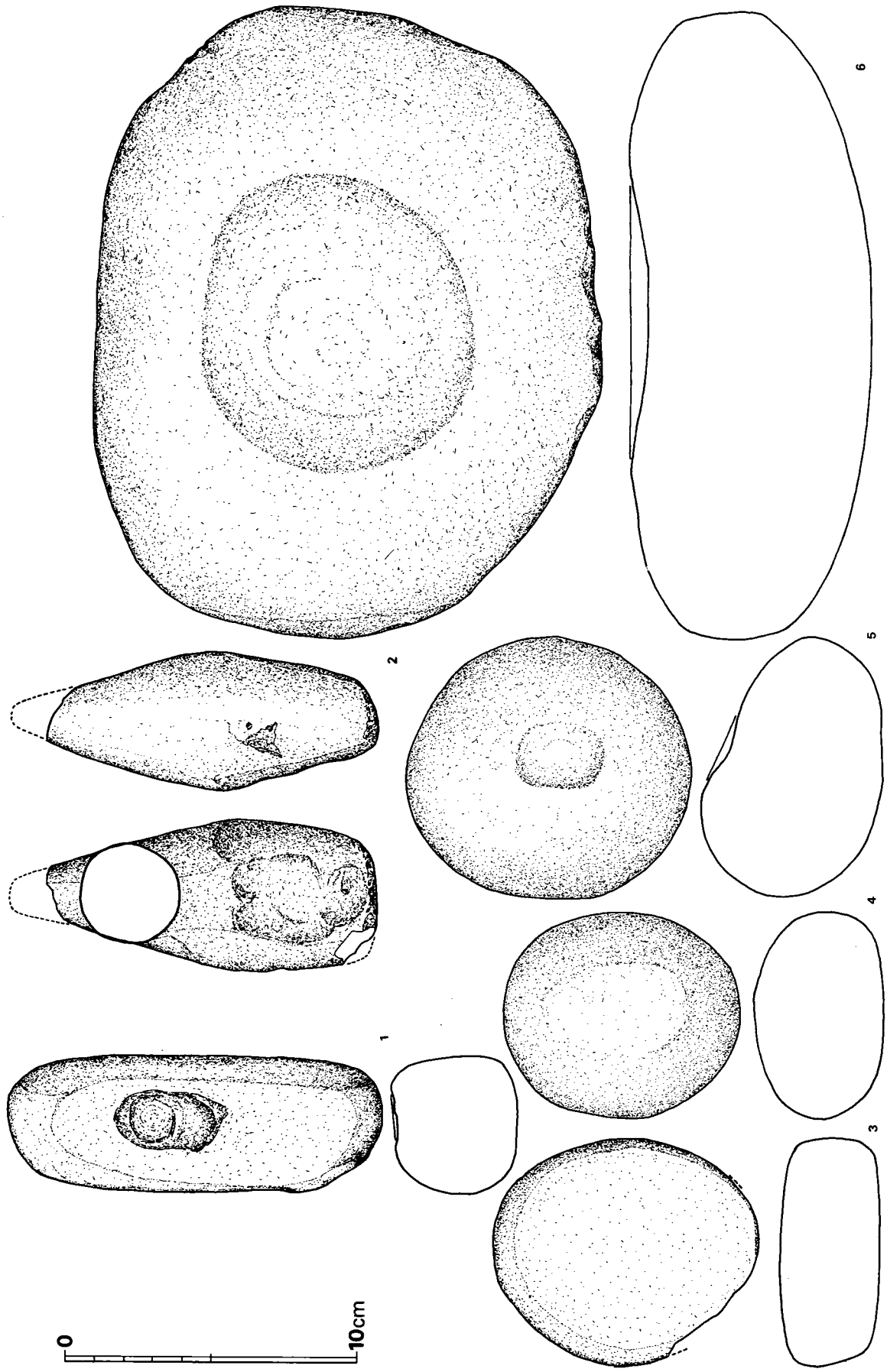


Fig. 75 石器実測図（磨石）（縮尺1/2）

(17) 磨石 (Fig. 75, PL. 40)

石槌・石皿と呼ばれる石器もいわゆる磨石と同様の使途に供されたと思われるので当器種に全て含めた。A（1）：長楕円形を呈し、断面は丸味のある方形である。上面中央に浅い凹部がある。B（2）：石槌である。体部中央から上は円錐状になり、先端が尖る。下半は断面楕円形で長径中央部は表裏とも浅く窪む。下面に使用痕がみられる。Cはいわゆる磨石で、断面形状により、さらに3類別される。C（3）：表裏両面が平坦なもの。C_2（4）：片面は弧状をなし、片面平坦なもの。C_3（5）：片面の中央に浅い窪みを持つもの。D（6）：石皿である。底部は丸く不安定。上面中央に径約10*cm*、深さ0.6*cm*の円形凹部がある。

I期からIII期まで、形態変化もなく使用され続けたと思われる。5の石皿は凹部面積が狭くいわゆる磨石と共用することは不可能で、石槌との併用が考えられる。

No.	出土地点	類別	石材	重量	備考	時期	挿図番号
1	表土	A	安山岩	500	完形		Fig 75－1
2	貯 110	B	砂質頁岩	(400)	先端欠	I	Fig 75－2
3	表土	C_1	玄武岩	(400)	片面一部欠、両面平坦		Fig 75－3
4	貯 63	C_2	安山岩	400	完形、片面平坦	III	Fig 75－4
5	表土	C_3	〃	700	〃 片面に凹部あり		Fig 75－5
6	貯 100	C_2	〃	800	〃 片面平坦	II	
7	貯 12	〃	〃	(500)	半欠 〃	II	
8	表土	〃	〃	(300)	〃 〃		
9	貯 11	〃	〃	(400)	〃 〃	II	
10	貯 99	〃	〃	(300)	〃 〃		
11	住 3	C_3	〃	(550)	〃 片面に凹部あり	II	
12	貯 65	C_2	〃	(400)	〃 片面平坦	II	
13	貯 19	C	〃	(300)	細片	II	
14	貯 62	C	〃	(100)	〃	I	
15	住 5	D	〃	4.800	完形 片面に凹部あり	III	Fig 75－6

Tab. 33 磨石一覧表 ※（ ）内数値は現存値

(18) 紡錘車 (Fig. 76－1～4, PL. 41)

4点出土している。いづれも整った円形で、扁平である。片岩製である。大きさによって2種に分けられる。A（1・2）：小形品である。径 4.0～4.3*cm*。1は一部欠損するが、15＋2*g*の重量である。B（3・4）：大形品である。径 4.9～5.0*cm*。3の重量は29*g*で、Aの約2倍ある。

No.	出土地点	類別	石材	重量	備考	法量 径	法量 厚	時期	挿図番号
1	住 14	A	片岩	(15)	一部欠	3.9	0.7	II	Fig 76－1
2	表土	〃	〃	(7)	半欠	4.2	0.4		Fig 76－2
3	貯 86	B	〃	29	完形 表面・周縁の磨丁寧	5.1	0.5	I	Fig 76－3
4	住 22	〃	〃	(8.5)	半欠	4.6	0.4	II	Fig 76－4

Tab. 34 石製紡錘車一覧表 ※（ ）内数値は現存値

No.	出土地点	分類	石材	重量	備考	法量 径	法量 厚	時期	挿図番号
1	住 17	A−2	片岩	12	完形、表面未加工	4.1	0.5	I	Fig 76−5
2	住 22	C−1	砂質粘板岩	19	完形、石庖丁利用	5.7	0.3	II	Fig 76−6
3	貯 9	B−1	頁岩	(27)	一部欠、表面磨研	4.9	0.6	II	Fig 76−7
4	貯 98	〃	片岩	24	完形、〃	5.7	0.5		Fig 76−8
5	貯 43	B−2	片岩	(15)	一部欠、表面未加工	4.9	0.4	II	Fig 76−9
6	住 6	C−2	片岩	(36)	半欠、〃	7.7	0.7	III	Fig 76−10
7	貯 14	〃	〃	72	完形、〃	6.2	1.0	II	Fig 76−11

Tab. 35　石製円盤一覧表　※（ ）内数値は現存値

(19)　石製円盤（Fig. 76−5〜11, PL. 41）

7点出土している。紡錘車と同様に石材は片岩が多いが、砂質粘板岩（6）と頁岩（7）も用いられている。大きさによって3種A・B・Cに、さらに周縁の加工度によって2種（1：周縁磨製、2：周縁打欠き）に区分される。A2（5）：未製品で、表面も未加工である。厚味も一定していない。径約3.8*cm*。B1（7・8）：扁平に仕上げられている。径5.1〜5.6*cm*。B2（9）：表面も未加工で、厚味が一定しない。径4.6*cm*。C1（6）：石庖丁片の再利用

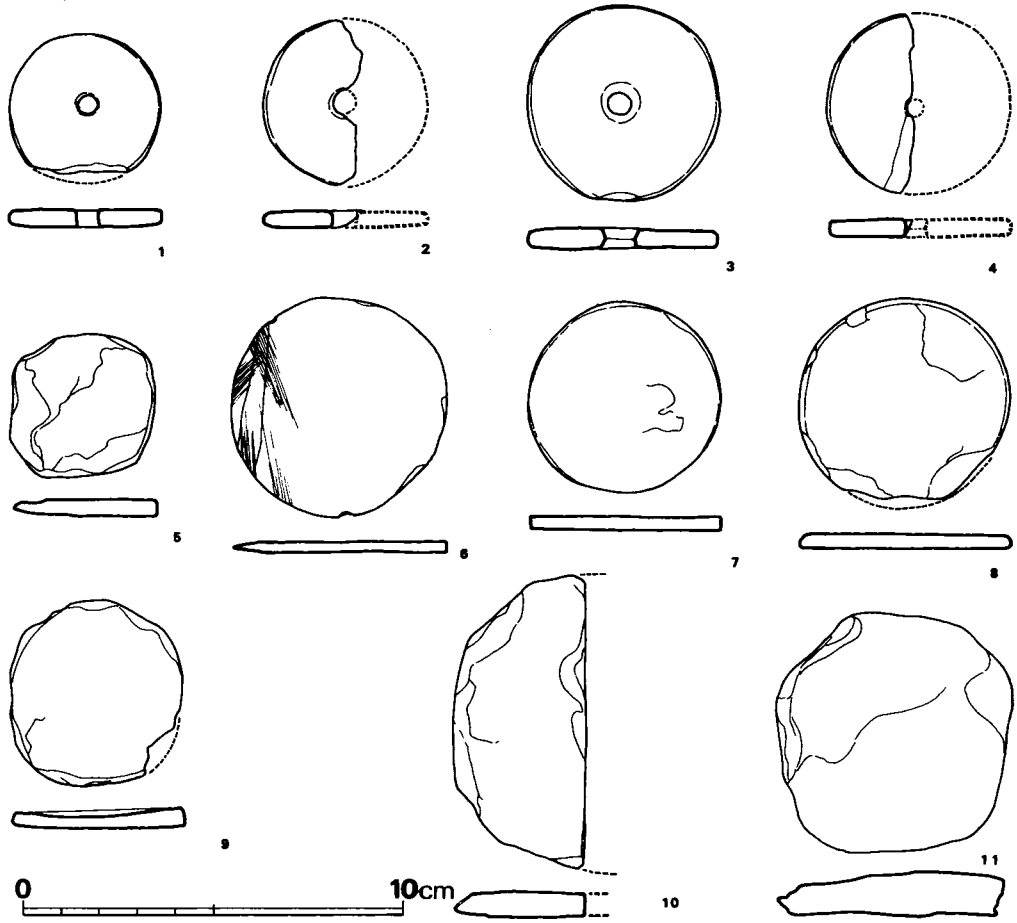


Fig. 76　石製品実測図（紡錘車・円盤）（縮尺1/2）

品で、図上左縁に刃部が、下端中央に紐孔部がみられる。径5.7cm。C2（10・11）：表裏両面も未加工で部厚い。10は径7.3cm、11は 6.4×6.1cm の不整円形である。

石製円盤は石製紡錘車の未製品とも考えられる。特にA・B類の径は紡錘車A・B類の径に近く、充分にその可能性がある。

C 土 製 品

紡錘車と投弾・土製円盤がある。

（1） 紡錘車（Fig. 77, PL. 41）

総数44点出土している。土器以外の出土品では土製円盤に次いで多い。大きく3種に区分される。A（1・2）：小形品である。径 2.7～2.9cm、重量9 g である。B種は中形品であるが、径に比して厚味が⅓以上あるもの（1）と、それ以下のものがある。B1（3～20）：径は 3.3～4.5cm まで、重量は15～41 g までとさまざまである。側面は面取りしているものと、そうではなく扁球状になるもの（3）を含んでいる。製作段階の穿孔によって生じた余り土の処理法によって表面の断面形状が違っている。B2（21～42）：径は3.5～4.5cmまで、重量は11～30g までさまざまである。他の特徴はB1と同様である。C（43）：つまみ形紡錘車のつまみが低くなり山形となったもので、1例のみ出土した。復元径は4.2cm、重量は現状で13 g。原形では30 g 前後であろう。

最も多いB種はI期からIII期まで継続してあり、その間の変化は見られない。A・C類はI期にみられる。特にC種は前期初頭のつまみ形紡錘車の流れを汲むものであろう。

（2） 投 弾（Fig. 78, PL. 42）

計16点出土している。このうち12号住居跡で8点、22号住居跡で3点と集中出土している。長さ 4.1～5.0cm、中央径 2.2～2.5cm のほぼ統一した形状を示す。重量は16～26 g と若干開きがある。

12号住居跡一括出土品と28号住居跡出土品で半数以上占めるため、IV期に多用されたように

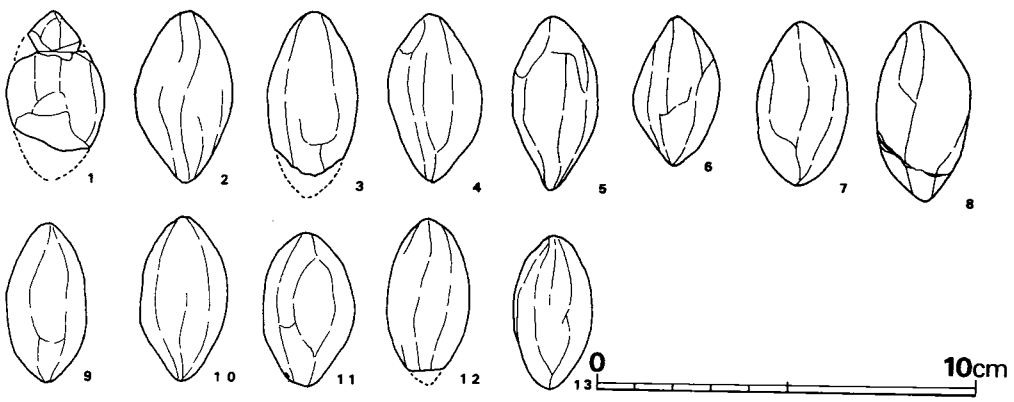


Fig. 77 投弾実測図（縮尺1/2）

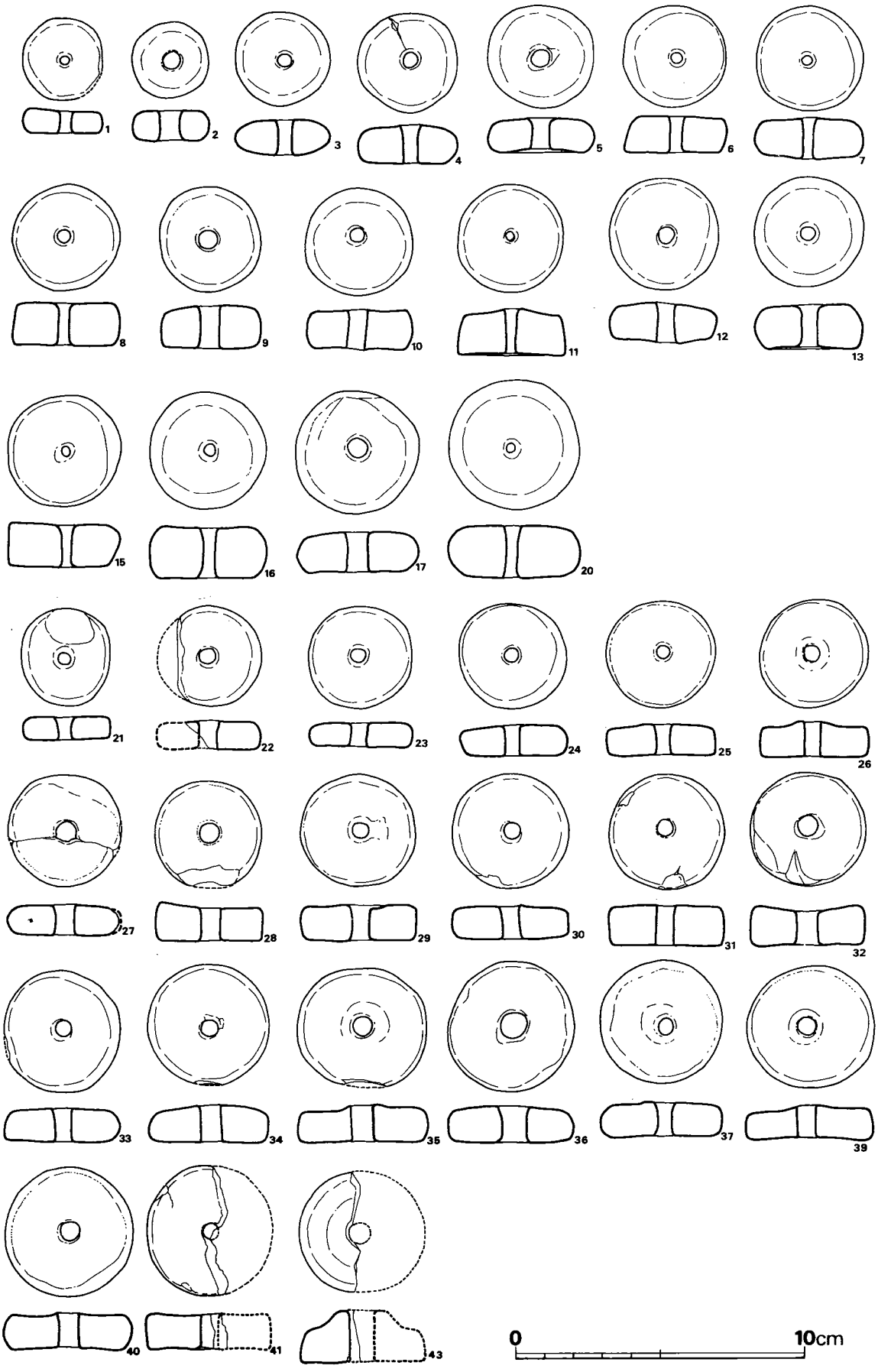


Fig. 78 土製品実測図（紡錘車）（縮尺1/2）

No.	出土地点	類別	法量 径	法量 厚	重量	備考	時期	挿図番号
1	貯 111	A	2.8	1.0	9	完形、側面面取りなし	I	Fig 77－1
2	表 採	A	2.6	1.1	9	〃 、 〃		Fig 77－2
3	貯 62	B—1	3.3	1.2	15	〃 、 〃	I	Fig 77－3
4	住 17	〃	3.4	1.3	16	〃 、 〃	I	Fig 77－4
5	貯 92	〃	3.6	1.2	19	〃 、 〃	I	Fig 77－5
6	貯 20	〃	3.5	1.2	19	〃 、 側面軽く面取り	II	Fig 77－6
7	住 17	〃	3.5	1.3	21	〃 、 〃	I	Fig 77－7
8	貯43～48	〃	3.6	1.4	23	〃 、 〃	II	Fig 77－8
9	貯 38	〃	3.5	1.3	21	〃 、 〃	II	Fig 77－9
10	住 11	〃	3.6	1.3	21	〃 、 〃	III	Fig 77－10
11	表 土	〃	3.5	1.5	25	〃 、 〃		Fig 77－11
12	住 18	〃	3.8	1.3	22	〃 、 〃	I	Fig 77－12
13	貯 84	〃	3.9	1.3	25	〃 、 〃	II	Fig 77－13
14	貯 65	〃	3.6	1.5	(11)	半欠、 〃	I	
15	貯 113	〃	3.9	1.5	30	完形、 〃		Fig 77－15
16	住 2	〃	4.0	1.8	35	〃 、 〃		Fig 77－16
17	貯 85	〃	4.3	1.4	31	〃 、 〃	II	Fig 77－17
18	住 17	〃	4.3	1.3	(14)	半欠、 〃	I	
19	〃	〃	4.0	1.5	(14)	〃 、 〃	I	
20	貯 40	〃	4.4	1.7	41	完形、 〃	II	Fig 77－20
21	表 土	B—2	3.3	0.8	11	〃 、表面剝落、側面軽く面取り		Fig 77－21
22	〃	〃	3.4	0.9	(12)	一部欠、側面面取り		Fig 77－22
23	〃	〃	3.5	0.9	13	完形側面軽く面取り		Fig 77－23
24	貯 6	〃	3.5	1.2	20	〃 、 〃	II	Fig 77－24
25	表 土	〃	3.7	1.2	21	完形、側面面取り		Fig 77－25
26	住 6	〃	3.7	1.0	20	〃 、 〃	III	Fig 77－26
27	表 土	〃	3.8	1.0	16	片面磨耗、軽く面取り		Fig 77－27
28	貯 94	〃	3.6	1.2	(21)	一部欠、側面面取り、片面凹面	I	Fig 77－28
29	表 土	〃	3.9	1.2	25	完形、 〃		Fig 77－29
30	貯 111	〃	3.9	1.0	20	〃 、 〃		Fig 77－30
31	住 6	〃	4.0	1.4	30	〃 、 〃	III	Fig 77－31
32	貯 94	〃	3.9	1.1	25	〃 、 〃 片面凹面	I	Fig 77－32
33	貯 65	〃	4.1	1.0	21	表面磨耗	II	Fig 77－33
34	貯 16	〃	4.1	1.2	24	完形、側面軽く面取り	II	Fig 77－34
35	貯 2	〃	4.3	1.2	(25)	一部欠、 〃	II	Fig 77－35
36	住 21	〃	4.2	1.1	29	表面磨耗、側面面取り	III	Fig 77－36
37	貯 93	〃	4.1	1.2	23	完形	I	Fig 77－37
38	貯 19	〃	3.8	1.2	(10)	半欠	II	
39	住 17	〃	4.1	1.0	25	完形、側面軽く面取り	I	Fig 77－39
40	貯 38	〃	4.5	1.0	30	〃 、片面凹面	II	Fig 77－40
41	貯 1	〃	4.5	1.2	(18)	半欠、側面面取り	II	Fig 77－41
42	住 6	〃			(20)	〃 、 〃	III	
43	貯 92	C	4.0	1.7	(13)	〃	I	Fig 77－43
44	住 21	〃			13		III	

Tab. 36　土製紡錘車一覧表

No.	出土地点	重　量	備　考	時　期	挿図番号
1	住　12	(19)	片端欠	Ⅳ	Fig 78－1
2	貯　110	26	完　形	Ⅱ	Fig 78－2
3	住　12	(24)	片端欠	Ⅳ	Fig 78－3
4	〃	22	完　形	Ⅳ	Fig 78－4
5	〃	20	〃	Ⅳ	Fig 78－5
6	〃	15	〃	Ⅳ	Fig 78－6
7	〃	22	〃	Ⅳ	Fig 78－7
8	〃	23	〃	Ⅳ	Fig 78－8
9	〃	(14)	半　欠	Ⅳ	Fig 78－9
10	住　22	20	完　形	Ⅱ	Fig 78－10
11	住　28	22	〃	Ⅳ	Fig 78－11
12	貯　99	21	〃	Ⅱ	Fig 78－12
13	住　22	16	〃	Ⅱ	Fig 78－13
14	〃	(15)	半　欠	Ⅱ	
15	住　17	(12)	〃	Ⅰ	
16	表　土	(11)	欠面欠		

Tab. 37　投　弾　一　覧　表　※（　）内は現存値

No.	出土地点	類　別	重　量	備　考	法量 径	法量 厚	時期
1	住　3	A－1	(8)	完　形、中厚手	3.5	0.8	Ⅱ
2	貯　92	〃	14	〃　、厚　手	3.2	1.6	Ⅱ
3	住　3	A－2	3.5	〃　、薄　手	2.7	0.5	Ⅱ
4	〃	〃	4.5	〃　、　〃	2.9	0.6	Ⅱ
5	住　5	〃	4	〃　、中薄手	2.6	0.6	Ⅲ
6	〃	〃	6.5	〃　、中厚手	2.5	1.0	Ⅲ
7	〃	〃	(2.5)	半　欠、薄　手	3.6	0.3	Ⅲ
8	住　25	〃	6	完　形、薄　手	3.5	0.5	Ⅲ
9	貯　11	〃	5	〃　、中薄手	2.8	0.7	Ⅱ
10	貯　13	〃	5	〃　、薄　手	2.8	0.7	Ⅱ
11	貯　24	〃	4	〃　、　〃	2.8	0.5	Ⅱ
12	貯　40	〃	5	〃　、中薄手	3.8	0.6	Ⅱ
13	貯　44	〃	(2)	半　欠、　〃	2.3	0.6	Ⅱ
14	貯43～47	〃	(4)	〃　、中薄手	3.1	0.6	Ⅱ
15	貯　44	〃	(2.5)	〃　、薄　手	2.8	0.5	Ⅱ
16	貯　53	〃	(3)	〃　、　〃	3.3	0.4	Ⅰ
17	貯　55	〃	(4)	〃　、中厚手	2.9	0.7	Ⅱ
18	貯　57	〃	6	完　形、中厚手	2.6	0.8	Ⅱ

Tab. 38　土　製　円　盤　一　覧　表　※（　）内は現存値

No.	出土地点	類別	重量	備考	法量 径	法量 厚	時期
19	貯 57	A－2	6	一部欠、中薄手	2.9	0.6	II
20	〃	〃	5	完形、〃	2.5	0.7	II
21	〃	〃	(4.5)	半欠、薄手	3.0	0.5	II
22	貯 79	〃	(4.5)	〃 、中薄手	3.1	0.7	II
23	貯 81	〃	(4.5)	一部欠、薄手	2.5	0.4	IV
24	貯 83	〃	8	完形、中薄手	3.3	0.6	II
25	貯 99	〃	14	完形、厚手	3.2	1.1	
26	貯 102	〃	8.5	〃 、中厚手	3.3	0.7	III
27	貯 106	〃	(5)	半欠、中薄手	3.5	0.6	
28	貯 108	〃	7	完形、〃	3.1	0.6	II
29	〃	〃	(4)	半欠、〃	3.2	0.5	II
30	表土	〃	(5)	一部欠、〃	3.0	0.6	
31	〃	〃	(3)	半欠、薄手	3.0	0.5	
32	〃	〃	7	完形、中薄手	3.0	0.6	
33	〃	〃	5	〃 、〃	3.0	0.6	
34	〃	〃	7	〃 、厚手	2.7	1.1	
35	〃	〃	7	〃 、中厚手	3.0	0.6	
36	〃	〃	4	〃 、薄手	2.6	0.5	
37	〃	〃	3	〃 、〃	2.8	0.4	
38	〃	〃	8	〃 、中厚手	3.2	0.7	
39	〃	〃	3	〃 、薄手	2.8	0.4	
40	〃	〃	(3)	半欠、中薄手	2.9	0.5	
41	〃	〃	(2.5)	一部欠、〃	2.1	0.6	
42	〃	〃	(4)	半欠、薄手	3.2	0.4	
43	〃	〃	(5)	〃 、中厚手	3.5	0.6	
44	〃	〃	(3)	〃 、薄手	3.2	0.4	
45	貯 16	B－1	13	完形、中厚手	4.1	0.6	II
46	貯 40	〃	(17)	一部欠、厚手	4.3	0.9	II
47	貯 7	B－2	16	完形、中厚手	4.5	0.8	III
48	貯 13	〃	11	〃 、中厚手	3.7	0.7	II
49	貯 16	〃	15	完形、厚手	3.8	0.8	II
50	〃	〃	15	〃 、中薄手	4.2	0.7	II
51	貯 27	〃	14	〃 、中厚手	4.4	0.8	
52	貯 40	〃	(8.5)	一部欠、中薄手	3.4	0.5	II
53	〃	〃	13	完形、中厚手	4.0	0.7	II
54	貯 44	〃	(9)	半欠、中厚手	3.8	0.8	
55	貯 47	〃	8	完形、薄手	3.8	0.5	II
56	貯 48	〃	(15.5)	一部欠、厚手	4.0	0.9	II
57	貯 57	〃	(7.5)	〃 、中薄手	3.7	0.5	II
58	〃	〃	(8)	半欠、厚手	4.0	0.8	II
59	〃	〃	10	完形、中厚手	3.8	0.6	II
60	〃	〃	11	〃 、中薄手	3.9	0.5	II
61	〃	〃	(17)	一部欠、中厚手	4.5	0.7	II

No.	出土地点	類別	重量	備考	径	厚	時期
62	貯 57	B－2	(1)	残欠、薄手	3.4	0.3	II
63	貯 62	〃	10	完形、中厚手	3.7	0.7	I
64	貯 65	〃	11	〃 、中厚手	3.6	0.8	II
65	〃	〃	13	〃 、中薄手	4.5	0.5	II
66	貯 78	〃	12	〃 、中厚手	3.5	0.9	I
67	〃	〃	13	〃 、 〃	4.0	0.8	I
68	貯 83	〃	14	〃 、 〃	3.6	0.9	II
69	〃	〃	14	〃 、 〃	3.6	0.8	II
70	貯 99	〃	7	〃 、薄手	3.8	0.4	II
71	〃	〃	21	〃 、厚手	4.4	0.8	II
72	〃	〃	17	〃 、厚手	3.9	1.0	II
73	貯 101	〃	17	〃 、中厚手	4.3	0.6	II
74	貯 105	〃	(14)	一部欠、中薄手	4.5	0.6	II
75	貯 108	〃	8	完形、 〃	3.3	0.7	II
76	表土	〃	10	〃 、 〃	3.5	0.6	
77	〃	〃	10	〃 、 〃	3.8	0.5	
78	〃	〃	13	〃 、中厚手	3.8	0.7	
79	〃	〃	13	〃 、 〃	4.3	0.7	
80	〃	〃	8	〃 、中薄手	3.4	0.6	
81	〃	〃	8	〃 、 〃	3.3	0.6	
82	〃	〃	(9)	半欠、中厚手	4.3	0.5	
83	〃	〃	(13)	一部欠、中薄手	4.3	0.5	
84	〃	〃	18	完形、厚手	3.8	1.0	
85	〃	〃	(5)	半欠、中薄手	3.6	0.5	
86	〃	〃	(11)	〃 、中厚手	4.1	0.8	
87	〃	〃	(9)	〃 、 〃	3.8	0.7	
88	〃	〃	19	完形、 〃	4.1	0.9	
89	貯 44	C－1	34	〃 、 〃	5.8	0.7	II
90	貯 65	〃	32	〃 、 〃	5.6	0.8	II
91	住 4	C－2	19	〃 、中薄手	4.8	0.6	III
92	貯 13	〃	(22)	一部欠、中厚手	4.7	0.9	II
93	貯 38	〃	49	完形、厚手	4.3	0.6	II
94	貯 57	〃	(10)	一部欠、薄手	4.0	0.6	II
95	貯 65	〃	18	完形、中薄手	5.1	1.5	II
96	貯 81	〃	(21)	一部欠、中厚手			IV
97	〃	〃	16	完形、 〃			IV
98	貯 95	〃	(29)	一部欠、厚手			II
99	貯 101	〃	13	完形、中薄手			II
100	表土	〃	(18)	一部欠、中厚手			
101	〃	〃	(7)	半欠、中薄手			
102	〃	〃	(9)	〃 、中厚手			
103	〃	〃	(14)	〃 、 〃			
104	〃	〃	57	完形、厚手			

も思えるが、投弾は前期初頭よりあり、その形態もそののちまったく変化していない。但し、球状の投弾はみられない。

（3） 土製円盤（PL. 42・43）

総数 104個出土しており、土器以外では最も多い遺物である。大きさによってA・B・Cの3種に区分される。さらに円盤として製作されたもの（1）と、土器片の周縁を打ち欠いて作られたもの（2）とがあり、後者が圧倒的に多い、A1（1・2）：2点含まれる。1は中厚手。2は厚手で、断面楕円形である。胎土中にはほとんど砂粒を含んでいない。A2（3～44）：42点分含まれる。壺・甕の底部以外の破片を利用している。径は 2.2～3.4cm まであり、厚さは 0.4～1.1cm で、重量は 3.5～14 g とさまざまである。B1（45、46）：2点出土している。45は中厚手で砂粒が多い。46は厚手で、周縁を面取りしている。胎土中に僅かの砂粒を含んでいる。B2（47～88）：42点含まれる。径は 3.4～4.5cm、厚さは 0.4～0.9 cm で、重量は7～21 g である。C1（89、90）：2点含まれる。中厚手で、胎土は砂量を多く含んでいる。径は 6.0cm と5.75cm。厚さは両者共0.8cm、重量は34 g と32 g で大差ない。C2（91～104）：A・B種と同様に壺や甕の破片を利用しているが、104のように底部を利用したものも含まれる。径は 4.3～6.2cm。厚さ 0.4～1.4cm、重量は16～57 g である。

非常に多い土製円盤のうち3号住居跡の3点と5号住居跡の3点、25号住居跡の1点、計7点を除いて全て貯蔵穴か表土中の出土遺物である。他遺物の出土傾向から見て異常であり、この遺物の性格を知る上で、一つの参考となろう。

D 鉄製品

（1） 刀子（Fig. 69－1）

出土した鉄器は4号住居跡床面の刀子1点である。錆が甚しく、正確には知り難いが、およそ図のようになろう。刃部残存長3.1cm、最大巾2.1cm、峰部厚さ 3.6mm。

E 木製品

（1） 鋤（Fig. 8）

6号住居跡の床面から焼けて炭化した鋤である。柄上部が住居跡の壁に当って折れていた。柄と身とは一木で作られた長柄鋤である。柄は52.7cmまでは確実に伸びており、その先は不明。身は方形で巾15.2cm、長さ21.0cm を残している。踏込み部は柄から直角に張り出している。なお、各部位の厚味については原料が炭化して後土圧によって圧縮されているので不明である。

F 自然遺物

炭化した植物遺体が数種出土した。

籾	10号住居跡	35号・85号・120号貯蔵穴
カシの実		40号・55号・62号・78号・91号・94号貯蔵穴
イチイガシの実	4号住居跡	
シイの実	5号・17号住居跡	
クリの実		40号貯蔵穴

G まとめ

石器、土製品、鉄器、木製品の当遺跡における傾向についてまとめると次のようになる。

1．打製石器のうち、石鏃、石錐はIII期まで、形態の変化もほとんどなく用いられた。但し、五角形鏃についてはI期で消失する。掻器はI期とII期にみられ、III期にはみられない。この事はIII期の刀子の出現と関連するものと思われる。IV期には全ての打製石器が消失し、鉄器化する傾向にあったと思われる。

2．磨製石器のうち最も多い石庖丁と蛤刃石斧について考察すると、石庖丁はIII期になっても頁岩あるいは粘板岩質を素材にしたものが主流を占める。輝緑凝灰岩製のものはI期にはなく、全体でも19%にすぎない。一方蛤刃石斧の場合I期から引き続いて今山産玄武岩を素材にしたものが大半を占める。この事は専業集団によって製作された石庖丁・蛤刃石斧のうち蛤刃石斧の方が早くから他地域（少くとも北牟田遺跡）に流布したことを示している。

3 小結

検出された遺構・遺物の各々については前各節でまとめた通りである。

近隣で発掘調査された墓跡以外の弥生時代遺跡の時期及び遺構種別を北牟田遺跡と比較すると次の通りである。

遺跡名 / 時期		北牟田	ハサコの宮	松尾口	牟田々	西中隈	宮裏	上棚田	種畜場	横隈2	横隈5	横隈6	横隈7	津古内畑
前期														
					貯蔵穴						V字溝		貯蔵穴	貯蔵穴 V字溝
	I	貯蔵穴	住居跡 貯蔵穴		貯蔵穴	貯蔵穴	貯蔵穴			住居跡 貯蔵穴	貯蔵穴	貯蔵穴	V字溝 貯蔵穴	貯蔵穴
中期	II				住居跡 貯蔵穴		貯蔵穴 住居跡		貯蔵穴 住居跡	住　居 貯蔵穴			住居跡 貯蔵穴	
	III												住居跡	住居跡
					土　壙									
	IV													
後期														
										住　居				
								住　居						

Tab. 39　周辺遺跡時期別一覧表

前期後半から中期初頭にかけての遺跡がほとんどである。その中でも断面V字の環溝で囲繞された遺跡とそうでないものがある。爆発的に三沢の丘陵上に営まれた前期後半から中期初頭にかけての集落が、中期中葉以降僅かな痕跡を残して忽然として断切れた原因がどこにあるのか、考えて余りあるものがある。第II章「位置と環境」の末尾で述べた低地（三沢丘陵地との比較の意味で）遺跡との関連で、今後の究明が必要とされよう。

V　ハサコの宮遺跡の生活遺構と遺物

1　遺　構

当遺跡での弥生時代の生活遺構（住居跡・貯蔵穴等）は、全て第2次調査B地点で検出した。検出した主要な遺構は住居跡1、ピット8である。ピット8口のうち貯蔵穴と判断できるのは7口である。

A　住居跡（Fig. 80, Tab. 40～41、PL. 44）

径6.6*m*を測る大形の円形住居跡で、壁高は20～63*cm*を測る。床面は若干南へ傾斜しているがほぼ水平である。柱穴は大小あわせて27個あるが、住居跡内のみで、外には1個もなかった。深さ・大きさから主柱穴は5個と考えられるこの5個の主柱穴のうち柱根跡が知られるのはP1・4の2個で、前者は径22*cm*、後者は径20*cm*を測る。P6は、5本の主柱穴の中で最長の柱間を測るP4とP5の中点近くにあり、また柱穴の深さが他に比して浅いことから、P4・5間の桁の補強のためのものと考えられる。

住居跡中央から灰層が出土したので、それを除去すると2段掘りのピットが出現した。上段は不定形な掘り方を有しているが、下段は略長方形を呈する。下段の平面は70×100*cm*、深さ約50*cm*を測る。この下段ピットの上位で厚さ3*cm*、7*cm*を測り凹レンズ状を呈し、硬く焼き締った暗赤褐色の焼土層が2層になって発見された。この焼土は「炉」跡と考えられるが、ピットは深いことから、ピット本来の用途ではなく、二次的に「炉」として使用したものと考えられる。

また、住居跡床面から炭化材および土器片（甕）が出土した。

Tab 40　柱穴の深さ一覧表(cm)

番号	柱穴の深さ	番号	柱穴の深さ
P1	95 (75)	Pイ	6
P2	49	Pロ	15
P3	59	Pハ	13
P4	77 (65)	Pニ	5
P5	47	Pホ	24
P6	28	Pヘ	27
P7	16	Pト	16
P8	29	Pチ	13
P9	15	Pリ	10
P10	12	Pヌ	24
P11	27	Pル	13
P12	15	Pオ	19
P13	33	Pワ	12

Tab 41柱間一覧表（cm）

P1－P2	246
P2－P3	230
P3－P4	290
P4－P5	332
P5－P1	300
P4－P6	168
P5－P6	165
P6－P7	145
P1－P7	270

B　貯蔵穴（Fig. 81～85、Tab.42、PL.45～47）

貯蔵穴と考えられるピット7口は、位置関係からP1・2・6とP5・7・9・10の2つのグループに大別でき、前者は円形住居跡の周辺に散在し、P2のように他に比して規模の小さなものもあり、後者は群在する姿がみられ、規模も全て大きい。

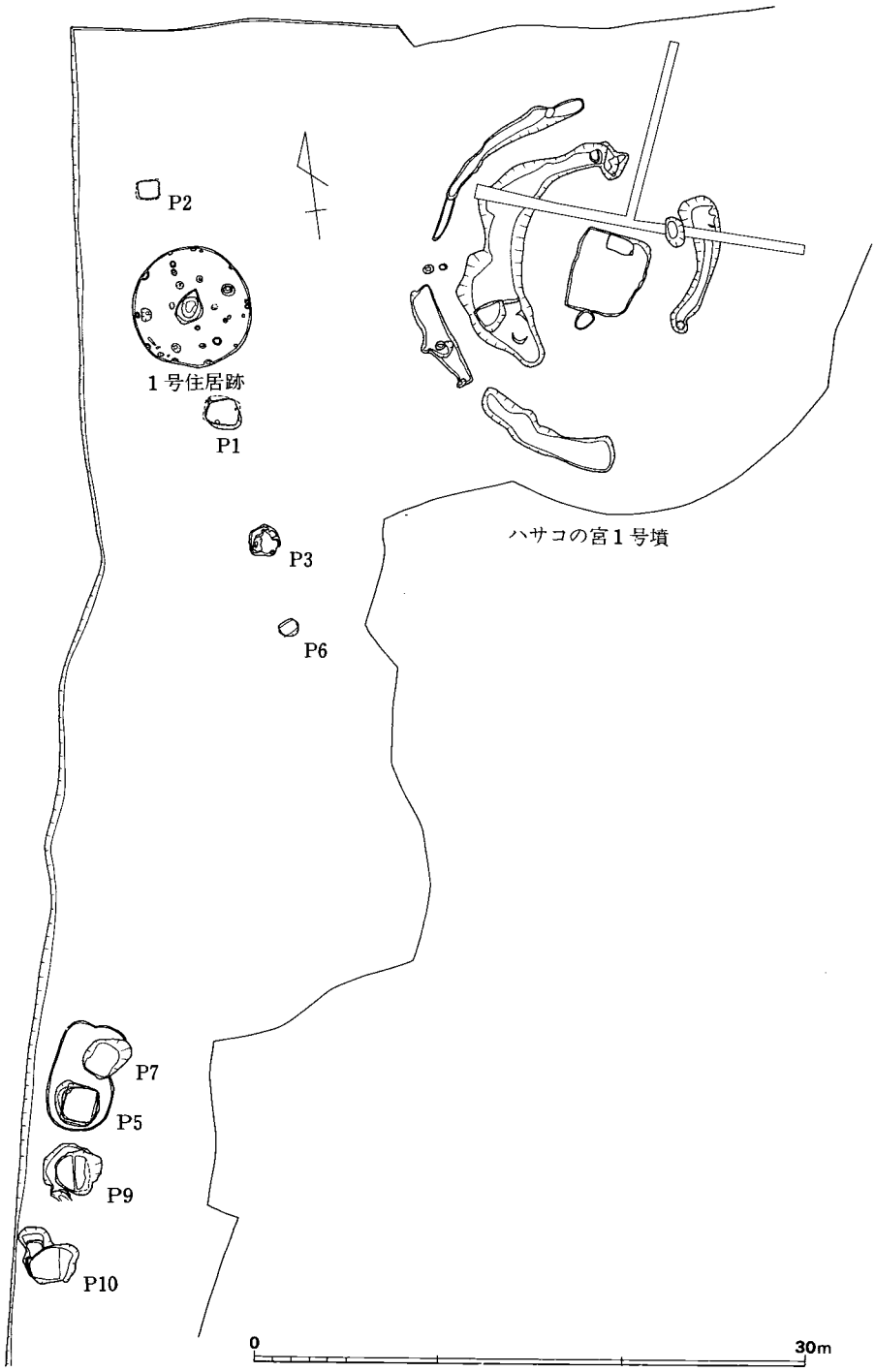


Fig. 79 ハサコの宮遺跡B地点遺構配置図（縮尺 1/400）

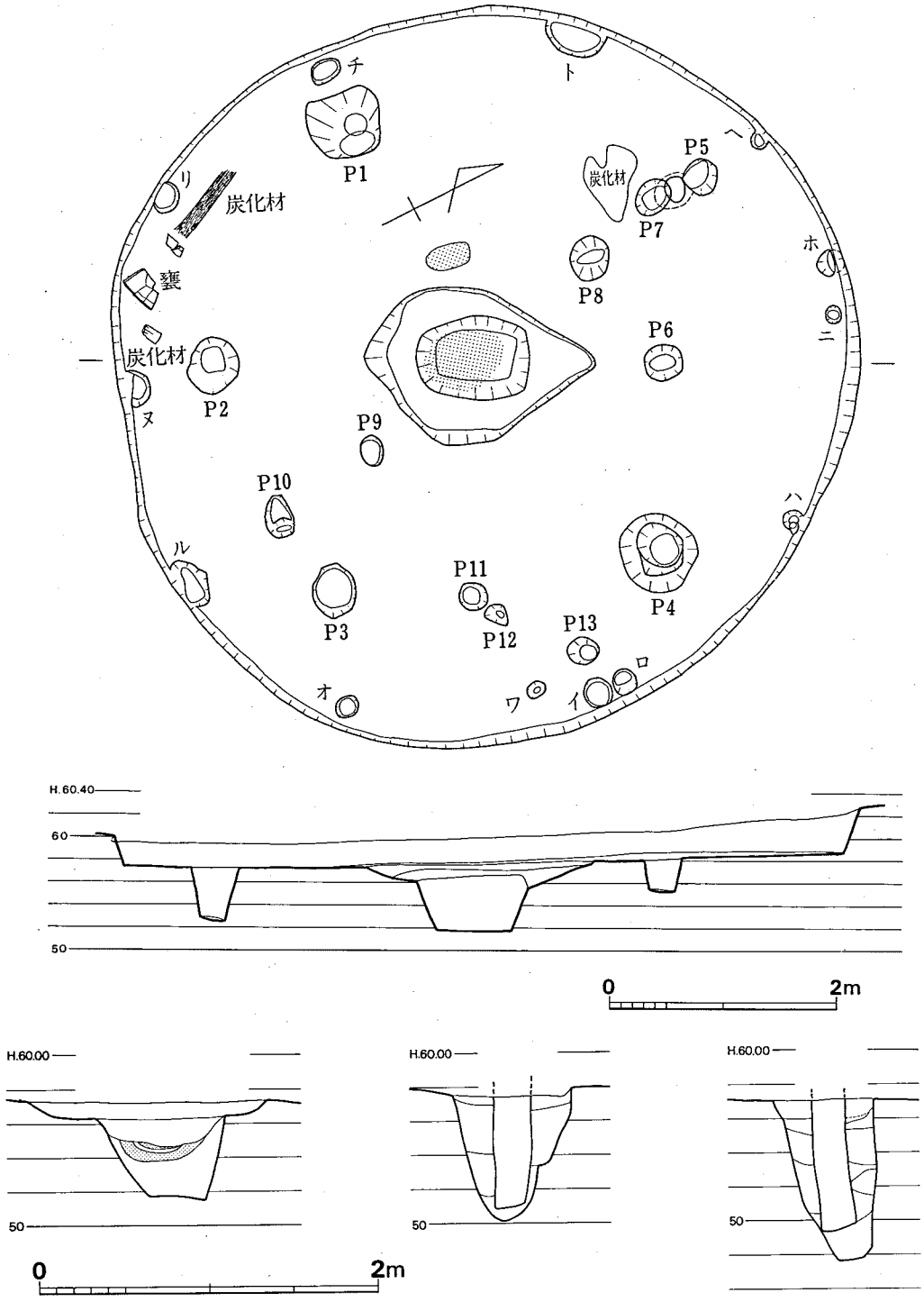


Fig. 80 1号住居跡実測図（縮尺1/60）中央ピット・柱穴（P4−1）・断面実測図（縮尺1/40）

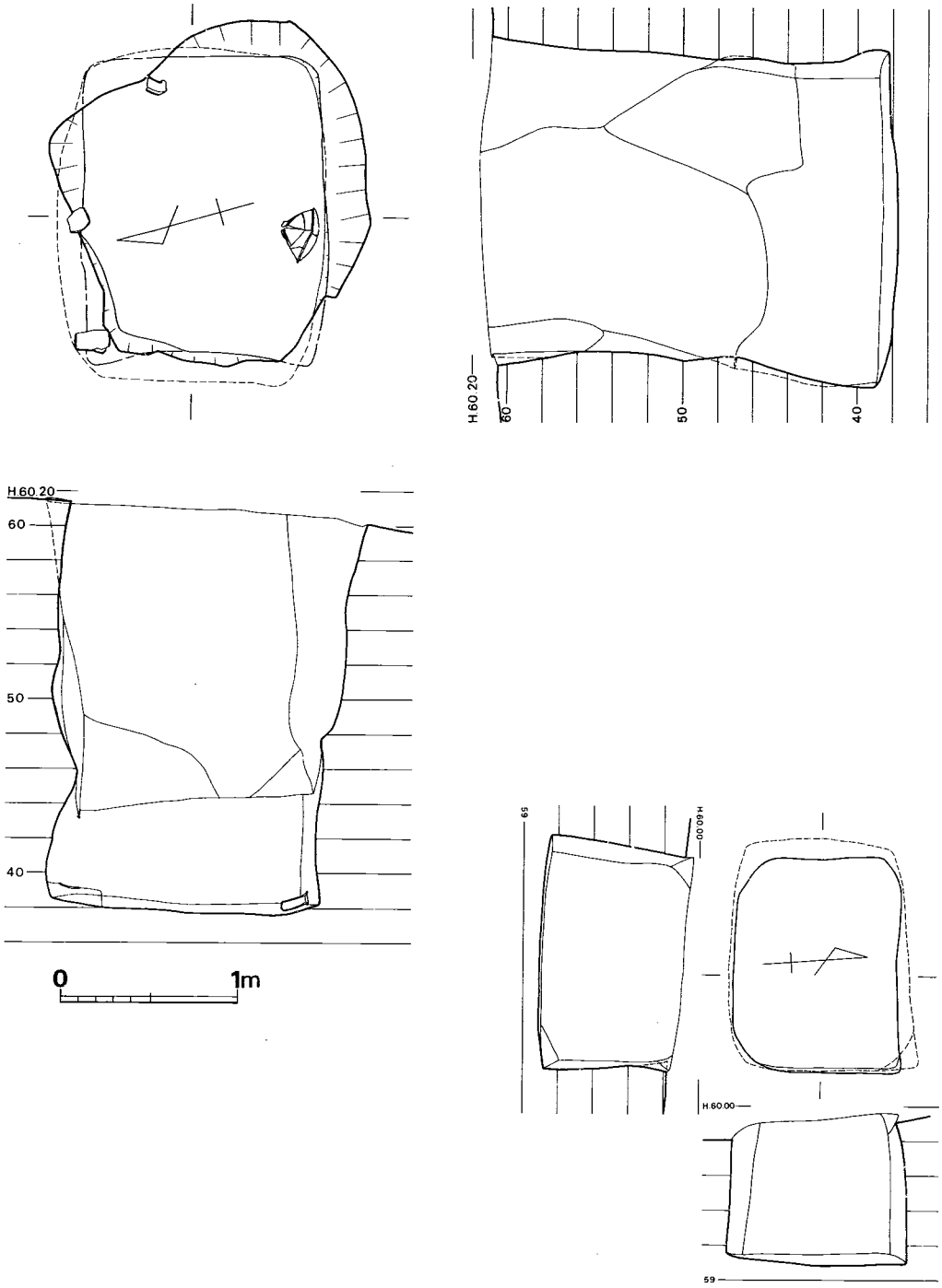


Fig. 81　1号（P1）・2号（P2）貯蔵穴実測図（縮尺 1/40）

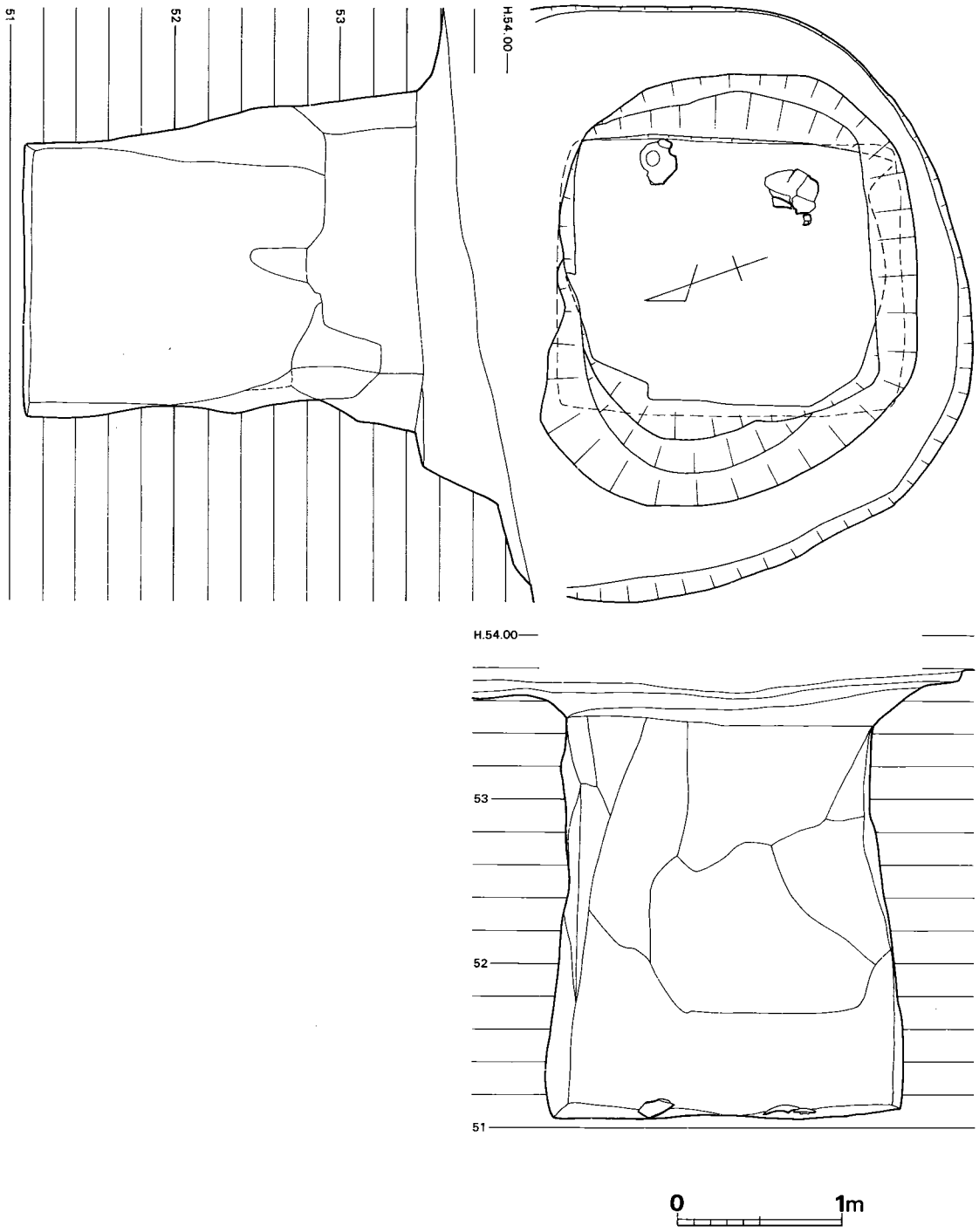


Fig. 82　3号（P5）貯蔵穴実測図（縮尺1/40）

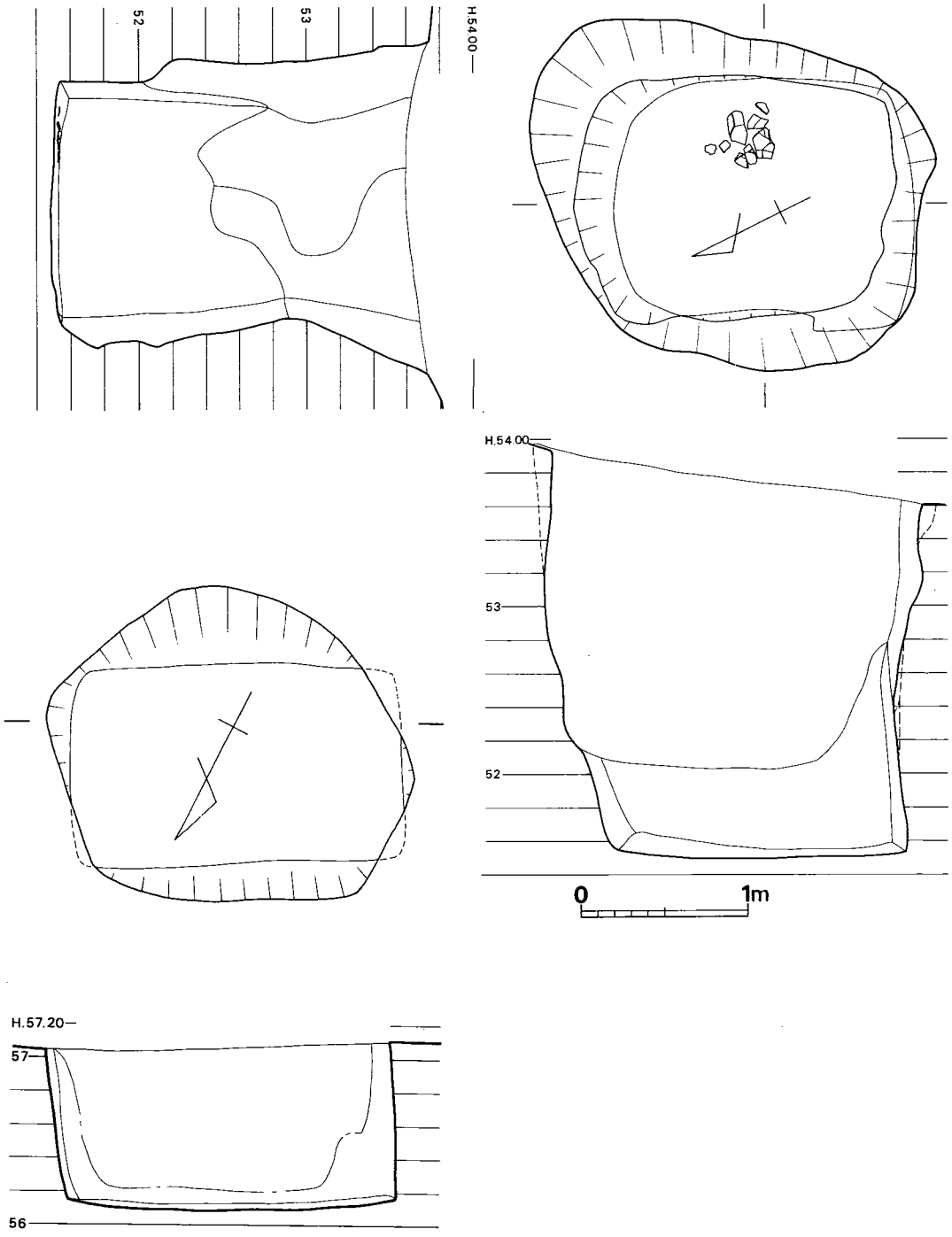


Fig. 83　4号（P6）・5号（P7）貯蔵穴実測図（縮尺1/40）

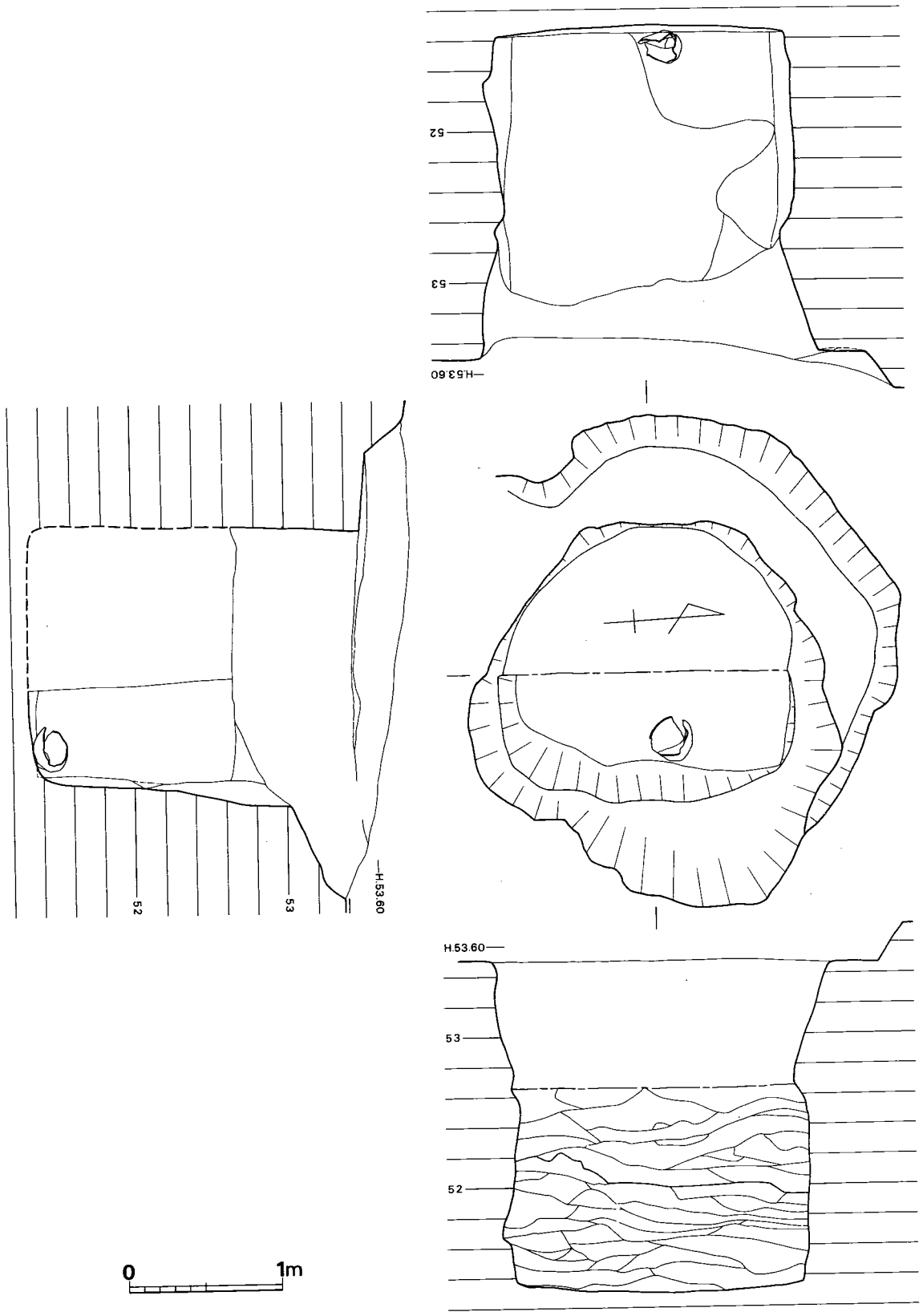


Fig. 84　6号（P9）貯蔵穴実測図（縮尺1/40）

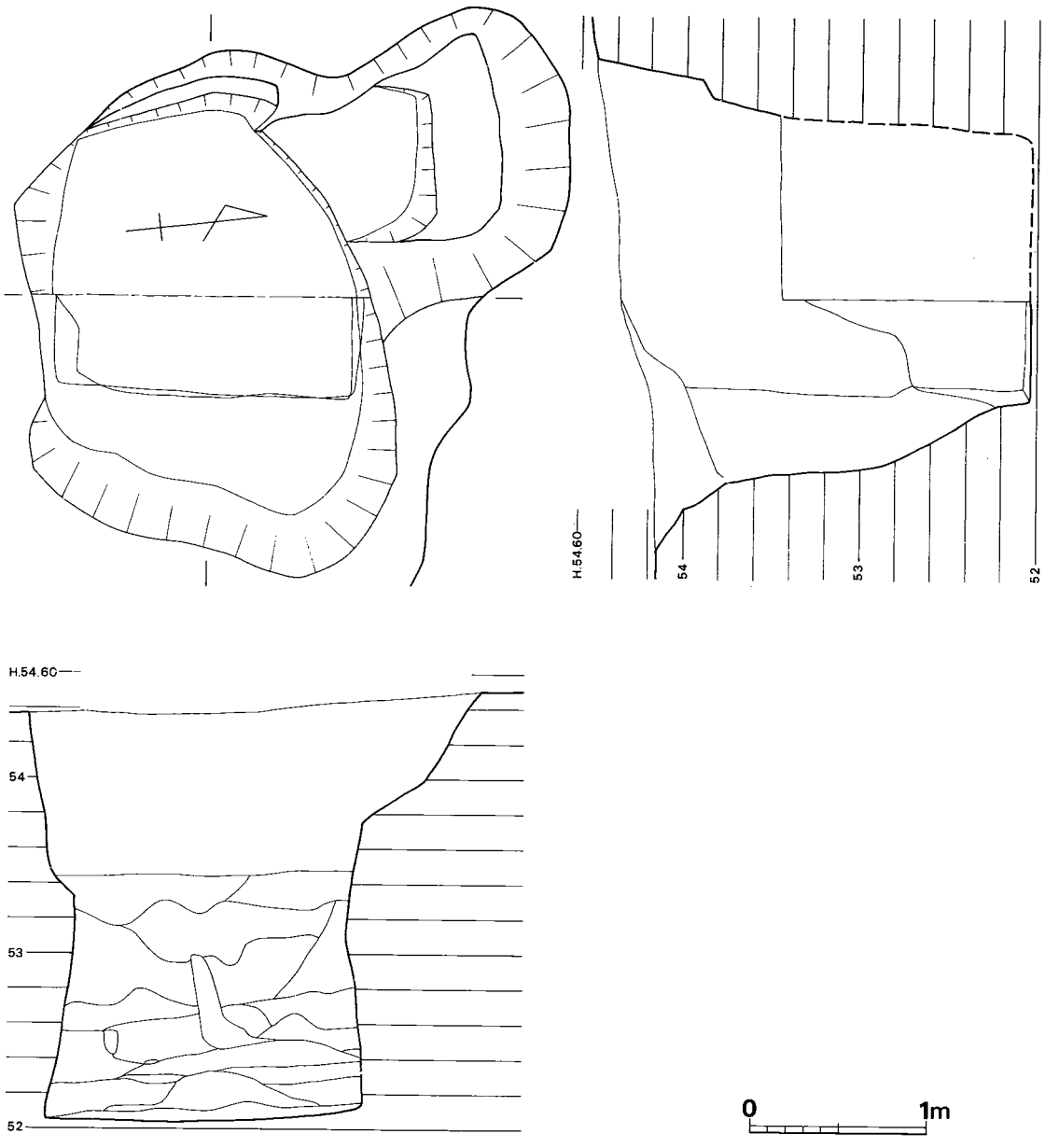


Fig. 85 7号（P10）貯蔵穴実測図（縮尺1/40）

	形状	上面長	底面長	深さ	出土品	備考
1	長方形	(125)×(160)	150×192	238	甕・鉢・打製石鏃出土	埋土中から焼土出土
2	隅丸長方形	94×123	103×134	87		
3	不整円形	167			甕・壺出土	底面は凹凸激しく貯蔵穴とは考え難い
4						欠番
5	長方形	(157)×(185)	166×210	275	壺・磨製石斧出土	P－7と浅い凹みを共有する
6	長方形	(186)×210	118×196	100＋α		
7	隅丸長方形	(120)×(185)	138×165	243		
8						欠番
9	不整円形	(170)×(175)	188×？	220	壺・打製石鏃出土	一部未掘
10	略長方形	(130)×？	170×？	248	甕出土	一部未掘

Tab 42　　竪穴一覧表　(cm)

2　遺物

調査区全体から出土した遺物はそれ程多くはない。それは、居住区域と考えられる部分の東端部にあたり、谷に面していることから、往時の生活面が流失したためと考えられる。

そこで、ここでは遺構に伴ったものを中心として報告する。

A　土器（Fig. 86、87, PL. 48）

1は口縁部から胴部にかけての破片である。それを復原すると、口径28.5cm、胴部径25.4cmとなる。口縁端部および突帯に刻み目が施され、また、口縁屈曲部および突帯の上下にやや小さ目の指頭圧痕がかすかに残存している。胎土は多くの砂粒を含む。焼成は良好で灰黄褐色を呈する。1号住居跡床面から出土。

2はP1の床面から出土し、口径22.6cm、器高16.5cm、底部径7.5cmを測る鉢である。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。焼成は良好で、暗赤茶色を呈する。

3は口径38cm、器高41cm、底径10.5cmを測る甕で、体部外面は全面に刷毛目調整を行っているが、胴部上・下半に差異が観察でき、上半は粗く、下半は細かい。口縁部直下および突帯接合部は刷毛目の上からヨコナデを施している。口縁上面は平坦であるが、約⅙周は断面図で示したようにわずかに凹む。胎土は砂粒を比較的多く含む。焼成は良好で、灰黄褐色を呈する。

4は口径25.7cm、器高27.6cm、底径10cmを測る。胴部中位付近で若干刷毛目調整が見られるが、器面が荒れているため、その詳細については明らかでない。胎土中には多くの砂粒を含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。3・4ともP3床面から出土した。

5はP10から出土した甕の底部である。外面は摩滅のため調整は不明瞭であるが、一部に刷毛目調整が観察できる。胎土中には砂粒が多く、器面荒れと相俟って、器表がザラついている。色調は明橙褐色を呈する。

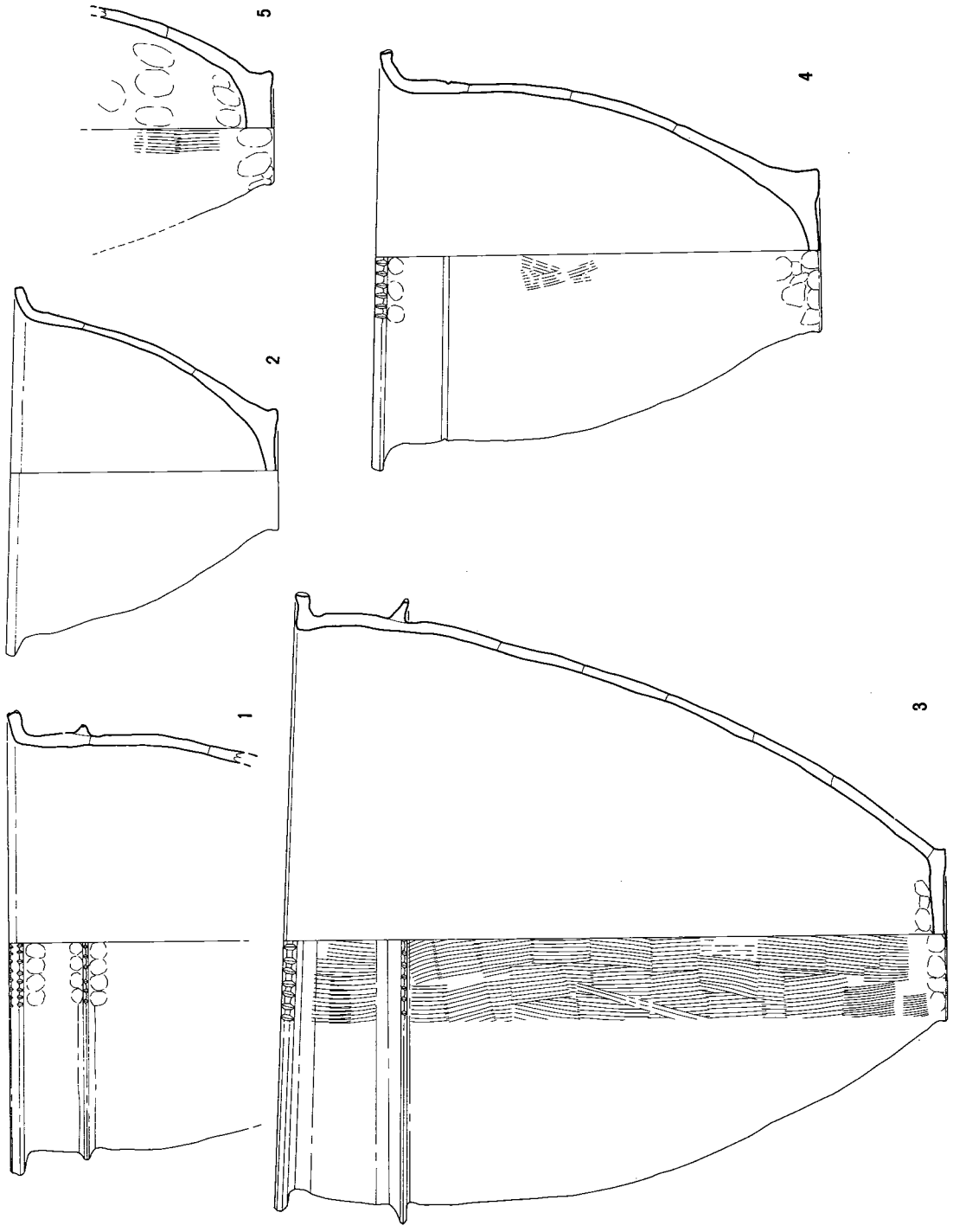


Fig. 86 ピット内出土土器実測図(1)（縮尺 1 / 4 ）

6は底部付近以下と以上とに相離れて、P5の床面から出土した。これは壁の落下により壺上半が割れて飛ばされた結果と考えられる。口径17.8cm、胴部最大径34.1cm、復原器高28.0cm、底部径8.6cmを測る。口頸部内外面はヨコナデ調整を観察できるが、他は摩滅のため調整は不明である。焼成は良好で、内面は黄黒色、外面は明茶褐色を呈する。

7は口頸部を欠失した壺で残存高23.0cm、胴部最大径28.8cm、底部径9.6cmを測る。底部外面には胴部接合時の指頭圧痕が観察できるが、他は摩滅のため調整は不明である。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。P9出土。

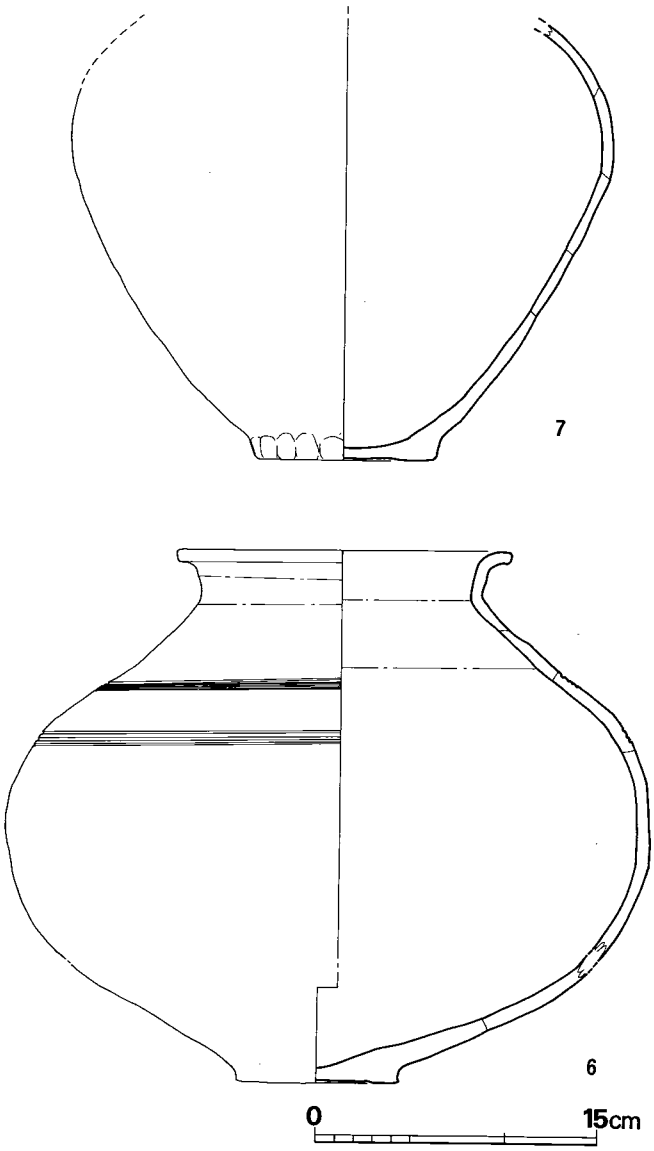


Fig. 87 ピット内出土土器実測図(2)（縮尺1/4）

B 石器（Fig. 88・89, Tab. 43）

石斧、石鏃、石錐が出土した。

石斧　3号貯蔵穴埋土中から出土したもので、約½欠損した玄武岩製のもので、残存長12.6cm、折損部径 4.6×6.5cmを測る。

石鏃　出土石器中もっとも多く出土した。このうち磨製石鏃がまともって出土したのが注目される。特に1号住居跡埋土中から出土した5点のうち、3を除き全て刃を研ぎ出していない。油質頁岩の破片の出土をみないことから、刃部未研の未製品を当地に搬入し、刃を研ぎ出し、完成させて使用したと思われる。

石錐　1号住居跡上層埋土中から1点と4号貯蔵穴の周辺から1点、計2点出土した。

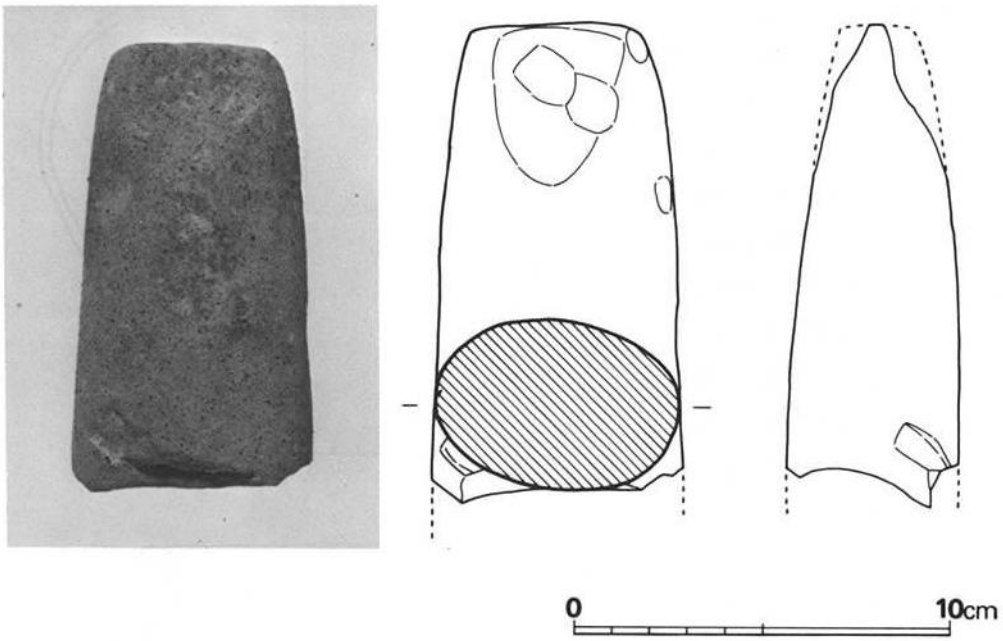


Fig. 88　3号（P5）貯蔵穴出土石斧および実測図（縮尺1/2）

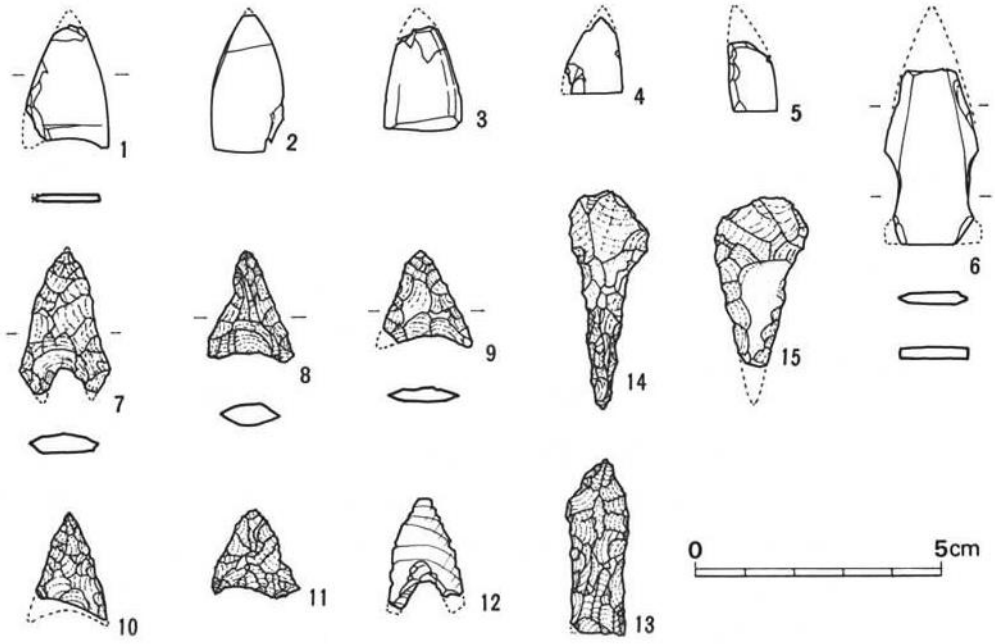


Fig. 89　石鏃・石錐実測図（縮尺2/3）

	器種	石質	最大長	最大幅	出土位置	備考
1	磨製石鏃	油質頁岩	(2.8)	1.7	住居跡埋土中	先端欠損、刃部未研
2	磨製石鏃	油質頁岩	(2.9)	1.4	〃	先端欠損、刃部未研
3	磨製石鏃	油質頁岩	(2.4)	1.5	〃	先端欠損
4	磨製石鏃	油質頁岩	(1.7)	(1.7)	〃	先端・基部欠損、刃部未研
5	磨製石鏃	油質頁岩			〃	
6	磨製石鏃	油質頁岩	(4.8)	(2.0)	表採	先端・基部欠損
7	打製石鏃	サヌカイト	(3.0)	1.9	住居跡埋土中	先端・基部欠損
8	打製石鏃	サヌカイト	2.2	1.7	P－1	
9	打製石鏃	サヌカイト	1.9	(1.8)	P－9	基部欠損
10	打製石鏃	サヌカイト	(2.2)	(1.6)	住居跡埋土中	基部欠損
11	打製石鏃	サヌカイト	1.8	1.7	表採	
12	打製石鏃	黒耀石	(2.4)	(1.5)	〃	剝片鏃、先端・基部欠損
13	打製石鏃	サヌカイト	3.5	1.3	〃	
14	打製石錐	サヌカイト	4.3	1.6	住居跡埋土中	
15	打製石錐	サヌカイト	(4.1)	1.9	表採	先端欠損

Tab 43　石器一覧表（cm）

3　小結

今回検出した遺構は弥生時代前期後半から末にかけての住居跡および貯蔵穴群である。貯蔵穴は前述したごとくその位置関係から2つのグループに分かれる。しかし、発掘面積が狭いため、その相互関係については即断しかねるので、ここでは性格の可能性についてのみ記すことにする。

1．住居跡周辺の貯蔵穴は散存するが、住居跡近辺に存することから、個々の住居跡に伴うものと考えられる。それは、物を貯蔵する倉庫を単独に占有する段階に入っていることを示す一資料となりうることである。

2．住居跡から離れたP5・7・9・10の4つの貯蔵穴は群在する有り方から、住居跡から離れた地域に設けられ、共同使用される倉庫としての貯蔵穴として捉えることができる。

1・2の性格の相違は巨視的にみると2→1への変遷として捉えることができる。しかし、今回の調査では、出土する土器からは前後に並べることはできなかったが、土器が示す弥生時代前期後半から末頃に、この地では貯蔵穴を個別に占有する段階に入っていることを示していると見做すことができる。

Ⅵ　松尾口遺跡の生活遺構と遺物

1　遺　構

松尾口遺跡で検出した弥生時代遺構は、住居跡1、ピット6口である。ピット6口のうち、貯蔵穴と考えられるものは4口である。

A　住居跡（Fig.91, PL.49）

壁と床の大部分が欠損している。残存部分から、径を復原すると約5.7*m*になる。床面は東方向へ若干傾斜するが、ほとんど平坦である。残存床面には構造材となるような柱穴は存しなかった。壁高は、もっとも遺存状態の所で60.5*cm*を測る。

床面から、石庖丁の小片と、細片化した土器が少量出土した。

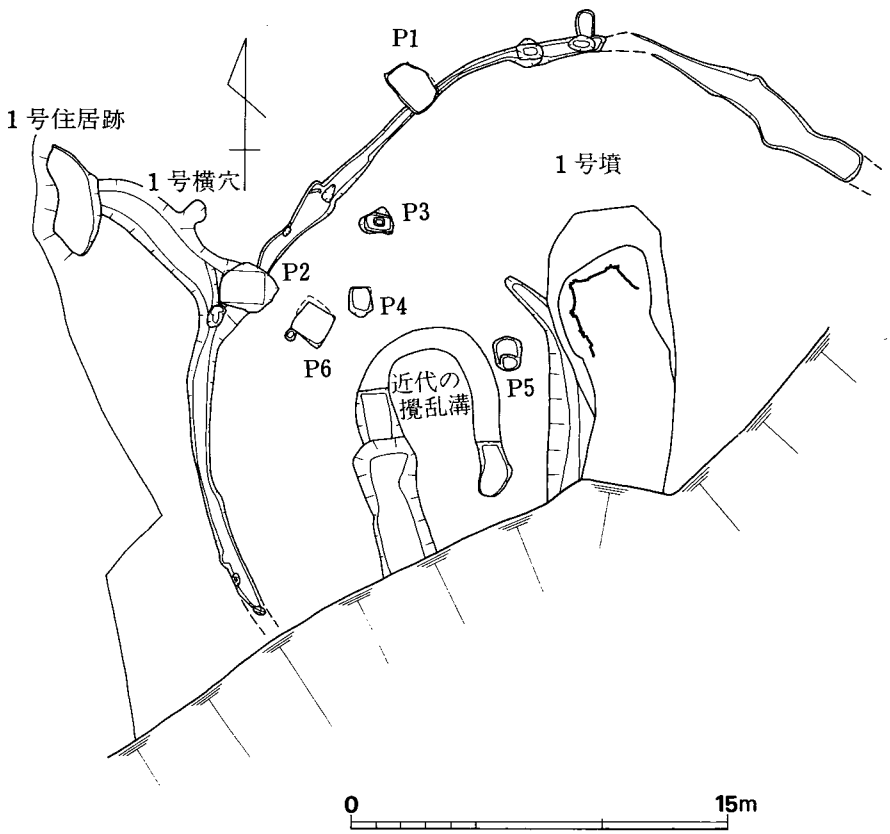


Fig. 90　松尾口遺跡A地区遺構配置図（縮尺1/300）

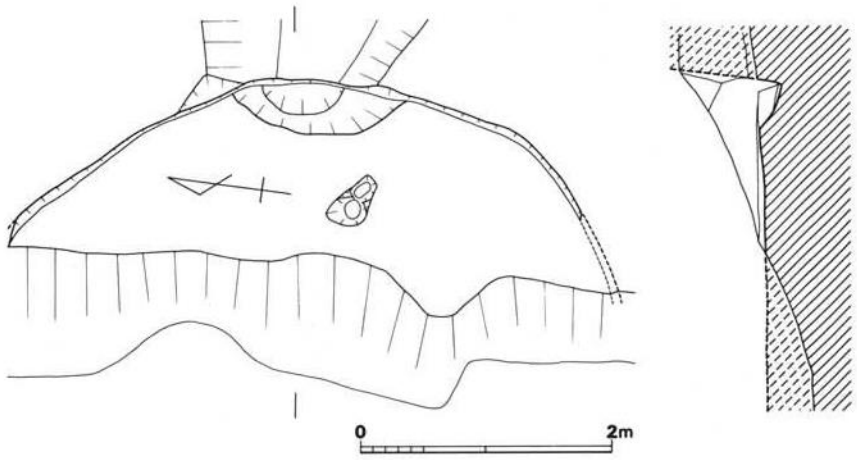


Fig. 91　1号住居跡実測図（縮尺1/60）

B　貯蔵穴（Fig. 93, Tab. 44, PL.50）

6個のピットを検出したが、そのうち2個は床面が不規則であることから貯蔵穴とは断じ難く、P1・2・4・6を貯蔵穴と見做した。

	形　状	上面長	底面長	深　さ	出　土　品	備　　考
1	隅丸長方形	142×203	137×199	70	甕出土	
2	長　方　形	135×193	130×175	200		中央に浅いピットあり
3	隅丸長方形	62×118	55× 98	67・71		中央に長方形の浅い凹みあり
4	隅丸長方形	75×(98)	57× 85	87		
5	隅丸長方形	103×130	81×117	50・62		底面に浅い凹みあり
6	方　　形	134×140	145×146	161	甕出土	

Tab 44　　竪　穴　一　覧　表　（cm）

2　出土遺物

調査区から出土した遺物は極めて少く、遺構に伴ったものは、1号住居跡の石庖丁片、1号（P1）貯蔵穴・4号（P6）貯蔵穴からの甕片である。

1号貯蔵穴出土甕（Fig. 92・94）

口縁端部と突端部に刻目を有するもので、床面から出土した。約⅕程の破片から復原すると、口径40*cm*になる。口縁部直下の内面には、指で押えたような凹凸が観察できるが、他の部分は風化のため調整方法は定かでない。焼成は良好で、黄茶褐色を呈する。

Fig. 92　1号(P1)貯蔵穴出土土器

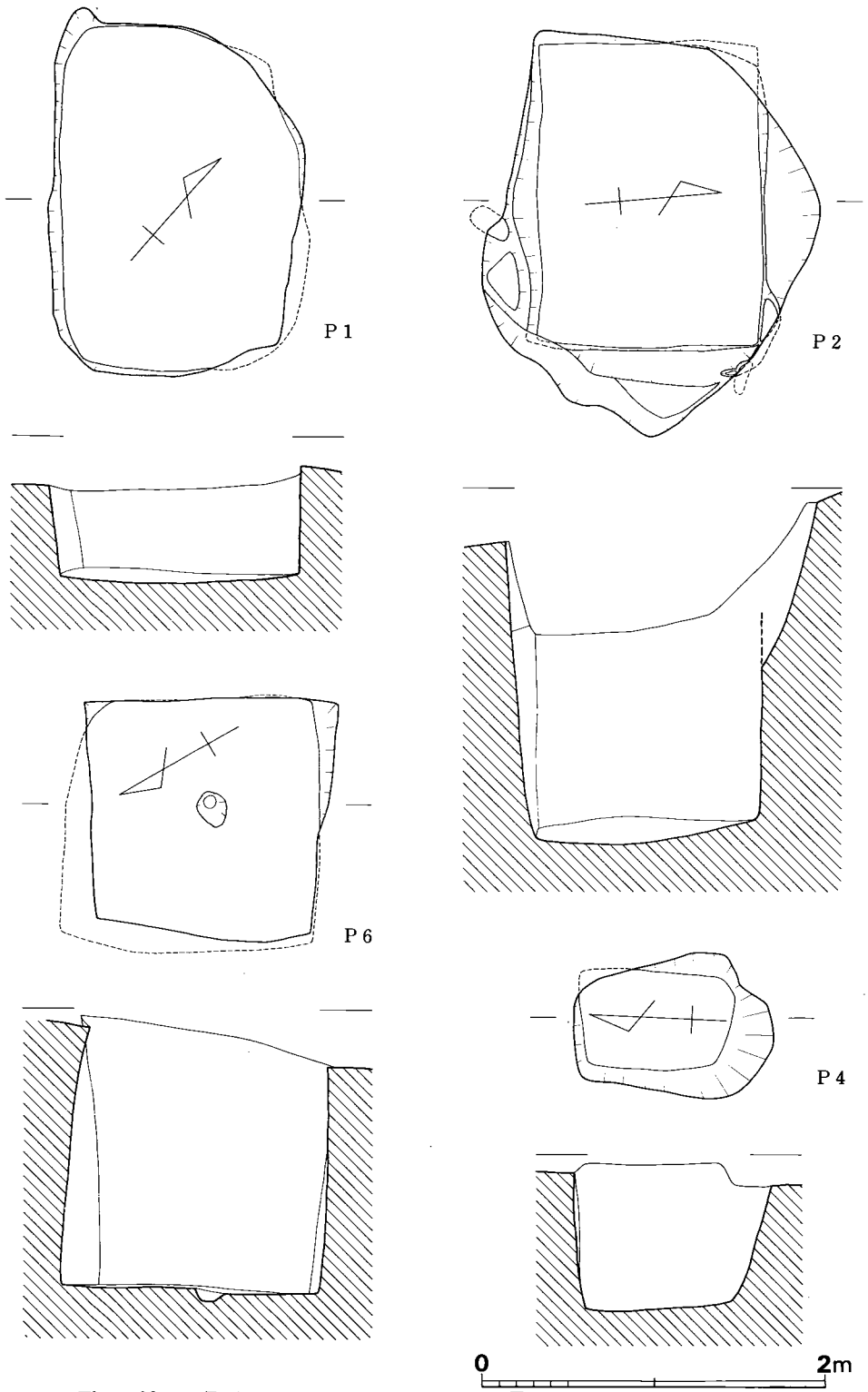


Fig. 93　1号（P1）・2号（P2）・3号（P4）・4号（P6）貯蔵穴実測図（縮尺1/40）

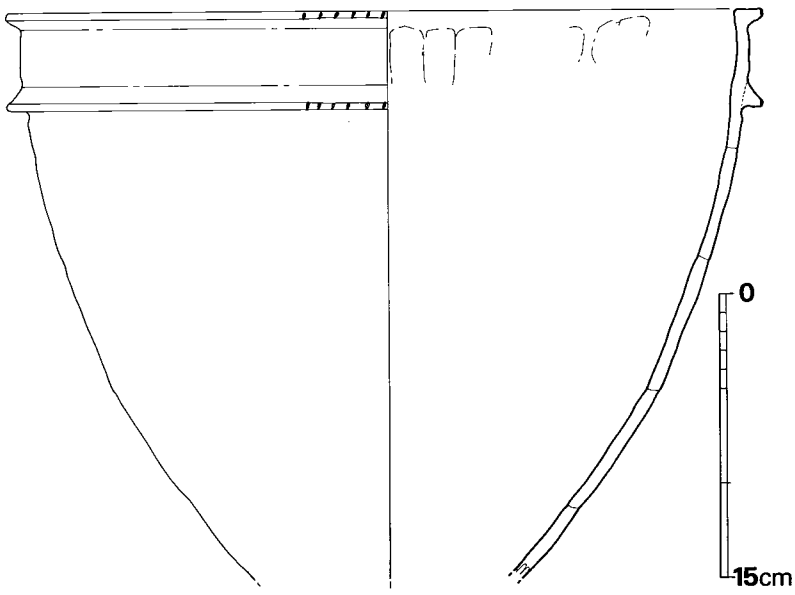


Fig.94　1号（P1）貯蔵穴出土土器実測図（縮尺1/4）

3　小　結

旧生活面の中心であったと考えられる丘陵上の平坦面が大きく削平されていたため、斜面に穿たれた貯蔵穴4口と、かろうじて一部を残す住居跡1を検出したに留まった。また、貯蔵穴の数や遺物の出土量も少なかったことから、大規模な集落は当遺跡では考え難く、最低の耕作集団のみによって当地域が占地されていたと思われる。

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

上　巻

昭和54年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6－29

印　刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— XXXI —

上　巻　付　図

Fig. ①　北牟田遺跡遺構配置図

Fig. ②　北牟田遺跡出土土器編年図（壺）（縮尺１/４）

Fig. ③　北牟田遺跡出土土器編年図（甕）（縮尺１/４）

Fig. ④　北牟田遺跡出土土器編年図（鉢・蓋・高杯・支脚）
（縮尺１/４）

１９７９

福岡県教育委員会

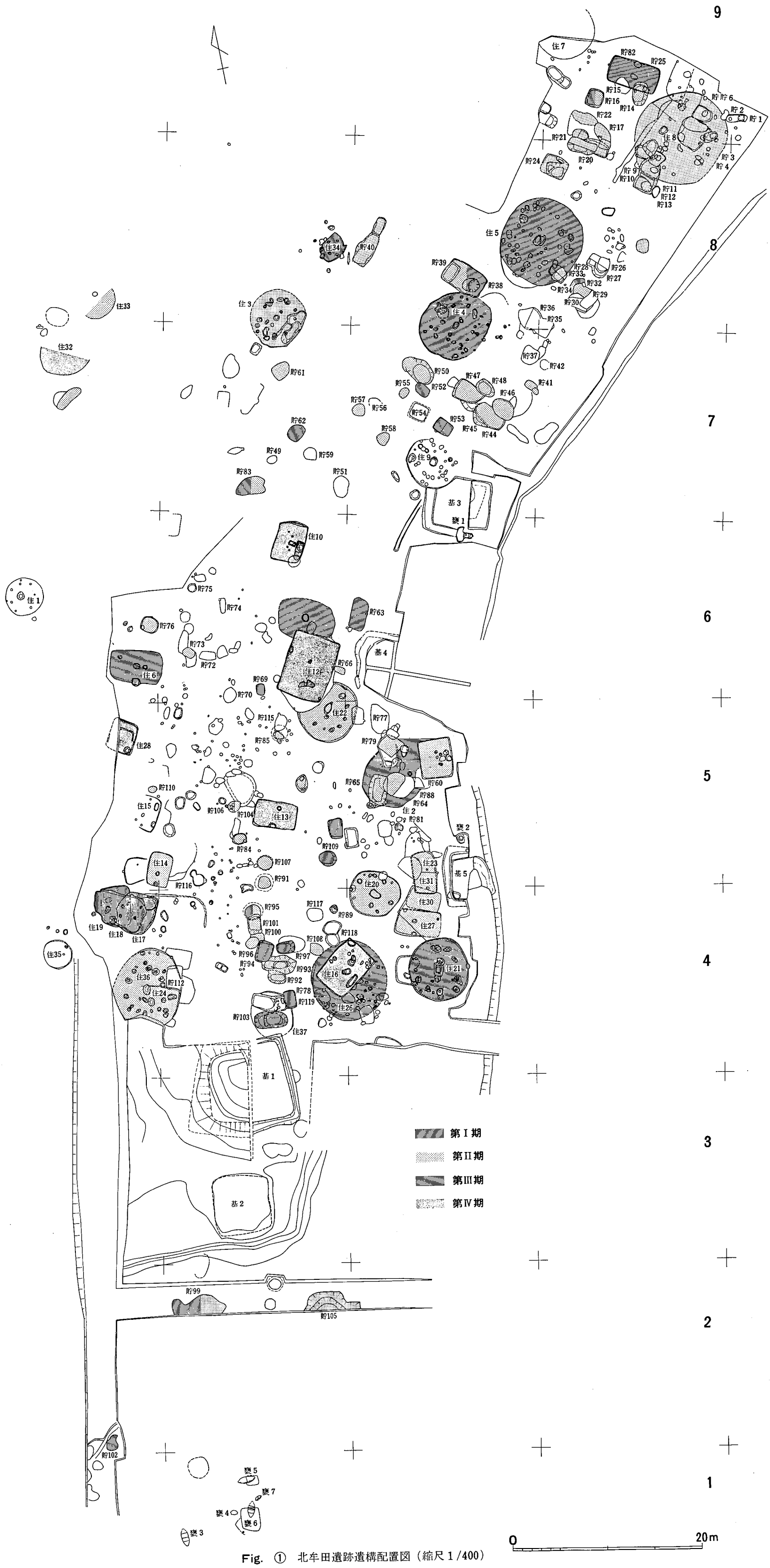


Fig. ① 北牟田遺跡遺構配置図（縮尺 1/400）

I

I－C (114)

I－C (99)

I－D (168)

I－E (40)

I－E (217)

I－F (86)

I－H (173)

II

(171)

II－A (132)

II－Ca (143)

II－Db (238)

II－D (141)

II－E (209)

II－E (191)

II－E (245)

II－E (210)

II－F (133)

III

III－C (269)

III－E (200)

III－E (201)

III－E (18)

III－E (20)

III－F (138)

IV

IV－B (13)

IV－B (12)

IV－G (28)

IV－E (23)

IV－F (16)

Fig. ② 北牟田遺跡出土土器編年図（壺）（縮尺1/4）

I

I－Aa (172)
I－B (194)
I－B (174)
I－Da (218)
I－Da (163)
I－Da (260)
I－Da (88)
I－Da (239)
I－Da (32)
I－Db (166)
I－Db (221)
I－E (105)

II

II－Ab (193)
II－Da (199)
II－Da (39)
II－Da (103)
II－Db (198)
II－Db (268)
II－Ea (194)
II－Eb (59)

III

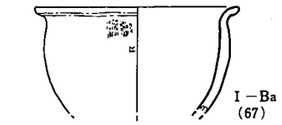
III－C (270)
III－D (10)
III－D (122)
III－D (8)
III－Db (271)
III－Db (11)
III－Db (9)

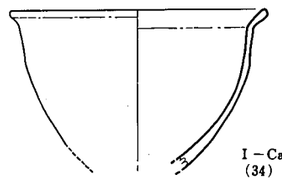
IV

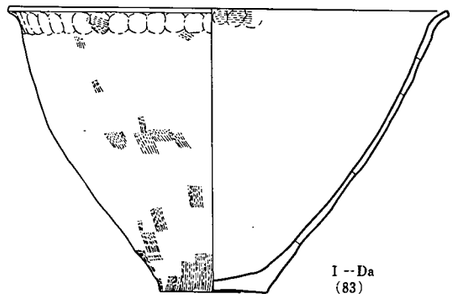
IV－Da (14)
IV－Da (123)
IV－Da (124)
IV－Da (25)
IV－D (26)

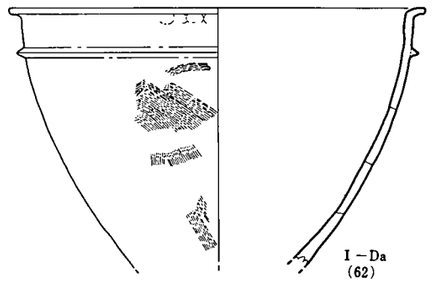
Fig. ③ 北牟田遺跡出土土器編年図（甕）（縮尺1/4）

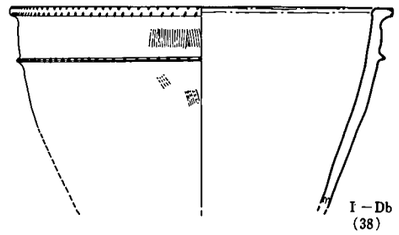
I

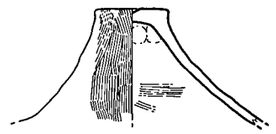


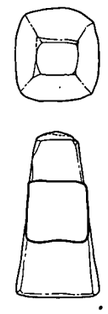




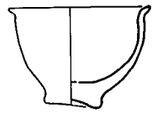


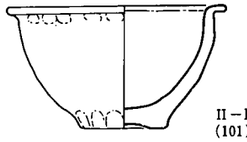


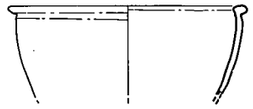


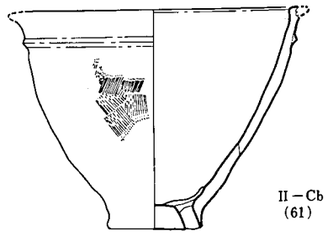


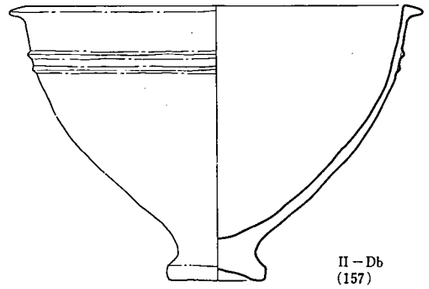
II

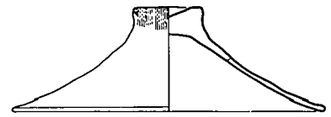


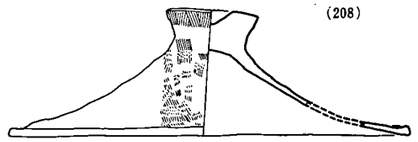




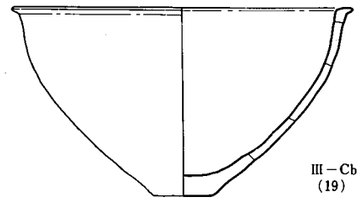


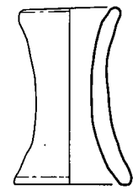




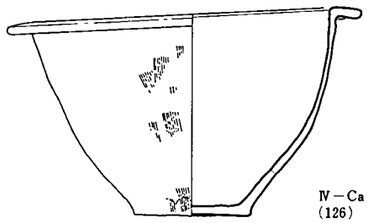


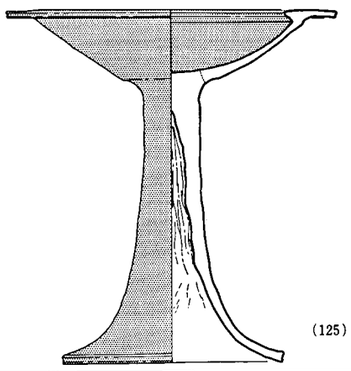
III





IV





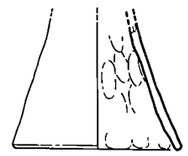


Fig. ④ 北牟田遺跡出土土器編年図（鉢・蓋・高杯・支脚）（縮尺1/4）